

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第174集

経塚長根・経塚森遺跡発掘調査報告書

早池峰ダム関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

経塚長根遺跡・経塚森遺跡発掘調査報告書

早池峰ダム関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600ヵ所にも及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にとまなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特に治山治水利水事業およびエネルギー開発は、他方面から期待されているところであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の経塚長根遺跡と経塚森遺跡は岳川右岸の丘陵上に立地し平成2年の発掘調査によって縄文時代の集落や狩り場跡および弥生時代の生活の場であり、また近世における墓域であることが明らかになりました。特に縄文時代前期の遺物は円筒系の土器と大木系の土器の分布領域を解明するうえで貴重な資料となるものであります。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成に御協力、御援助を賜りました大迫町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心から謝意を表します。

平成3年11月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工 藤 巖

例 言

1. 本報告書は、稗貫郡大迫町内川目第14地割24-2ほかに所在する経塚長根遺跡、および同町内川目第14地割55-3ほかに所在する経塚森遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、県営早池峰ダム建設事業に伴う道路の付け替え工事により遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、岩手県土木部と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡番号および調査略号は、次のとおりである。
経塚長根 遺跡番号 L F 70-1277 調査略号 K Z N-90
経塚森 遺跡番号 L F 70-2219 調査略号 K Z-90
4. 本遺跡の発掘調査期間および調査面積は、次のとおりである。
経塚長根 平成2年4月11日～5月31日 2,960㎡
経塚森 平成2年6月1日～8月31日 4,520㎡
5. 本遺跡の発掘調査担当者および報告書の執筆は、次のとおりである。
経塚長根 調査担当者 藤村敏男・金子昭彦 報告書執筆 藤村敏男
経塚森 調査担当者 金子昭彦・藤村敏男 報告書執筆 金子昭彦
6. 遺跡の基準点測量は、東奥測量設計会社に委託した。
7. 分析鑑定は、下記の方々に依頼した。(敬称略)
石質鑑定 佐藤二郎(佐藤地質工学研究所)
樹種鑑定 早坂松次郎(岩手県木炭協会)
骨種鑑定 百々幸雄(札幌医科大学解剖学教室)
8. 発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々に指導・助言をいただいた。(敬称略)
中村良幸(大迫町教育委員会)、熊谷常正(当時 岩手県立博物館)、豊田宏良(千歳市教育委員会)、和田晋治(富土見市教育委員会)、高橋重貴子(当時 滝沢村教育委員会)、岡田康博(青森県埋蔵文化財センター)
9. 野外調査において小松充夫・伊藤一蔵氏をはじめとする地元の方々の御協力をいただいた。
10. 発掘調査による出土品および記録資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
また調査に伴い出土した近世の遺骨は供養の後改葬をした。

目 次

序

例 言

〈本 文〉

I. 調査に至る経過	1	IV. 経塚森遺跡	61
II. 遺跡の位置と立地	1	1. 調査成果の概要	63
1. 位置	1	2. 調査・整理の方法	63
2. 地形	1	3. 基本層序と検出・出土状況	68
3. 基本層序	5	4. 遺構	69
4. 周辺の遺跡	5	① 竪穴住居跡	70
III. 経塚長根遺跡	13	② 溝状ピット	72
1. 調査と室内整理の方法	15	③ 土坑	74
(1) 野外調査	15	④ 溝	75
(2) 室内整理	16	⑤ 炉跡	76
2. 検出された遺構と遺構内の遺物	20	⑥ 焼土	76
(1) 縄文時代竪穴住居跡	20	5. 遺物	89
(2) 土坑	27	① 土器	90
(3) その他の遺構	36	② 石器・石製品	112
(4) 遺構外の遺物	37	6. まとめ	132
(5) まとめ	41	附編 経塚森遺跡出土の火葬人骨	139

〈図 版〉

第1図 遺跡位置図	2	第3図 第1号住居跡出土遺物	19
第2図 地形分類図	3	第4図 第2号住居跡	21
第3図 遺跡と周辺の地形図	4	第5図 第2号住居跡出土遺物	24
第4図 周辺の遺跡位置図	7	第6図 第2号住居跡出土遺物	25
経塚長根遺跡		第7図 第3号住居跡・出土遺物	26
第1図 遺構配置図	17	第8図 第1号土坑・出土遺物	27
第2図 第1号住居跡・出土遺物	18	第9図 第2～6号土坑・出土遺物	29

第10図	第7・8号土坑・出土遺物	31
第11図	第9～11号土坑・出土遺物	33
第12図	第12～14号土坑・出土遺物	35
第13図	第15号土坑	36

第14図	溝状遺構	37
第15図	遺構外出土遺物(1)	39
第16図	遺構外出土遺物(2)	40

〈写真図版〉

写真図版1	遺跡の全景	45
写真図版2	第1号住居跡	46
写真図版3	第2号住居跡	47
写真図版4	第3号住居跡	48
写真図版5	第1～3号土坑	49
写真図版6	第4～6号土坑	50
写真図版7	第7～9号土坑	51
写真図版8	第10～12号土坑	52
写真図版9	第13～15号土坑・土器出土状況	53

写真図版10	第1号住居跡出土遺物	54
写真図版11	第2号住居跡出土遺物	55
写真図版12	第1～3号住居跡・第1・9・10号 土坑出土遺物	56
写真図版13	第4・7・8号土坑及び遺溝外出土 遺物	57
写真図版14	遺構外出土石器	58
写真図版15	溝状遺構 他	59

経塚森遺跡

〈図版〉

第1図	遺構配置図	79
第2図	第1号・第2号住居跡	81
第3図	第3号・第4号住居跡	82
第4図	第1号～第3号溝状ピット	83
第5図	第4号・第5号溝状ピット、第1号土坑	84
第6図	第2号～第5号土坑	85
第7図	溝	86
第8図	石囲炉、第1号～第4号焼土	87
第9図	第5号～第10号焼土	88
第10図	遺構内出土の土器	96
第11図	北側包含層出土の土器(1)	97
第12図	北側包含層出土の土器(2)	98
第13図	北側包含層出土の土器(3)	99
第14図	北側包含層出土の土器(4)	100

第15図	北側包含層出土の土器(5)、 南側包含層出土の土器(1)	101
第16図	南側包含層出土の土器(2)	102
第17図	南側包含層出土の土器(3)	103
第18図	遺構・包含層外出土の土器(1)	104
第19図	遺構・包含層外出土の土器(2)	105
第20図	北側包含層出土の石器(1)	114
第21図	北側包含層出土の石器(2)	115
第22図	北側包含層出土の石器(3)	116
第23図	北側包含層出土の石器(4)	117
第24図	北側包含層出土の石器(5)	118
第25図	南側包含層出土の石器(1)	119
第26図	南側包含層出土の石器(2)	120
第27図	南側包含層出土の石器(3)	121

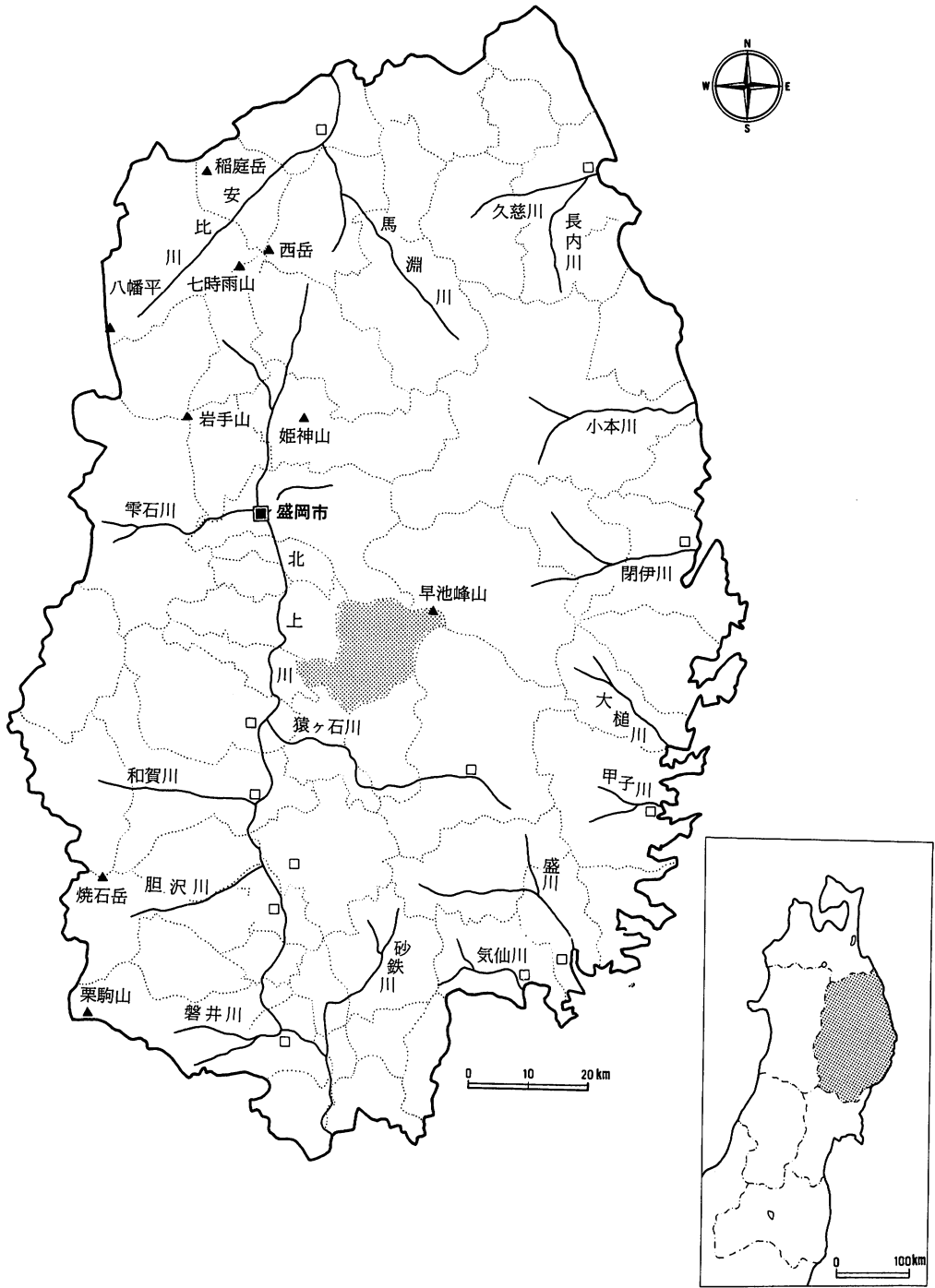
第28図	南側包含層出土の石器(4) ……122	第31図	包含層外出土の石器(3) ……125
第29図	包含層外出土の石器(1) ……123	第32図	包含層外出土の石器(4) ……126
第30図	包含層外出土の石器(2) ……124	第33図	包含層外出土の石器(5) ……127

〈 表 〉

第1表	土坑(竖穴)分類表 ……69	第5表	土器観察表(3) ……109
第2表	遺構一覧表 ……77	第6表	土器観察表(4) ……110
第3表	土器観察表(1) ……106	第7表	石器分類表 ……112
第4表	土器観察表(2) ……107	第8表	石器・石製品観察表 ……128

〈写真図版〉

写真図版1	調査前全景 ……143	写真図版21	南側包含層出土の土器(2) ……163
写真図版2	十勝沖地震による断層の様子144	写真図版22	南側包含層出土の土器(3) ……164
写真図版3	第1号住居跡 ……145	写真図版23	遺構・包含層外出土の土器(1)165
写真図版4	第2号住居跡 ……146	写真図版24	遺構・包含層外出土の土器(2)166
写真図版5	第3号住居跡 ……147	写真図版25	北側包含層出土の石器(1) ……167
写真図版6	第4号住居跡 ……148	写真図版26	北側包含層出土の石器(2) ……168
写真図版7	第1号溝状ピット ……149	写真図版27	北側包含層出土の石器(3) ……169
写真図版8	第2号・第5号溝状ピット ……150	写真図版28	北側包含層出土の石器(4) ……170
写真図版9	第3号溝状ピット ……151	写真図版29	北側包含層出土の石器(5) ……171
写真図版10	第4号溝状ピット ……152	写真図版30	南側包含層出土の石器(1) ……172
写真図版11	第1号・第2号土坑 ……153	写真図版31	南側包含層出土の石器(2) ……173
写真図版12	第3号土坑、炉跡、焼土 ……154	写真図版32	南側包含層出土の石器(3) ……174
写真図版13	第4号・第5号土坑と近代の墓坑 155	写真図版33	南側包含層出土の石器(4) ……175
写真図版14	溝 ……156	写真図版34	包含層外出土の石器(1) ……176
写真図版15	遺構内出土の土器 ……157	写真図版35	包含層外出土の石器(2) ……177
写真図版16	北側包含層出土の土器(1) ……158	写真図版36	包含層外出土の石器(3) ……178
写真図版17	北側包含層出土の土器(2) ……159	写真図版37	包含層外出土の石器(4) ……179
写真図版18	北側包含層出土の土器(3) ……160	写真図版38	包含層外出土の石器(5) ……180
写真図版19	北側包含層出土の土器(4) ……161		
写真図版20	北側包含層出土の土器(5)、 南側包含層出土の土器(1) ……162		



岩手県全図

I. 調査に至る経過

県営早池峰ダムは、北上川水系稗貫川総合開発の一貫をなすものであり、稗貫郡大迫町落合地内に建設される。ダムは、重力式コンクリートダムで高さ73.5m、最大貯水量1725万 m^3 の多目的ダムである。

これにかかわる埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で協議がなされ、昭和62年と63年に分布調査を実施し、平成元年9月5日付け「教文415号」により埋蔵文化財に関連する土木事業等について照会し、9月29日付けの回答をうけて早池峰ダム建設事務所と協議の上発掘調査を岩手県文化振興事業団の受託事業として調整実施することとした。

これをうけて当埋蔵文化財センターは平成2年4月4日付け委託契約により経塚長根遺跡の調査を実施した。引き続き同6月1日付け委託契約により経塚森遺跡の調査を実施した。なお、平成元年11月20～21日の文化課の試掘調査で縄文時代中期の竪穴住居跡が確認されている。

II. 遺跡の位置と立地

1. 位置

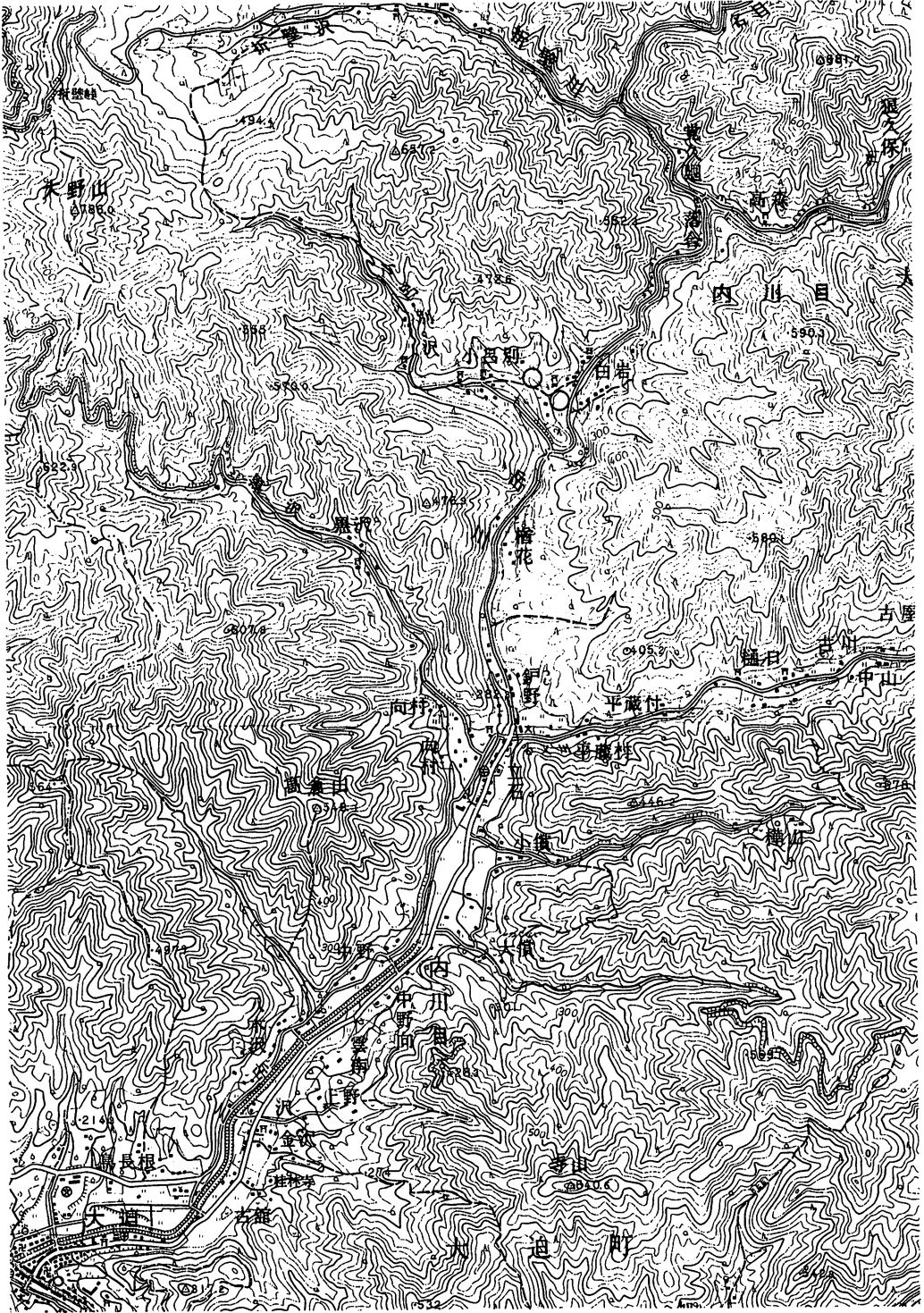
経塚長根遺跡・経塚森遺跡は北緯39°31'22"東経131°19'46"付近に位置し、大迫町役場の北々東距離約7kmのところにある。大迫町は、岩手県のほぼ中央部にあり、東方が遠野市、南方が宮守村、西方が紫波町、北方が盛岡市・川井村と隣接する人口約八千人の町である。

2. 地形

大迫町は東方を北上山地と境を接しており、西方の北上盆地とに挟まれている。遺跡の東方を流下する岳川は、北上山地の最高峰早池峰山（標高1,914m）に源を発し西流し、折壁川と合流した後に南々西に流下する。途中小又川を合流させ町内に達する。ここで北上山地に源を発し西流する中居川と合流し流れの向きを西に変え稗貫川として稗貫郡石鳥谷町で北上川に合流する。

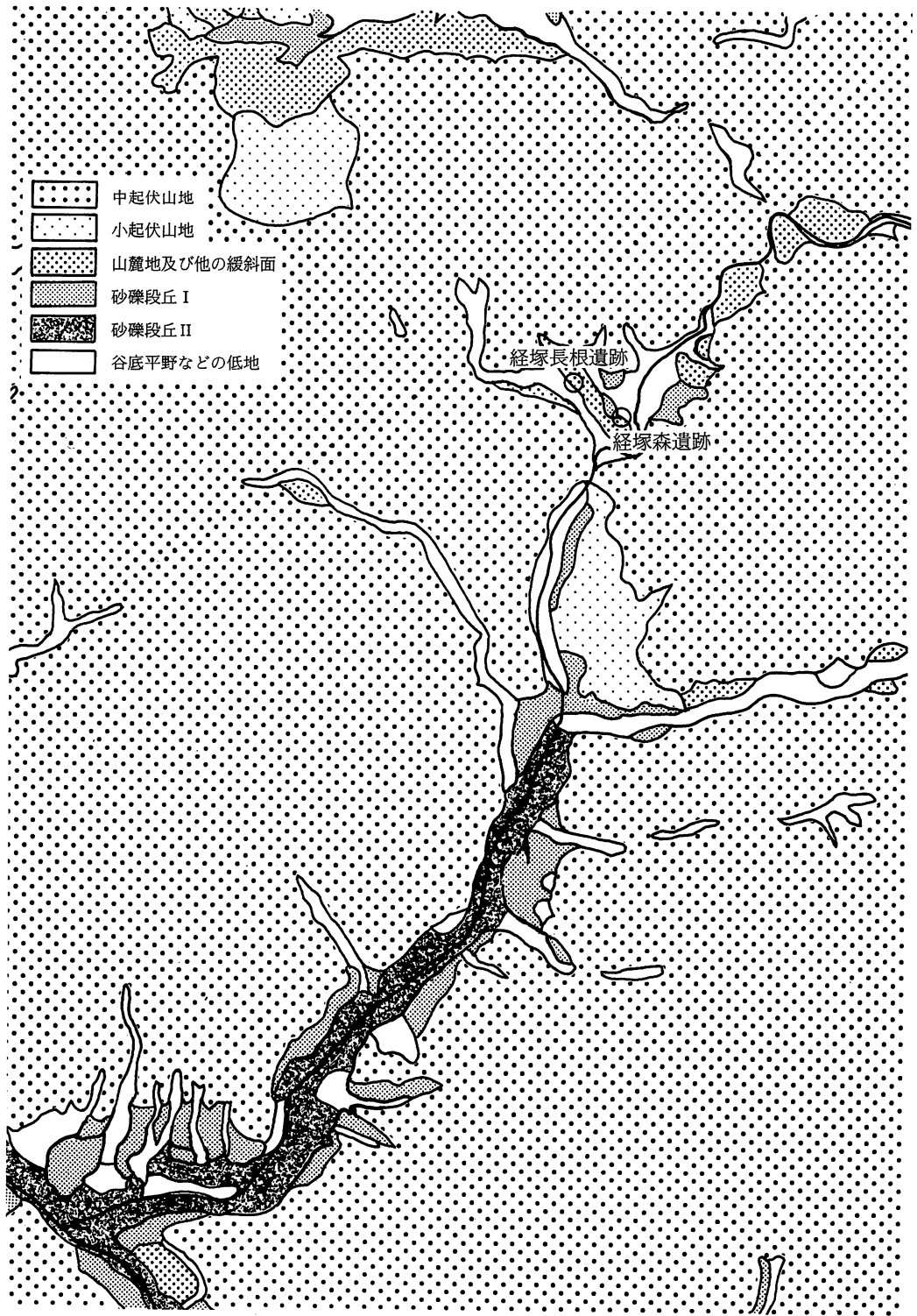
大迫町の大部分は、地形区分図に見られるように早池峰山を起点にし、南西方向に広がる高低差400m～200mの中起伏山地によって占められている。

前述の小河川はこれらの山地の狭間に砂礫段丘や扇状地・谷底平野・氾濫平野等を形成している。平地は町の南西部に多く見られる。河岸段丘は大きく2区分されるが中居川の合流地点である大迫地区においては上位のものが更に2分され3区分になる。このうち下位段丘は北上川流域の金ヶ崎段丘あるいは盛岡段丘に比定できると考えられている。

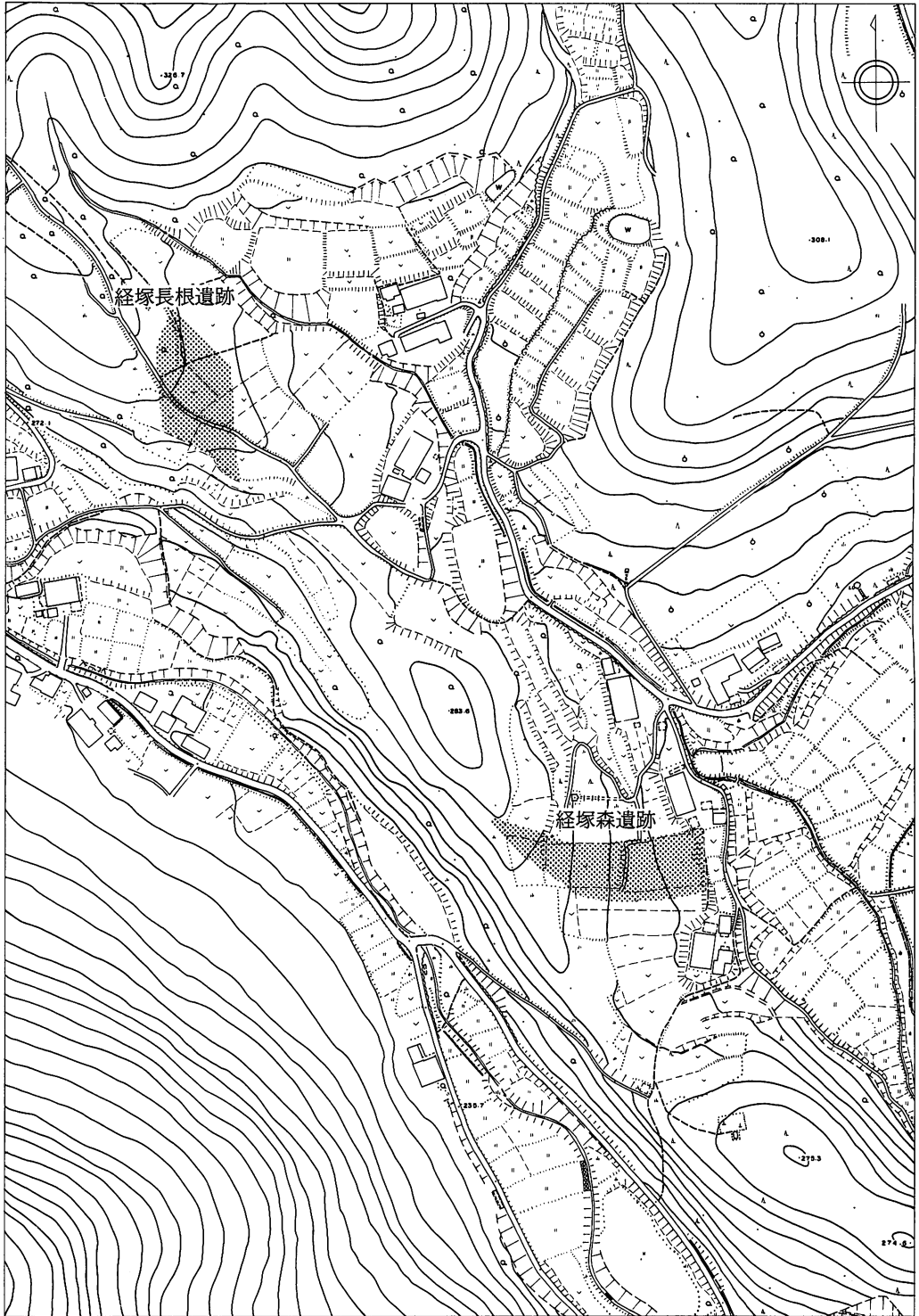


(図幅 大迫・早池峰山)

第1図 遺跡位置図



第2図 地形分類図



0 40 80 120 160 200 m

1 : 4000

第3図 遺跡周辺の地形図

遺跡は岳川が南西方向から南東そして西方向へ蛇行し、小呂別沢と合流して再び南西方向に流れの向きを変える付近に位置し、岳川右岸の南東方向に張り出した山麓地の緩斜面に立地している。遺跡の標高は経塚長根遺跡は289m前後、経塚森遺跡では260m前後であり、後者の河岸低地との比高は25m前後である。現状は削平された畑地である。

3. 基本層序

経塚長根遺跡は比較的平坦であり土層は一様であるが、経塚森遺跡は傾斜が急であり斜面上位と下位では特に層厚において差異が見られる。それぞれの基本層序は次のとおりである。

経塚長根遺跡	I層	褐色土	耕作土で砂礫を多く含む。粘性・しまり幾分あり。層厚は12~30cmである。
	II層	暗褐色土	粘性・しまり幾分あり。砂礫はI層より少ない。層厚は10~20cmである。
	III層	明黄褐色土	砂礫を多く含む。部分的に明赤褐色を呈する。上面が遺構検出面である。
経塚森遺跡	I層	褐色土	耕作土、層厚は30cmである。
	II層	黒褐色土	多量の遺物を包含する。一部の遺構（炉、焼土）の検出面である。層厚は40cmである。
	III層	明黄褐色土	上面が主だった遺構検出面である。

4. 周辺の遺跡

経塚長根、経塚森の両遺跡は、現在の行政区分で言えば、大迫町の北部に位置し、盛岡市、川井村、紫波町に近接している。これらの市町村に存在する遺跡については『全国遺跡地図3岩手県』（文化庁文化財保護部 1984）等でその概要を知ることができる。しかし、特に盛岡市や川井村で大迫町に近接する地域は山が深いこともあって不明な点が多い。また、紫波町の近接している地域においても同様に不明な点が多いのである。ところが大迫町の場合は、町の教育委員会によって綿密な分布調査が行われたこともあって、多くの情報が公表されている（引用・参考文献参照）。また、縄文時代の地域を考えるにあたっては、やはり水系を考慮することが重要であると思われる。経塚長根、経塚森遺跡は岳川右岸の丘陵に立地しており、岳川は早池峰山系から大迫町の中心に向かって流れ、そこで中居川と合流して稗貫川となる。したがって岳川を中心に据えて周辺の遺跡を捉えるには大迫町の遺跡を見ていけば良いことになる。そこで、今回は大迫町内に限って周辺の遺跡について触れることにする。

大迫町内には、現在80以上の遺跡が確認されている。その中で、本報告書に関係する縄文時

代～弥生時代の遺跡を選んで表に示した(位置は第4図)。ここでは、今回の調査の結果、経塚長根遺跡の主体であった縄文時代中期末(大木10式)の遺跡、経塚森遺跡の主体であった縄文時代前期初頭の遺跡についてやや詳しく見ていくことにする。なお、大迫町で確認された弥生土器を出土する遺跡は、今のところ、経塚長根、経塚森の二遺跡のみのようである。

また、大迫町の古代以降の遺跡については、引用・参考文献に示した大迫町が発行した報告書を参照していただきたい。

(1)縄文時代前期初頭の遺跡

前期初頭～前葉の土器を出土する遺跡は現在7遺跡確認されており(周辺の遺跡一覧表1～7)、このうち発掘調査がなされて報告書が刊行されているのは、経塚森遺跡、経塚長根遺跡、そして白山遺跡の3遺跡である。

・経塚森遺跡(1)

本報告書の第IV章参照。

・白岩長根遺跡(2)

経塚森遺跡とは岳川をはさんでほぼ対岸に位置する遺跡である。標高も280m前後と経塚森遺跡とほぼ同じである。発掘調査はなされていないが、町の教育委員会によって土器片、石器が紹介されている(大迫町教育委員会 1987)。土器は繊維を多く含むもので、石器は搔器、石錐などである。

・大又I遺跡(3)

昭和61年度に町の教育委員会が遺跡詳細分布調査事業で一部発掘したようであるが、その成果については不明である。この時は前期初頭の繊維土器が最も多く出土したようであるが、中期の大木8b式土器なども出土するらしい(大迫町教育委員会 1990)。

・古館遺跡(4)

岳川のすぐ左岸に位置する。発掘調査はなされていないが、町の教育委員会によって採集した土器が紹介されている(大迫町教育委員会 1987)。前期初頭～前葉の土器である。また、昭和初期の開田の時にカマド跡が数個並んでいたといわれているが、中村良幸氏は、これを「縄文時代の炉であろう」と推定している。

・熊の上遺跡(5)

岳川からやや離れた標高175～200mほどの台地にある。標高190～200mにかけて濃密な遺物の散布が見られるようである。町の教育委員会によって試掘グリッドが設定され、その際方形の住居跡の一部と柱穴が確認されている。その成果の一部は大迫町教育委員会(1987)に公表されている。出土土器は、繊維を含むものがほとんどで、羽状縄文、附加条、網目状撚糸文な



- 凡 例
- ▲ 縄文時代前期初頭の遺跡
 - 縄文時代中期末(大木10式)の遺跡
 - 縄文時代前期初頭と中期末(大木10式)の遺跡

第4図 周辺の遺跡位置図

どが施されており、中村氏は「大木1式に近い土器群である」としている。なお、本遺跡の他の地点からは中期の破片も多く出土するらしい。

・白山遺跡(6)

東から西側に向かって流れる中居川の左岸の標高160mほどの段丘面に立地している。緩やかに北に傾斜する北面の遺跡である。昭和63年7月11日から9月24日まで、発掘調査が町の教育委員会によって行われ、報告書が刊行されている(大迫町教育委員会 1989)。調査面積は約820㎡で、目的は遺跡の現状変更が計画されている場所の記録保存と遺跡の範囲・内容の確認であった。遺構は、縄文時代中期末の住居跡が3棟、前期初頭や中期初頭から後期初頭にかけてのピット、時期不明の溝状遺構が確認された。遺物は土器、石器、土製品、石製品が出土している。土器は縄文時代前期初頭から後期初頭にかけてのもので、石器は石鏃、石匙、石斧、石錘、石皿などがあり、土製品は土製円盤など、石製品は石剣などがある。

以下、これらのなかで前期初頭のものについて述べたい。前期初頭と考えられるピット類はやや楕円形の形態が多く、底面には施設らしきものは作られていないようである。前期初頭の土器は、羽状縄文、S字状連鎖沈文、木目状撚糸文、組紐縄文などが施されており、中村氏は「大木1～大木2式に属するものが多い」としている。

・経塚長根遺跡(7)

本報告書の第III章参照。

(2)縄文時代中期末(大木10式)の遺跡

白山、経塚長根、観音堂の3遺跡が確認されており、そのいずれも発掘調査が行われ報告書が刊行されている。

・白山遺跡(6)

概要については前期初頭の遺跡のところでも述べたので、ここでは大木10式に関係することのみ記したい。遺構は大木10式の古い部分と思われる時期の住居跡が2棟確認されている。大木10式土器は古い部分にあたるものが多く、ほとんどが住居跡から出土しており、経塚長根遺跡出土のものと同時期と思われるものが多くあり、経塚長根遺跡の地域的な位置付けを考える上で重要である。なお、本遺跡の地域的な位置付けについて、中村氏は「全体の遺跡の規模から見れば、観音堂遺跡の分村的な性格の集落であったことは間違いないであろう」としている(大迫町教育委員会 1989)。

・経塚長根遺跡(7)

本報告書の第III章参照。

・観音堂遺跡(8)

標高160～174mの中位段丘に相当する広大な平坦地に立地している。昭和54年度から昭和60年度までの7ヵ年にわたって、町の教育委員会によって範囲・内容の確認調査が行われた。最終的な調査面積は約3000㎡に及んでいる(岩手県埋蔵文化センター 1985)。報告書によれば(大迫町教育委員会 1986)、遺構は、縄文時代中期後葉～後期初頭の30棟以上の住居跡、配石遺構群、多数のピット類(陥し穴状、フラスコ状等)などが検出されている。出土遺物は土器、土製品、石器、石製品があり、土器は縄文時代中期後葉から後期初頭まで切れ目なく出土している。石器は、不定形石器・使用痕のある剥片が多いが、その他に石鏃、石匙、石錘、磨石、石皿、台石などがある。土製品には、土製円盤や土偶、耳飾り等があり、石製品には、石製円盤や石棒などがある。

これらの結果から、中村氏は「本遺跡は12万㎡の面積を有する台地全域に広がりを持ち、住居跡群などは大地の縁辺部に沿って馬蹄形状(あるいは環状)に並んでおり、いわゆる「広場」は南北300m、東西200m以上の広さをもっている。住居跡も最終的には200～300軒ほどが埋もれているものと考えられ、全国でも屈指の規模をもっている。」としている。

以下、中期末(大木10式)に関するものをあげる。遺構は、住居跡が8棟、炉跡が3基?、その他にフラスコ状ピットなどのピット類がある。住居跡は大木10式でも新しい時期のものが多く、第22号住居だけはやや古くなりそうな可能性がある。土器も大木10式の中でも新しい時期のものが多いようである。

引用・参考文献

- 岩手県埋蔵文化財センター(1985) 『岩手の遺跡』
- 大迫町教育委員会(1979) 『小田遺跡発掘調査報告書』
- (1986) 『観音堂遺跡―第1次～6次発掘調査報告書―』
- (1987) 『稗貫川流域詳細分布調査報告書I』
- (1988) 『町内遺跡群発掘調査報告書II〔屋敷遺跡〕』
- (1989) 『町内遺跡群発掘調査報告書III〔白山遺跡〕』
- 大迫町ほか(1990) 『早池峰ダム水没地区民俗調査報告書』

表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	遺跡の性格・遺構・遺物	所在地	備考
1	きようづかもり 経塚森	住居跡、溝状ピット、ピット、縄文土器、弥生土器、石器	内川目第14地割	今回調査
2	しらいわながね 白岩長根	縄文土器(前期初頭)、石器(石錐・播器)	内川目第13地割	
3	おおまた 大又 I	縄文土器(前期初頭・大木 8 b 式)、石器	内川目第 2 地割	昭和61年度一部調査
4	ふるだて 古館	炉?、縄文土器(前期初頭～前葉)	内川目第48地割	
5	くまのうえ 熊の上	住居跡(方形)、縄文土器(前期初頭・中期)	大迫第 7 地割ほか	試掘
6	ほくせん 白山	住居跡、ピット、縄文土器(前期初頭・大木 9～10式)、石器	大迫第19地割	昭和63年度部分調査
7	きようづかながね 経塚長根	住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器、弥生土器、石器	内川目第14地割	今回調査
8	かんのどう 観音堂	住居跡、配石遺構、縄文土器(中期後葉～後期初頭)、石器	大迫第11～12地割ほか	昭和54年度～昭和60年度発掘調査
9	でと 出戸	縄文時代の遺跡?	内川目第 9 地割	
10	たかもり 高森	縄文時代中期?	内川目第11地割	
11	かみたかもり 上高森	縄文時代	内川目第11地割	
12	ひとなか 人中	縄文時代	内川目第12地割	
13	おいのくぼ 狼久保	縄文土器	内川目第11地割	
14	おおまた 大又 II	縄文土器、石器	内川目第 2 地割	
15	じよぐち 城口	縄文時代、石器(凹石)	内川目第12地割	
16	たかだて 高館	縄文時代後期後半、土器、土偶、石器	内川目第 9 地割	
17	しもおりかべ 下折壁	縄文土器	内川目第 9 地割	
18	おりかべ 折壁	縄文時代の集落址?	内川目第 8 地割	
19	サッケゾ	縄文時代の中期以降、石器(石鍬形)	内川目第27地割	
20	なべやしき 鍋屋敷	縄文土器(大洞 C ₁ ～A 式)、石器、玉類	内川目第23地割	
21	へいぞうづり 平蔵付	縄文土器(後期、大洞 C ₁ ～C ₂ 式)、石器	内川目第21地割	
22	さらばば	焼土、縄文土器(大木 4～9 式)	内川目第19地割	
23	たていし 立石	配石遺構、縄文土器(後期初頭～晩期中葉)、石器、土製品(土偶、土版など)、石製品(石棒など)	内川目第19地割	昭和52、61年度発掘調査
24	いなりじんじや 稲荷神社	縄文土器(加曾利 B ₁ ～B ₃ 併行期)、土製円盤	内川目第16地割	
25	むかいむら 向村	縄文土器(大木 8～9 式ほか)	内川目第18地割	

26	わむら 和村	縄文土器、石器(石鍬)	内川目第38地割	
27	やぎきわ 八木沢	縄文土器(前期、後～晩期?)	内川目第43地割	
28	うんなんだて 雲南館		内川目第46地割	
29	けいりんじ 桂林寺	縄文土器、石器(石鍬)	内川目第47～48地割ほか	
30	てんじんがおか 天神ヶ丘	フラスコ状ピット、住居跡、縄文土器(大木6～8・9式、後期後葉～晩期中葉)	大迫第9地割	昭和46年部分調査・破壊
31	やしき 屋敷	石組炉、縄文土器(後期後葉～大洞A式)、石器	大迫第11地割	昭和62年度部分調査
32	みちのうみ 明道沢	縄文土器(前～中期)	大迫第13地割	
33	ぶどう沢	縄文土器(後期～晩期)	大迫第13～14地割	
34	うまのやま 上の山	縄文土器(後期?)	大迫第3地割	
35	おほきまししょうがつかうら 大迫小学校裏	縄文土器(後～晩期)、石器(磨製石斧)	大迫第18地割	
36	いもがよい 芋通	石組炉、縄文土器(大木7～8式)、石器(石鍬)	大迫第34地割	
37	にしべ 西部	縄文時代後～晩期		
38	上の台	縄文時代		
39	本宿	縄文時代		
40	大釜	縄文時代晩期		
41	館野	縄文時代晩期		
42	愛宕神社	縄文時代		
43	西小屋	縄文時代前～中期		
44	大林	縄文時代後～晩期		
45	御堂鼻	縄文時代前～後期、配石遺構?		
46	休場	縄文時代前～中期		
47	エゾ穴	縄文時代前～中期		
48	大沢	縄文時代後期(宝ヶ峯式中心)		
49	望	縄文時代後(宮戸Ⅲ式中心)～晩期		
50	こだ 小田	石組炉、焼土ブロック、埋設土器、縄文土器(後期末～晩期末)、石器(打製石斧、石匙など)、土製品(土偶、亀形土製品など)、石製品(石棒・石剣など)	亀ヶ森第24地割	昭和53年度発掘調査

III. ^{きょうづかながね} 経塚長根遺跡

所在地 稗貫郡大迫町内川目第14地割24-2ほか
委託者 岩手県土木部 早池峰ダム建設事務所
発掘調査期間 平成2年4月11日～5月31日
調査対象面積 2,960㎡
発掘調査面積 2,960㎡
遺跡番号・略号 LF70-1277・KZN-90
調査担当者 藤村敏男・金子昭彦
協力機関 大迫町教育委員会

1. 調査と室内整理の方法

① 野外調査

(1) 調査区の設定

調査グリッドの設定は任意の2点を基点として行った。

各基点の成果と設定は次のとおりである。

経塚長根遺跡

基点1 X = -52,789.08 m Y = 42,640.16 m H = 286.46 m

基点2 X = -52,749.08 m Y = 42,639.79 m H = 286.60 m

基点1から基点2方向を10mごとに区画しA～Lを付し、これと直角の東方向10mごとに1～6を付した。従ってグリッド名は4G、4Hのように呼称し、必要に応じて2m×2mの小区画名を付した。また区域内の位置を原点(N0・E0)からの1m×1mの小区画に基づいて呼称する形も併用した。北方向の座標軸線は真北に対して19°東に偏して設定されている。

経塚森遺跡

基点1 X = -53,078.46 m Y = 42,887.58 m H = 256.879 m

基点2 X = -53,065.22 m Y = 42,914.50 m H = 254.537 m

基点1から基点2方向を10mごとに区画しA～Lを付し、これと直角の北方向10mごとに1～6を付した。従ってグリッド名は4G、4Hのように呼称し、必要に応じて2m×2mの小区画名を付した。また区域内の位置を原点(N0・E0)からの1m×1mの小区画に基づいて呼称する形も併用した。北方向の座標軸線は真北に対して33°西に偏して設定されている。

(2) 粗掘りと検出遺構

調査対象区ほぼ全面にわたり重機を利用して表土除去を行った。

検出された遺構は、各区域名ごとに住居跡・住居状遺構は1から、土坑等は51から一連番号を与え、この分類番号に区域名を合わせ、遺構名とした。焼土、炉跡、溝跡等は区域名を前に付すのみで呼称したが、同一区域で同種の遺構が複数検出された場合はNo.1・No.2と付番した。

(3) 精査

精査は、住居跡・住居状遺構は4分法、土坑・落とし穴・ピット・焼土遺構は2分法を用いた。溝については5mまたは10m間隔でセクションベルトを残して精査した。

(4) 記録

遺構の実測図は、住居跡などは平面・断面ともに20分の1縮尺で、溝跡の平面は40分の1、断面は20分の1で作成した。

写真撮影は6×7のモノクロ、35mm版のモノクロ、カラーリバーサルの3種によった。

土層の区分は、基本層序の場合ローマ数字で上位からI、II…とし、細分される場合はa、

b…を付した。遺構の埋土は、上位からアラビア数字で表示した。土層の色調は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）によった。

② 室内整理

資料の整理は通常の手順によって行い、報告書の作成にあたった。

報告書の記述のうち、遺構は本文、図版、写真図版ともに種類別に掲載した。

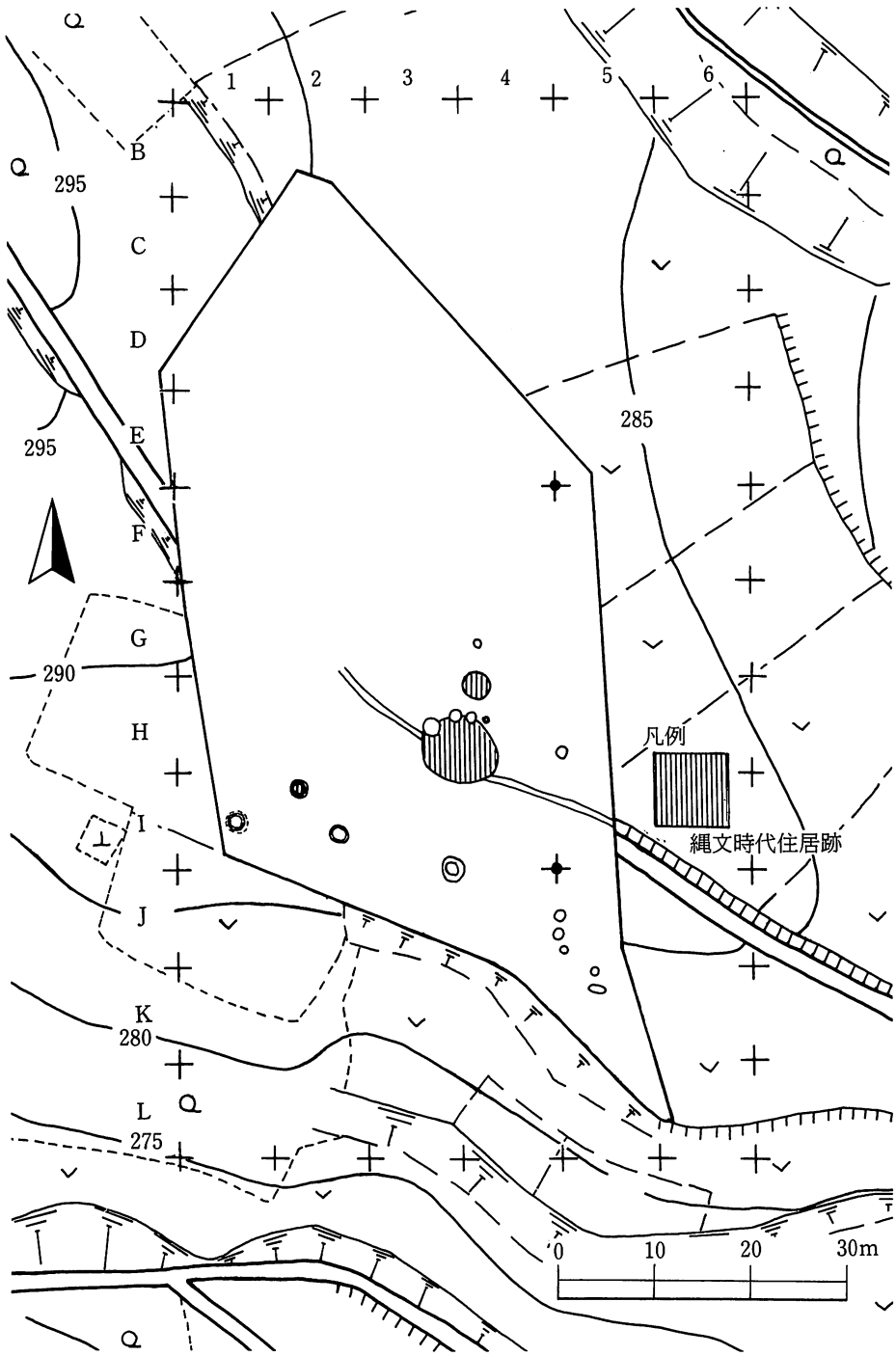
遺物は遺構内外や種類に関係なく、掲載順に1からの通し番号を付し、図版に掲載した遺物の番号もそれに対応させた。

遺構縮尺は40分の1と60分の1を原則として表示した。

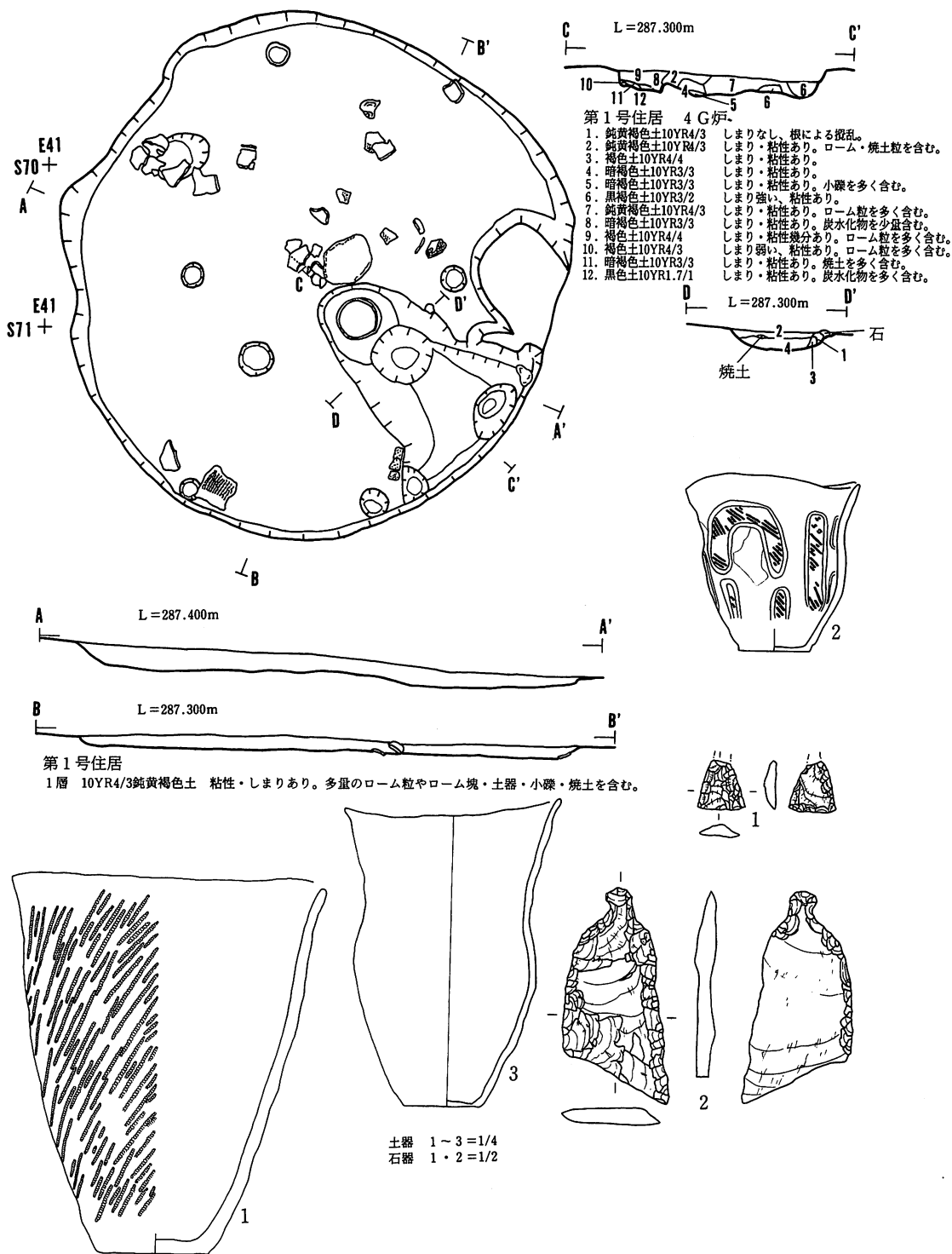
図版は3分の2、2分の1、3分の1、任意の縮尺である。写真図版の縮尺は3分の2、2分の1、3分の1、4分の1を原則とし、一部は原寸大、他は縮尺率を表示した。

石器の一覧表において長さ・幅・厚さの単位はmmであり、重さの単位はgである。

なお、遺物については、中世から近世に掛けての遺構から出土した縄文時代遺物のように時期関係が明らかな場合において遺構外の扱いをした。



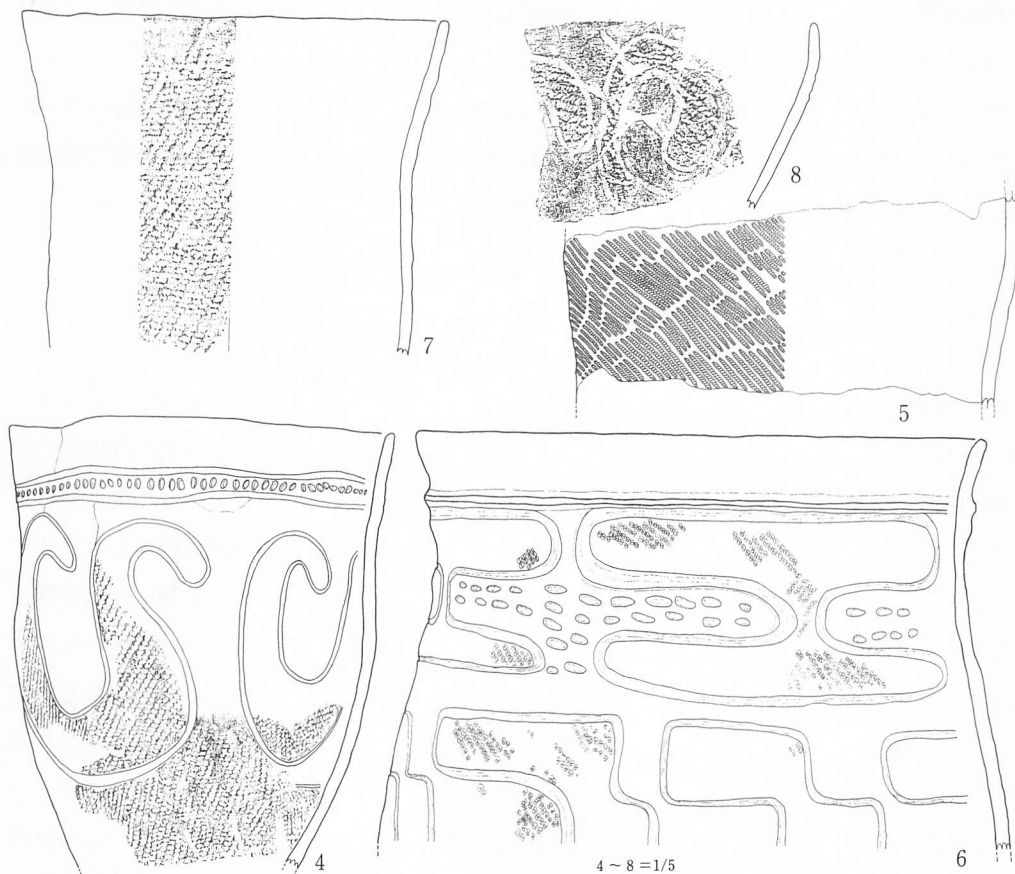
第1図 経塚長根遺跡遺構配置図



第2図 第1号住居跡・出土遺物

No.	位置	器種	部位	器形／外面	胎土	口径	底径	器高	備考	図版	写真図版
1	床面	鉢	口～底	口唇部ミカキ攪り糸L-R煤付着	均一	19.7	6.7	23.6	10Y R8/3浅黄橙使用されている	2	10
2	床面	鉢	口～底	小波状口縁磨消逆U字細かいR-L	薄手	10.8	4.4	11.0	炭質物滲み内外10Y R6/4鈍黄橙色煤付着	2	10
3	床面	鉢	口～底	口縁外反磨消細かいL-R-L複節	軟質	13.5	4.8	19.2	表面剝離内外煤付着10Y R4/4褐色	2	10

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	出土地点・層位	備考(産地)	図版	写真図版
1	石 鏝	15	15	3.4	0.5	凝灰質粘板岩	Q3埋土	古生界北上山地	2	10
2	石 匙	67	34	0.6	13.1	硬質凝灰質泥岩	Q3 1層	新世界第三系中新統奥羽山地	2	12



No.	位置	器種	部位	器形／外面	胎土	口径	底径	器高	備考	図版	写真図版
4	床面	鉢	口～体	連鈎縄文爪形刺突太めの原体L-R	硬堅	25.5	／	28.5	煤付着炭質物滲み内外10Y R7/3鈍黄橙色	3	10
5	床面	鉢	体部	R-L単節	硬堅	／	／	(14.3)	2次焼成内外10Y R8/4浅黄橙色研体器	3	10
6	床面	鉢	口～体	隆帯沈線区画斜方刺突L-R-L	硬堅	38.0	／	(26.4)	推定最大胴部径40.0内外10Y R7/4	3	10
7	床面	鉢	口～体	口縁部ミカキ反L-R-L煤付着	硬堅	(28.2)	／	(22.3)	内外10Y R8/2灰白色摩耗	3	10
8	床面	鉢	口～体	平口内湾鈎状磨消縄文細長いR-L	硬堅	／	／	／	内外10Y R8/3浅黄橙	3	10

第3図 第1号住居跡出土遺物

2. 検出された遺構と遺構内の遺物

1 縄文時代竪穴住居跡

第1号住居跡（4G住居跡）

〈遺構〉（第2図、写真図版2）

事前の試掘調査において検出済みのものである。鈍黄褐色土が土器を伴って円形状に検出された。他の遺構との切り合いはない。

平面形は南北方向が幾分長いがほぼ円形である。規模は3.3m×3.1mと小規模なものである。

壁は遺構の上部が耕作等で削平されて約10cm残存するのみである。床面はほぼ平坦で、東部において小範囲に張り出し状のものが認められる。貼り床や柱穴は認められない。

埋設土器を伴う複式炉が南東隅に認められた。前庭部は床面より10cmほど掘り込まれている。石組みは認められないが炉体部および埋設土器は火熱による変色が著しい。埋設土器は鉢の胴部を用いているが、複式炉の外から出土した土器片が接合関係にある。

埋土は一層のみで、土器、炭化物、クルミの破片を含む。

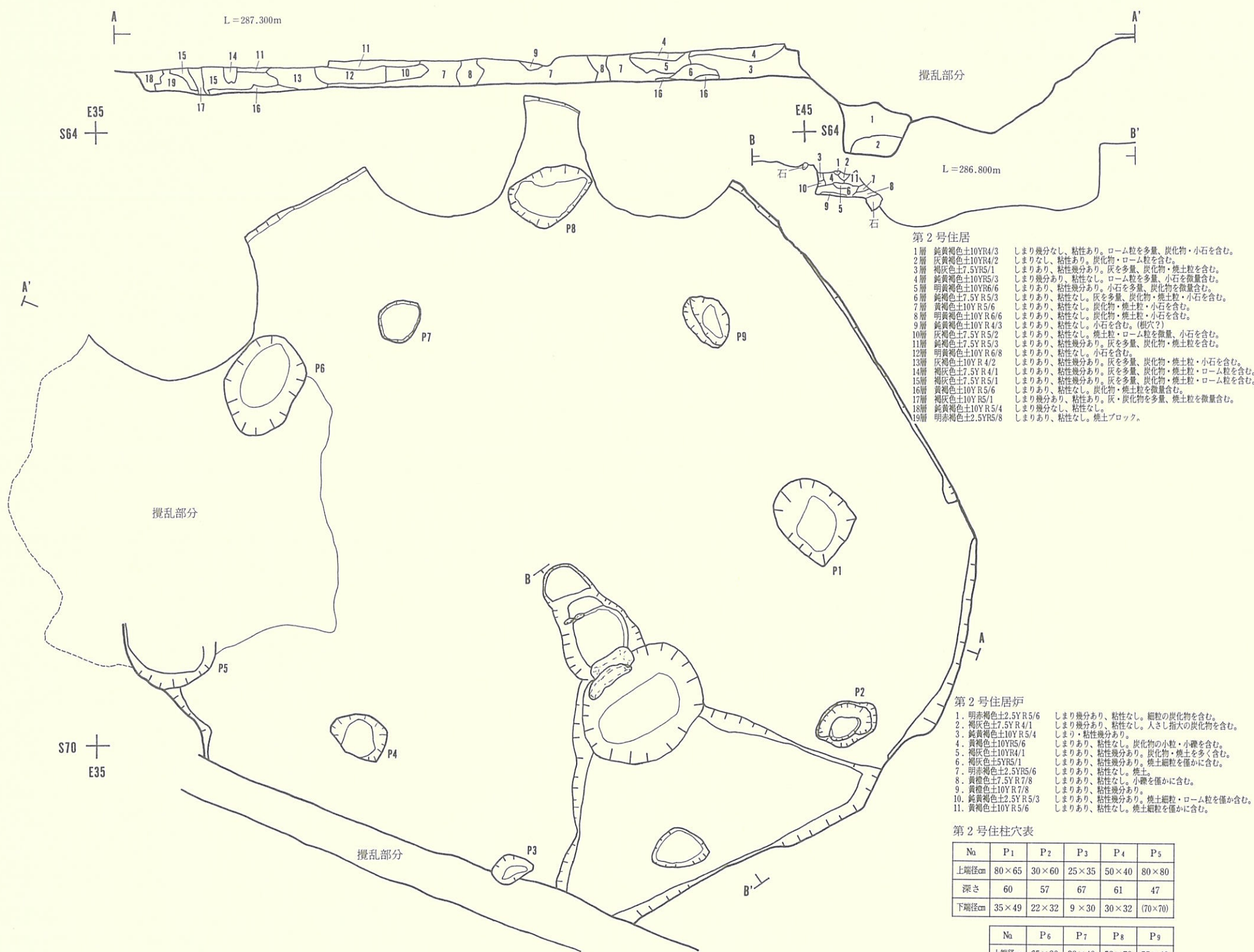
遺構の時期は出土した土器より縄文時代中期末以降と考えられる。

〈遺物〉（第2・3図、写真図版10・12）

土器 全部で7点出土している。住居の北半部にほぼ完形に復元できるものが集中している。

1は口唇部を磨き、間隔の狭い燃糸を地文としている。2は小型の鉢で、小波状の口縁部を磨き沈線区画内に縄文を充填し区画外を磨消して逆U字文・鉤状文を描出している。炭質物が胎土に滲み込み使用した痕跡が認められる。3も小型の鉢で、磨かれた口縁部は外反し小波状をなす。全体的に表面の化粧粘土が剥離しているが、わずかに細かい複節縄文を施した磨消技法が認められる。内外に多量の煤が付着している。4は小波状をなす磨かれた口縁部を2条の沈線と爪形刺突によって体部と区画している。体部には沈線によって縄文を区画し横位のS字により連続鉤状文を描出している。表面は2次焼成を受け煤が付着し、胎土には炭質物が滲み込んでいる。5は単節の地文のみの2次焼成を受けた炉体器である。炉には逆に据えられている。6は大型鉢の5分の1個体ほどの破片である。外反気味の口縁部と体部を隆帯により区画し体上部に続く隆帯と沈線の区画内に斜方向からの刺突を加えている。更にL字状の短い垂下文が体部を巡る形で下方に続いている。7は平口の地文のみの口縁部破片である。8は平口で内弯気味の口縁部である。体部にかけて鉤状の磨消縄文が施されている。

石器 1の石鏃は平基で先端部が欠損した粗雑な造りをしたものである。2の石匙は縦型で摘まみが左に寄っている。先端部4分の1を欠損したものである。



- 第2号住居
- 1層 鈍黄褐色土10YR4/3 しまり幾分なし、粘性あり。ローム粒を多量、炭化物・小石を含む。
 - 2層 灰褐色土10YR4/2 しまりなし、粘性あり。炭化物・ローム粒を含む。
 - 3層 褐灰色土7.5YR5/1 しまりあり、粘性幾分あり。灰を多量、炭化物・焼土粒を含む。
 - 4層 鈍黄褐色土10YR5/3 しまり幾分あり、粘性なし。ローム粒を多量、小石を微量含む。
 - 5層 明黄褐色土10YR6/6 しまりあり、粘性幾分あり。小石を多量、炭化物を微量含む。
 - 6層 鈍褐色土7.5YR5/3 しまりあり、粘性なし。灰を多量、炭化物・焼土粒・小石を含む。
 - 7層 黄褐色土10YR5/6 しまりあり、粘性なし。炭化物・焼土粒・小石を含む。
 - 8層 明黄褐色土10YR6/6 しまりあり、粘性なし。小石を含む。(樹穴?)
 - 9層 鈍黄褐色土10YR4/3 しまりあり、粘性なし。小石を含む。
 - 10層 灰褐色土7.5YR5/2 しまりあり、粘性なし。焼土粒・ローム粒を微量、小石を含む。
 - 11層 鈍褐色土7.5YR5/3 しまりあり、粘性幾分あり。灰を多量、炭化物・焼土粒を含む。
 - 12層 明黄褐色土10YR6/8 しまりあり、粘性なし。小石を含む。
 - 13層 灰褐色土10YR4/2 しまりあり、粘性幾分あり。灰を多量、炭化物・焼土粒・小石を含む。
 - 14層 褐灰色土7.5YR4/1 しまりあり、粘性幾分あり。灰を多量、炭化物・焼土粒・ローム粒を含む。
 - 15層 褐灰色土7.5YR5/1 しまりあり、粘性幾分あり。灰を多量、炭化物・焼土粒・ローム粒を含む。
 - 16層 黄褐色土10YR5/6 しまりあり、粘性なし。炭化物・焼土粒を微量含む。
 - 17層 褐灰色土10YR5/1 しまり幾分あり、粘性あり。灰・炭化物を多量、焼土粒を微量含む。
 - 18層 鈍黄褐色土10YR5/4 しまり幾分なし、粘性なし。
 - 19層 明赤褐色土2.5YR5/8 しまりあり、粘性なし。焼土ブロック。

- 第2号住居炉
- 1. 明赤褐色土2.5YR5/6 しまり幾分あり、粘性なし。細粒の炭化物を含む。
 - 2. 褐灰色土7.5YR4/1 しまり幾分あり、粘性なし。入さし指大の炭化物を含む。
 - 3. 鈍黄褐色土10YR5/4 しまり・粘性幾分あり。
 - 4. 黄褐色土10YR5/6 しまりあり、粘性なし。炭化物の小粒・小礫を含む。
 - 5. 褐灰色土10YR4/1 しまりあり、粘性幾分あり。炭化物・焼土を多く含む。
 - 6. 褐灰色土5YR5/1 しまりあり、粘性幾分あり。焼土細粒を僅かに含む。
 - 7. 明赤褐色土2.5YR5/6 しまりあり、粘性なし。焼土。
 - 8. 黄褐色土7.5YR7/8 しまりあり、粘性なし。小礫を僅かに含む。
 - 9. 黄褐色土10YR7/8 しまりあり、粘性幾分あり。
 - 10. 鈍黄褐色土2.5YR5/3 しまりあり、粘性幾分あり。焼土細粒・ローム粒を僅かに含む。
 - 11. 黄褐色土10YR5/6 しまりあり、粘性なし。焼土細粒を僅かに含む。

第2号住居柱穴表

Na	P1	P2	P3	P4	P5
上端径cm	80×65	30×60	25×35	50×40	80×80
深さ	60	57	67	61	47
下端径cm	35×49	22×32	9×30	30×32	(70×70)

Na	P6	P7	P8	P9
上端径cm	65×80	38×40	52×78	55×40
深さ	89	7	17	73
下端径cm	(46×65)	33×43	30×40	33×15

第4図 第2号住居跡

第2号住居跡（4H住居跡）

〈遺構〉（第4図、写真図版3）

事前の試掘調査において検出済みのものであるが、攪乱・道路工事および溝跡・土坑等の影響を受けて遺構範囲の確定に難渋した。溝跡・土坑に切られている。

平面形は南北方向が幾分長い角張った楕円形である。規模は8.5m×9.0mと大型である。

壁は遺構の上部が耕作等で削平されて約30cm残存するのみである。床面はほぼ平坦であるが、僅かに南東部方向に傾いている。貼り床は認められない。柱穴は6基検出された。

組石を伴う複式炉が南西隅に認められた。前庭部は床面より50cmほど掘り込まれている。石組の石は多くは認められない。炉体部は火熱による変色が著しい。埋設土器は認められない。

埋土は炭化物や焼土と地山ブロックを多量に含む攪乱層である。炭化物の形態や量より焼失家屋の可能性が考えられる。出土遺物は規模に比して少ない。

遺構の時期は出土した土器より縄文時代中期末以降と考えられる。

〈遺物〉（第5・6図、写真図版11・12）

土器 9はほぼ原形に復元できた浅鉢である。内傾気味の波状口縁部から沈線区画U字磨消縄文と波頂下部にO字状2重区画内刺突列文で囲んだ円形磨消縄文を配している。割れ口に炭化物滲み込みが認められる。10は6分の1個体程の破片である。口縁部は平口で緩く外反している。蕨状の入り組み文で沈線区画内に縄文が施されている。19・20・21は同じ技法の体部破片である。14は平口の口縁部分である。15は口縁部で、小波状の頂下に隆帯区画部を持ち下方より刺突し沈線文で区画されている。16は折返しをもつ口縁部で2条の刺突列を有する。17は平口の口縁部で大粒の斜行縄文が施されている。18は平口折返し口縁部で隆帯上に波状竹管沈線文が施されている。12は摩耗した壺の体下部から底部にかけての破片である。13は沈線区画文を配した小型鉢の体下部から底部の破片である。

石器 石鏃が4点、石斧が2点、不定形石器9が1点出土している。

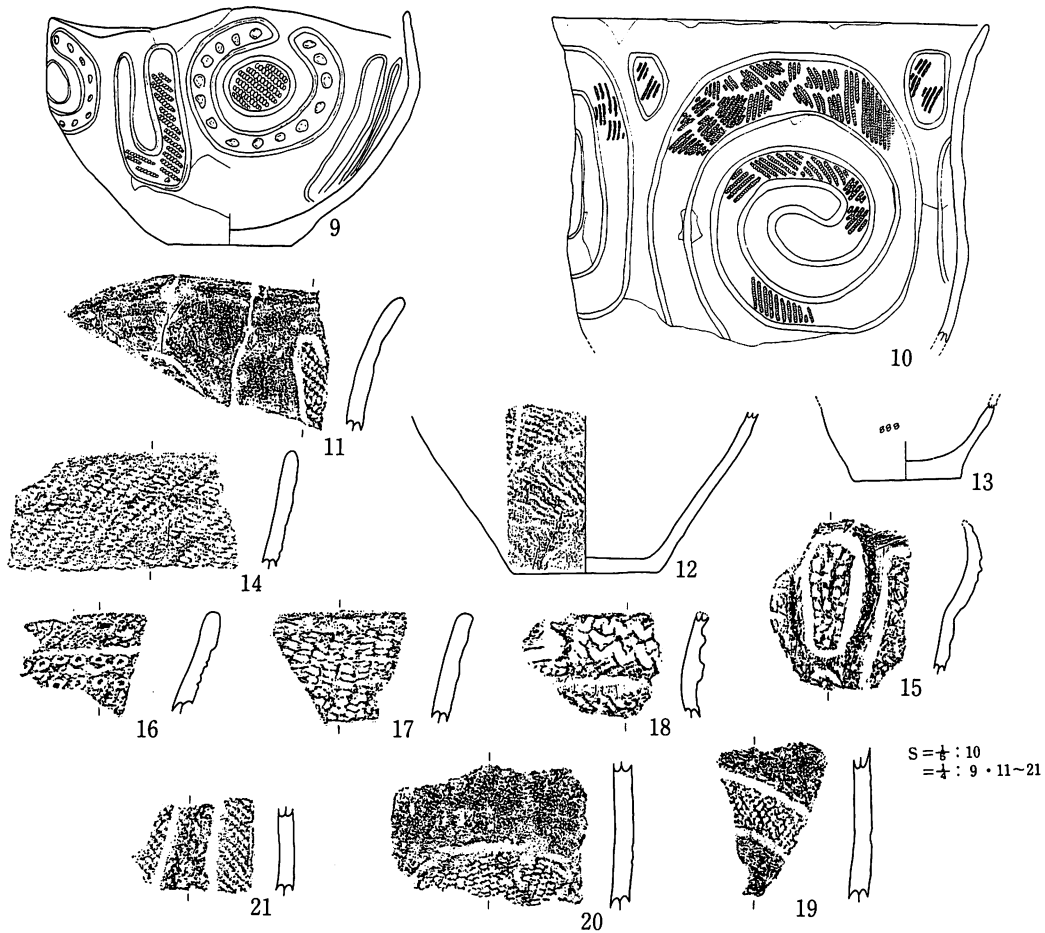
3～6の石鏃は24mmから27mmの長さのもので無茎である。うち5と6の2点は基部が開いた形のUまたはV字形になっている。7と8は石斧である。7は風化が著しく、折損していた破片を接合できたものである。

第3号住居跡（2I遺跡）

〈遺構〉（第7図、写真図版4）

調査区の南側斜面部分で薄い再堆積層を除去したのちに検出したものである。この遺構の床面下よりフラスコ状土坑が検出されている。

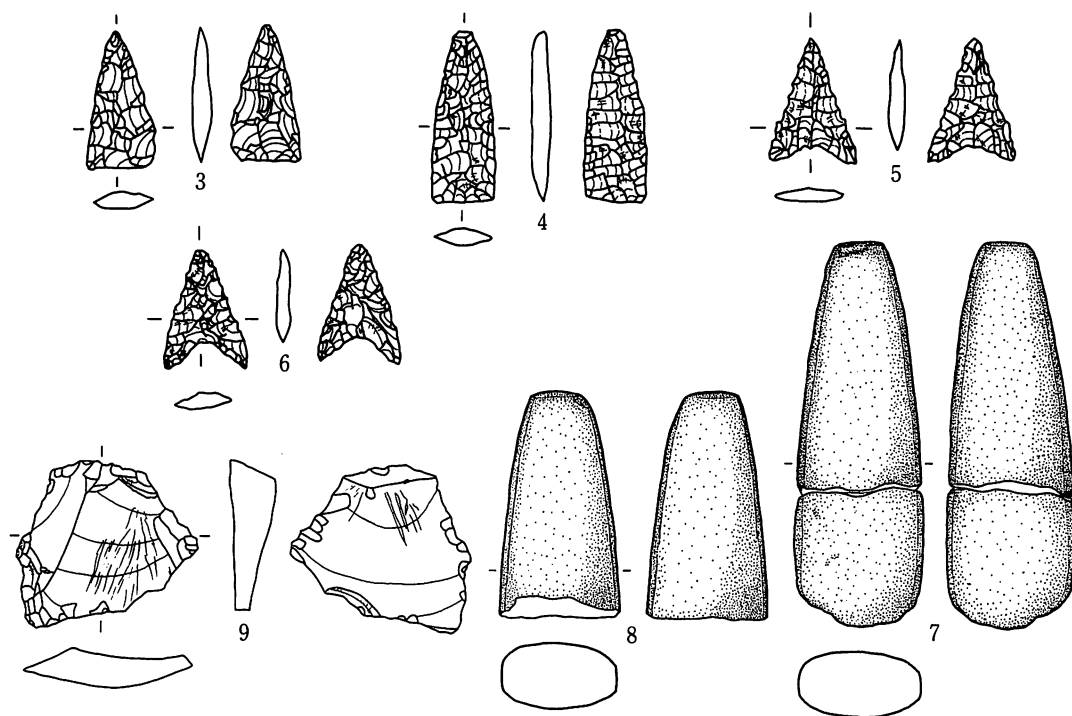
平面形は東西方向が幾分長いほぼ円形である。東部に入り口状の張り出し部がみられるが



S = $\frac{1}{4}$: 10
 = $\frac{1}{4}$: 9 · 11 ~ 21

No	位置	器種	部位	器形 / 外面	胎土	口径	底径	器高	備考	図版	写真図版
9	下層	浅鉢	口~底部	磨消縄文0字状2重区画内刺突列文	細粒	19.0	6.7	12.5	断口10Y R3/2黒褐色炭化物滲み込み	5	11
10	下層	鉢	口~体	口唇ミガキ蕨状入組文L-R煤付着	粗粒	(29.0)	／	(21.4)	内外10Y R5/6黄褐色	5	11
11	Q 3	鉢	口縁部	口縁反小波状鈎状磨消縄文R-L	硬堅	／	／	／	内外10Y R8/3浅黄褐色	5	11
12	下層	壺	下部~底	摩耗	均一	／	7.8	(8.5)	内外煤付着5Y R7/4鈍橙色2次焼成	5	11
13	下層	鉢	下部~底	小型・沈線区画文	軟質	／	5.8	(4.0)	平底内外5Y R7/4鈍橙色摩耗輪積みL-R	5	11
14	上層	鉢	口縁部	平口斜行縄文L-R煤付着	雲母	／	／	／	粗製内外10Y R6/1褐灰色	5	11
15	Q 3	鉢	口縁部	小波状隆帯区画内刺突沈線文R-L	硬堅	／	／	／	内10Y R6/3鈍黄褐色摩耗	5	11
16	下層	鉢	口縁部	折返し口縁R-L横2条の刺突列	細礫	／	／	／	内外10Y R5/6黄褐色	5	12
17	上層	鉢	口縁部	平口大粒斜行縄文L-R	硬堅	／	／	／	煤滲み内外5Y R6/4鈍橙色	5	12
18	埋土	鉢	口縁部	折返・隆帯上波状竹管文R-L	細礫	／	／	／	10Y R4/4褐色内5Y R6/4鈍橙色煤滲み	5	12
19	Q 1	鉢	体部	鈎状磨消縄文L-R充填	軟質	／	／	／	炭化物浸透・煤付着	5	12
20	Q 4	鉢	体部	鈎状磨消縄文L-R充填	軟質	／	／	／	5Y R6/4鈍橙色25に類似	5	12
21	中層	鉢	体部	鈎状磨消縄文L-R	硬堅	／	／	／	内外5Y R6/4鈍橙色煤滲み	5	12

第5図 第2号住居跡出土遺物



No	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	出土地点・層位	備 考 (産地)	図版	写真図版
3	石 鏃	27	14	0.4	0.8	凝灰質粘板岩	Q 1 埋土	古生界北上山地	6	11
4	石 鏃	34	12	0.4	1.5	凝灰質粘板岩	Q 3 埋土	古生界北上山地	6	11
5	石 鏃	25	18	0.3	0.6	チャート質粘板岩	Q 4 埋土	古生界北上山地	6	11
6	石 鏃	24	16	0.3	0.5	輝緑凝灰岩	Q 1 埋土	古生界北上山地	6	11
7	石 斧	154	52	26	335	凝灰質硬砂岩	Q 4 埋土	古生界北上山地	6	11
8	石 斧	91	48	27	200	輝石粉岩	Q 4 埋土	中生界北上山地	6	11
9	不定形石器	44	49	13	20.8	硬質凝灰質泥岩	Q 4 埋土	新世界第三系中新統奥羽山地	6	12

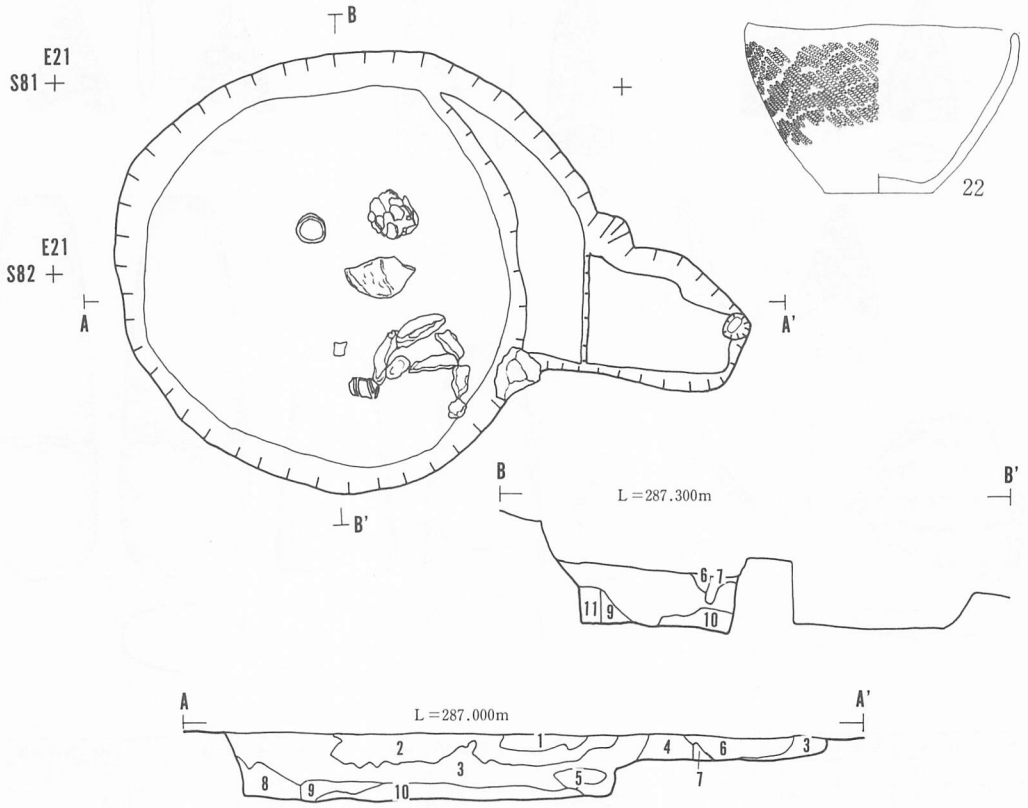
第6図 第2号住居跡出土遺物

関連する他の施設は認められない。規模は円形部が2.0m×2.0m、張り出し部は1.0m×0.3mである。壁は遺構の南側部が耕作等で削平されているため約15cm残在するのみである。床面はほぼ平坦であるが、僅かに南東部方向に傾いている。貼り床は認められない。柱穴は検出できなかった。複式炉的な石囲い炉が南東隅に認められた。使用された期間は焼土の少なからずから短いものと推定できる。埋設土器は認められない。埋土には少量の炭化物や土器破片が含まれていた。ほぼ完形の浅鉢と壺と鉢が床面から出土している。

遺構の時期は出土した土器より縄文時代中期末以降と考えられる。

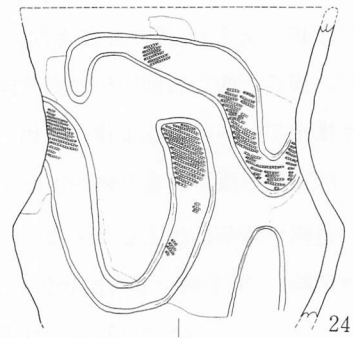
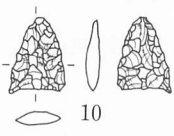
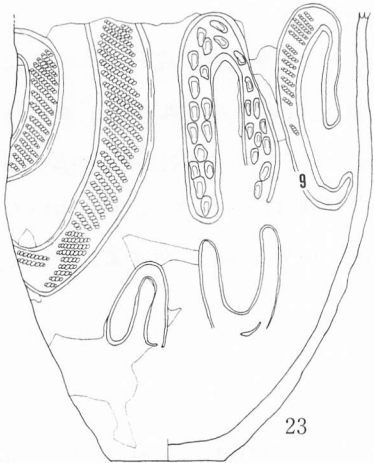
〈遺物〉(第7図、写真図版12)

土器 22の浅鉢は口唇部と底部をミガキ、体部には細かい縄文が施されている。23は体部から底部にかけての鉢で、蕨状磨消縄文と逆U字状区画内に刺突が施されたものの組み合わせが



第3号住居

- 1層 10YR5/6黄褐色土 粘性・しまり幾分あり。礫を若干含む。
- 2層 10YR4/4褐色土 粘性・しまりあり。礫・炭化物を若干含む。
- 3層 10YR5/6黄褐色土 粘性・しまり幾分あり。礫を若干含む。
- 4層 10YR5/6黄褐色土 粘性・しまりなし。礫を若干含む。
- 5層 10YR4/4褐色土 粘性・しまりあり。礫・炭化物を若干含む。
- 6層 10YR4/6褐色土 粘性・しまりあり。礫・炭化物を若干含む。
- 7層 10YR4/6褐色土 粘性・しまりなし。礫・炭化物を若干含む。
- 8層 10YR6/4鈍黄橙色土 しまりあり。地山質ブロック。
- 9層 10YR4/6褐色土 粘性・しまり幾分あり。
- 10層 10YR3/4暗褐色土 粘性あり、しまり幾分あり。炭化物を若干含む。
- 11層 10YR7/8黄橙色土 しまりあり。多量の小礫を含む。地山。



第7図 第3号住居跡・出土遺物

見られる。24は壺の体部で入り組み状磨消縄文で区画の外に細かい縄文が施されている。

石器 10は無茎の石鏃で、長さ20mmと小型である。

No.	位置	器種	部位	器形 / 外面	胎土	口径	底径	器高	備考	図版	写真図版
22	床面	浅鉢	口~底	口唇部底部ミガキ細かいR-L	軟質	14.5	5.6	9.0	部分的に煤染み内外10Y R8/3浅黄橙	7	12
23	床面	鉢	体~底	炭状磨消縄文逆U字内刺突R-1	硬堅	/	(6.0)	(24.8)	煤付着内外5Y R6/6橙色使用による摩耗大	7	12
24	床面	壺	体部	入り組み状磨消縄文細かいR-L	硬堅	/	/	(16.0)	煤付着内外5Y R7/6橙色	7	12

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	出土地点・層位	備考 (産地)	図版	写真図版
10	石 鏃	20	14	0.4	0.7	粘板岩	Q21層	古生界北上山地	7	12

2 土坑

第1号土坑

〈遺構〉(第8図、写真図版5)

4 G区に位置している。平面形はほぼ円形である。遺構上部は削平を受け皿状の底部が残在するのみである。開口部の直径は1.5m、底部の直径は1.4m、検出面からの深さは13cmである。埋土は1層で土器の破片や炭化物を含む。

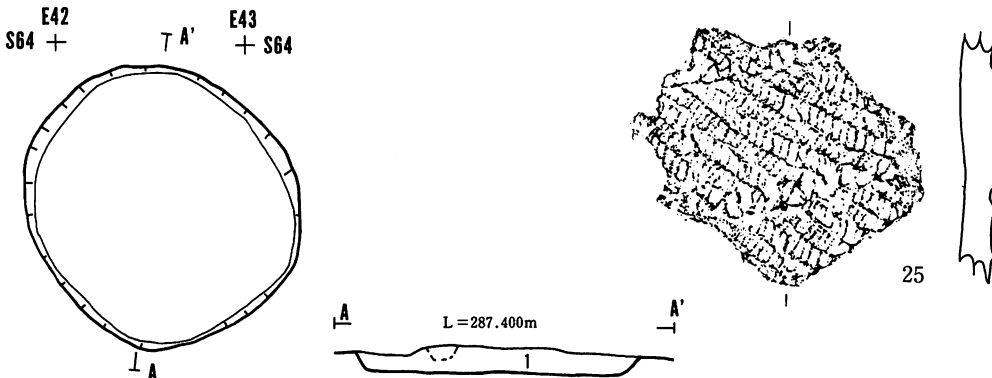
時期は出土遺物から縄文時代早期末葉以降が考えられる。

〈遺物〉(第8図、写真図版12)

石器 25は鉢の体部で結束縄文が施され胎土に繊維を含む。

第1号土坑

No.	器種	部位	部位	器形 / 外面	胎土	備考	図版	写真図版
25	下部	鉢	体部	結束縄文10Y R5/2灰黄褐色	繊維	内5Y R7/4鈍橙色摩耗	8	12



第1号土坑

1層 10Y R4/3鈍黄褐色 粘性なし・しまり幾分あり。ローム粒・ローム塊・小礫を多量に含む。

第8図 第1号土坑・出土遺物

第2号土坑

〈遺構〉（第9図、写真図版5）

4 H区に位置している。平面形はほぼ円形である。遺構としては柱穴様である。開口部の直径は0.75m、底部の直径は0.45m、検出面からの深さは0.65mある。埋土は3層で炭化物を含む。

時期を特定する出土物はないが近くの住居跡との関連で縄文時代中期末葉以降が考えられる。

第3号土坑

〈遺構〉（第9図、写真図版5）

5 H区に位置している。平面形はほぼ円形である。遺構上部は削平を受け浅い。開口部の直径は0.80m、底部の直径は0.70m、検出面からの深さは0.20mである。埋土は1層で土器の細かい破片や炭化物を含む。

時期を出土遺物から特定できないが縄文時代後期以降が考えられる。

第4号土坑

〈遺構〉（第9図、写真図版6）

4 J区に位置している。平面形はほぼ円形である。開口部の直径は1m、底部の直径は0.90m、検出面からの深さは0.96mである。埋土は複層であるが大部分は一気に埋積したものと考えられる。土器の破片や炭化物を含む。

時期は出土遺物から縄文時代中期末葉以降が考えられる。

〈遺物〉（第9図、写真図版13）

土器 26は鉢の体部で斜行縄文を施してある褐灰色の硬質な破片である。

第5号土坑

〈遺構〉（第9図、写真図版6）

4 J区に位置している。平面形はほぼ円形である。遺構上部は幾分開き気味である。開口部の直径は1.20m、底部の直径は1.07m、検出面からの深さは1.05mである。埋土は複層に区分できるが、第4号土坑と同様に一気に埋積したものと考えられる。摩耗した土器の破片や炭化物を含む。

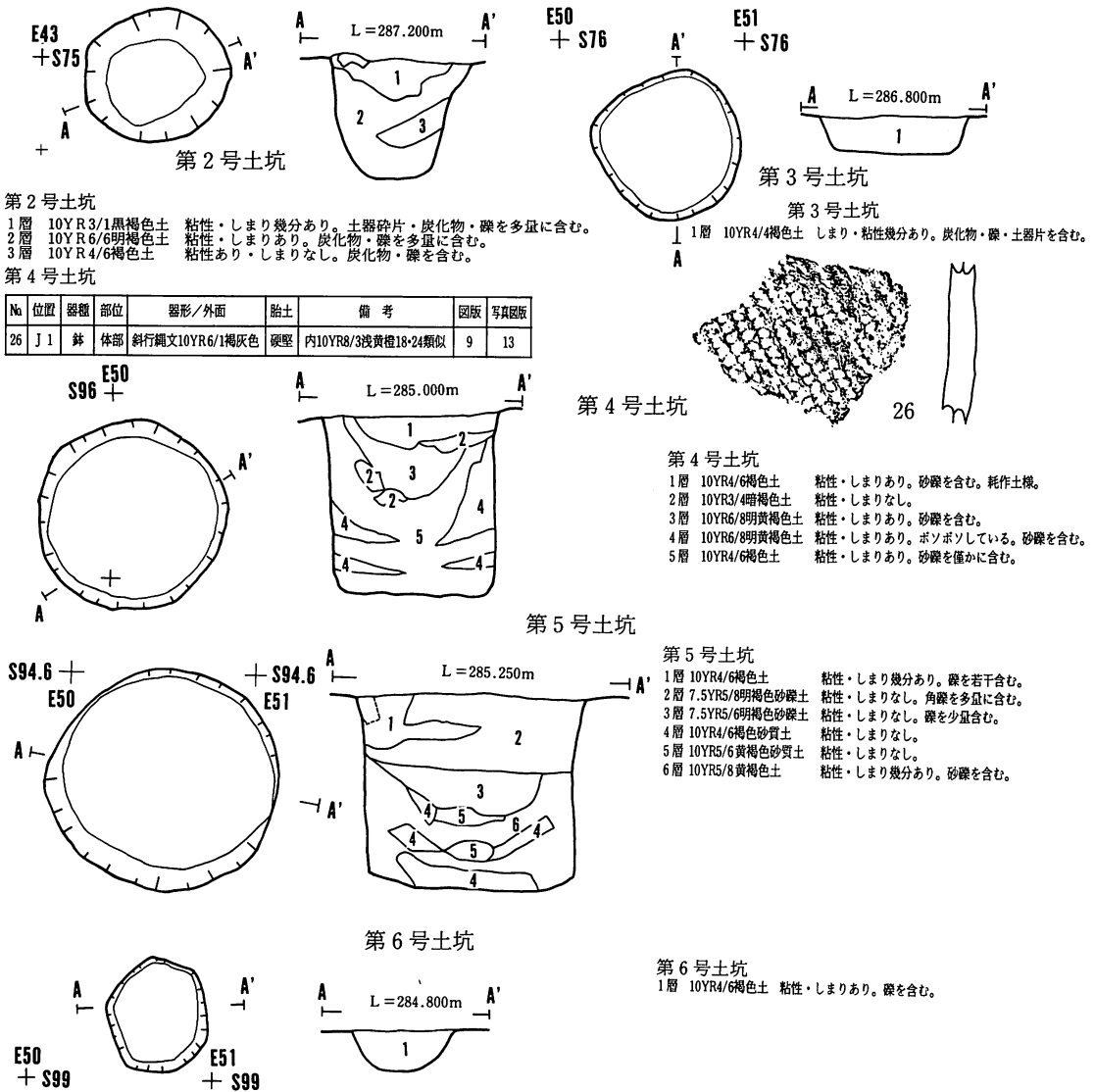
時期を出土遺物から判定することはできない。

第 6 号土坑

〈遺構〉（第 9 図、写真図版 6）

5 J 区に位置している。平面形は不整多角形である。遺構上部は削平を受け深皿状の底部が残存するのみの小型の土坑である。開口部の直径は0.60m、底部の直径は0.50m、検出面からの深さは0.20mである。埋土は1層で土器の細かい破片や炭化物を含む。

時期を出土遺物から判定することはできない。



第 9 図 第 2 ~ 6 号土坑・出土遺物

第7号土坑

〈遺構〉(第10図、写真図版7)

5 K区に位置している。平面形は楕円形である。遺構上部の南側は崩落により開いた形になっている。開口部の直径は1.15m、底部の直径は0.95m、検出面からの深さは1.10mである。埋土は複層であるが他の土坑と同様一気に埋積したものと考えられる。土器破片や炭化物を含む。

時期は出土遺物から縄文時代中期末葉以降が考えられる。

〈遺物〉(第10図、写真図版13)

土器 27は口縁部から底部まで接合できた鉢である。小さい山形をもつ口縁部は隆帯によって区画されている。隆帯には刺突が施されている。体部には細かい縄文が施されている。全体的には摩耗している。28～32は鉢の口縁部および体部類似破片で、磨いた口縁部を隆帯にて区画し弧状刺突および隆帯が頸部に続く、体部には懸垂文様磨消縄文が施されている。内部は磨かれ硬硬で、鈍橙色を帯びる。外部は浅黄橙色で摩耗が目立つ。29にはボタン状貼付文と撚紐圧痕が認められる。

第8号土坑

〈遺構〉(第10図、写真図版7)

5 K区に位置している。平面形は長楕円形である。開口部の長径は2.20m、短径は1.20m、底部の径は2.10mである。検出面からの深さは0.30mである。埋土上部には焼土や少量の炭化物が含まれる。土器の破片も含む。

時期は出土遺物から弥生時代以降が考えられる。

〈遺物〉(第10図、写真図版13)

土器 33は壺の口縁部で外反した口唇近くまで細かい撚糸文と竹管様条痕が施されている。胎土に雲母を含む。34は鉢の体部で33より太めの撚糸文が施されている。鈍黄橙色で煤が付着している。33の類似破片が同地区より出土している。

第9号土坑

〈遺構〉(第11図、写真図版7)

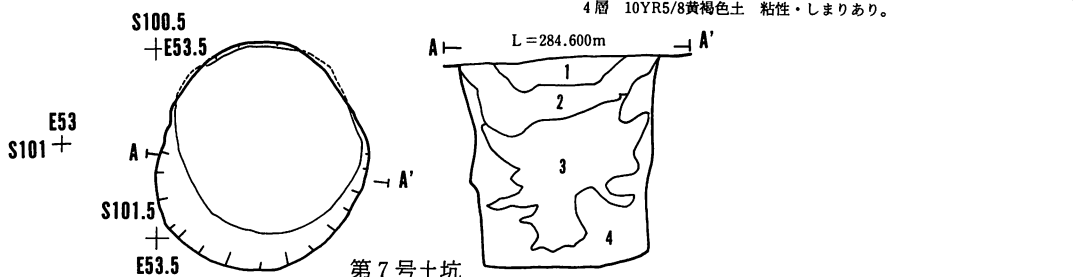
4 H区に位置している。第2号住居跡を切っている。平面形はほぼ円形である。開口部の直径は1.86m、底部の直径は1.75m、検出面からの深さは1.60mである。壁は中位で内側に膨らんでいる。底部の南東隅に浅い窪みがあり、この部分に向かって3方向から浅い溝が刻まれている。埋土は複層で土器の破片や炭化物を含む。

時期は出土遺物から縄文時代中期末葉以降が考えられる。

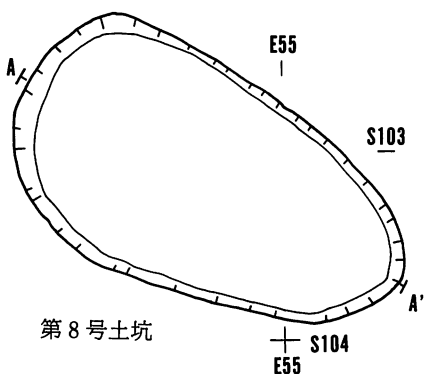
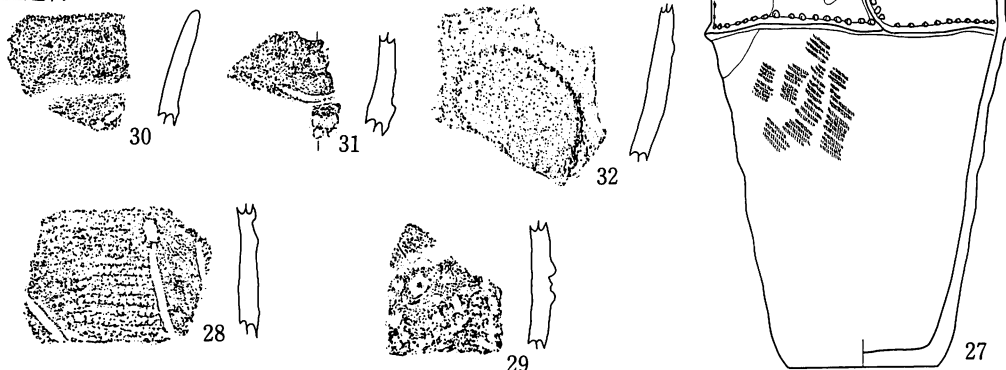
No	位置	器種	部位	器形 / 外面	胎土	口径	底径	器高	備考	図版	写真図版
27	上層	鉢	口~底	隆帯区画刺突列細かいL-r摩耗	粗粒	15.6	8.0	21.0	内外5Y R6/4鈍橙色	10	13
28	上層	鉢	体部	刺突懸垂摩耗縄文R-L煤付着	硬堅	/	/	/	内外10Y R6/6明黄褐色	10	13
29	上層	鉢	体部	隆帯区画ボタン状貼付燃紐圧痕	硬堅	/	/	/	10Y R8/3浅黄橙摩耗内5Y R6/4鈍橙	10	13
30	上層	鉢	口縁部	ミガキ弧状刺突列	硬堅	/	/	/	内外5Y R6/4鈍橙色摩耗内煤付着35類似	10	13
31	上層	鉢	口縁部	隆帯区画磨消縄文10Y R8/3	硬堅	/	/	/	内5Y R8/3淡橙色36類似	10	13
32	上層	鉢	口縁部	平口ミガキ弧状隆帯10Y R8/3	硬堅	/	/	/	摩耗内5Y R7/4鈍橙色	10	13

第7号土坑

- 1層 10YR3/4暗褐色土 粘性・しまり幾分あり。礫を若干含む。
- 2層 10YR4/6褐色土 粘性・しまり幾分あり。礫・炭化物を若干含む。
- 3層 10YR4/4褐色土 粘性・しまり幾分あり。礫・炭化物を若干含む。
- 4層 10YR5/8黄褐色土 粘性・しまりあり。



出土遺物



第8号土坑

No	位置	器種	部位	器形 / 外面	胎土	備考	図版	写真図版
33	中層	壺	口縁部	外反口唇近くまで細い燃糸竹管條条	夏母	内外5YR5/3鈍赤褐色内摩耗	10	10
34	中層	鉢	体部	燃糸文	硬堅	内外10YR7/3鈍黄褐色煤付着	10	10

第8号土坑

- 1層 10YR3/4暗褐色土 粘性・しまり幾分あり。礫・炭化物を若干含む。
- 2層 10YR6/6明黄褐色土 粘性・しまりあり。ブロック状焼土(10YR4/8赤)を含む。
- 3層 10YR3/4暗褐色土 粘性・しまり幾分あり。礫・炭化物を若干含む。
- 4層 10YR6/6明黄褐色土 粘性・しまりあり。
- 5層 10YR3/3暗褐色土 粘性・しまりあり。

第10図 第7・8号土坑・出土遺物

〈遺物〉（第11図、写真図版12）

土器 鉢の口縁部から底部にかけてのもの2個体と底部にかけての1個体のいずれも小型の土器である。35はほぼ完形で地文のみである。36は口縁部から底部にかけてのミニチュア土器で、口縁部は小波状である。37は体部から底部にかけてのもので懸垂磨消縄文が細かい地文とともに施されている。

第10号土坑

〈遺構〉（第11図、写真図版8）

4H区に位置している。平面形はほぼ円形である。遺構上部は攪乱を受けフラスコ状の下部が残存するのみである。開口部の直径は1.75m、底部の直径は1.75m、検出面からの深さは1.00mである。壁は部分的に直に立っているところがある。埋土は複層で土器の破片や炭化物を含む。時期は出土遺物から縄文時代中期末葉以降が考えられる。

〈遺物〉（第11図、写真図版12）

土器 38は鉢の小波状口縁部に鈎状磨消縄文が施されている。39は鉢の体部で、細かい地文の磨消縄文が施されている。

第11号土坑

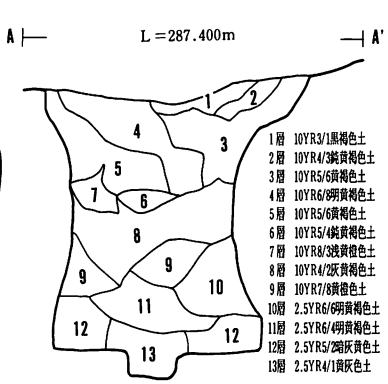
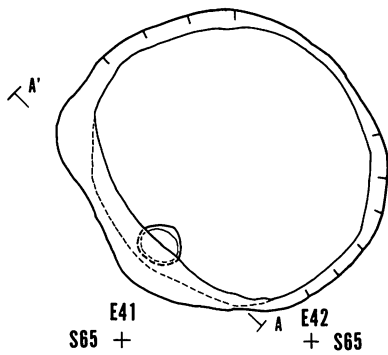
〈遺構〉（第11図、写真図版8）

4H区に位置している。平面形はほぼ円形である。開口部の直径は1.65m、底部の直径は1.50m、検出面からの深さは1.50mである。壁は南西隅で内側に膨らんでいる。また南西隅に副穴様のものがある。埋土は複層で焼土や炭化物を含む。

時期を特定できる出土遺物はないが切合いから縄文時代中期末葉以降が考えられる。

第9・10号土坑出土土器

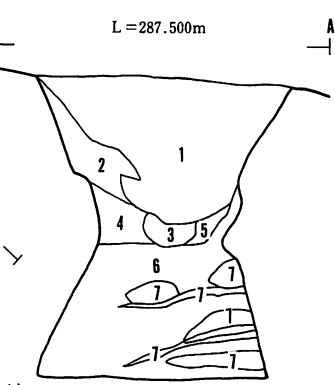
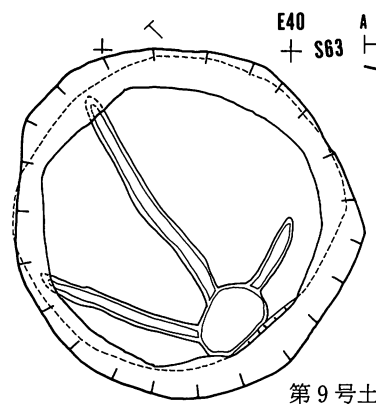
No.	位置	器種	部位	器形／外面	胎土	口径	底径	器高	備考	図版	写真図版
35	床面	鉢	口～底	口縁部わずかに外反ミガキ細い縄文	軟質	7.8	3.8	7.8	内外10Y R8/2灰白色焼土棕色素付着	11	12
36	床面	鉢	口～底	小波状口縁細かい縄文	軟質	6.2	2.7	4.9	煤滲み内外10Y R8/3浅黄橙色	11	12
37	床面	鉢	体～底	懸垂磨消縄文細かい縄文幾分上げ底	軟質	／	4.8	(10.1)	内外5Y R7/4鈍橙色摩耗	11	12
38	埋土	鉢	口縁部	小波状口縁鈎状磨消縄文	細礫	／	／	／	内外10Y R4/3鈍黄褐色	11	12
39	埋土	鉢	体部	磨消縄文細いR-L	硬質	／	／	／	内外10Y R8/3浅黄橙	11	12



第11号土坑

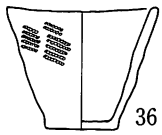
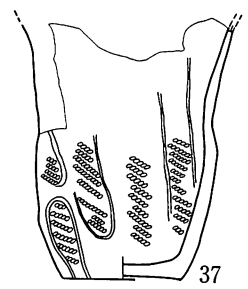
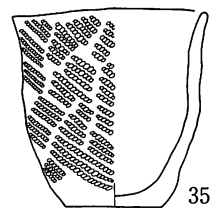
- 1層 10YR3/1黒褐色土 しまり・粘性幾分あり、小石を含む。
- 2層 10YR4/3鈍黄褐色土 しまり・粘性幾分あり、小石・ローム粒を含む。
- 3層 10YR5/6黄褐色土 しまり・粘性幾分あり、ローム粒と多量の小石を含む。
- 4層 10YR6/8明黄褐色土 しまりあり、粘性なし。小石を含む。
- 5層 10YR5/6黄褐色土 しまり幾分あり、粘性なし。小石・炭化物・焼土を含む。
- 6層 10YR5/4鈍黄褐色土 しまり・粘性幾分あり。小石・炭化物を極少量含む。
- 7層 10YR6/3暗黄褐色土 しまりあり、粘性幾分あり。炭化物を極少量含む。
- 8層 10YR4/2灰黄褐色土 粘性幾分あり、しまりなし。小石・炭化物・焼土を多量に含む。
- 9層 10YR7/8黄褐色土 粘性幾分、しまりあり、顕指大の礫・ローム粒を多量に、焼土・炭化物を含む。
- 10層 2.5YR6/7明黄褐色土 粘性幾分あり、しまりなし。焼土粒を多量に、小石・炭化物を含む。
- 11層 2.5YR6/4明黄褐色土 粘性幾分あり、しまりなし。小石・炭化物を含む。
- 12層 2.5YR5/2暗黄褐色土 粘性あり、しまりなし。炭化物を多量に、焼土粒を少量含む。
- 13層 2.5YR4/1黄灰色土 粘性あり、しまりなし。炭化物を多量に、焼土粒を少量含む。

E38 + S63

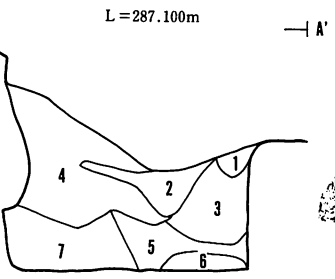
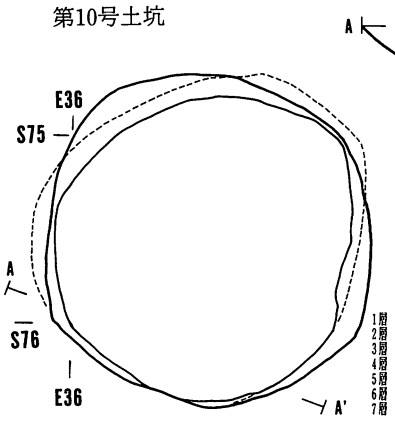


第9号土坑

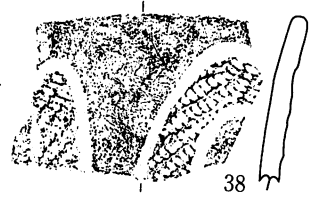
- 1層 10YR3/1黒褐色土 しまり・粘性幾分あり、小石を含む。
- 2層 10YR6/8黄褐色土 しまり幾分あり、粘性大。
- 3層 2.5YR7/4淡黄褐色土 しまり・粘性幾分あり、小石を少量含む。
- 4層 10YR7/8黄褐色土 しまり幾分あり、粘性大、小石を少量含む。
- 5層 2.5YR8/8黄褐色土 しまりあり、粘性なし、炭化物を含む。
- 6層 10YR7/8黄褐色土 しまり・粘性なし、レンズ状の褐灰色土(10YR6/1)が混在。
- 7層 10YR6/1褐灰色土 ローム塊・ローム粒。しまりあり・粘性幾分あり。



第10号土坑



- 1層 10YR6/4鈍黄褐色土 しまり・粘性幾分あり、小石・炭化物を含む。
- 2層 10YR6/8明黄褐色土 しまりなし、粘性あり。多量のローム塊・極少量の炭化物・小石を含む。
- 3層 10YR5/4鈍黄褐色土 しまり・粘性あり。単大のローム塊・炭化物・小石を含む。
- 4層 10YR7/8黄褐色土 しまりあり、粘性なし。小石を多量に含む。
- 5層 10YR6/8明黄褐色土 しまり・粘性幾分あり。多量のローム塊と炭化物を含む。
- 6層 10YR4/2灰黄褐色土 しまり幾分・粘性あり。炭化物・ローム粒を含む。
- 7層 10YR7/8黄褐色土 しまりなし、粘性幾分あり。小石を多量に含む。



第11図 第9～11号土坑・出土遺物

第12号土坑

〈遺構〉(第12図、写真図版8)

1 I 区に位置している。平面形はほぼ円形である。開口部の直径は1.20m、底部の直径は1.30m、検出面からの深さは1.90mである。壁は下半部から内側に膨らみ、断面形はフラスコ状である。埋土は複層であるが下半部は一気に埋積している。土器の細片や炭化物を含む。

時期を特定できる出土遺物はないが、周囲との関連で縄文時代中期末葉以降が考えられる。

第13号土坑

〈遺構〉(第12図、写真図版9)

2 I 区に位置している。平面形はほぼ円形である。遺構上部は第3号住居跡に切られている。開口部の直径は1.90m、底部の直径は2.10m、断面形はフラスコ型である。検出面からの深さは1.30mである。底部に深さ12cm程の副穴がある。埋土は複層で土器の破片や炭化物を含む。

時期を特定できる出土遺物はないが、切合いの関係から縄文時代中期末葉以前と考えられる。

第14号土坑

〈遺構〉(第12図、写真図版9)

2 I 区に位置している。平面形はほぼ円形である。開口部の直径は1.75m、底部の直径は2.00m、断面形はフラスコ型である。検出面からの深さは1.60mである。底部に深さ10cm程の副穴がある。埋土は複層で土器の破片や炭化物を含む。

時期は出土遺物から縄文時代中期末葉以降が考えられる。

〈遺物〉(第12図、写真図版12)

〈土器〉40は鉢の口縁部から体部の破片で、平口と思われる口唇部は内側に肥厚している。斜行縄文が施され、硬質な破片である。

第12号土坑

1層	10Y R4/6褐色土	しまり・粘性幾分あり。砂礫を若干含む。
2層	10Y R5/6黄褐色土	しまり・粘性あり。砂礫を若干含む。
3層	10Y R4/4褐色土	しまり・粘性あり。礫を若干・炭化物含む。(砂質)
4層	10Y R4/4褐色土	しまり・粘性あり。礫を若干・炭化物含む。水分を多く含む。
5層	10Y R3/4暗褐色土	しまり・粘性あり。砂礫・炭化物若干含む。
6層	10Y R6/6明黄褐色土	しまり・粘性あり。(地山質)
7層	10Y R6/8明黄褐色土	しまりなし、粘性あり。水分を多く含むボソボソしている。

第14号土坑

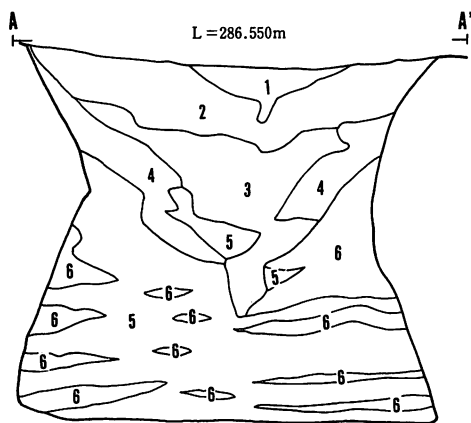
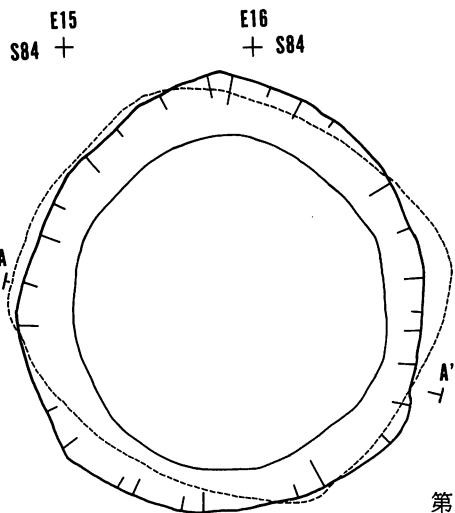
1層	10Y R4/6褐色土	粘性・しまり幾分あり。礫を若干含む。
2層	10Y R4/4褐色土	粘性・しまり幾分あり。礫・炭化物を若干含む。
3層	10Y R4/6褐色土	粘性・しまり幾分あり。礫を若干含む。1層と同じ。
4層	10Y R4/4褐色土	粘性・しまり幾分あり。礫・炭化物を若干含む。2層と同じ。
5層	10Y R3/4暗褐色土	粘性・しまりあり。砂礫を若干含む。
6層	10Y R6/8明黄褐色土	粘性・しまりあり。砂礫を多く含む。
7層	10Y R4/6褐色土	粘性・しまりあり。砂礫・炭化物を多く含む。
8層	10Y R4/6褐色土	粘性・しまりあり。砂礫・炭化物をより多く含む。

第13号土坑

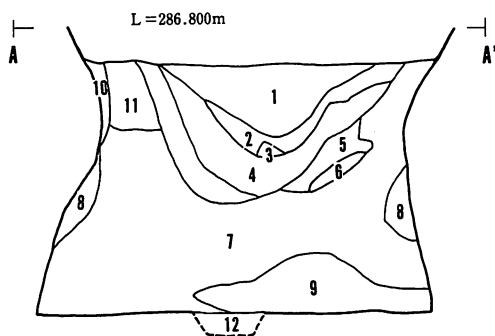
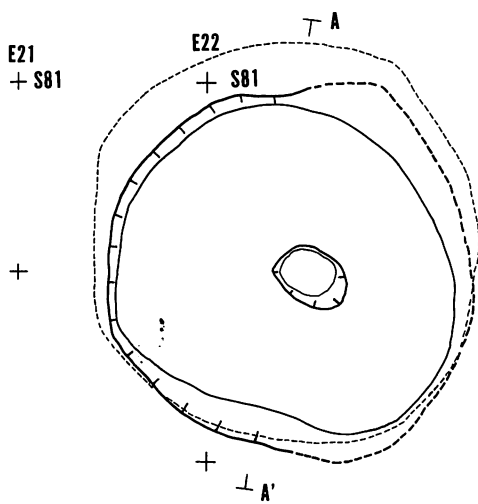
1層	10Y R3/11黒褐色土	しまりあり、粘性幾分あり。小礫含む。
2層	10Y R5/6黄褐色土	しまり・粘性幾分あり。多量のローム粒・小礫を含む。
3層	10Y R3/1黒褐色土	しまり・粘性幾分あり。ローム粒・小礫を含む。
4層	10Y R3/1黒褐色土	しまりあり、粘性幾分あり。ローム粒・小礫を含む。
5層	10Y R6/6明黄褐色土	粘性幾分あり・しまりなし。多量ローム粒・小礫を含む。
6層	10Y R4/6褐色土	粘性幾分あり、しまりなし。
7層	10Y R7/8黄褐色土	粘性しまり幾分あり、層中にローム粒ローム塊がレンズ状に散在する。

8層	10Y R7/8黄褐色土	6層とほぼ同じ、しまりなし。
9層	10Y R6/8明黄褐色土	色調以外6層と同じ。
10層	10Y R3/1黄褐色土	粘性幾分あり、しまりあり。小礫含む。
11層	10Y R6/8明黄褐色土	粘性幾分あり、しまりあり。小礫含む。
12層	10Y R4/4褐色土	しまりなし、粘性あり。

No.	位置	器種	部位	器形/外面	胎土	備考	図版	写真図版
40	中層	鉢	口~体	平口口唇内側に肥厚斜行縄文R-L	硬質	内外5Y R5/8明赤褐色 2次焼成	12	12

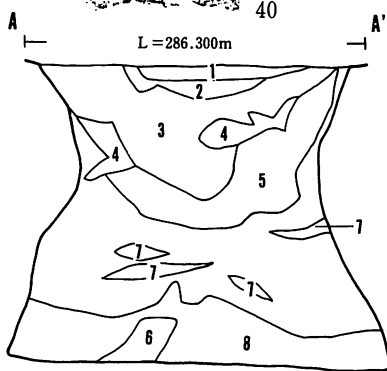
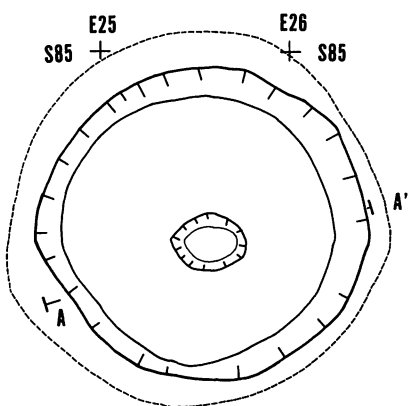
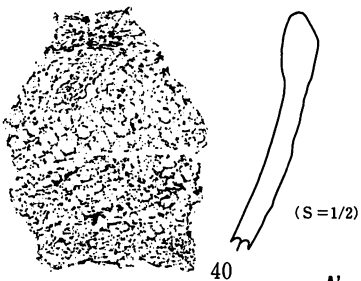


第12号土坑



第13号土坑

第14号土坑遺物



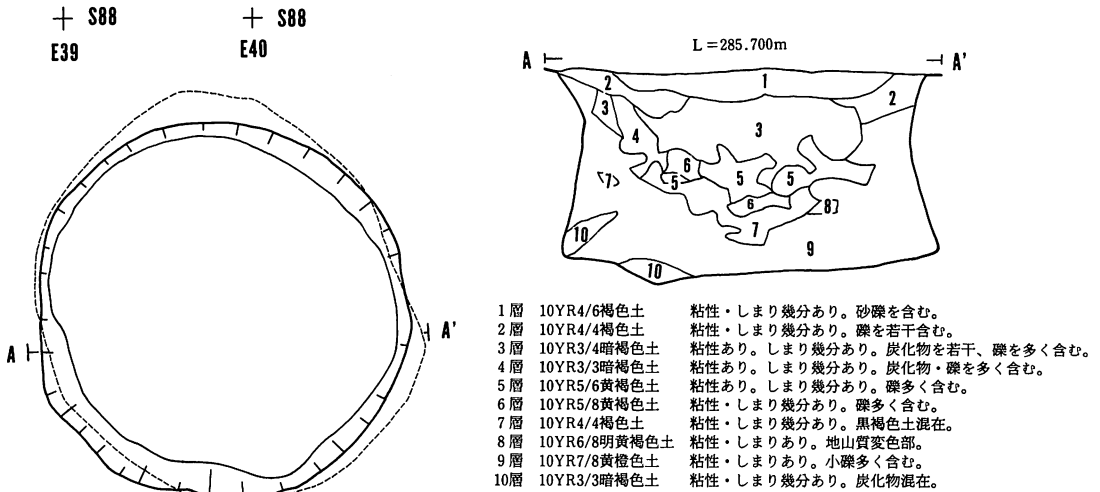
第14号土坑

第12图 第12~14号土坑·出土遺物

第15号土坑

〈遺構〉(第13図、写真図版9)

3 I区に位置している。平面形はほぼ円形である。遺構上部は幾分削平をうけている。開口部の直径は2.00m、底部の直径は1.80m、検出面からの深さは1.10mである。壁は幾分内側に膨らみ、断面形はフラスコ形に近い。埋土は複層であるが中位部分は人為的埋積の傾向を示す。土器の細片や炭化物はないが周囲との関連から縄文時代中期末葉以降が考えられる。

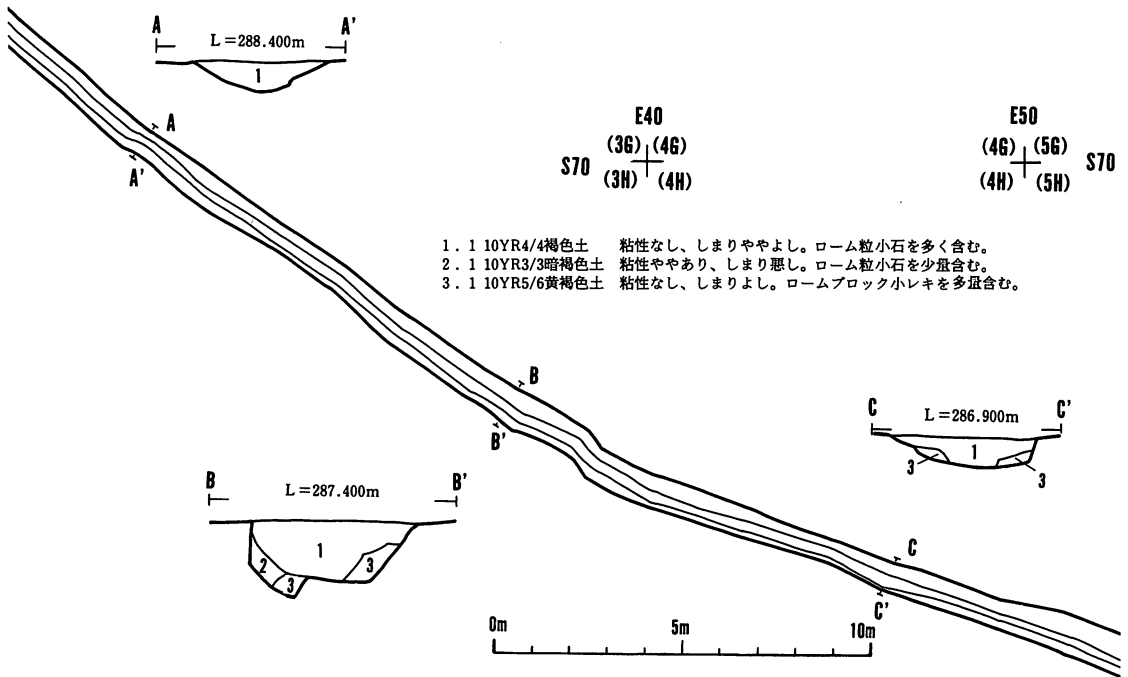


第13図 第15号土坑

3 その他の遺構

溝状遺構 (第14図、写真図版15)

北西部から東部へ調査区をほぼ二分する形で延びている。確認長37m、幅40cm、深さ30cm、高低差2.7mである。第3号住居跡を切っている。水路として使用された形跡はない。道路としてもちいられたと考えられる。



第14図 溝状遺構

4 遺構外の遺物

今回の調査で遺構外から土器及び石器が少量出土している。土器の大半は破片で、縄文時代早期～弥生時代のものであるが大部分は縄文時代中期である。石器の大半は剥片石器である。

1 土器 (第15図、写真図版13)

口縁部および体部の一部について、文様の特徴・施文技法・胎土の特徴などからⅠ～Ⅳ群に分類した。第Ⅰ群は縄文時代早期、第Ⅱ群は縄文時代前期、第Ⅲ群は縄文時代中期、第Ⅳ群は弥生時代のものである。

第Ⅰ群

41は鉢の口縁部で口唇に竹管押圧と撚糸の結束部圧痕の施されたものである。

第Ⅱ群

42は鉢の口縁部で平口の口唇部に撚糸の圧痕があり体部にかけて斜行縄文が施してある。胎土に繊維を含む。

43は内弯気味の鉢の口縁部で太めの撚糸を施文してある。胎土に雲母を含む。

第III群

44は鉢の口縁部で小波状をなし内穹ぎみである。体部は地文のみで硬堅である。45は鉢の硬堅な体部に撚糸が施されている。46も鉢の硬堅な体部で地文のみ施されている。47は鉢の口縁部で山形をなす。斜方向刺突列を施した隆帯で区画されている。

第IV群

48は鉢の口縁部で内穹の後外反する。隆帯と沈線で段状の文様を構成している。全体的に摩耗している。49は鉢の硬堅かつ薄手な体部で細かい撚糸文が施されている。50は壺の体部で頸部に沈線が巡り細かい撚糸文が施されている。51も壺で頸部近くの体部片である。細かい縄文が施されている。52は鉢の体部から底部まで接合されたものである。硬堅な体部に細かい撚糸が施されている。

石器（第16図、写真図版14・15）

剝片石器12点と礫石器1点について記載をおこなった。他に記載を省いた剝片数十点がある。

(1) 石鏃

11は茎部をもたず基部がハの字型に先端部に向かって抉り込んでいる。背面に未調整の部分を残している。12も基部部分がハの字型に先端部に向かって抉り込んでいるが、11ほど丸みを帯びていない。先端部を欠いている。13は基部がほぼ平らなもので、整形および調整は雑である。

(2) 石匙

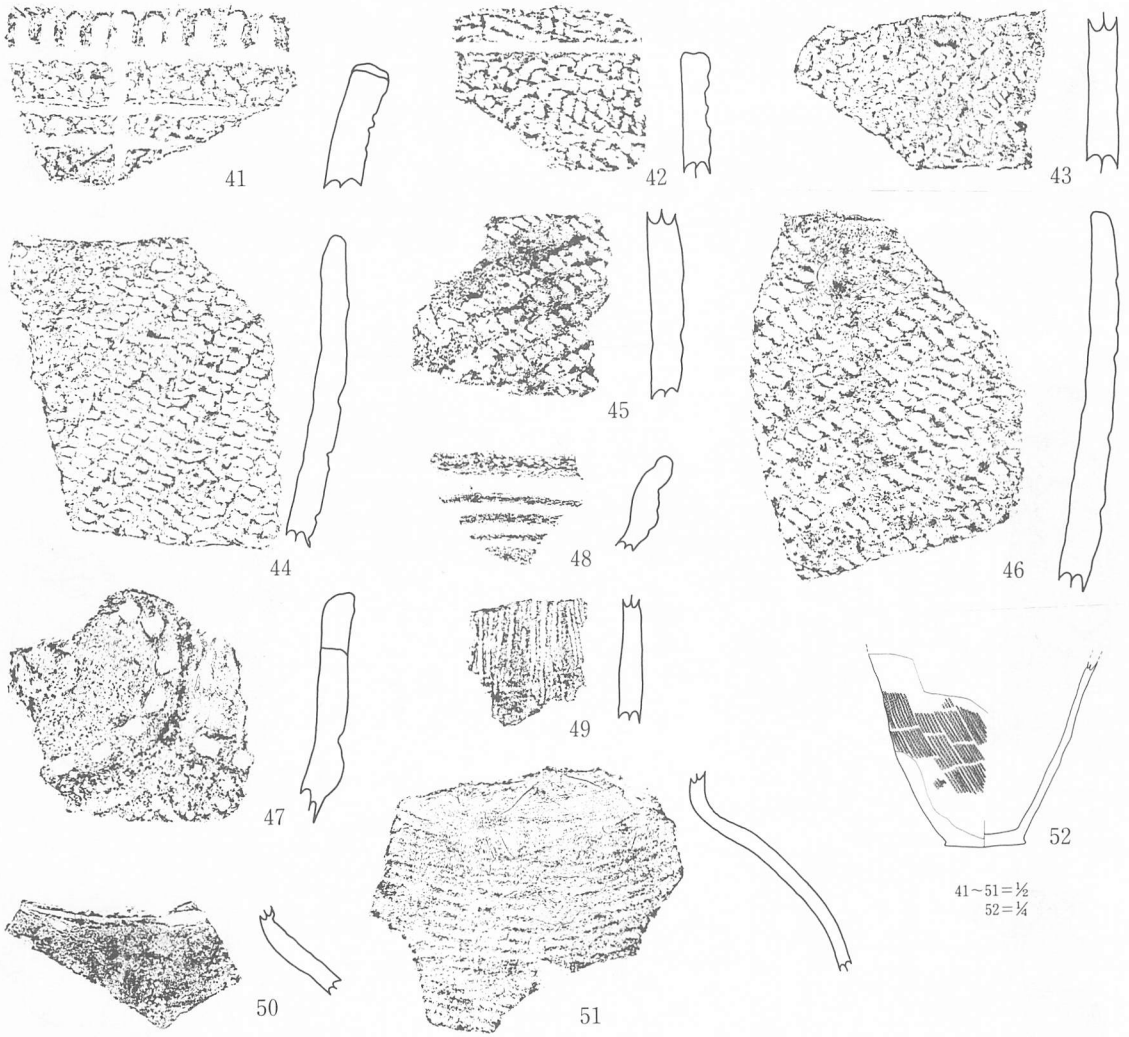
14は縦型の小型のもので、主面に未調整部分をもつ。15も縦型であるが、14に比較して大きく、また調整も丁寧である。

(3) 不定形石器

16～22の7点である。剝片の1縁辺に調整痕のあるものは16・18・20・21の4点である。2縁辺に調整痕のあるものは17・19である。3縁辺に調整痕をもつものは22である。以上のうち19・21・22は定形石器の破片的要素をもつ。

(4) 凹石

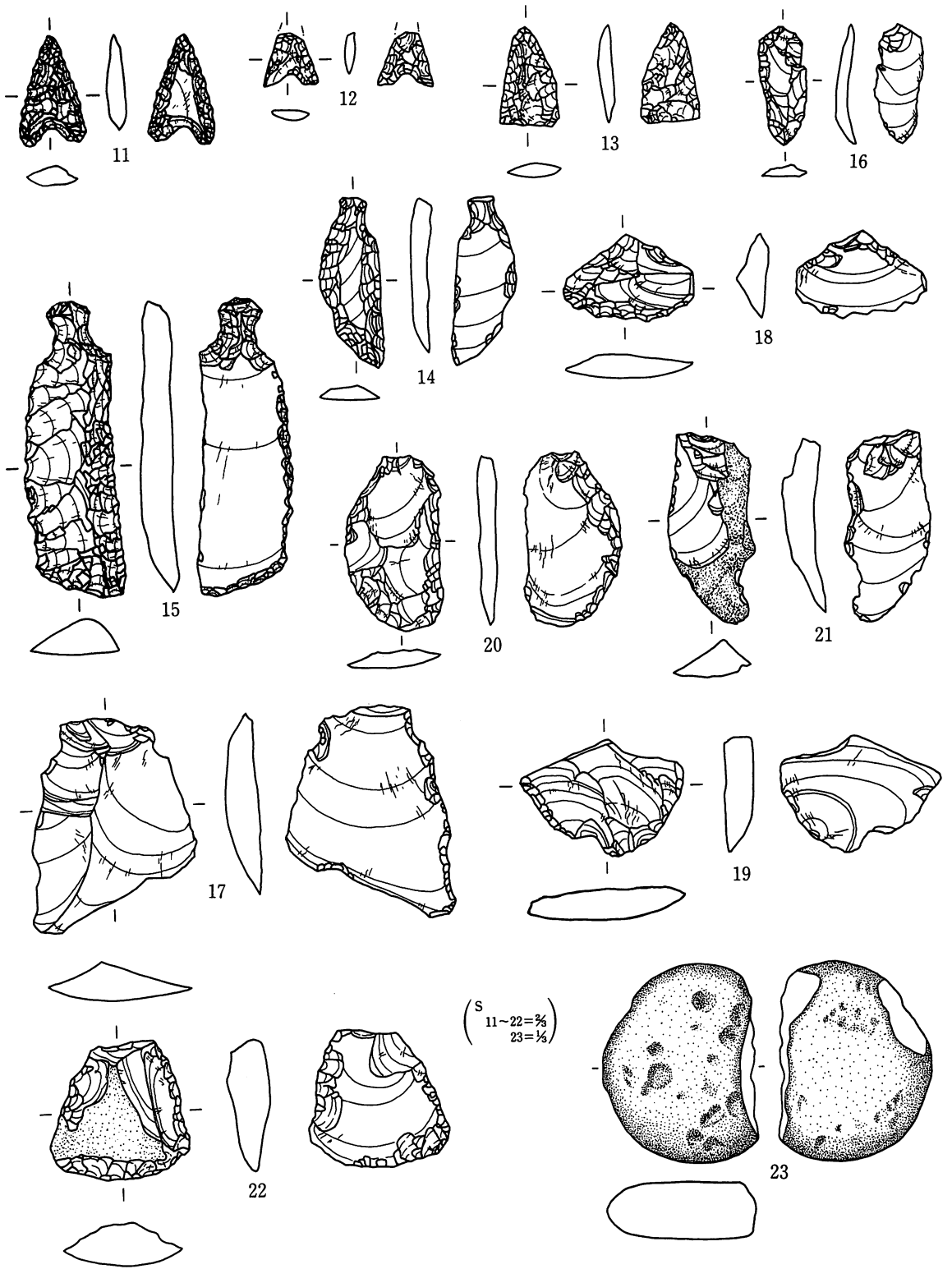
23は礫石器で明確な用途が考えられるものはこれのみである。3分の1程が欠損している。表裏とも平坦で複数の窪みが認められる。



41~51 = 1/2
52 = 1/4

No.	地点・層位	器種	部位	器形／外面	胎土	備考	図版	写真図版
41	5 F 表採	鉢	口縁部	口唇に竹管押圧結節部圧痕10 Y R 4/2 灰黄褐色	纖維含	内外10 Y R 8/3 浅黄橙色	15	13
42	4 H 表採	鉢	口縁部	平口口唇 L-R 圧痕斜行縄文	纖維含	内外10 Y R 8/3 浅黄橙色	15	13
43	4 B 表採	鉢	口縁部	内湾ための撚糸 L-R 煤付着	雲母含	内外5 Y R 6/6 橙色	15	13
44	4 G 表採	鉢	口縁部	小波状口縁内湾斜行縄文 R-L 煤付着	硬堅	内外5 Y R 7/4 鈍橙色 2次焼成	15	13
45	4 H 3 層	鉢	体部	撚糸 L-R	硬堅	内外5 Y R 7/4 鈍橙色 2次焼成	15	13
46	5 J 3 層	鉢	体部	斜行縄文 R-L 底部近く 5 Y R 6/6 橙色	硬堅	2次焼成煤滲み内 5 Y R 5/2 灰褐色	15	13
47	5 K 表採	鉢	口縁部	山形隆帯区画斜方向刺突列	雲母含	内外10 Y R 7/3 鈍黄橙色	15	13
48	5 K 2 層	鉢	口縁部	内湾の後外反隆帯沈線	浮石含	内外5 Y R 5/8 明赤褐色	15	13
49	2 G 溝	鉢	体部	細かい撚糸 L-R 煤付着	硬堅	弥生内外 5 Y R 4/4 鈍赤褐色	15	13
50	5 K 表採	壺	体部	頸部に沈線巡る細かい L-R	雲母含	内外 5 Y R 6/3 鈍橙色 30 類似	15	13
51	5 K 表採	壺	体部	細かい R-L 煤付着頸部近く	雲母含	弥生内外 5 Y R 5/2 灰褐色	15	13
52	4 H 3 層	鉢	体～底	細かい R-L 撚糸 (底径 4.3 高さ 10)	硬堅	内外 10 Y R 6/4 (+ 3 H 4 c 破片)	15	13

第15図 遺構外出土遺物(1)



(S
 11-22=3/8
 23=1/2)

第16圖 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土石器

№	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石 材	出土地点・層位	備 考 (産地)	図版	写真図版
11	石 鏃	27	16	0.5	1.4	チャート質ストレート	3 J 1 層	古生界北上山地	16	14
12	石 鏃	13	14	2.4	0.2	チャート	5H 1 d 1 層	古生界北上山地	16	14
13	石 鏃	24	15	3.3	0.9	凝灰質粘板岩	5H 1 d 1 層	古生界北上山地	16	14
14	石 鏃	41	16	0.5	2.4	チャート質ストレート	5G5e 1 層	古生界北上山地	16	14
15	石 匙	72	23	0.8	14.0	硬質凝灰質泥岩	4 H 1 層	新世界第三系中新統奥羽山地	16	14
16	不定形石器	29	11	0.3	0.8	硬質凝灰質泥岩	3 B 1 層	新世界第三系中新統奥羽山地	16	14
17	不定形石器	52	41	10.4	14.3	凝灰質粘板岩	3 I 2 層	古生界北上山地	16	15
18	不定形石器	21	32	6.8	3.0	凝灰質粘板岩	4 I 1 層	古生界北上山地	16	14
19	不定形石器	29	40	0.7	7.5	硬質凝灰質泥岩	4 J 1 層	新世界第三系中新統奥羽山地	16	14
20	不定形石器	43	24	0.5	6.3	粘板岩	4 K 1 層	古生界北上山地	16	14
21	不定形石器	47	21	0.9	7.3	硬質凝灰質泥岩	表探	新世界第三系中新統奥羽山地	16	14
22	不定形石器	34	34	10.6	11.7	凝灰質粘板岩	表探	古生界北上山地	16	14
23	凹 石	98	75	30	310	砂岩	5 I 1 層	古生界北上山地	16	15

5 まとめ

1 遺構について

検出された遺構は、縄文時代の住居跡3棟、土坑15基、近世の溝状遺構1条である。

(1) 住居跡

丘陵状の鞍部に分布している。西方は高度を増すが平坦部は広がるので集落は調査区域外に延びる可能性が考えられる。これら3棟は全体面積や規模の違いはあるものの複式炉を有する。なかでも第2号住居跡の複式炉は大型住居に伴う平面的にも垂直的にも大型のものである。このような大型住居と複式炉については観音堂遺跡などの類例をもとに加工場跡的性格づけを行っている報告例がある。大迫町教育委員会中村良幸氏は複式炉の前庭部に灰が残存していないことなどから、アク抜きのために意図的に灰を用い、またアク抜きする場所と推論している。

第3号住居跡は土坑の窪みを利用して構築してある。住居の規模として小型ながら遺物が比較的多く出土していることから特殊な、例えば祭祀跡的な性格も考えられる。

3棟はほぼ同時期の縄文時代中期末に構築されたものと考えられる。

(2) 土坑

形態から3分類できる。その1つは第1号～第7号土坑で断面形がピーカー型で小規模なもの、他の2つは第9号～第15号土坑の断面形がフラスコ型で大規模なもの、1例だけであるが第8号土坑で平面形が楕円形で浅いものである。これらの3形態の内後者の2形態はそれぞれ時期を出土遺物などから縄文時代中期末後期初頭と弥生時代と判断できるが最初の形態のものは縄文時代以降としか判断できないものである。

断面形がフラスコ型のは貯蔵穴としての用途を持つとすれば、住居跡との関連が考えられる。第13号と第14号は副穴を有するが、貯蔵の用途に関する施設と考えられる。

2 遺物について

土器について

出土土器のうち第Ⅰ群と第Ⅱ群に属するものは数片のみで、本遺跡の集落の営まれた時期の範疇に含まれるものではない。

(1) 第Ⅰ群とした土器は、縄文時代早期に比定される土器である。本遺跡では2片出土するのみである。その内の1片は表館遺跡出土第Ⅹ群の早稲田五類に相当するものの類例と思われる。

第Ⅱ群とした土器は円筒式土器に属するもので前期でも古い時期のものと思われる。

第Ⅲ群は本遺跡の主体をなすもので、文様の明確なものは大木10式が多い。遺構外で示した大半は地文のみながら他の第Ⅲ群と胎土等で類似性をもつことからこの群に属するものとした。

第Ⅳ群の弥生時代の土器は十数片の出土をみたのみで、底部から体部まで復元できたものと数個体分の破片である。

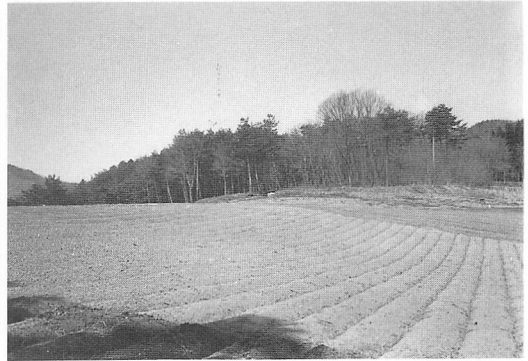
参考文献

- 岩手県 (1971)：「大迫」北上山系開発地域土地分類基本調査
- 中村良幸 (1979)：『立石遺跡』大迫町埋蔵文化財報告書第3集
- 〃 (1986)：『観音堂遺跡』大迫町埋蔵文化財報告書第5集
- 〃 (1982)：「大形住居」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 〃 (1982)：「複式炉について」『考古風土記』第7号
- 目黒吉明 (1982)：「住居の炉」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 高橋丈夫他(1980)：『松尾村長者屋敷遺跡(I)』遺構編Ⅰ 岩手県埋文センター文化財調査報告書第12集
- 〃 (1981)：『松尾村長者屋敷遺跡(II)』遺構編Ⅱ 岩手県埋文センター文化財調査報告書第20集
- 宮城県 (1978)：『上深沢遺跡』東北縦貫自動車道関係遺跡報告書Ⅰ 宮城県教育委員会
- 小林達雄他(1989)：「縄文土器の編年」『縄文土器大観Ⅰ』講談社
- 高橋興右エ門(1983)：『上里遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集
- 青森県 (1984)：『売場遺跡』3次・4次発掘調査報告書 青森県教育委員会
- 青森市 (1979)：『蛭沢遺跡』発掘調査団
- 青森県 (1988)：『表館Ⅰ遺跡』青森県教育委員会
- 丹羽茂 (1989)：「中期大木式土器様式」『縄文土器大観Ⅰ』講談社
- 藤村敏男他(1979)：「遺物について」『卯遠坂遺跡』東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書Ⅰ 岩手県教育委員会
- 馬目順一他(1986)：「東北地方の弥生土器」『弥生文化の研究』3 佐原真他雄山閣
- 加藤晋平他(1980)：『図録石器の基礎知識Ⅰ』柏書房
- 鈴木道之助(1981)：『図録石器の基礎知識Ⅱ』柏書房

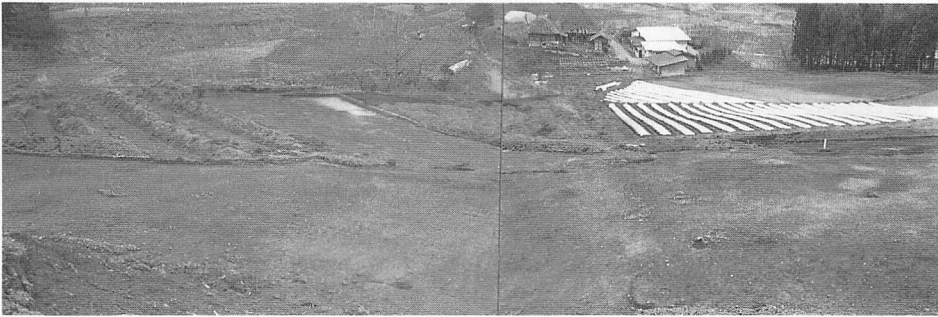
写 真 图 版



遺跡北部(調査前)



遺跡中央部(調査前)

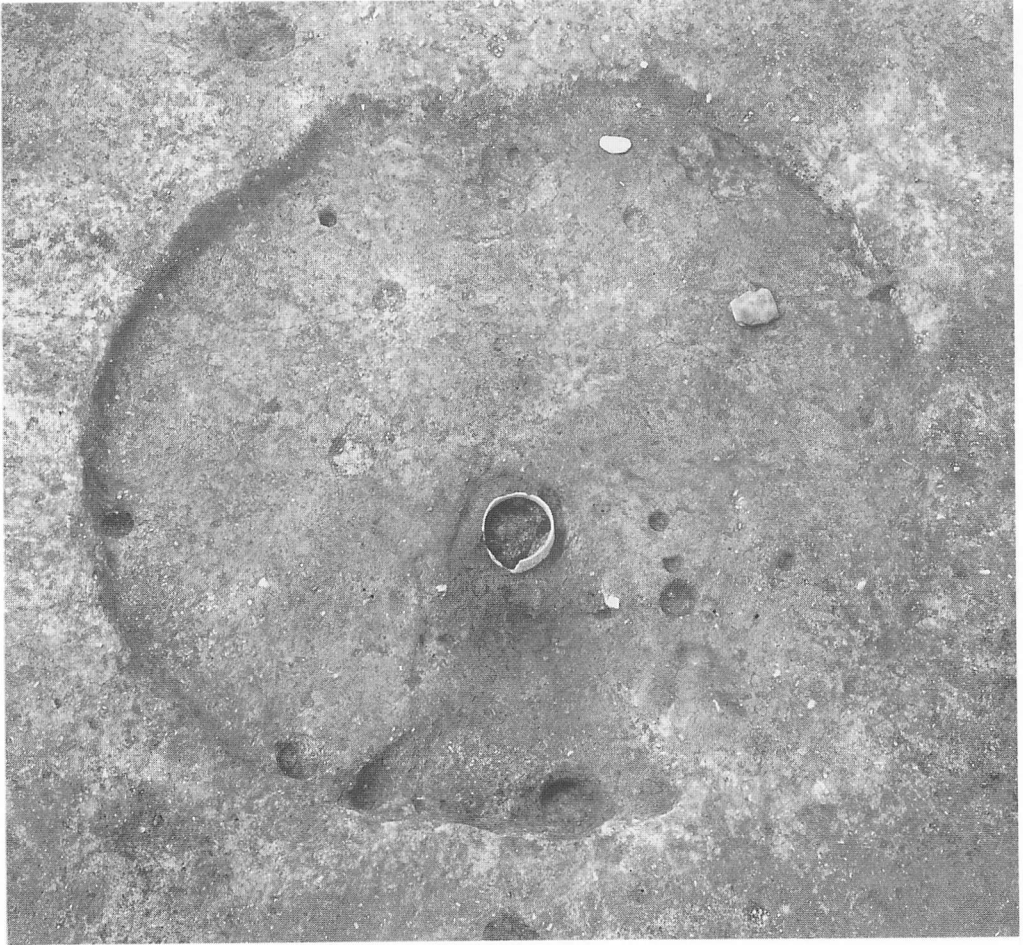


遺跡北部から中央部(検出時)

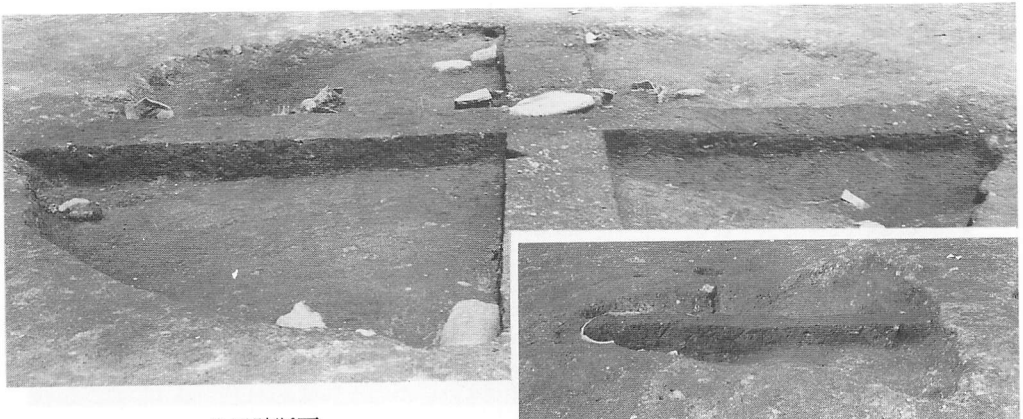


遺跡南部(検出時)

写真図版 1 遺跡の全景



住居跡平面



住居跡断面

複式炉跡断面

写真図版2 第1号住居跡



住居跡平面



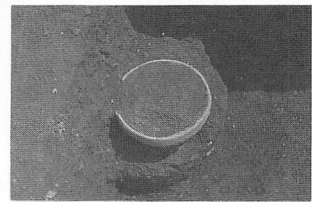
住居跡断面(北から)・「土坑との切り合い」



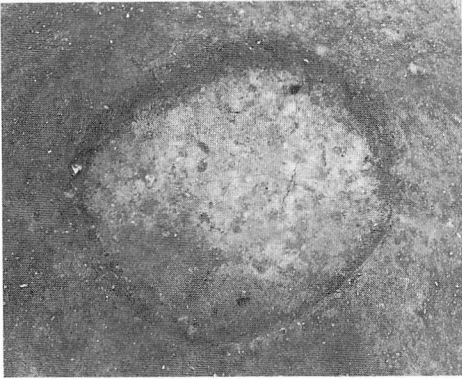
住居跡平面



住居跡断面



土器出土状況



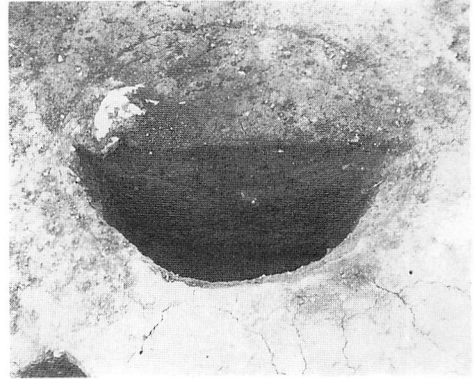
第1号土坑



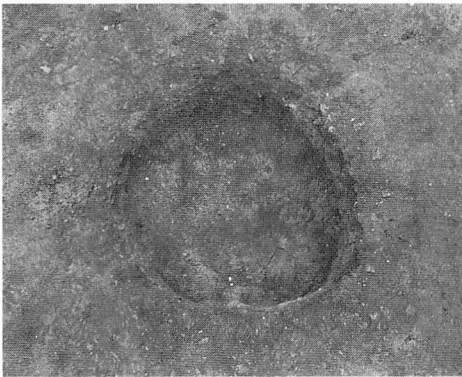
同左断面



第2号土坑



同左断面

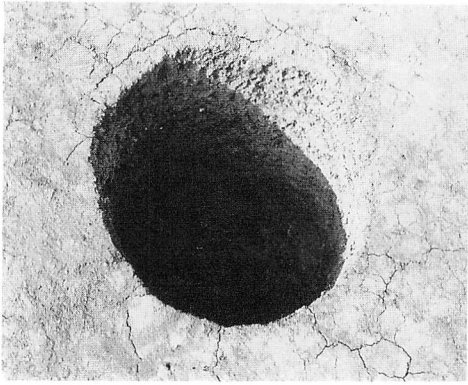


第3号土坑

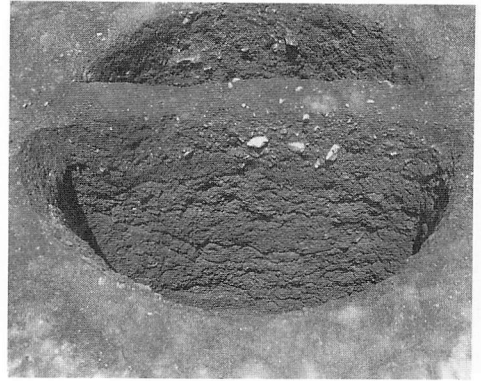


同左断面

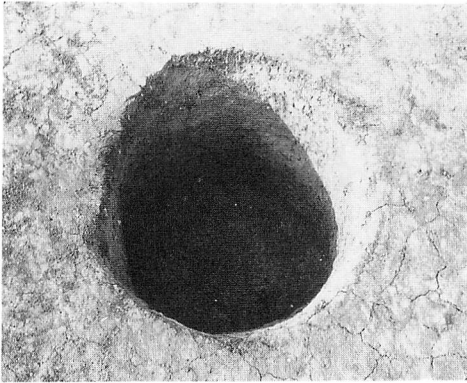
写真図版5 第1～3号土坑



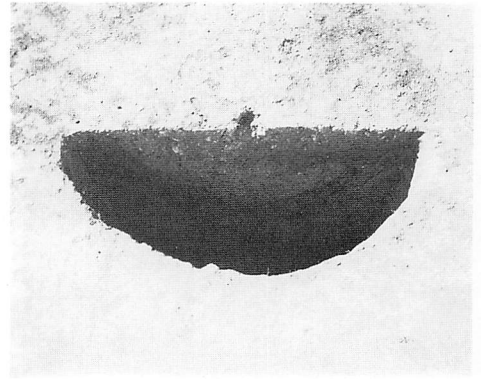
第4号土坑



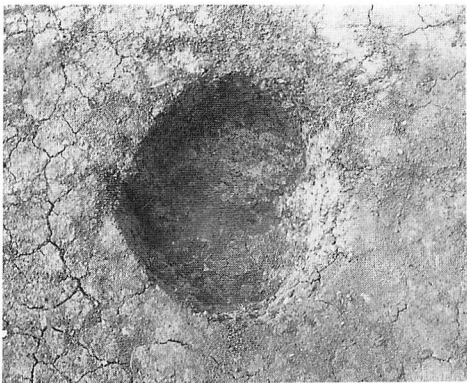
同左断面



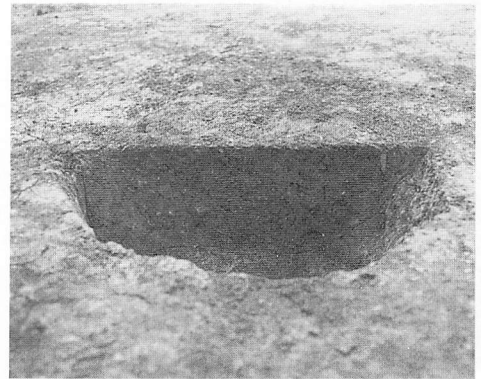
第5号土坑



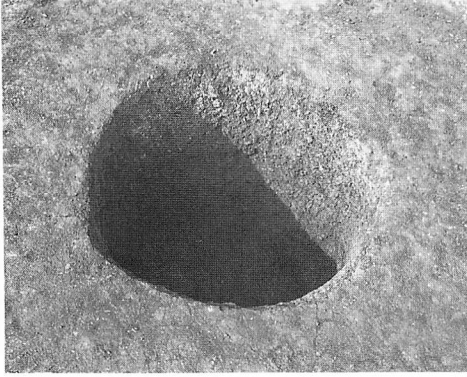
同左断面



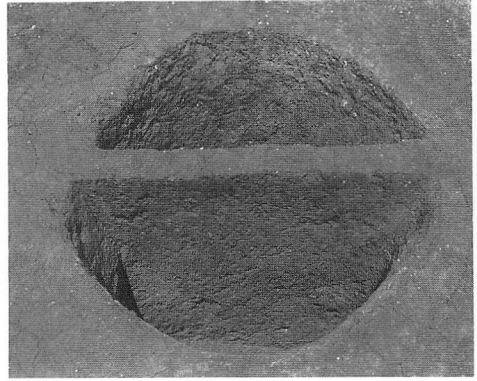
第6号土坑



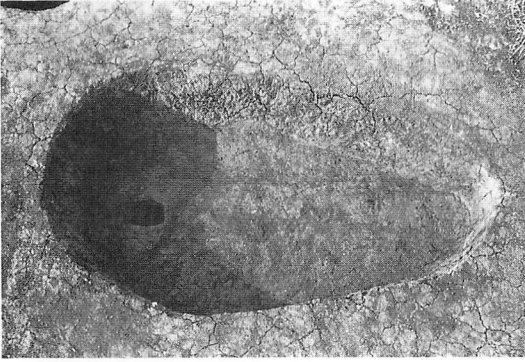
同左断面



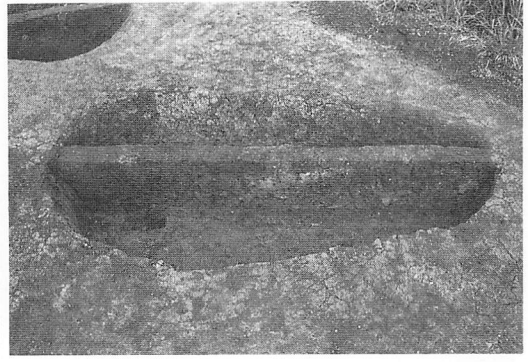
第 7 号土坑



同左断面



第 8 号土坑



同左断面



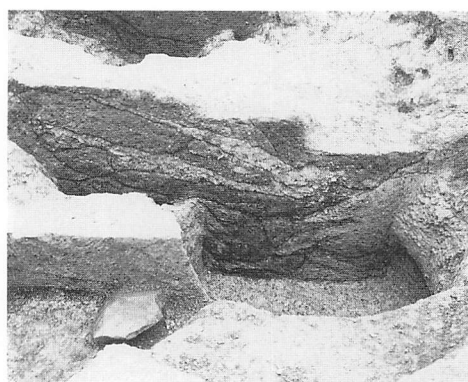
第 9 号土坑



同左断面



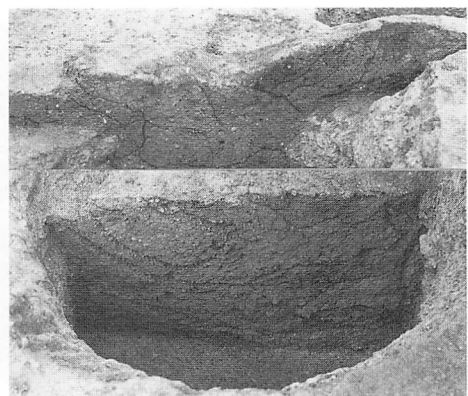
第10号土坑



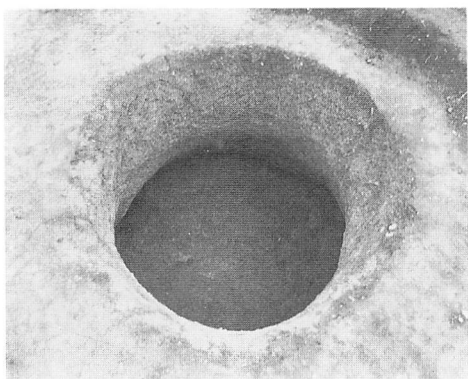
同左断面



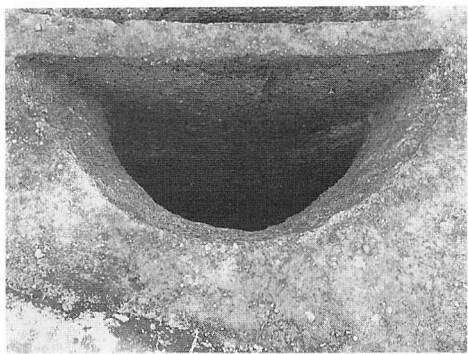
第11号土坑



同左断面



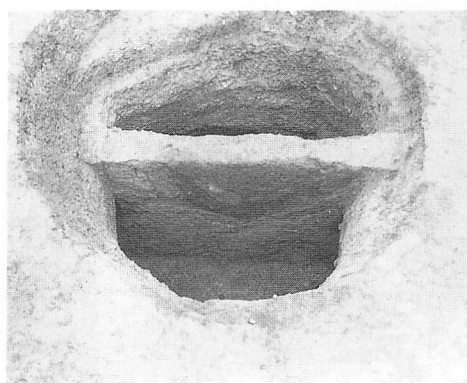
第12号土坑



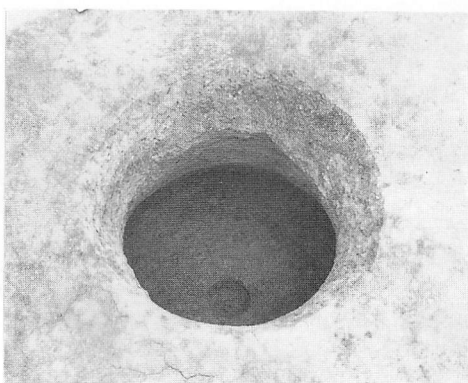
同左断面



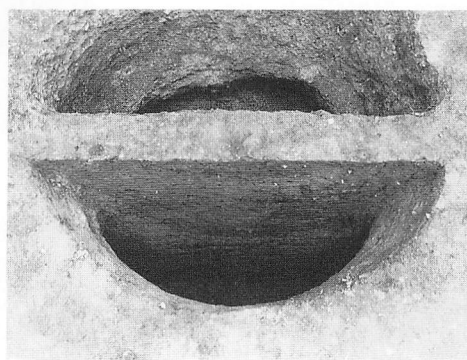
第13号土坑



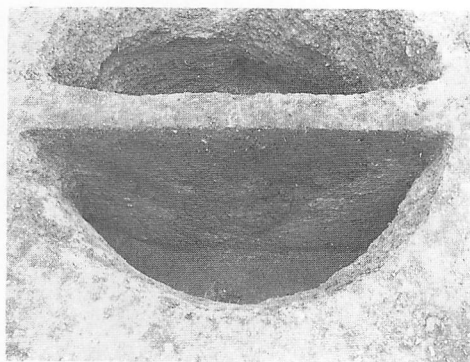
同左断面



第14号土坑



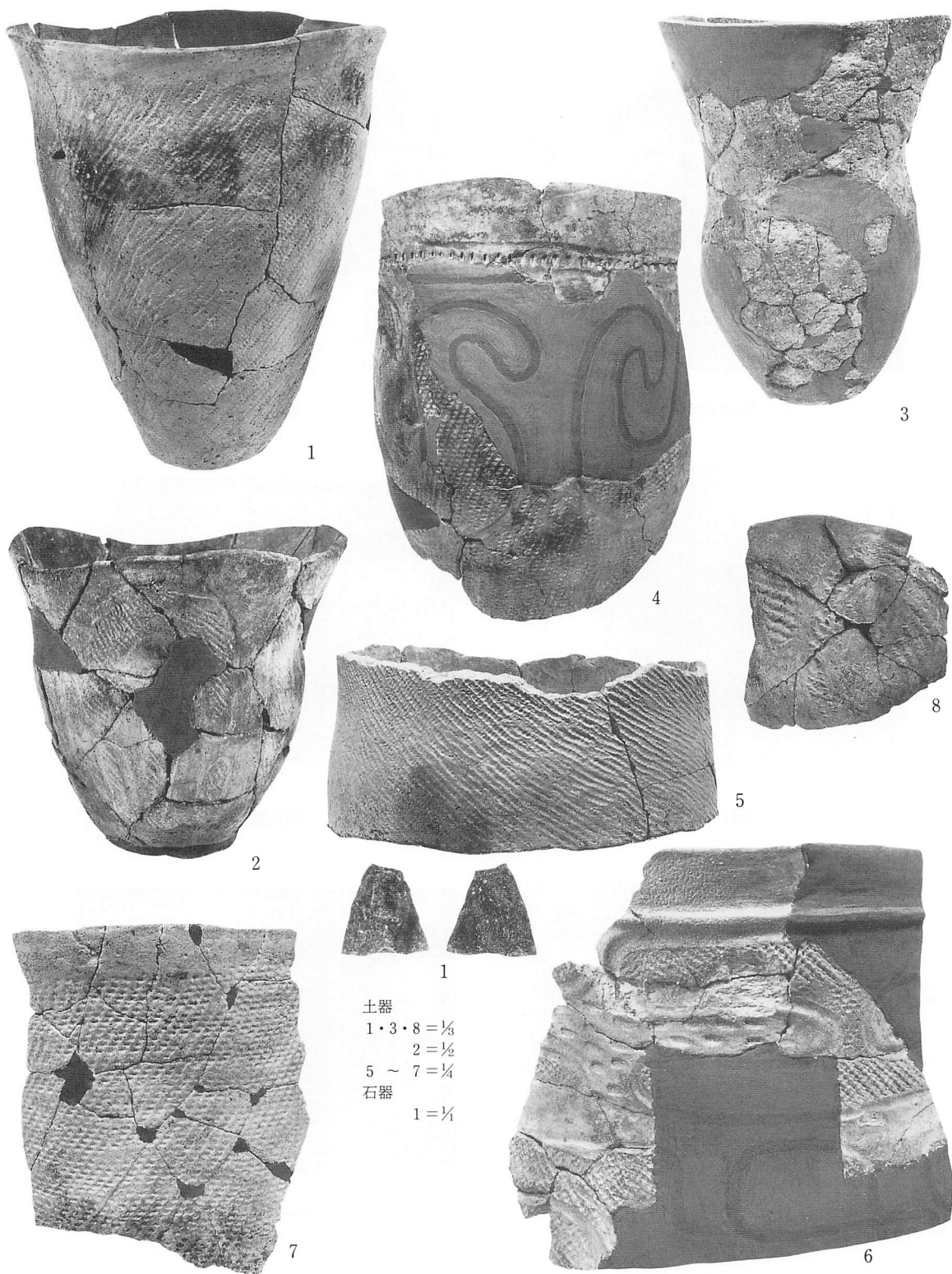
同左断面



第15号土坑断面

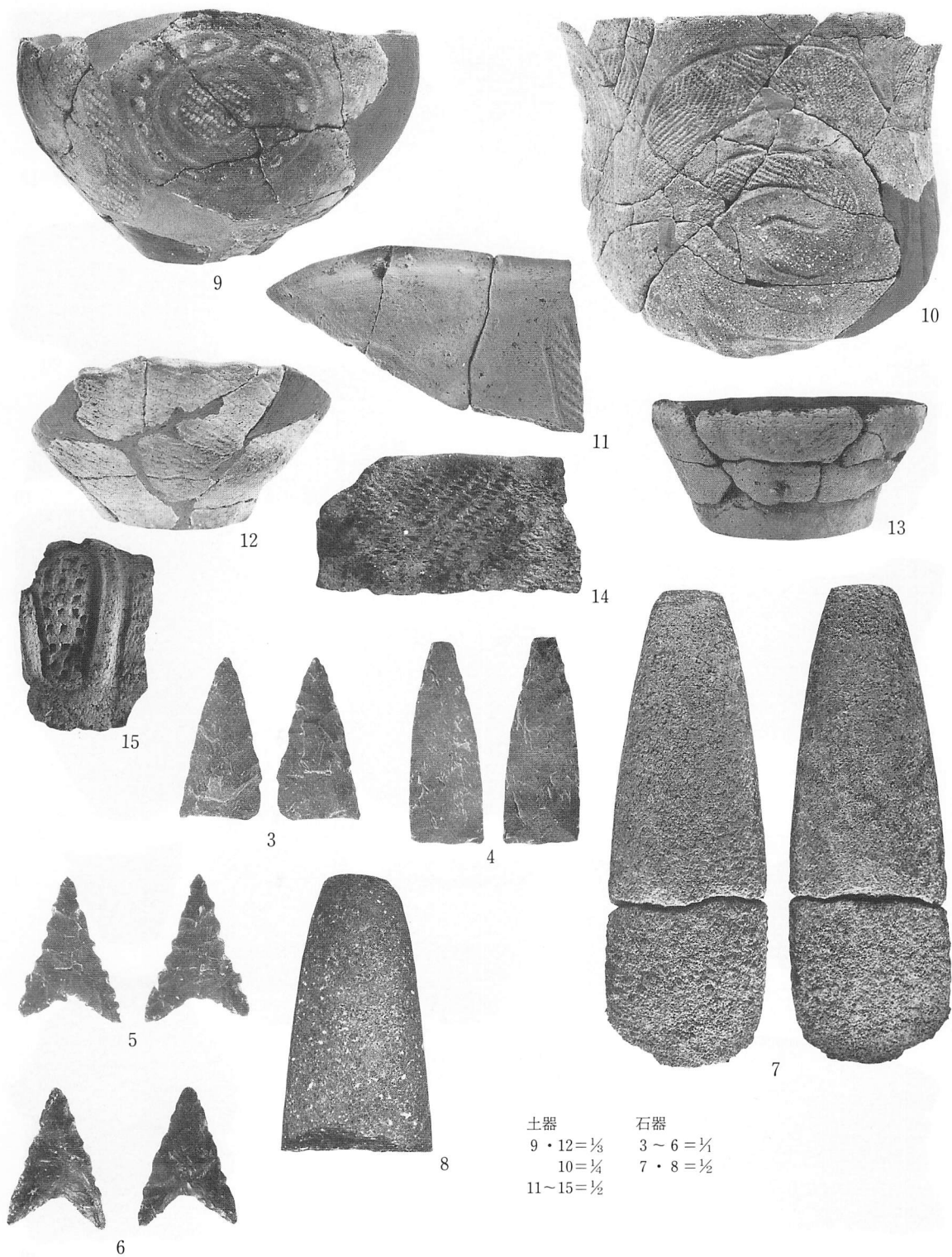


第7号土坑土器出土状况

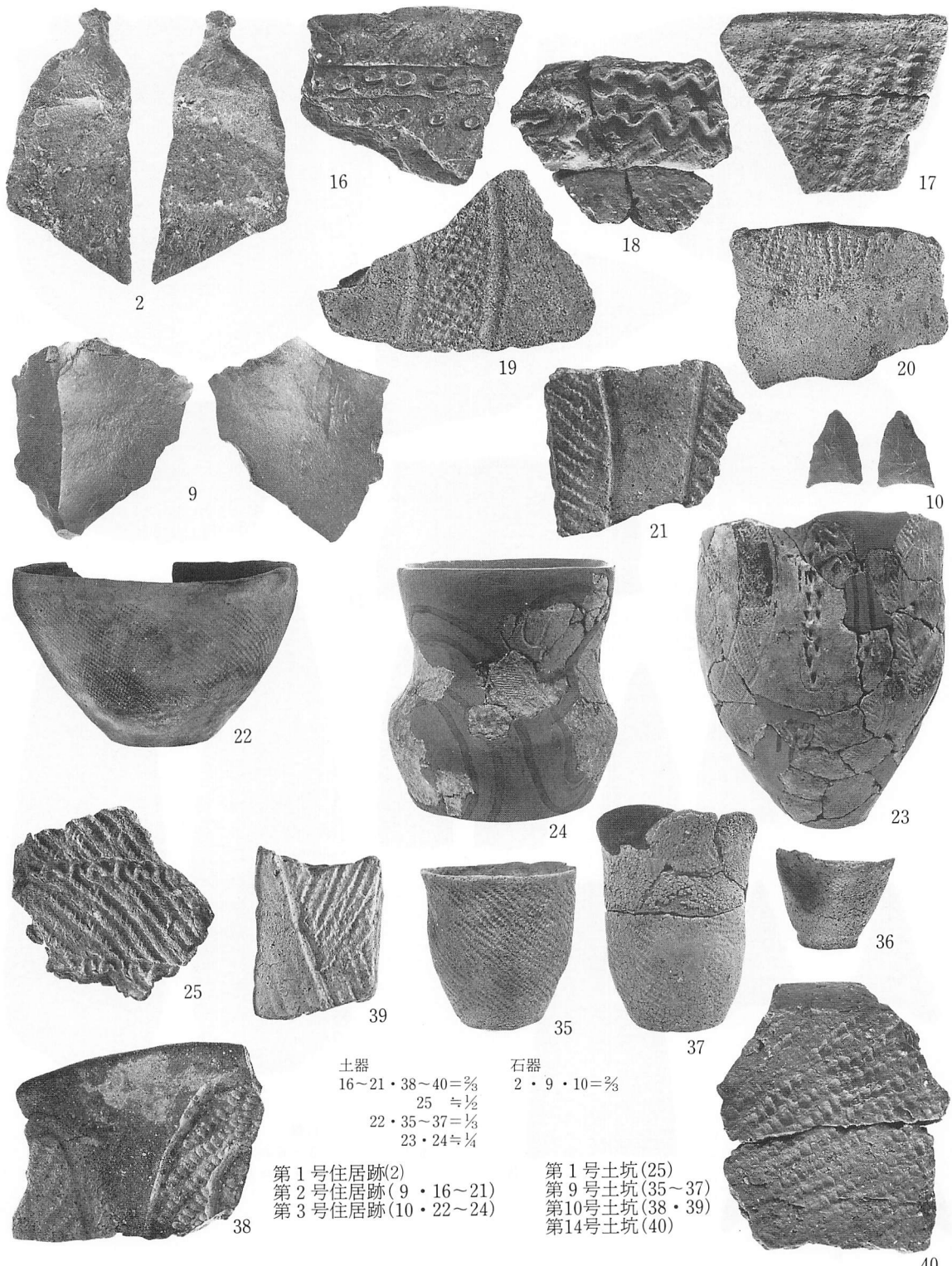


土器
 1・3・8 = $\frac{1}{3}$
 2 = $\frac{1}{2}$
 5 ~ 7 = $\frac{1}{4}$
 石器
 1 = $\frac{1}{2}$

写真図版10 第1号住居跡出土遺物



写真図版11 第2号住居跡出土遺物



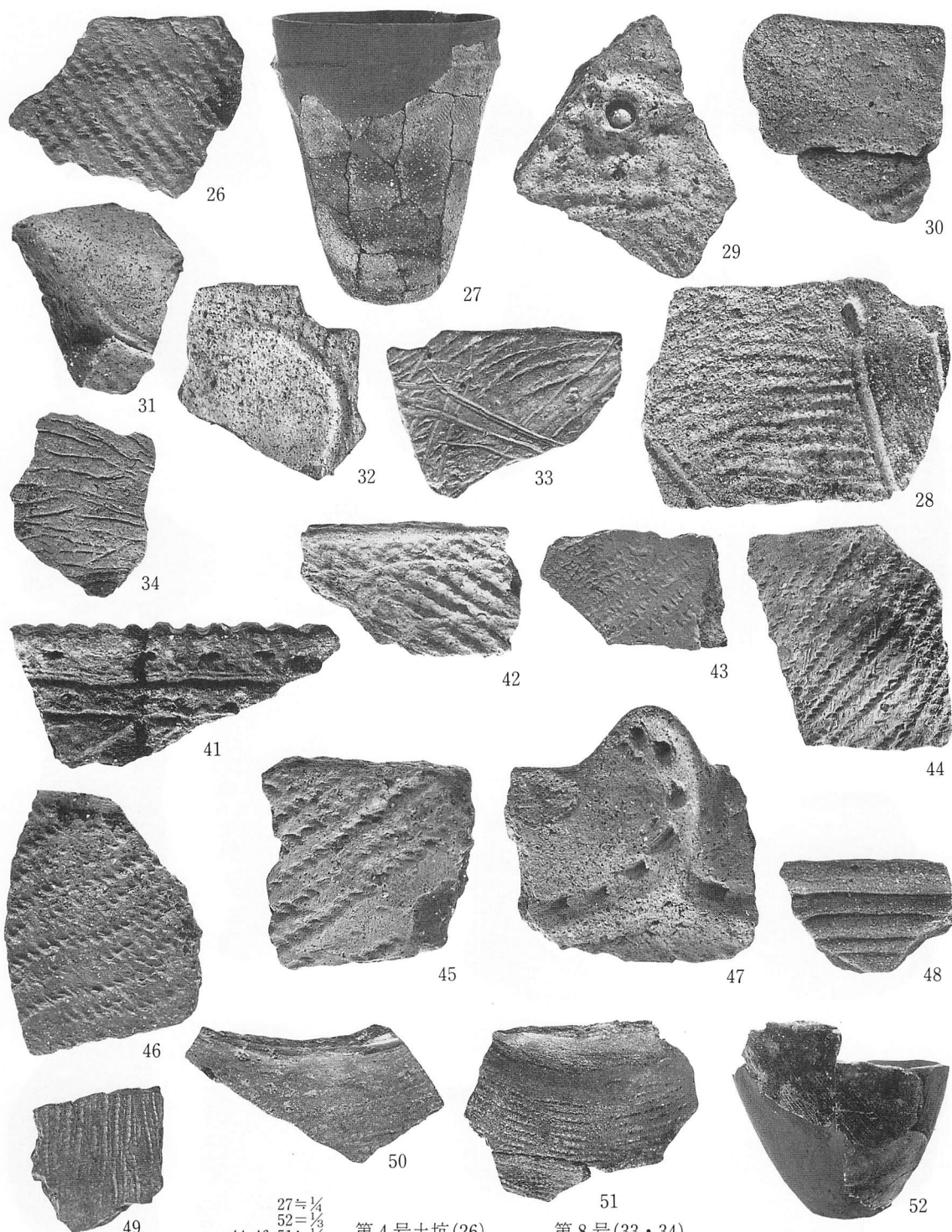
土器
 16~21・38~40=⅔
 25 = ½
 22・35~37=¼
 23・24=¼

石器
 2・9・10=⅓

第1号住居跡(2)
 第2号住居跡(9・16~21)
 第3号住居跡(10・22~24)

第1号土坑(25)
 第9号土坑(35~37)
 第10号土坑(38・39)
 第14号土坑(40)

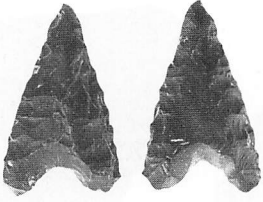
写真図版12 第1~3号住居跡・第1・9・10・14号土坑出土遺物



$27 = \frac{1}{4}$
 $52 = \frac{1}{3}$
 $44 \cdot 46 \cdot 51 = \frac{1}{2}$
 他は $= \frac{2}{3}$

第 4 号土坑(26) 第 8 号(33・34)
 第 7 号土坑(27~32) 他は遺構外

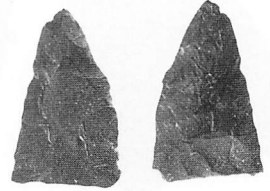
写真図版13 第 4・7・8 号土坑及び遺構外出土遺物



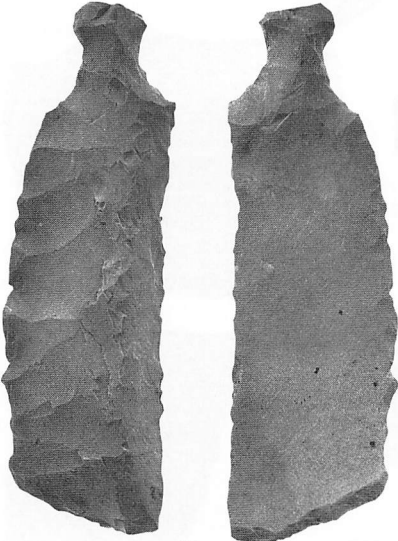
11



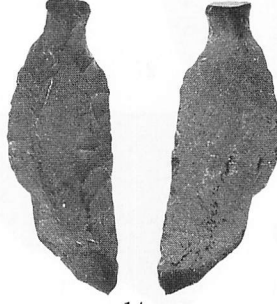
12



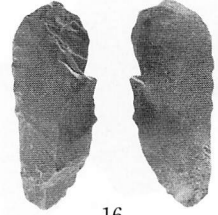
13



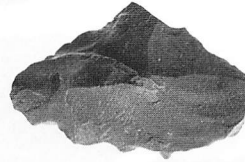
15



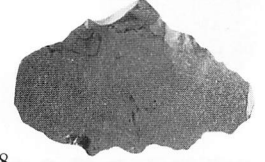
14



16



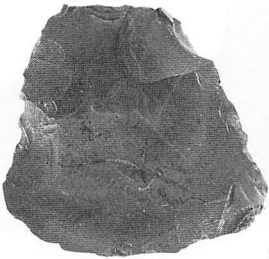
18



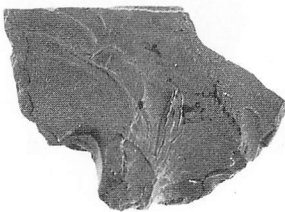
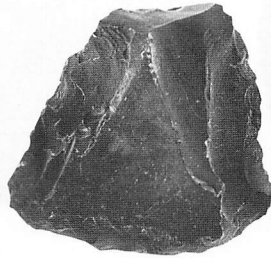
縮尺(全部)



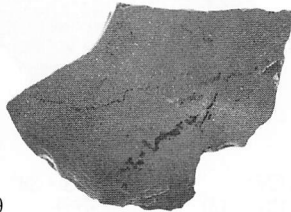
21



22



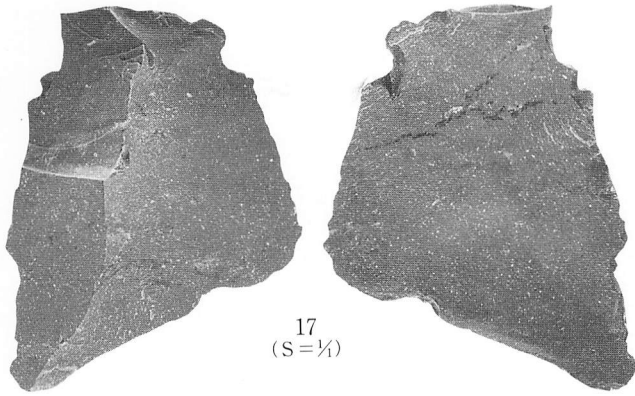
19



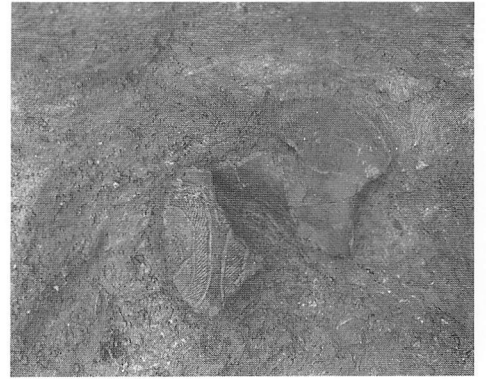
20



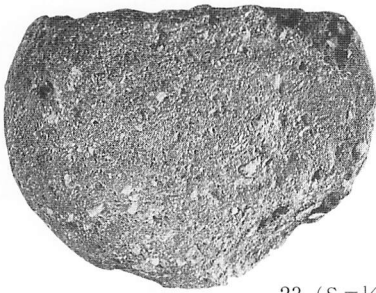
写真図版14 遺構外出土石器



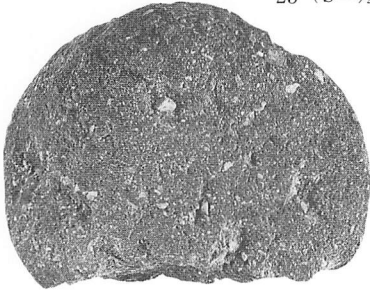
17
(S=1/4)



第二号住居跡土器出土状況



23 (S=1/2)



溝状遺構



同右断面

IV. 経塚森遺跡

所在地 稗貫郡大迫町内川目第14地割55-3ほか
委託者 岩手県土木部 早池峰ダム建設事務所
発掘調査期間 平成2年6月1日～9月10日
整理期間 平成2年11月30日～平成3年3月31日
調査対象面積 4,520㎡
発掘対象面積 4,520㎡
遺跡番号・略号 LF70-2219・KZ90
調査担当者 金子昭彦・藤村敏男
協力機関 大迫町教育委員会

1. 調査成果の概要

経塚森遺跡の調査成果について、検出遺構・出土遺物の概要及び注目すべき点を述べたい。本遺跡で検出した遺構は、竪穴住居跡4棟、溝状ピット（陥し穴状遺構）5基、土坑5基、溝1条、石囲炉1基、焼土10箇所である。竪穴住居跡は4棟とも縄文時代前期初頭に位置付けられると思われる。土坑のうち2基は近代に位置付けられよう。溝は弥生時代の可能性がある。石囲炉と焼土は縄文時代前期の可能性が高い。その他の遺構は縄文時代に属すると思われるが不明である。

出土遺物は、縄文土器・弥生土器、石器・石製品である。縄文土器の大半は前期初頭のものであり、他にわずかに中期中葉の土器、晩期前葉の土器がある。弥生土器は、破片が十数点ある。石器は石鏃、石錐、石匙、その他の搔器、石筥、磨製石斧、凹石があり、石製品は垂飾である。

出土遺物の大半を占める縄文時代前期初頭の土器についてその概要と注目すべき点を次に述べる。前期初頭の土器のほとんどはいわゆるピッチリ縄文を持つもので時期は早稲田6類に相当すると考えられている土器である。そのほかに長七谷地Ⅲ群・上川名Ⅱ式に位置付けられる土器があるが、芦野Ⅰ群・表館式と明確に言える土器はない。そして本遺跡からは他に類例を見ない注目すべき土器が出土している。47・58・178（本報告書のP97・98・104）がそれである。文様効果の類似性などから長七谷地Ⅲ群に位置付けられるのではと思われる。

2. 調査・整理の方法

①野外調査の方法

はじめに、調査経過について簡単に述べ、次に報告書を読む際に心に留めておいていただきたい点を述べる。

(1)調査経過

調査面積は4,520㎡で、野外調査は平成2年6月1日から同年9月10日まで行われた。

調査に入る前、県文化課による試掘の結果と調査者による踏査で、斜面上方には遺構、遺物がほとんど確認できず、遺物の出土は斜面下方がほとんどで、また遺構もそちらに集中しそうだということがわかっていた。そこで、斜面上方はⅢ層上面まで、斜面下方は表土を重機によって剥ぐことにした。

続いて、検出作業が斜面上方から下方へ8月上旬まで行われた。斜面中程にさしかかったと

き、江戸時代末～明治時代の墓塚が検出された。この件について、元の地権者から再埋葬したい旨、申し入れがあったので、検出作業と同時に遺骨の取り上げにかかり、これが8月上旬まで行われた。

遺構の精査・実測に入ったのは7月下旬以後である。これは、作業員の中に実測可能な者が一人しか居なかったことによって経塚長根遺跡の調査が遅れたためである。

9月5日をもって野外作業を終了し、以後8日まで遺物の水洗を行ない、10日に器材を搬出して調査は終了した。

(2)特記事項

・調査員、作業員の構成について

調査は、経塚長根遺跡と同じメンバー（調査員二名、作業員十数名）で行われた。作業員の平均年齢は高く、近在の方が多かった。当地で発掘調査が行われたのは初めてであり、また調査員の不慣れなことも手伝って、調査はスムーズに進行したとは言いがたい。最も困ったのが、実測方法を習得していただけたのが一名のみであったという事実である。したがって、実測する時は調査員一名が必ず組んで行なわざるをえなかった。このことは、以下に述べるように、調査のさまざまな点に影響を及ぼした。

・グリッドについて（第1図参照）

遺跡内に任意の2点を設定し、10×10mの大グリッドを配置した。さらに、その中を25等分して2×2mの小グリッドを設定したが、実際に使用することはなかったので詳述しない。

・遺構の精査について

遺構の精査は全て2分法によって行った。竪穴住居跡、石囲炉を2分法によって精査した理由を以下に述べる。竪穴住居跡を2分法によって精査したのは、初めは調査員の手違いによるものであったが、その後この種の遺構に炉跡・柱穴が検出されないことがわかって住居跡とすることに疑問を持ち、また規模も小さいこと、さらには時間が限られていたことから、最後まで2分法で通すことにしたのである。この種の遺構は下場が平らであること、さらに同時期の住居跡の検出例から最終的に竪穴住居跡に認定したため、現在ではやはり4分法によるべきだったと反省している。石囲炉を2分法によって精査したのは時間不足と調査員の認識不足によるものである。

以上述べたように、本遺跡の遺構精査は粗かったと言わざるをえない。大いに反省している次第である。

・遺構の実測について

石囲炉以外は平板で実測した。石囲炉は、いわゆる簡易遣り方で実測した。石囲炉以外を平

板で実測したのは以下の理由によるものである。実測に入ったのが遅かったので時間が限られていたこと。遺構が分散していることとトランシットを使えるものが現場に二名しかいなかったことで、簡易遣り方用の釘を打つには多大な時間を要すると思われたこと。現場に実測可能な作業員が一名しかいなかったことで、調査員一名がその作業員と組んで実測せざるをえなかったこと。

・遺物の取り上げについて

遺物の取り上げは、基本的に各グリッド、各層位ごとに行い、出土位置の詳細な記録（ドットによる取り上げ、出土状況の写真撮影など）は行っていない。時間がなかったこととその必要があると思われる遺物が出土しなかったためである。

遺構内出土の遺物については、覆土出土か床面出土かの観察・記録のみで、覆土の中をさらに層位ごとに分けて取り上げることは、上に述べた理由による作業の進行上できなかった。遺構外出土については基本的に大グリッドで層位ごとに取り上げている。2×2 mの小グリッドによる取り上げは作業進行の都合上できなかった。さらに、同様の理由で、包含層出土の遺物については、大グリッドも記載せず、包含層出土の遺物として取り上げたものがある。

以上述べたように、本遺跡での遺物の取り上げは粗かったと言わざるをえない。いくら作業進行上の理由とはいえ、もう少しなんとかできたのではないかと反省している。

②室内整理と報告書の作成

はじめに作業経過について簡単に述べ、次に報告書を読む際特に心に留めておいていただきたい点について述べる。

(1)作業経過

整理作業は、平成2年11月30日から平成3年3月30日まで行われた。遺物の水洗は、現場で行ったので終了していた。また、石器の実測は、先にセンターにあげて、この時点までに約70点が終了していた。

遺構図面・写真の整理・点検は、調査員が12月から1月まで行った。遺構図面のトレースは作業員が、遺物の実測・トレース終了後3月末に行ない、調査員が点検した。

遺物の整理は、分類、接合・復元、注記から始め、これを1月上旬までに終了した。石器の実測は、作業員が12月末から始め、3月上旬に終了した。土器の拓本は、作業員が1月中旬から2月上旬にかけて採り、ついでその断面実測を2月上旬から下旬まで行った。それらのトレースは、調査員の点検後、作業員が3月上旬から下旬にかけて行った。遺物の写真撮影は、この間2月上旬に当センターの岩淵希士氏が行ない、その整理を調査員が2月下旬まで行った。

整理期間は、図・表・写真図版の作成、原稿執筆、割り付けを残して、3月30日に終了した。

(2)特記事項

・調査員、作業員の構成について

整理作業は、主として調査員1名と作業員2名によって行われた。調査員は、整理作業は今回が四回目で、報告書の執筆は二度目である。また、縄文時代晩期の土器・土偶を一応専門とし、縄文時代前期初頭の土器については不慣れ、石器の記載は全く初めてである。作業員のうちの一名は、ここ何年かにわたって冬場の間だけ整理作業をお手伝いしていただいていた、遺物の実測もできる方である。もう一名は今回が全く初めての方であった。なぜこんなことを述べるのかというと、土器の接合作業の成果、報告書の記述の正確さのひとつの目安になるのではないかと考えたためである。

・出土遺物の量について

今回の調査で出土した遺物は、土器片が30×40×30cmのコンテナで8箱、石器が200点ほど、素材薄片が数百点である。

・接合、注記について

整理期間がとても短いので、土器は接合の後注記するという形を採った。石器・石製品については1点、1点別の小袋にしまってその袋に出土位置等を記し、注記はしていない。また素材剥片の注記、接合は、図化する余裕がないという理由で一切行っていない。

土器の接合は、作業員二名が3週間ほど行った。基本的には同じ袋、同じ遺構・同じグリッド、同じ包含層の中でのみ接合を試み、遺構間接合、異なるグリッドの間での接合は行っていない。接合の後、図化が必要なものだけ注記を行なって取り上げ、その他は元の袋にしまい収納した。

・遺物の実測・トレースについて

遺物の実測・トレースは作業員が行ない、それを調査員が点検した。しかし、調査員が不慣れなこともあり、特に石器については見落とし、誤りがあるかもしれない。

・報告書の体裁について

報告書の体裁（第IV章 経塚森遺跡の調査のみ）は基本的には既存の報告書にならったが、一部既存の報告書と違うところがあるので、以下にそれを記す。最も違うところは遺物の記載である。

〔遺物の記載位置、順序について〕

遺構出土の遺物も、第5節 遺物にまとめて載せた。その理由は、報告書は通して読まれることはあまりなく、遺構について知りたい人は遺構のところのみ、遺物について知りたい人は

遺物のところのみ読むという傾向があるので、そのことを考えて読みやすいようにしたつもりである。

遺構以外から出土した遺物（特に土器）は、分類にしたがって並べるのが常であるが、本章では、出土位置に重きをおき、その順序にしたがって並べた。本遺跡はあまり良好な出土状況とは言いがたいのであるが、報告書は原典であるので原則的には層位的な検証をしやすいように記載すべきであるとの考えにしたがってこのような体裁にした。また遺構出土の遺物は出土位置による記載で、遺構以外出土の遺物は別の基準によって記載すると統一性に欠けるとの考え、明確な時期、型式の同定は報告者の義務ではないという考えもあり、さらには、報告者が自分の考えで分類してしまうとかえって読みづらいのではないかという気持ちにもよる。

〔遺物の記載の仕方について〕

遺物の記載は基本的に表で行ない、表の項目に当てはまらないことで記述する必要のある事柄は本文中に記し、そのページを「本文記載」という欄に記した。また、遺物の記載は出土位置の順序で行なっており、そのままでは出土遺物の概要がつかみにくいので、①土器、②石器・石製品という項目を作って時期別、器種別に概要を記すことにした。遺物の本文中の追加記載もその中にある。

〔遺構の記載の仕方について〕

遺構の記載は本文中に各項目ごとに行なった。そして、その概要を簡略にまとめて表にした。したがって、遺構の概要を知りたい方は表のみ読んでいただければよいと思う。

〔引用・参考文献の掲載位置について〕

引用・参考文献は各節ごとに文末に記した（ただし、第5節 遺物だけは、①土器、②石器・石製品の各項目ごとの最後に記した）。これは、上に述べたように報告書が各項目ごとに独立して読まれやすいという性格を考慮して読みやすくしたつもりである。

〔本文、表、図のレイアウトについて〕

本文、表、図は基本的にそれぞれまとめて掲載した。時間的余裕がないことが第一の理由であるが、それ以外に「コピーしやすいこと」が理由としてある。それは、凝ったレイアウトをしても本文と図がずれやすく、それならば、これだけコピー機が普及している現在、あらかじめ図をコピーして読んでいただくことを前提としたほうが実際的であると考えたことである。また遺構、遺物の集成をする方には、このほうが好都合であろうと思われたこともある。

3. 基本層序と検出・出土状況

基本層序は以下のとおりである。

I層 褐色土 (10Y R 4 / 4) 耕作土、層厚30cm。

II層 黒褐色土 (10Y R 3 / 1) 斜面上半にはほとんど検出されない。一部の遺構（炉跡、焼土）の検出面である。斜面下半に確認された遺物包含層との区別はつかない。上層と下層に分けられる部分もある（II 1層とII 2層で、II 2層には若干ロームブロックを含むが、ほとんど区別はつかない）。層厚40cm。

III層 明黄褐色土(10Y R 7 / 6) 地山で、上面が主だった遺構検出面である。層厚不明。

次に遺構・遺物の保存状況（原位置性）、検出・出土状況について述べる。

斜面上半は、煙草畑にする際かなりの削平を受けているようで、表土の下はほとんど地山という状態であった。斜面下半は、昭和43年に起きた十勝沖地震の際に断層が生じ（写真図版参照）、遺物包含層と溝、土坑の一部はかなりの攪乱を受けているようである。

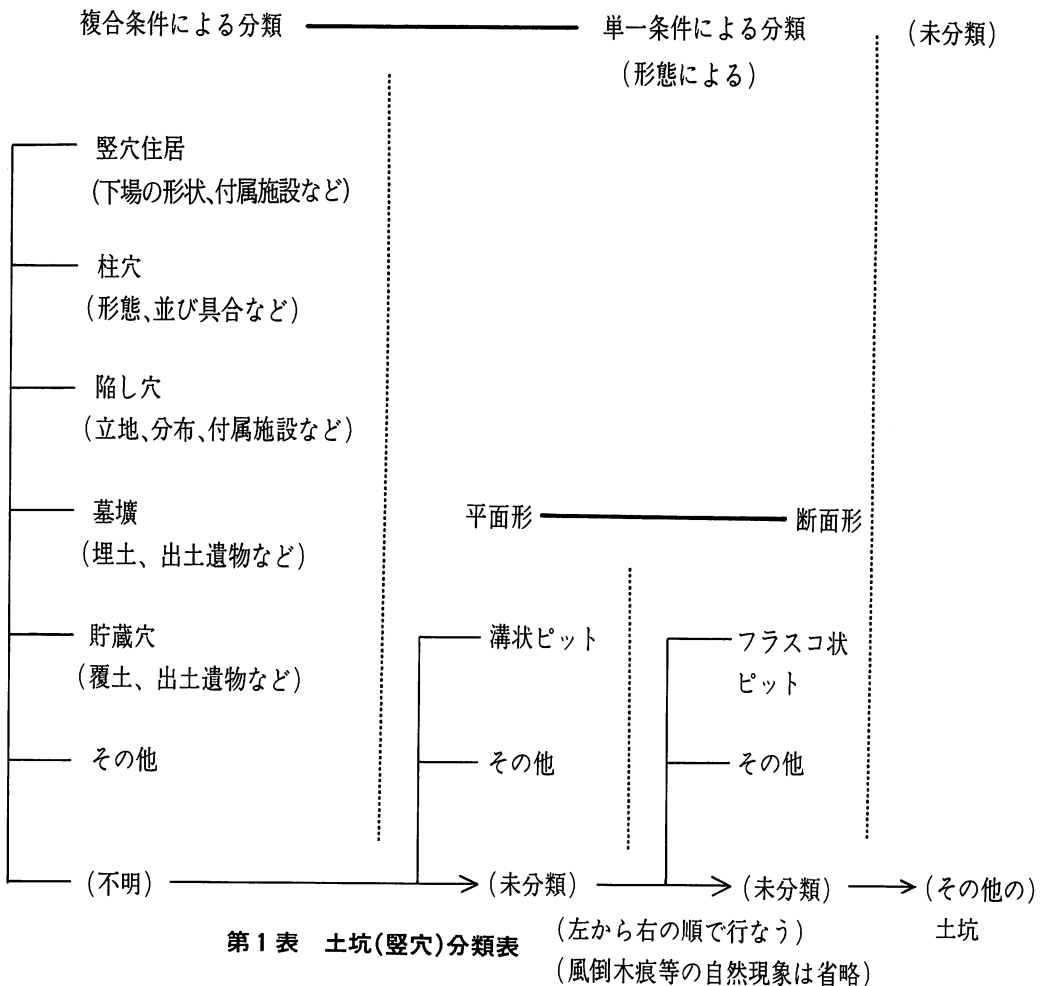
以上の理由によるためか、ほとんどの遺構はIII層上面まで確認できなかった。ただし検出面からの深さを考えると、いずれの遺構も掘りこみ面はもっと高かったと思われる。

遺物の出土状態もあまり良好とはいいがたい。基本的には大部分が縄文時代前期初頭に位置付けられると思われるが、一部中期、晩期の土器、弥生土器が出土しており、その間に地点差・層位差を認めることはできなかった。また前期初頭の土器の中を地点差・層位差を認めてさらに細別することもできなかった。

4. 遺 構

検出した遺構は、竪穴住居跡4棟、溝状ピット5基、土坑5基、溝1条、炉跡1基、焼土10箇所である。なお、江戸時代末～明治時代の墓坑も検出されたが(第1図参照)、埋葬者がわかっており、調査区域外へ再埋葬したので、ここでは触れない。また、遺物包含層については、次の第5節 遺物で述べることにする。

さて、溝状ピット、土坑と記したが、本項では、土坑(竪穴遺構)について、第1表のような分類概念のもとに分類・記載した。つまり、検出した住居跡以外のいわゆる土坑の中で、これまで類例がよく知られていて特徴的に長楕円形の平面形を持つ土坑を「溝状ピット」として分類・記載し、それ以外の土坑を「土坑」と一括して述べることにしたのである。また、「溝状ピット」を「陥し穴状遺溝」と呼ばない理由については②溝状ピットの項を参照していただきたい。



次に検出状況について述べる。遺構はいずれも斜面の下半分で検出された。斜面の下半分は、第1節で述べたように、昭和43年の十勝沖地震によりかなりの攪乱を受けており、遺構の保存状態、検出状況も良いものとは言えない。炉跡、焼土以外は、Ⅲ層上面まで確認することが出来なかったし、溝の覆土と縄文時代前期の遺物包含層の区別もつけられなかった。

以下、竪穴住居跡、溝状ピット、土坑、溝、炉跡、焼土の各項目ごとに述べていく。なお、遺構から出土した遺物については次の第5節 出土遺物の中で扱っていくこととお断わりしておく。

①竪穴住居跡

Ⅲ層上面から4棟検出した。床面出土土器はないが、覆土からの出土土器および青森県、岩手県等の類例（第6節 まとめ参照）から、いずれも縄文時代前期初頭に位置付けられると思われる。

住居跡は斜面の中程から斜面下まで高いところから低いところへ4棟並んで立地している。どの住居跡からも、柱穴、炉跡は検出できなかった。遺跡からは、石囲炉、焼土も検出されているが、これらが炉跡のない住居跡に関係するのかどうかは不明である。

以下、各住居跡ごとに述べていく。基本的な観察事項は第2表にまとめて記したので、参照していただきたい。

第1号住居跡（第2図、第2表①）

〔位置・検出状況〕2F～3FのⅢ層上面で検出。重複はない。住居跡群の中では最も西寄りの標高の高いところにあり、斜面に立地している。

〔覆土・堆積状況〕自然堆積と思われる。1層は攪乱か？

〔平面形・規模〕長軸2.7m、短軸1.7mのいびつな楕円形である。

〔壁・床面〕壁高は、地形の傾斜にそって西側で20cmと高く東側で4.5cmと低い。床はかたく、砂利が露出している。

〔炉跡、柱穴、周溝、付属施設など〕いずれも検出できなかった。

〔出土遺物〕床面出土遺物なし。覆土から縄文土器が1点出土している（第10図1、第3表1、第3節 遺物参照）。前期初頭と思われる。

〔時期〕出土遺物、類例などから縄文時代前期初頭と思われる。

第2号住居跡（第2図、第2表①）

〔位置・検出状況〕3GのⅢ層上面で検出。重複はない。斜面に立地している。

〔覆土・堆積状況〕自然堆積と思われる。1、2層は攪乱であろう。

〔平面形・規模〕長軸2.8m、短軸1.7mの楕円形である。

〔壁・床面〕壁高は、地形の傾斜にそって西側で15cmと高く東側で7cmと低い。壁は外反している。床はかたい。

〔炉跡、柱穴、周溝、付属施設など〕いずれも検出できなかった。

〔出土遺物〕なし。

〔時期〕類例から縄文時代前期初頭と思われる。

第3号住居跡（第3図、第2表①）

〔位置・検出状況〕2GのIII層上面で検出。重複はない。斜面に立地している。

〔覆土・堆積状況〕3層の堆積状況がやや不自然だが、自然堆積と思われる。

〔平面形・規模〕長軸3m、短軸2mのいびつな楕円形である。

〔壁・床面〕壁高は、地形の傾斜にそって西側で30cmと高く東側で5cmと低い。壁は外反し、床はかたい。

〔炉跡、柱穴、周溝、付属施設など〕いずれも検出できなかった。

〔出土遺物〕床面出土遺物なし。覆土から縄文土器が1点出土している（第10図2、第3表2、第3節 遺物参照）。前期初頭と思われる。

〔時期〕出土遺物・類例から縄文時代前期初頭と思われる。

第4号住居跡（第3図、第2表①）

〔位置・検出状況〕2HのIII層上面で検出。重複はない。緩やかな斜面に立地している。

〔覆土・堆積状況〕自然堆積と思われる。

〔平面形・規模〕長軸4m、短軸3mの隅丸長方形である。

〔壁・床面〕壁高は、地形の傾斜にそって西側で25cmと高く東側で5cmと低い。壁は外反し、床はかたい。

〔炉跡、柱穴、周溝、付属施設など〕いずれも検出できなかった。

〔出土遺物〕床面出土遺物なし。覆土から縄文土器が15点（第10図3～17、第3表3～17、第3節 遺物参照）、弥生土器が1点出土している。（第10図18、第3表18）。縄文土器は前期初頭に位置付けられると思われる。弥生土器は流れ込みであろう。

〔時期〕出土遺物・類例から縄文時代前期初頭と思われる。

②溝状ピット

平面形が長楕円形を呈する土坑を「溝状ピット」として紹介する。「陥し穴状遺構」という言い方もあるかもしれないが、本節で土坑に分類した中にも「陥し穴」があるかもしれず、また本遺跡の場合は、動物の骨や逆木の出土もなく、副穴も確認できず、平面形のみで分類したので溝状ピットと称した。なお、正しくは「溝形ピット」と称すべきと思うが、今までそうした呼び方はされておらず、報告書という体裁から、比較的定着している「溝状ピット」を使うことにした。さらに、今回溝状ピットに含めた土坑の中には長楕円形とは言いがたいものもあるが(第3号溝状ピット)、他の土坑に比べると類似性が非常に高いので一緒に紹介することにした。

溝状ピットはⅢ層上面から5基検出した。急斜面直下と斜面下の溝付近の二ヶ所に分かれて集中している。出土遺物は第4号溝状ピットにのみあり、縄文時代前期初頭の土器が出土している。ただし第4号溝状ピットは遺物包含層の範囲にあり、この付近が地震により攪乱を受けていることを考えると、これらの土器は包含層からの流れ込みである可能性が高い。第4、5号溝状ピットは遺物包含層を切っているようであるが正確には不明である。したがって、溝状ピットの時期を推定できるものは何もなく、不明である。

以下、各溝状ピットごとに述べていく。基本的な観察事項は第2表に記したので、参照していただきたい。

第1号溝状ピット(第4図、第2表②)

〔位置と検出状況〕2HのⅢ層上面で検出。

〔覆土と堆積状況〕1層は攪乱の可能性が高い。自然堆積と思われる。

〔規模と平面形〕長軸1.9m、短軸0.5mの長楕円形である。

〔深さと断面形〕深さ0.5mで、長軸方向にオーバーハングしている。

〔副穴などの付属施設等〕確認できなかった。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕不明

第2号溝状ピット(第4図、第2表②)

〔位置と検出状況〕2HのⅢ層上面で、攪乱を剥いだ後に検出。第1号溝状ピットの南側にある。

〔覆土と堆積状況〕記録が残っていない。

〔規模と平面形〕長軸2.2m、短軸0.7mの長楕円形である。

〔深さと断面形〕深さ約1m

〔副穴などの付属施設等〕確認できなかった。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕不明

第3号溝状ピット（第4図、第2表②）

〔位置と検出状況〕3HのⅢ層上面で検出。

〔覆土と堆積状況〕根による攪乱を受けているためか、不自然な堆積の仕方であるが、人為堆積であるかどうかははっきりしない。

〔規模と平面形〕長軸1.8m、短軸1mのいびつな楕円形である。底面は長方形を呈している。

〔深さと断面形〕深さ1.2m

〔副穴などの付属施設等〕確認できなかった。

〔出土遺物〕なし

〔時期〕不明

第4号溝状ピット（第5図、第2表②）

〔位置と検出状況〕1JのⅢ層上面で検出。一部攪乱を受けている。遺物包含層を切っているようであるが、正確には不明である。

〔覆土と堆積状況〕自然堆積と思われる。

〔規模と平面形〕長軸1.9m、短軸0.7mの楕円形。

〔深さと断面形〕深さ0.9m

〔副穴などの付属施設等〕確認できなかった。

〔出土遺物〕縄文土器が3点出土している（第10図20～22、第3表20～22）。いずれも前期初頭に位置付けられると思うが、包含層からの流れ込みの可能性が高い。

〔時期〕不明

第5号溝状ピット（第5図、第2表②）

〔位置と検出状況〕2JのⅢ層上面で検出。地震による攪乱を受けている。遺物包含層を切っているようであるが、正確には不明である。

〔覆土と堆積状況〕自然堆積と思われる。

〔規模と平面形〕長軸1.9m、短軸0.5mの長楕円形。

〔深さと断面形〕深さ0.9m

〔副穴などの付属施設等〕確認できなかった。

〔出土遺物〕 なし

〔時期〕 不明

③土坑

溝状ピット以外の土坑を、その他の土坑として一括して述べる。Ⅲ層上面から5基検出した。これらは形態の類似性などから二つに大別できる。第1号～第3号土坑と第4、5土坑である。第1～3号土坑は、出土遺物が少なく時期不明であるが、規模、形など規格が非常に似通っている。第4、5土坑は近代の墓坑と考えられるものである。

第1号土坑（第5図、第2表③）

〔位置と検出状況〕 4 FのⅢ層上面で検出。

〔覆土と堆積状況〕 不自然な部分は根による攪乱か。人為堆積とは思われない。

〔規模と平面形〕 長軸1.5m、短軸1.4mの円形である。

〔深さと断面形〕 深さ0.5m

〔副穴などの付属施設等〕 確認できなかった。

〔出土遺物〕 縄文土器が出土している（第10図19、第3表19）。前期初頭に位置付けられると思われる。

〔時期〕 不明

第2号土坑（第6図、第2表③）

〔位置と検出状況〕 3 GのⅢ層上面で検出。

〔覆土と堆積状況〕 やや不自然な所もあるが、人為堆積とは思われない。

〔規模と平面形〕 長軸1.3m、短軸1.2mの円形。

〔深さと断面形〕 深さ0.5mで、片側がオーバーハングしている。

〔副穴などの付属施設等〕 確認できなかった。

〔出土遺物〕 なし

〔時期〕 不明

第3号土坑（第6図、第2表③）

〔位置と検出状況〕 1 IのⅢ層上面で検出。

〔覆土と堆積状況〕 自然堆積と思われる。

〔規模と平面形〕 直径1.7mの円形。

〔深さと断面形〕 深さ0.4m

〔副穴などの付属施設等〕 確認できなかった。

〔出土遺物〕 なし

〔時期〕 不明

第4号土坑（第6図、第2表③）

〔位置と検出状況〕 4 IのIII層上面で検出。

〔覆土と堆積状況〕 1層の黒さが他の遺構の覆土に比べて異質である。人為堆積か？

〔規模と平面形〕 長軸1.7m、短軸1.2mの角ばった楕円形である。

〔深さと断面形〕 深さ0.7m

〔副穴などの付属施設等〕 確認できなかった。

〔出土遺物〕 なし

〔その他、時期、所見など〕 位置（第1図参照）、覆土、平面形、土坑の掘り方などから考えると、近代の墓坑の可能性が高いと思われる。

第5号土坑（第6図、第2表③）

〔位置と検出状況〕 3 HのIII層上面で攪乱を除去した後、検出。攪乱を受けている。トラクターによる削平を受けていると思われる。

〔覆土と堆積状況〕 1層が土坑の覆土であり、付近に検出された墓坑の覆土と同じである。明らかに人為堆積である。2～4層は攪乱。

〔規模と平面形〕 縦1.2m、横0.9mの長方形。

〔深さと断面形〕 深さ0.5m

〔副穴などの付属施設等〕 確認できなかった。

〔出土遺物〕 なし

〔その他、時期、所見など〕 人骨は発見されなかったが、次の理由で近代の墓坑であると思われる。まず、位置が江戸時代末～明治時代の墓坑のすぐ近くであること。覆土がその墓坑と同じであること。トラクターによる削平を受けていると思われ、すぐ近くに、人骨が墓坑の掘り込みを伴わずに出土していること（附編の3 H人骨の項参照）である。

④溝（第7図、第2表④）

1条検出した。

〔位置と検出状況〕 1 J、2 J、1 K、2 KのII層下面～III層上面で検出。調査区外に続いて

いる。地震による攪乱を受けていて、はっきりと確認できなかったが、おそらく遺物包含層を掘りこんで作られていると思われる。

〔覆土と堆積状況〕自然堆積と思われる。

〔規模と平面形〕調査区外に続いているので不明であるが、検出した範囲では、全長14m、幅1.6m、方形の一角のような形である。

〔深さと断面形〕深さ0.4mで、断面は緩やかなU字状を呈している。

〔付属施設など〕確認できなかった。

〔出土遺物〕縄文土器（第10図23～30、第3表23～30、第3節参照）、弥生土器？（第10図31、第3表31）が出土している。23～29は前期初頭に、30は前期前葉に位置付けられると思われる。ただし、溝は遺物包含層の範囲にあるので、そこからの流れ込みの可能性が高い。

〔その他、時期、所見など〕縄文時代前期の遺物包含層を掘りこんでつくられていると思われるので、それより新しい時期のものであり、弥生土器？が出土しているので弥生時代のものかもしれない。

⑤炉跡（第8図、第2表⑤）

1基検出した。

〔位置と検出状況〕1I～1JのII層中に検出。遺物包含層の中である。

〔規模と平面形、種類〕直径0.7mの円形の石囲炉である。

〔使用の痕跡、焼土の有無など〕炉内に焼土を検出。炉を構成している石も焼けていて、明らかに使用されている。

〔付属施設、所属施設など〕この炉が属すると思われる住居跡は確認できなかった。

〔遺物〕この炉跡に明らかに関係すると思われる遺物は確認できなかった。

〔その他、時期、所見など〕縄文時代前期の遺物包含層中に構築されているということで、この時期のものと思われる。この炉は竪穴住居跡中に検出されなかったのも、もしかすると、上に述べた炉のない竪穴住居跡に関係するのかもしれない。

⑥焼土（第9図、第2表⑥）

10箇所検出した。第1号はIII層上面に検出し、第2号から第10号まではII層中に検出した。全部現地性のもと思われるが、いずれからも灰、炭化物等を検出できず、また形も不整形で、はっきりしない。第1号以外はすべて縄文時代前期の遺物包含層中に検出され、この時期のものと思われる。

第2表 遺構一覧表

①堅穴住居跡

名称	位置	平面形	規模(m) 長軸×短軸	壁高 (cm)	炉	柱穴	出土遺物
第1号住居跡	2F~3F	だ円形	2.7×1.7	4~24	なし	なし	覆土から縄文土器(1=前期初)
第2号住居跡	3G	だ円形	2.8×1.7	3~18	なし	なし	なし
第3号住居跡	2G	だ円形	3×2	4~23	なし	なし	覆土から縄文土器(2=前期初)
第4号住居跡	2H	隅丸長方形	4×3	3~26	なし	なし	覆土から縄文土器(3~17=前期初) 弥生土器(18)

②溝状ピット

名称	位置	断面形	規模(m) 長軸×短軸	標高 (m)	副穴	出土遺物
第1号溝状ピット	2H		1.9×0.5	0.5	なし	なし
第2号溝状ピット	2H		2.2×0.7	0.8	なし	なし
第3号溝状ピット	3H		1.8×1	1.2	なし	なし
第4号溝状ピット	1J		1.9×0.7	0.9	なし	縄文土器(20~22=前期初)
第5号溝状ピット	2J		1.9×0.5	0.9	なし	なし

③土坑

名称	位置	平面形	断面形	規模(m) 長軸×短軸	深さ (m)	出土遺物	備考
第1号土坑	4F	円形		1.4×1.5	0.5	縄文土器(19=前期初)	
第2号土坑	3G	円形		1.3×1.2	0.5	なし	
第3号土坑	1I	円形		1.7×1.7	0.4	なし	
第4号土坑	4I	だ円形		1.7×1.2	0.7	なし	墓塚の可能性あり
第5号土坑	3H	長方形		1.2×0.9	0.5	なし	墓塚の可能性が高い

④溝

名称	位置	平面形	断面形	規模(m)		深さ (cm)	出土遺物	備考
				長さ	幅			
溝	1J、2J、1K、2K	不明 (L字形)	U字形	14	1.6	0.4	縄文土器(23~29=前期初、30=前期前葉?)、 弥生土器(21)?	調査区域外に続いている

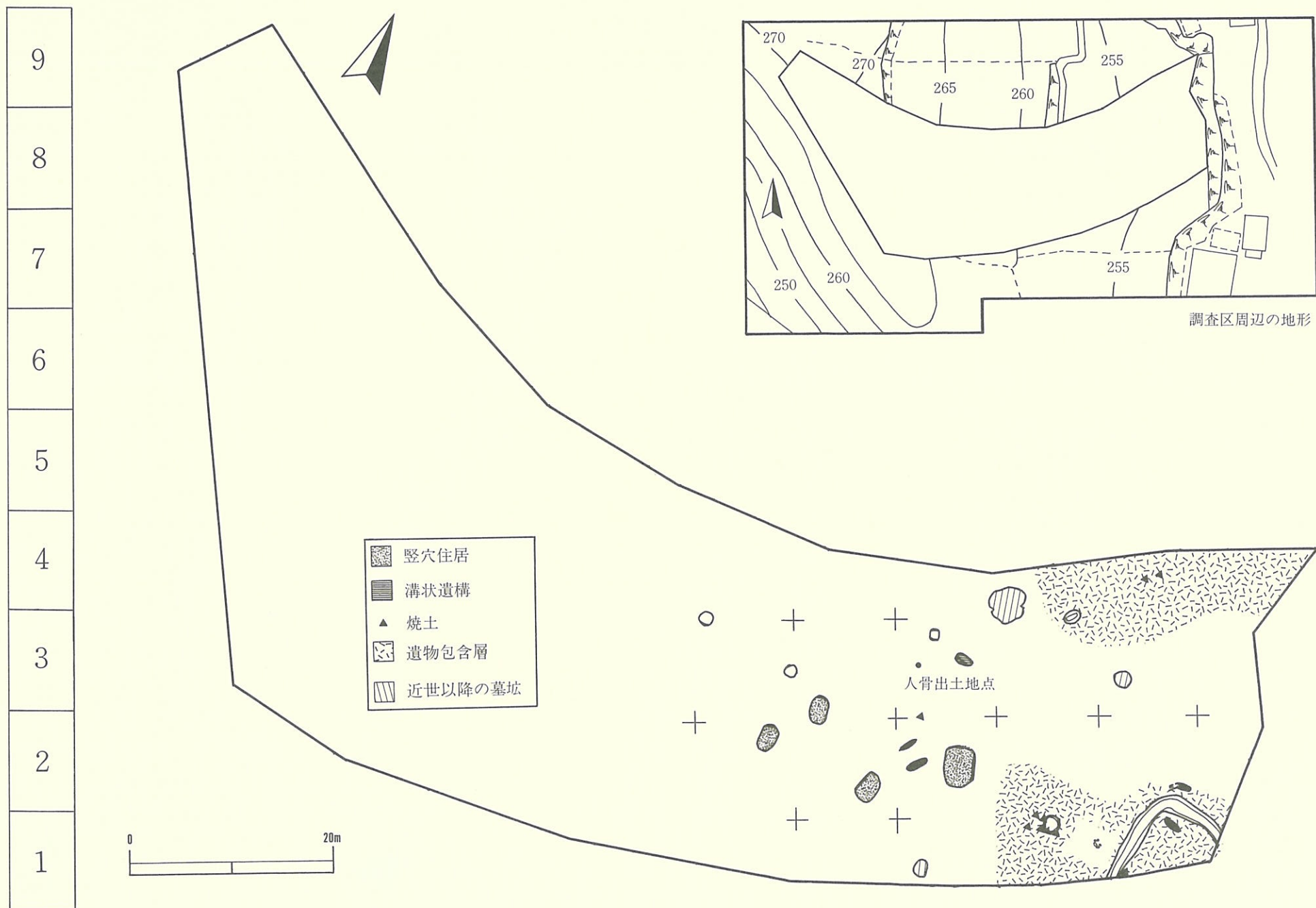
⑤ 炉跡

名 称	位 置	分 類	平 面 形	規 模 (m) 長軸×短軸	焼土の 有無	伴 出 遺 物	備 考
炉	1 I ~ 1 J	石囲炉	円形	0.7×0.7	あり	なし	石は焼けている 所属する住居跡は不明

⑥ 焼土

名 称	位 置	平 面 形	規 模 (cm) 長軸×短軸など	厚 さ (cm)	伴 出 遺 物	備 考
第1号焼土	3 H III層上面	三角形	28×22	4	なし	
第2号焼土	4 J II層中	不整形	32×12	16	なし	第2号と第3号は近接
第3号焼土	4 J II層中	不整形	5×4	16	なし	"
第4号焼土	1 J II層中	三角形	26×4	14	なし	
第5号焼土	2 I II層中	円形	8×8	4	なし	第5～10号は近接
第6号焼土	2 I II層中	不整長楕円形	50×18	9	なし	"
第7号焼土	1 I II層中	不整円形	22×22	9	なし	"
第8号焼土	2 I II層中	不整長楕円形	58×26	5	なし	"
第9号焼土	1 I II層中	不整円形	22×22	7	なし	"
第10号焼土	1 I II層中	不整形	6×6	3	なし	"

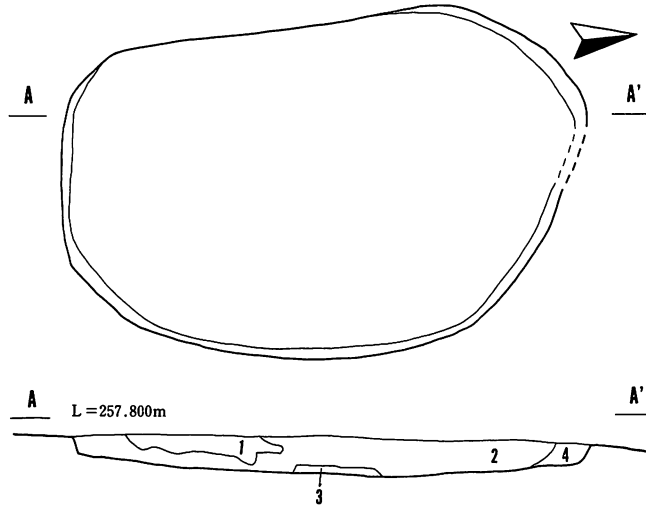
A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---



-  竖穴住居
-  溝状遺構
-  焼土
-  遺物包含層
-  近世以降の墓塚

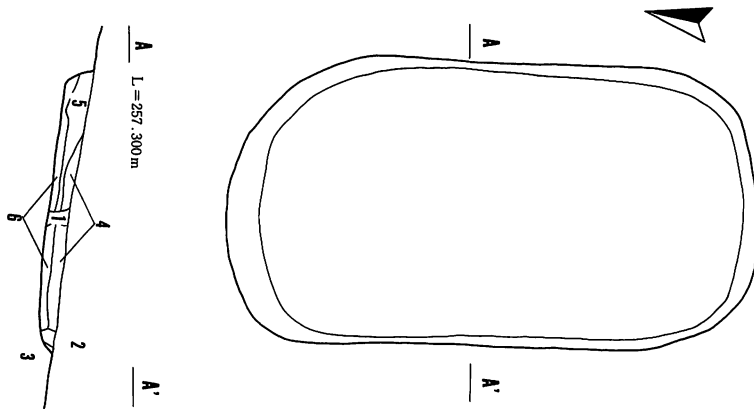
第1図 経塚森遺跡遺構配置図

第1号住居跡



- 1. 10YR7/8黄橙色土 1~2cmの小石をわずかに含む。
- 2. 10YR3/1黒褐色土 しまり悪し。1~2cmの小石、ローム粒を多量に含む。
- 3. 10YR8/8黄橙色土 粘性ややあり。
- 4. 10YR7/8黄橙色土 堀りすぎか？

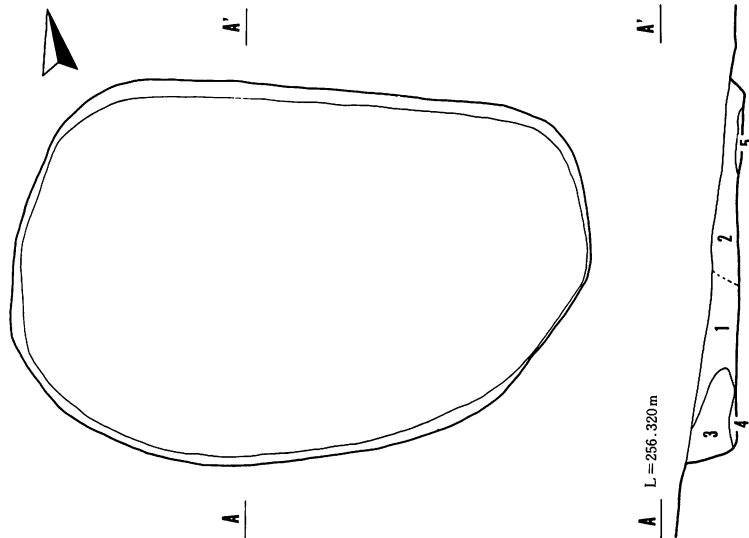
第2号住居跡



- 1. 10YR4/4褐色土
 - 2. 10YR4/1褐灰色土
 - 3. 10YR4/4褐色土
 - 4. 10YR4/4褐色土
 - 5. 10YR3/3暗褐色土
 - 6. 10YR7/8黄橙色土~10YR5/6黄褐色土
- 根による攪乱。
 1cm程度の石、ローム粒をわずかに含む。
 ローム粒を多量に含む。
 1cm程度の石を含み、ローム粒を多量に含む。
 ローム粒を含み、1cm程度の石をわずかに含む。
 1cm程度の石を多量に含む。

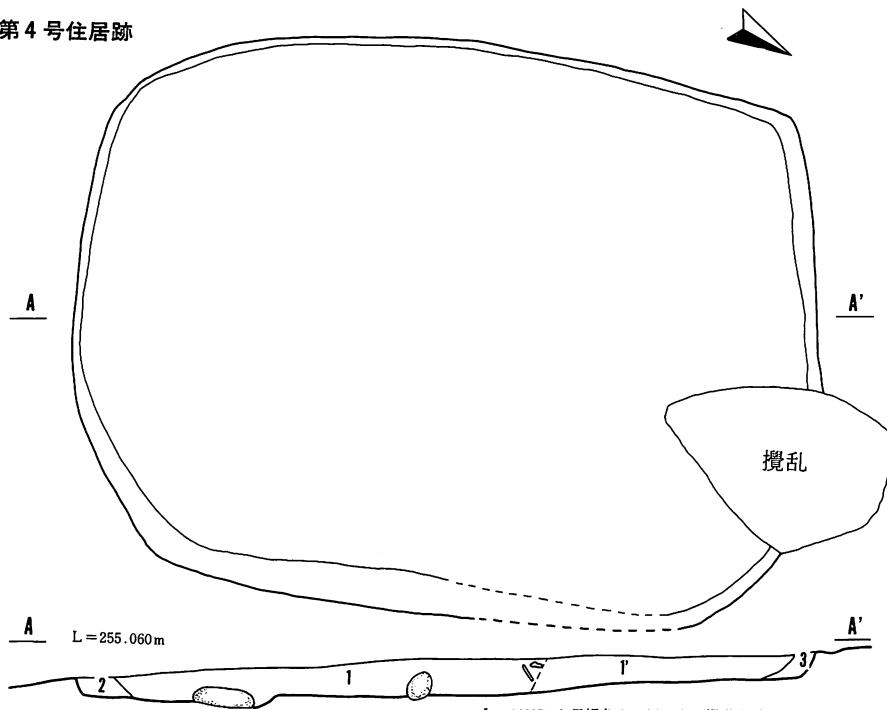
第2図 第1号・第2号住居跡 (S=1/40)

第3号住居跡



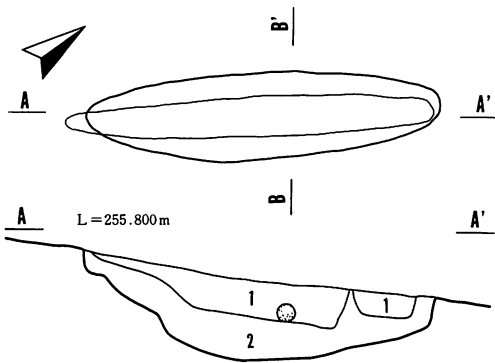
1. 10YR4/2 灰黄褐色土
2. 10YR4/4 褐色土 ~ 10YR4/3 に近い黄褐色土
3. 10YR3/2 黒褐色土
4. 10YR5/6 黄褐色土 上にまだらに 10YR4/2 灰黄褐色土
5. 10YR6/8 明黄褐色土

第4号住居跡



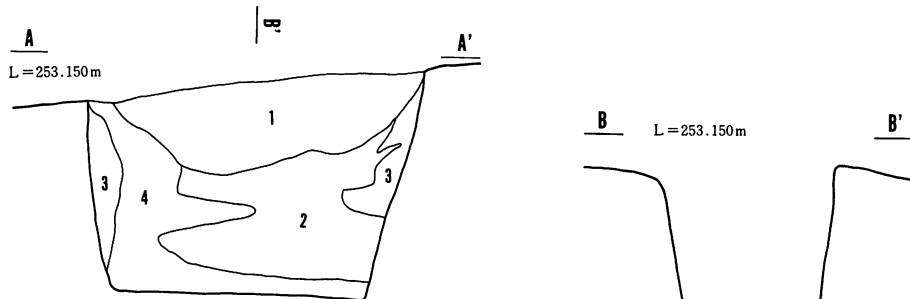
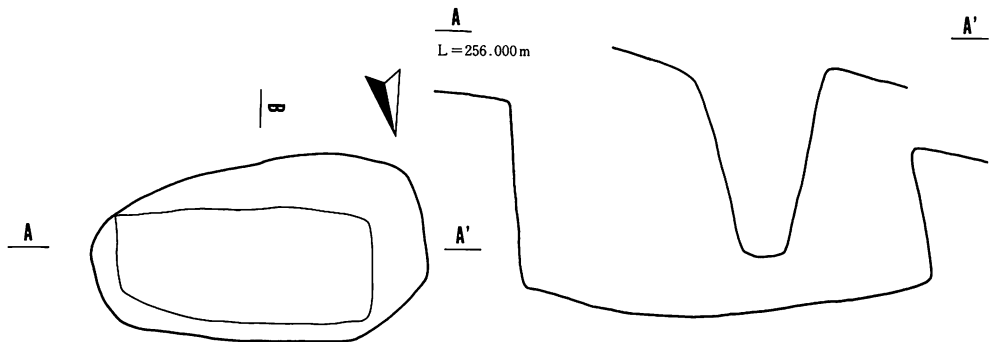
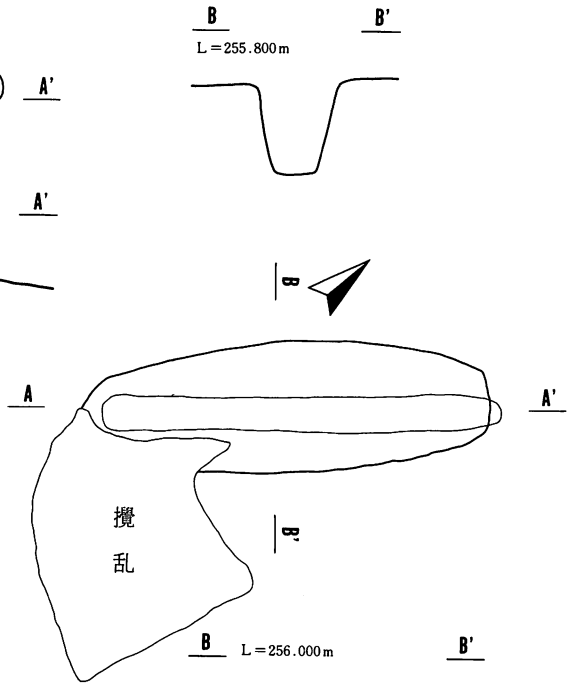
1. 10YR3/2 黒褐色土 根による攪乱を受けている。
- 1'. 10YR4/4 褐色土 根による攪乱を受けている。
2. 10YR5/8 黄褐色土
3. 10YR7/8 黄橙色土

第3図 第3・第4号住居跡 (S = 1/40)



1. 10YR7/1黒色土
2. 10YR2/3黒褐色土 10YR6/8明黄褐色土のブロックを多量に含む。

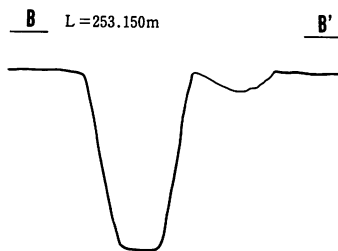
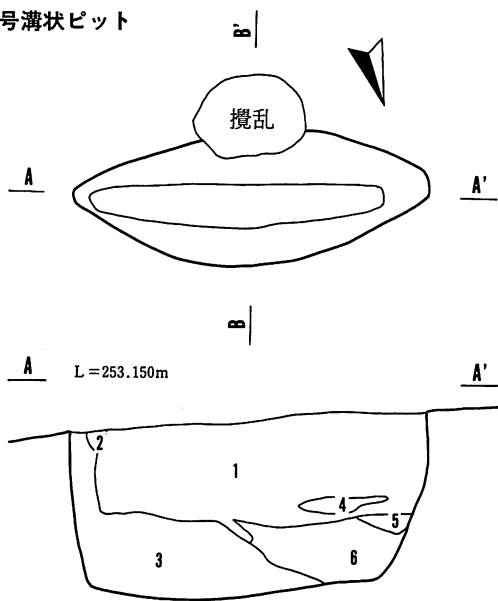
第1号溝状ピット (上)
 第2号溝状ピット (右)
 第3号溝状ピット (下)



1. 10YR3/1黒褐色土 1~2 cmの小石を多量に含み、ローム粒、ロームブロックを含む。
2. 10YR5/3にぶい黄褐色土 5 cm程度のレキを含み、ロームブロックが網状に入る。
3. 10YR7/8黄橙色土
4. 10YR4/1褐灰色土 1~2 cmの小石を多量に含む。

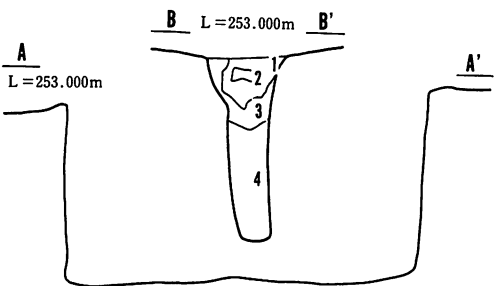
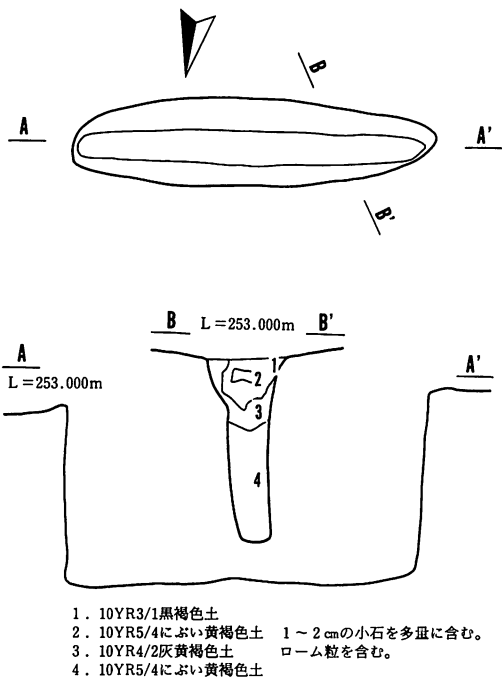
第4図 第1号~第3号溝状ピット (S=1/40)

第4号溝状ピット



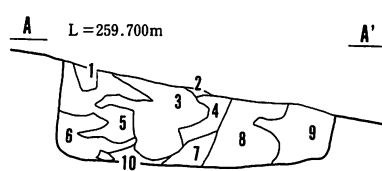
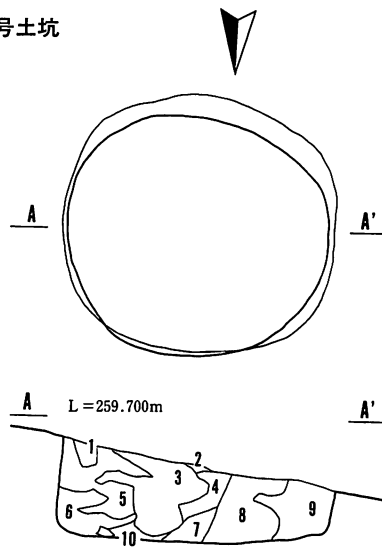
- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 10YR3/1黒褐色土 | ロームブロックを含む。 |
| 2. 10YR8/6黄橙色土 | 3~5 cmのレキを多量に含む。 |
| 3. 10YR8/6黄橙色土 | |
| 4. 2.5Y 8/6黄色土 | 3~5 cmのレキを多量に含む。 |
| 5. 2.5Y 6/4にぶい黄色土 | |
| 6. 10YR8/6黄橙色土 | |

第5号溝状ピット



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 10YR3/1黒褐色土 | |
| 2. 10YR5/4にぶい黄褐色土 | 1~2 cmの小石を多量に含む。 |
| 3. 10YR4/2灰黄褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 4. 10YR5/4にぶい黄褐色土 | |

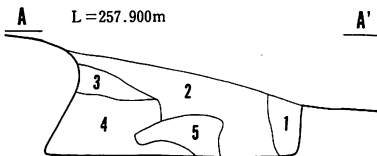
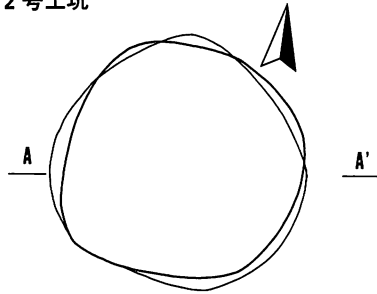
第1号土坑



- | | |
|------------------------------------|----------------------|
| 1. 10YR6/8明黄褐色土 | 5 cm程度のレキを含む。 |
| 2. 10YR6/3にぶい黄褐色土 | しまり悪し。 |
| 3. 10YR2/1黒灰色土 | 2~3 cmの小石、ローム粒を含む。 |
| 4. 10YR4/1褐灰色土 | 4~5 cmの石、多量のローム粒を含む。 |
| 5. 10YR4/1褐灰色土 | 多量のローム粒を含む。 |
| 6. 10YR7/8黄橙色土 | 2~3 cmの小石を含む。 |
| 7. 10YR6/6明黄褐色土に褐灰色土10YR5/1が縞状に入る。 | |
| 8. 10YR6/6明黄褐色土 | 1~2 cmの小石を多量に含む。 |
| 9. 10YR3/1黒褐色土 | 3~4 cmの石を含む。 |
| 10. 10YR4/1褐灰色土 | ローム粒を含む。 |

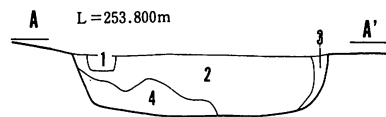
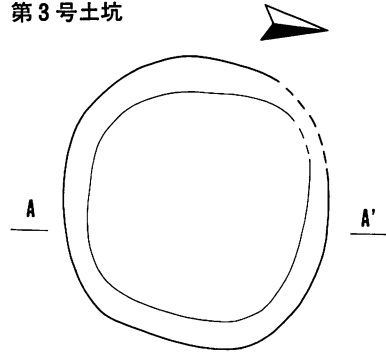
第5図 第4号・第5号溝状ピット、第1号土坑 (S=1/40)

第2号土坑



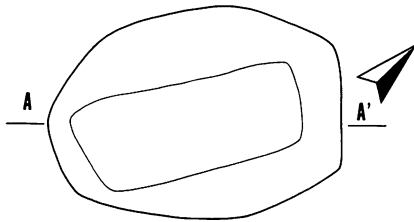
1. 10YR7/6明黄褐色土と10YR5/2灰黄褐色土が混合。
2. 10YR5/2灰黄褐色土 1cm程度の小石、ロームブロックを含む。
3. 10YR4/1褐灰色土 ローム粒を含む。
4. 10YR3/1黒褐色土 こぶし大のレキをわずかに含む。
5. 10YR7/6明黄褐色土 1cm程度の小石を含む。

第3号土坑



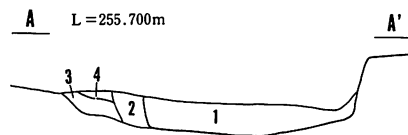
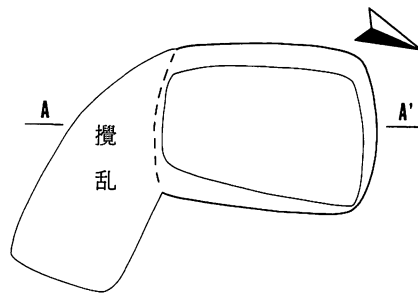
1. 10YR4/1褐灰色土 焼土ブロックを含む。
2. 10YR5/3にぶい黄褐色土
3. 10YR8/8黄橙色土と10YR3/1黒褐色土が混合。
4. 10YR6/6明黄褐色土

第4号土坑



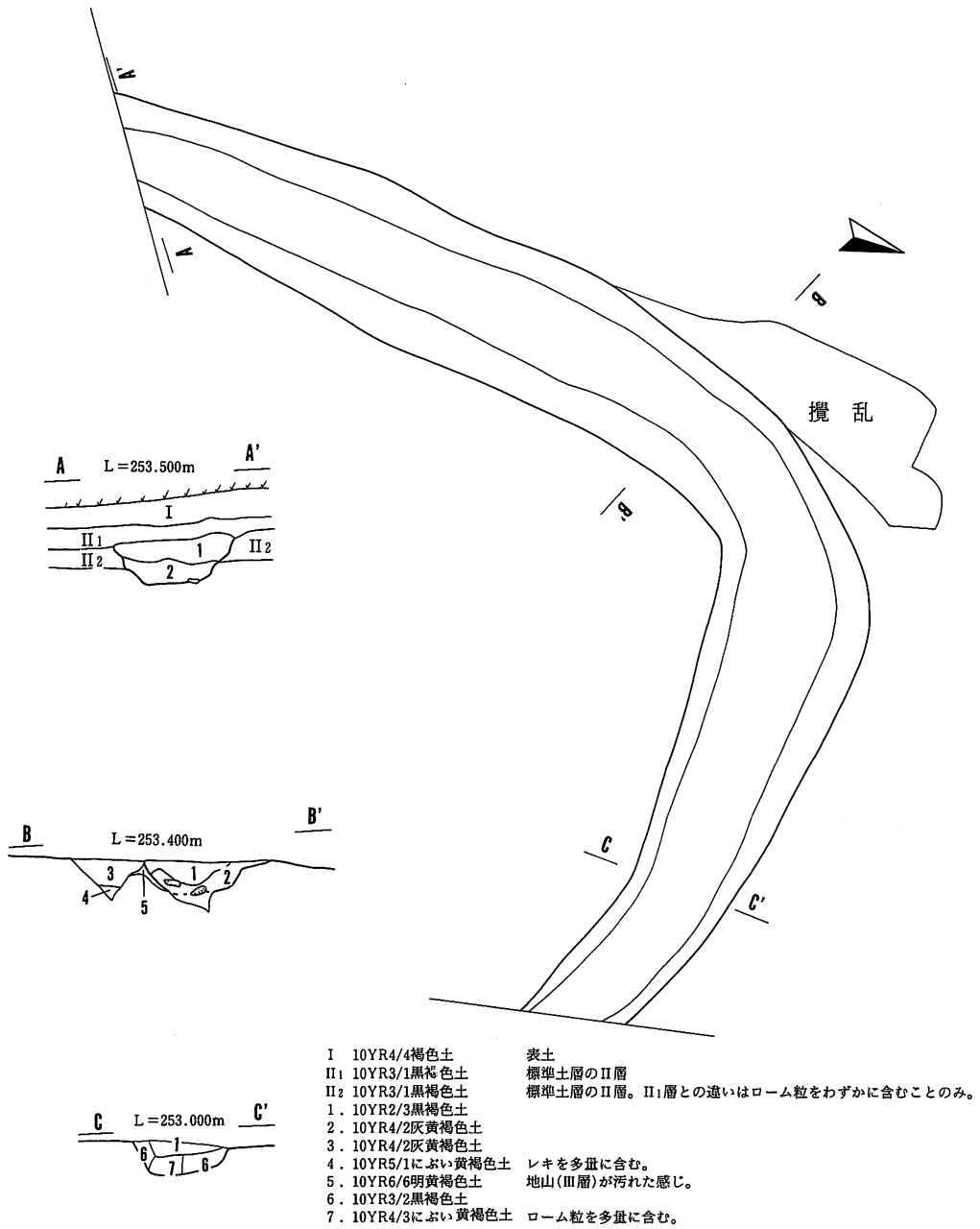
1. 10YR1.7/1黒色土 3cm程度の石を含む。
2. 10YR3/1黒褐色土
3. 10YR3/2黒褐色土 ローム粒を多量に含む。
4. 10YR6/4にぶい黄褐色土
5. 10YR7/8黄橙色土
6. 10YR3/3暗褐色土
7. 10YR7/8黄橙色土

第5号土坑

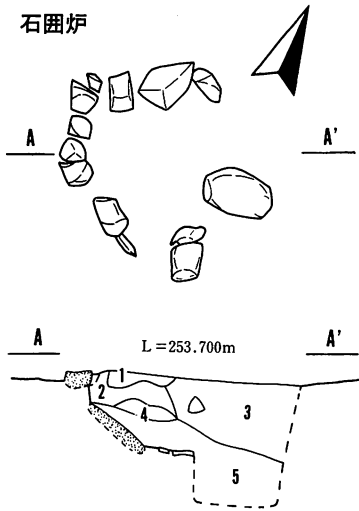


1. 10YR3/2黒褐色土を地として10YR7/8黄橙色土が霜降り状に入る。
2. 10YR4/2灰黄褐色土
3. 10YR5/2灰黄褐色土
4. 10YR8/8黄橙色土

第6図 第2号～第5号土坑 (S=1/40)

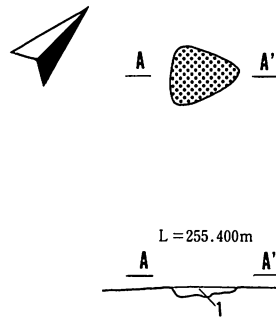


第7図 溝 (S=1/60)



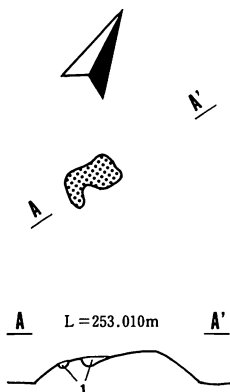
1. 7.5YR2/1 黒色土
2. 7.5YR4/1 褐灰色土に7.5YR6/8 橙色土が混じる。多量の焼土粒を含む。
3. 7.5YR4/2 灰褐色土~7.5YR3/1 黒褐色土
4. 7.5YR6/8 橙色土
5. 7.5YR4/1 褐灰色土

第1号焼土



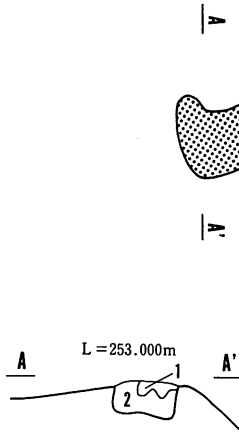
1. 5YR4/4 におい赤褐色土

第2号焼土



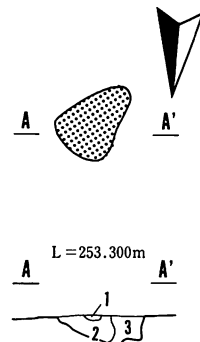
1. 5YR5/2 灰褐色土

第3号焼土



1. 5YR5/6 明赤褐色土
2. 5YR5/3 におい赤褐色土

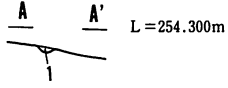
第4号焼土



1. 5YR7/8 橙色土
2. 7.5YR7/6 橙色土
3. 7.5YR1.7/1 黒色土

第8図 石囲炉、第1号~第4号焼土 (S=1/30)

第5号焼土

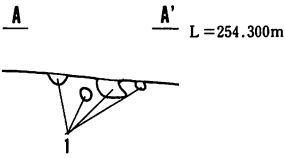


第5号焼土

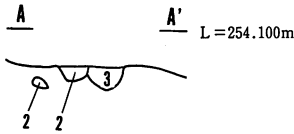


第6号焼土

第6号焼土



第7号焼土

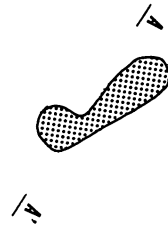
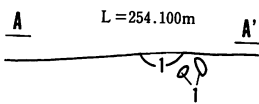


第7号焼土

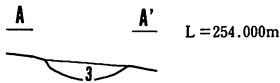


第8号焼土

第8号焼土



第9号焼土



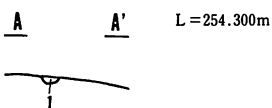
第9号焼土



第10号焼土



第10号焼土



- 1. 5YR5/8明赤褐色土 黒土混じり
- 2. 5YR5/3にふい赤褐色土
- 3. 5YR7/8橙色土

第9図 第5号～第10号焼土 (S = 1/30)

5. 遺物

本遺跡から出土した遺物は、土器と石器・石製品である。遺物の出土状況は、第1節でも述べたように地震による攪乱を受けており、良好なものとは言えない。

以下、出土遺物を、まず出土位置にしたがって記述、紹介していき、その後、土器、石器・石製品のように遺物の種類ごとに表の補足をし、概要、特徴等を述べてまとめることにする。ただし、石器・石製品については器種を第一にして分類したために図番号および表の順序がやや複雑になってることをお断りしておく。なお、石器の器種の分類については、②石器・石製品の項を参照していただきたい。また、引用・参考文献は、①土器、②石器・石製品の各項目の最後に記した。

出土位置は、大きく遺構内、遺物包含層、その他の三つに分けられる。以下、この三つの項目ごとに紹介していく。

・遺構内出土の遺物（第10図、第3表）

土器片のみ出土している。層位差に基づく型式の認定は出来なかった。殆どが縄文時代前期初頭に位置付けられるが、溝から出土した30は前期前葉に属すると思われる、第4号住居跡から出土した18は弥生時代のものと思われる。溝から出土した31も弥生時代のものかもしれない。

・遺物包含層出土の遺物（第11図～第17図、第4表、第20図～第28図、第8表）

最初に、遺物包含層について述べておく。遺物の集中地点層を遺物包含層と呼ぶ。本遺跡の遺物包含層は斜面下の4 I、4 J、4 K、1 I、2 I、1 J、2 Jで確認され、大きく北側包含層と南側包含層に分けられるが、ほぼ同じ性質を持つものである。（第1図 遺構配置図参照）。層厚は厚いところで40～50cm、層の性状は基本土層のII層と区別がつかず、分層できなかった。

したがって、このことと包含層が斜面下に形成されていることから、この包含層は斜面上からの流れこみによるものとも考えることも出来る。だが、それでは、この包含層中に構築された石囲炉の説明がつかない。よって、土器捨て場という積極的な解釈は出来ないまでも、現地性のものであることは間違いないと思われる。

包含層からは縄文土器、弥生土器、石器・石製品が出土している。土器は殆どが縄文時代前期初頭に位置付けられるものであり、一部見られる縄文時代中期中葉の土器（124）や弥生土器（52、54、56、120、125、133、153等）などは、他からの流れ込みや他の遺構（溝など）に関するものと思われる。前期初頭の土器の中で、地点差・層位差による違いは認められなかった。

石器は、石鏃、石錐、石匙、石筥、磨製石斧、凹石などが出土しており、特に特徴だった器種組成は認められないが、北側包含層からは垂飾(154)が、南側包含層からは異形石器(115)が出土している。包含層出土の石器の方が他より破損率が高いというような傾向は見られないようである。

・遺構、遺物包含層以外から出土した遺物(第18・19図、第6表、第29～33図、第8表)

縄文土器、弥生土器、石器が出土している。縄文土器は、やはり前期初頭のものが多いが、その他に、前期前葉のもの(199)?、中期中葉のもの(202)、晩期初頭のもの(203、215)などが出土している。206は弥生土器と思われる。181、204、205も、その可能性があると思われるが、縄文時代晩期の可能性もある。

石器は、石鏃、石錐、石匙、石筥、凹石などが出土している。

①土器

本遺跡から出土した土器は、大部分が縄文時代前期初頭に位置付けられるものである。その他に、縄文時代早期末の土器?、前期前葉の土器、中期中葉の土器、晩期前葉の土器、晩期後葉～弥生時代前葉の土器が十数点ある。

(1)出土状況

全てが破片による出土であり、接合されたものも少なく、特に特徴だった出土状態は認められなかった。出土位置は、大きく遺構、遺物包含層、その他の三ヶ所に分けられる。

遺構出土の土器は全て覆土からの出土であり、層位差による違いは認められなかった。

遺物包含層は地震による攪乱を受けており、また基本土層であるII層と区別できず、また分層もできなかった。したがって、地点差・層位差による違いは確認できなかった。

遺構、遺物包含層以外から出土した土器についても同様である。

(2)時期別による分類

(1)で述べたように、出土状況は良いものとは言えず、地点差・層位差による型式の認定および細別はできそうもない。そこで、本項では、型式学的観点のみから従来の編年成果に基づいて時期別に分類することにする。また、小さな破片が多く、型式の同定が困難なものが多いので、明らかに同定できるもののみ〇〇式と記すことにしたい。さらに、文様があるにもかかわらず筆者の不勉強で今回わからなかったものについて、時期不明の項にはっきりと記すことにする。

以下、時期ごとに土器を分類し、その概要を述べ、表の補足をする。縄文時代早期の土器？、前期の土器、中期の土器、晩期の土器、弥生土器、時期不明の土器の順で述べていくことにする。

・縄文時代早期の土器？（189）

189は、遺構・包含層外から出土した表裏縄文の土器である。早期末に位置付けられると思われるが、確信が持てないので？をつけた。

・縄文時代前期の土器

本遺跡出土土器の大部分がここに位置付けられ、またそのほとんどが初頭に位置付けられると思われるが、一部前葉に属すると思われるものもある。ほとんど全て繊維混入土器である。なお、ここで前期初頭というのは長七谷地Ⅲ群・上川名Ⅱ式、表館式、早稲田6類に相当するものを指し、前期前葉というのは大木1～2a式に相当するものを指している。

さて、この時期の土器は、地文のみのもが多く、また型式内容も不明な点が多く、さらには表館式と早稲田6類の新旧関係など未だ明らかになっていない点が多い。そこで、本遺跡では小さな破片が多く、地点差・層位差も認められなかったことから、これらを一括して述べることにする。

前期初頭～前葉の土器を便宜的に、1. いわゆるピッチリ縄文を中心にした斜行縄文を持つ一群、2. 羽状縄文を持つ一群、3. その他に分類して述べていく。なお、1、2に相当しても口唇部以外に他の文様を持つことがわかる場合は3に含めた。

1. いわゆるピッチリ縄文を中心にした斜行縄文を持つ一群

この群は、さらに、いわゆるピッチリ縄文を持つものとそれ以外のものに分けて述べていくことにする。

a. いわゆるピッチリ縄文を持つもの

「ピッチリ縄文」とは「斜縄文の中で条と節が非常に整然と表出されるもの」（熊谷 1989）である。本遺跡出土のもので全体が窺われるものはないが、岩手県仏沢Ⅲ遺跡（滝沢村教育委員会 1987）や同千鶴遺跡（宮古市教育委員会 1989）での類例を見ると、口縁部は平坦で、緩やかに湾曲する胴部を持ち、底部は乳房状の尖底を呈するようである。口唇部には刺突・圧痕を持つものと持たないものがある。時期は早稲田6類に相当し、この時期の岩手県を中心にした地域に見られる局地的な土器と考えられているものである。

本遺跡から出土した中で最も数が多い。口縁部破片には、3～6、7、19？、20～22、24、

26～28、32、35?、36～43、48、60～68、71、72、74、77～79、81、83～86、87?、88、89?、94、95、99～104、106?、116～119、121、122、126～130、135～147、156～158、160～163、164?、165?、176、177、184～188、190、191、194～196、207～210、212、214が相当すると考えられる。胴部破片には、51?、107?、159が相当し、底部破片には、33、113、114、115?、152、173?が相当しよう。

b. a以外の斜縄文を持つもの

15、25、44、49、57、59、76、82、92、93、98、149、166、169、174、177、183、198、211が相当する。このうち、15?、59、82、93、166?は0段多条の原体を用いていると考えられる。

2. 羽状縄文を持つ一群

結束を持つものと持たないものがある。結束を持つものは、11、13、14、23、45、50、69、80、96、108、109、110、151?、170、179、180、197、201、213が相当する。結束を持たないものは、111、167?、182が相当する。結束を持つものの中には、原体を転がす時に胴部の上から下へ重ねて施文しているため、結束下の斜縄文が消されて正しく羽状を呈していないものがある(11、151、170、179)。このことから考えると、9、10、12、91、92、134のように結束下の斜縄文がほぼ全く見えないものもこの一群に位置付けられてよいかもしれない。9は、口端部以下は結束部のみを回転しているようである。

3. その他

1、2に相当しなかった一群を便宜的に、a. 口縁部に沈線による文様を持つもの、b. 口縁部に横位または斜位に撚糸文を持つもの、c. 特徴的な原体(縄の部分の変化及び附加物、単軸絡条体)が用いられているものに分けて述べていく。

a. 口縁部に沈線による文様を持つもの(46、200)

46は、口縁部破片で、口縁上端とくびれ部に近い胴部との境を共に縄の側面圧痕(R?)で区画している。口縁上端には刻目が施され、縄の側面圧痕で区画された部分にはやや角ばった棒状工具で斜位の沈線が描かれている。胴部には斜縄文(RL)が施されているが、区画に用いた縄とは別の原体を用いている。

200も口縁に近い部分の破片で、中央に縄を輪にして圧痕し、その周りにやや太めの棒状工具を使って沈線で文様を描いたものである。

46、200ともに、上川名II式、長七谷地III群に位置付けられると思われる。

b. 口縁部に横位に撚糸文を持つもの (70、73、75、97、106、171、216)

いずれも右下がりに施されている。撚糸文を持つ部分が高いもの (73、106、171、216) と、比較的短くてその下に斜縄文を持つもの (70、75、97) の二つに分けられる。70、75、97は、同一個体ではないが、胎土、焼成等良く似ている。97は胴部に羽状縄文を持っているが、70、75も羽状縄文を持つものかもしれない。なお、岩手県湯舟沢遺跡の6区から本土器の類例が数点出土しており、さらにこの遺跡のXIRi住居跡からはこの種類の土器の全体がわかるものが出土している (滝沢村教育委員会ほか 1986)。それを見ると丸底の鉢のようである。

c. 特徴的な原体 (縄の部分の変化及び附加物、単軸絡条体) が用いられているもの (30、47、58、148、150、172、178、199)

この類の中には、結節(30、148)、縄の端を他の条で閉じたもの(47、58、178)、附加条(150、172)、単軸絡条体 (199) を含めている。

30と148は結節を回転したものである。大木1式に位置付けられようか。

47、58、178は、いずれも同様の原体が用いられているもので、同一個体と考えられる。他に類例を見ない本遺跡の特徴的な土器である。RLの開いた端にRを長めに巻いて閉じたものを回転していると思われる。上端には閉じた端の回転圧痕が見える。口縁上端には粘土紐を貼りつけていて、口唇部には刻目が見られる。本例は他に類例を見ないので時期決定は難しいが、文様効果の類似性から、長七谷地III群の時期に相当するものではないかと思われる。

150はLRにRを左巻きにしたもの、172も同様である。150と172は、色調がやや違うが、胎土等は良く似ているので同一個体かもしれない。

199は、いわゆる木目状撚糸文である。単軸絡条体第1A類 1。「中心部で他の条を巻き止め」(山内 1979) たものであろう。大木2a式と思われる。

・縄文時代中期の土器 (124、202)

二点とも中期中葉に属すると思われる。124は南側包含層出土であるが、流れ込みであろう。大木8b式に位置付けて間違いなきと思われる。202は大木7b式か？

・縄文時代晩期の土器 (203、215)

二点とも晩期前葉に属すると思われる。大洞B2式であろう。

なお、次の弥生土器に含めたものの中には晩期後半に位置付けられるものもあるかもしれないことを付言しておく。

・弥生土器 (18?、31?、52?、53?、54、56、120、125、133、154、181、204~206)

高坏(?)の台部が多い(18、120、125、133、206)。52は高坏の口縁部か?31、54、181、205は壺形土器、56、154、204は甕形土器と思われる。53は蓋か?いずれも弥生土器のなかでも比較的古い時期のものと思われ、一部晩期後葉の土器を含んでいるかもしれない。

・時期不明の土器 (105、112、123、192、193)

105の口唇部と口縁部の文様は、竹管様の工具を押し引いて描かれたものである。胎土に繊維は含まれておらず、堅くて緻密である。色調は灰色である。施文工具等から判断すると表館式というようにも考えられるが、明らかに様子が違う。

112は、天地逆の可能性もある。沈線で力強く鋭角的な文様が描かれている。地文は縄の側面圧痕のようでもあるが不明である。胎土には繊維は含まれていないが、小石を含んでいる。色調は茶褐色で、本遺跡出土の縄文時代前期の土器のそれにやや似ているが、やや暗い。表面に煤が付着しているようでもある。

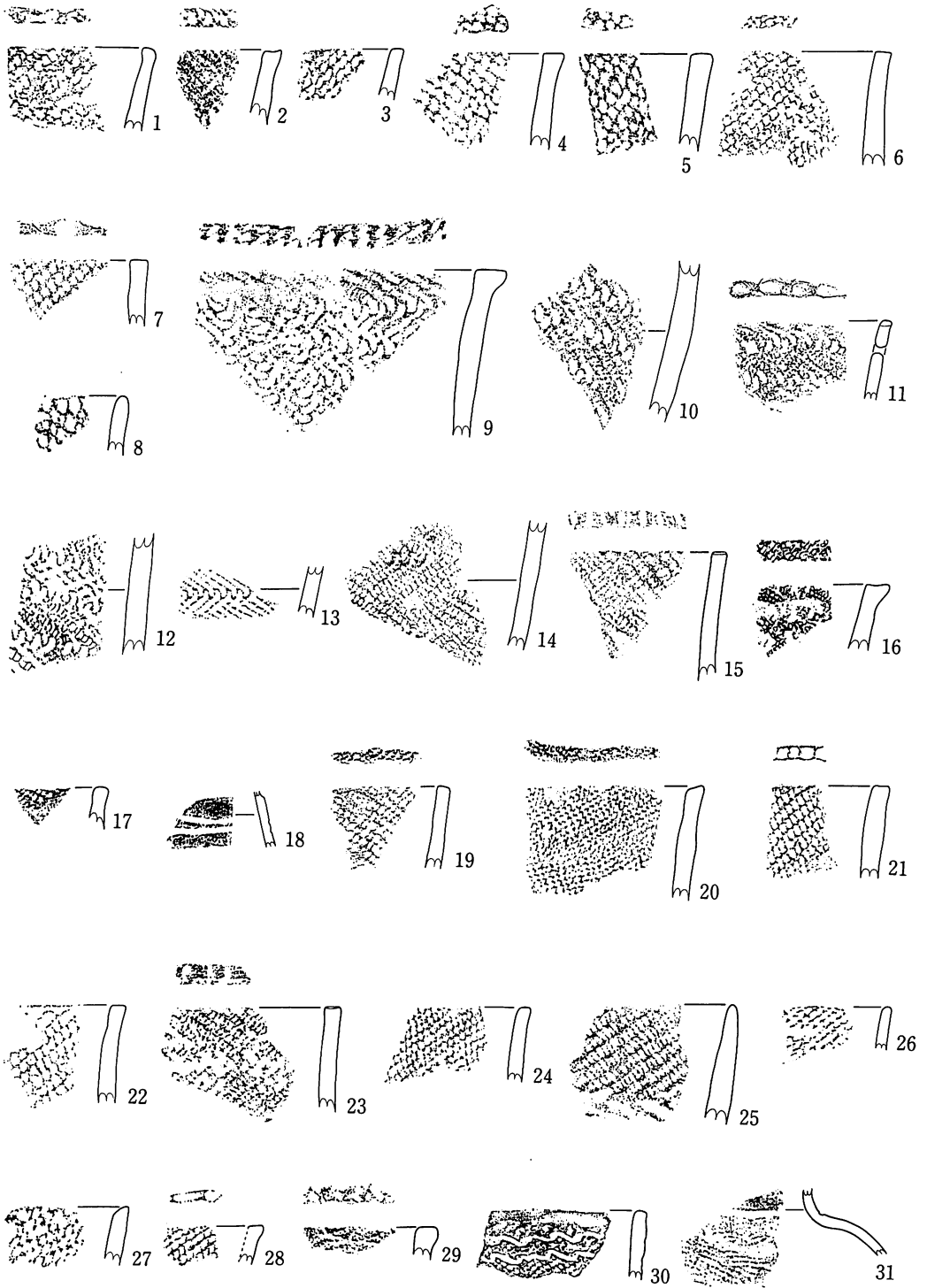
123は、沈線で緩やかに逆三角形の文様が描かれている。胎土には繊維は含まれていないが、白い小石を特徴的に含んでいる。堅くて緻密な焼き上がりである。色調は赤みがかっている。十腰内I式に似ていないこともないが、明らかに様子が違う。

192と193は、色調等良く似ていて同一個体かもしれない。両方とも縦に綾線文が施されている。胎土には繊維は含まれていないが、小石を多量に含んでいて、あまり良いものとは言えない。色調はやや灰色がかった肌色である。文様等から判断すると、前期末~中期初頭に位置付けられるかもしれない。

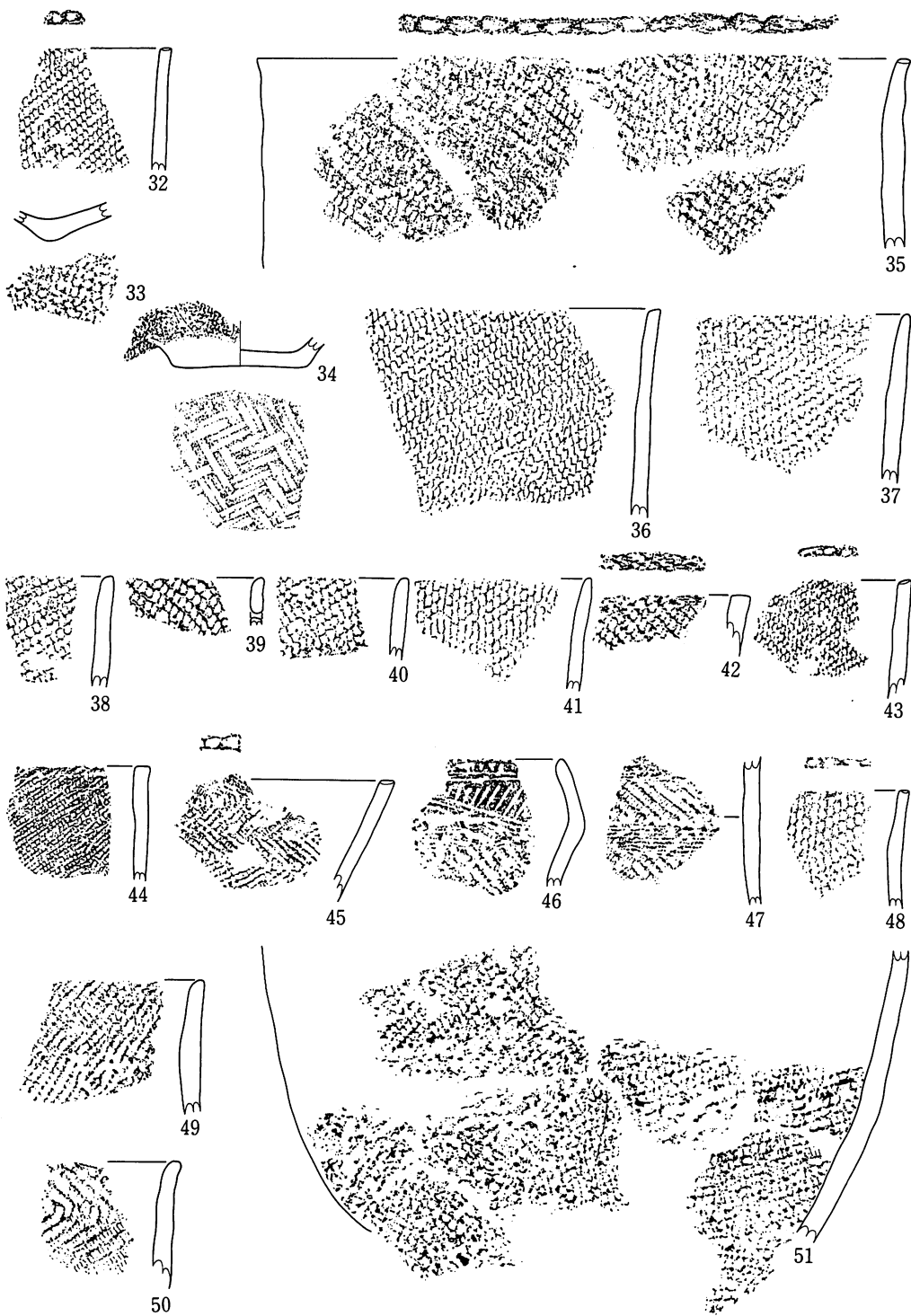
引用・参考文献

- | | | |
|----------|------|--|
| 相原淳一 | 1991 | 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76-1 |
| 青森県教育委員会 | 1980 | 『長七谷地貝塚』 |
| | 1989 | 『表館(1)遺跡III』 |
| 興野義一 | 1967 | 「大木式土器理解のために(I)」『考古学ジャーナル』13 |
| | 1968 | 「大木式土器理解のために(II)」『考古学ジャーナル』16 |
| | 1984 | 「大木式土器について」『宮城の研究1』清文堂 |
| 工藤竹久 | 1989 | 「縄文尖底土器様式」『縄文土器大観1』小学館 |
| 熊谷常正 | 1983 | 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究年報』 |

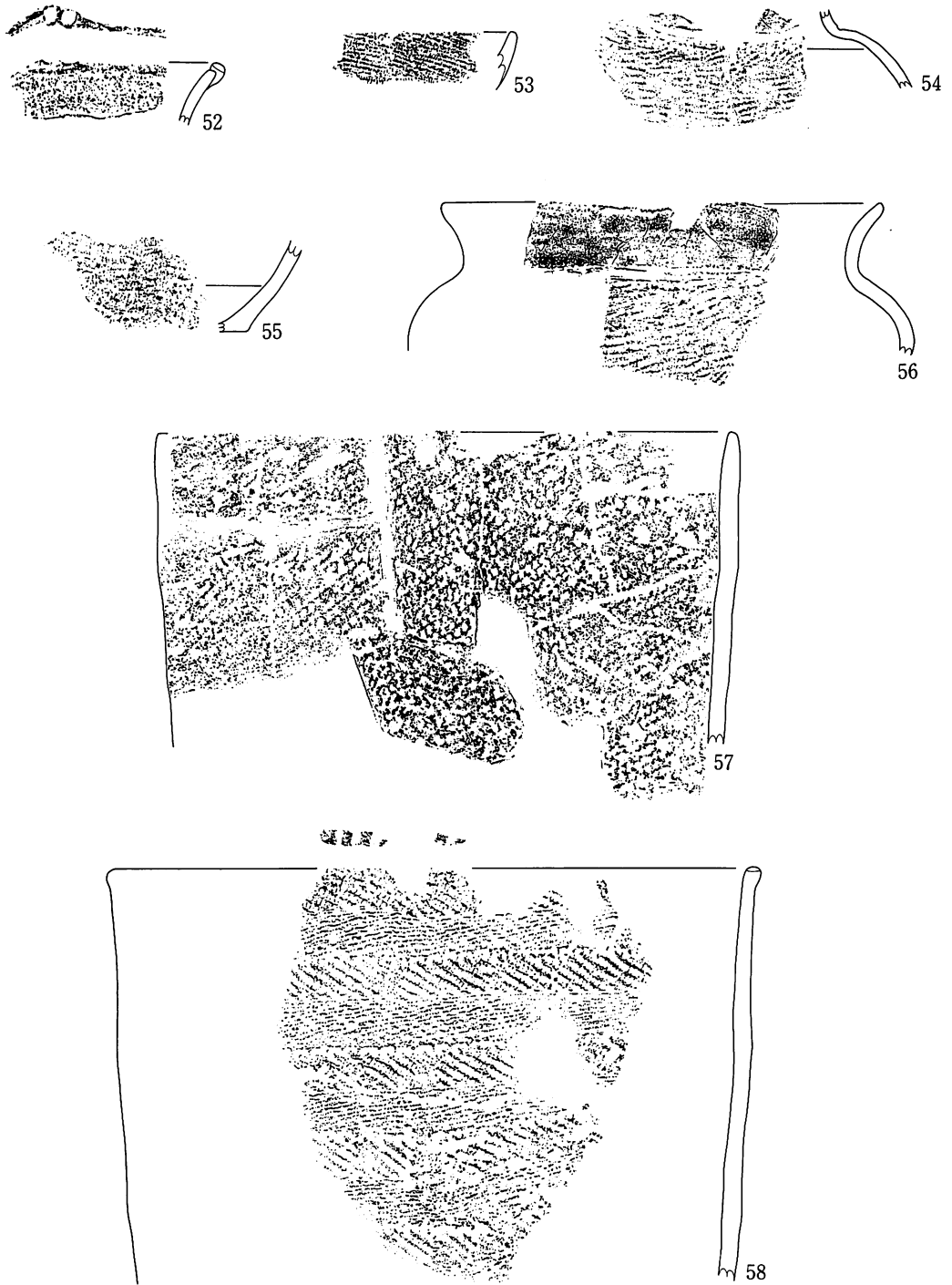
- 1989 「岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について」『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』(第4回縄文文化検討会シンポジウムレジュメ)
- 佐藤達夫ほか 1957 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』43-2
- 1960 「六ヶ所村表館出土の土器」『上北考古会誌』1
- 1961 「六ヶ所村尾駸出土の土器」『上北考古会誌』2
- 縄文文化検討会 1989 『東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』(第4回縄文文化検討会シンポジウムレジュメ)
- 滝沢村教育委員会 1987 『仏沢III遺跡』
- 滝沢村教育委員会ほか 1986 『湯舟沢遺跡』
- 名久井文明 1971 「青森県芦野遺跡の土器群について」『考古学雑誌』57-2
- 丹羽茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣
- 宮古市教育委員会 1987 『崎山遺跡群I』
- 1989 『千鷲遺跡』
- 武藤康弘 1988 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究」『考古学雑誌』74-2
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1-3
- 1979 『日本先史土器の縄文』先史考古学会



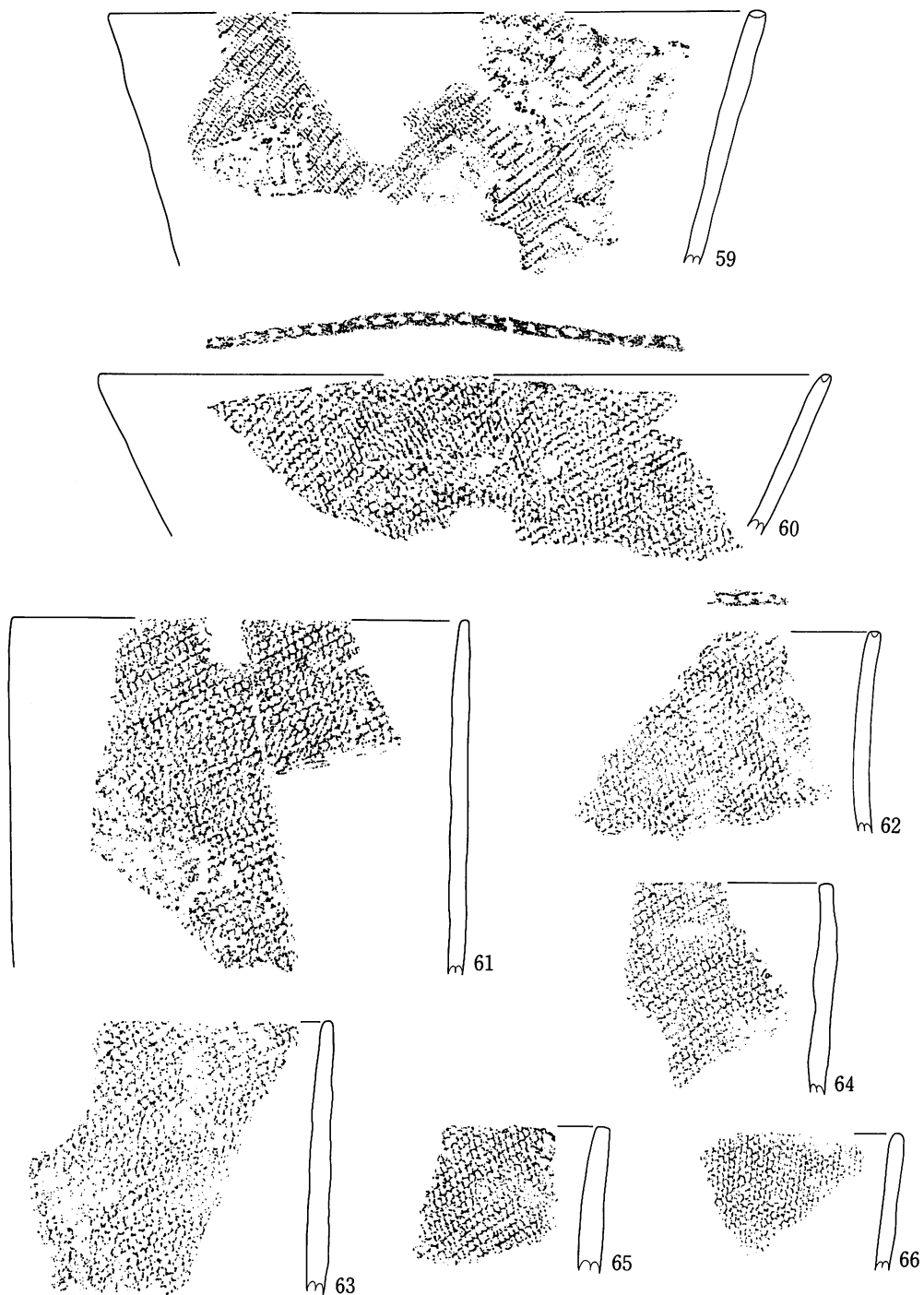
第10図 遺構内出土の土器 (S = 1/3)



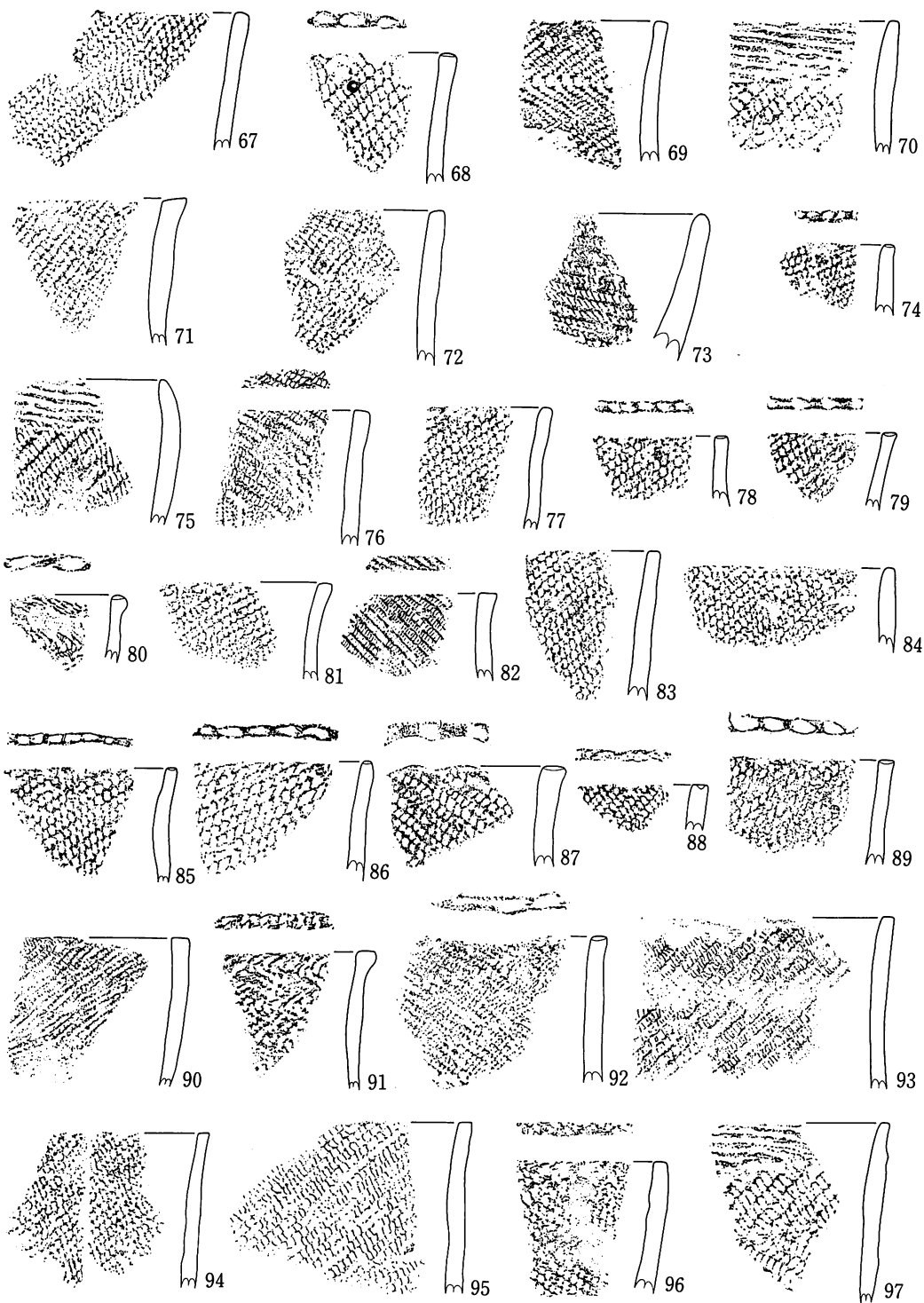
第11図 北側包含層出土の土器(1) (S = 1/3)



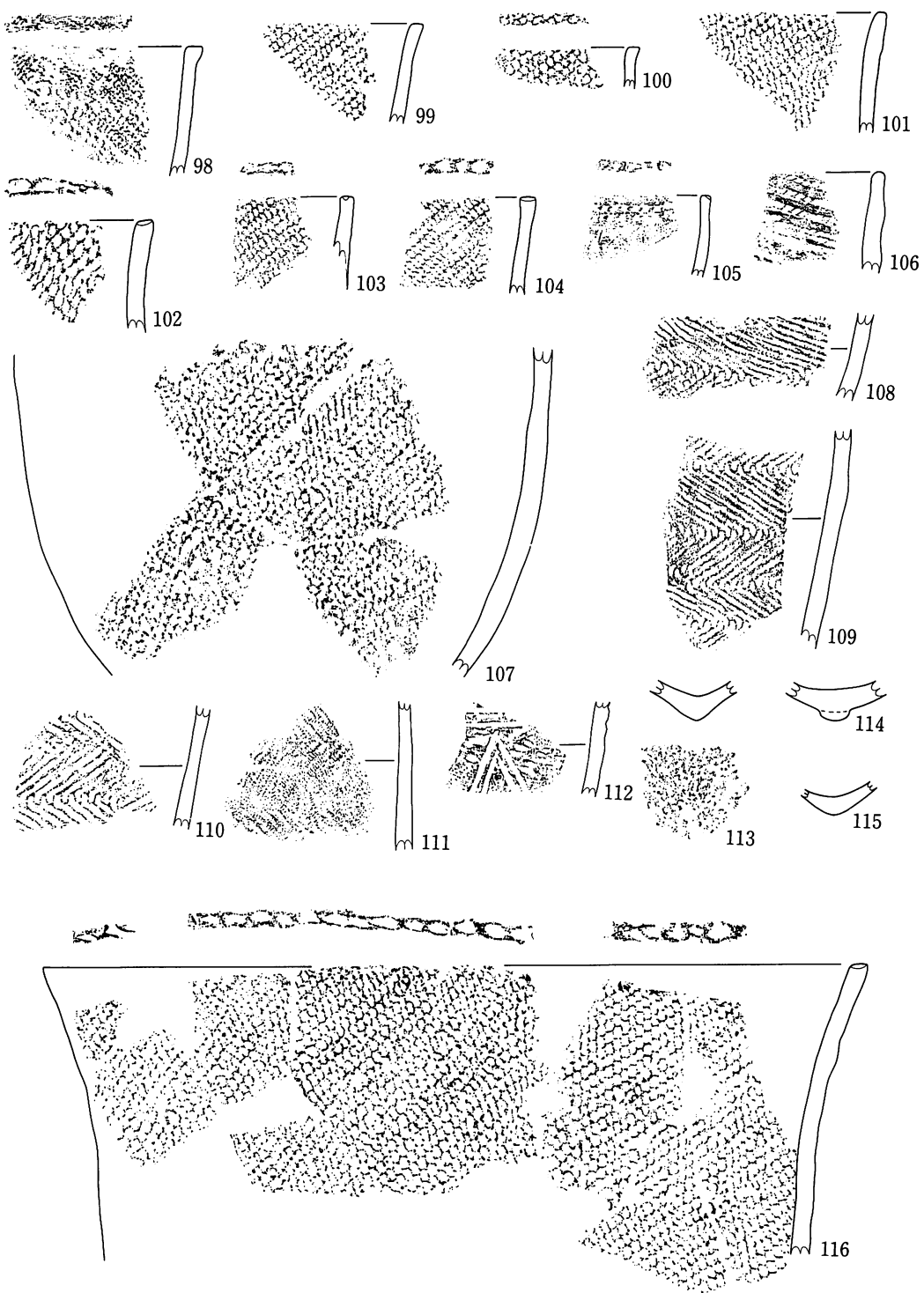
第12図 北側包含層出土の土器(2) (S = 1/3)



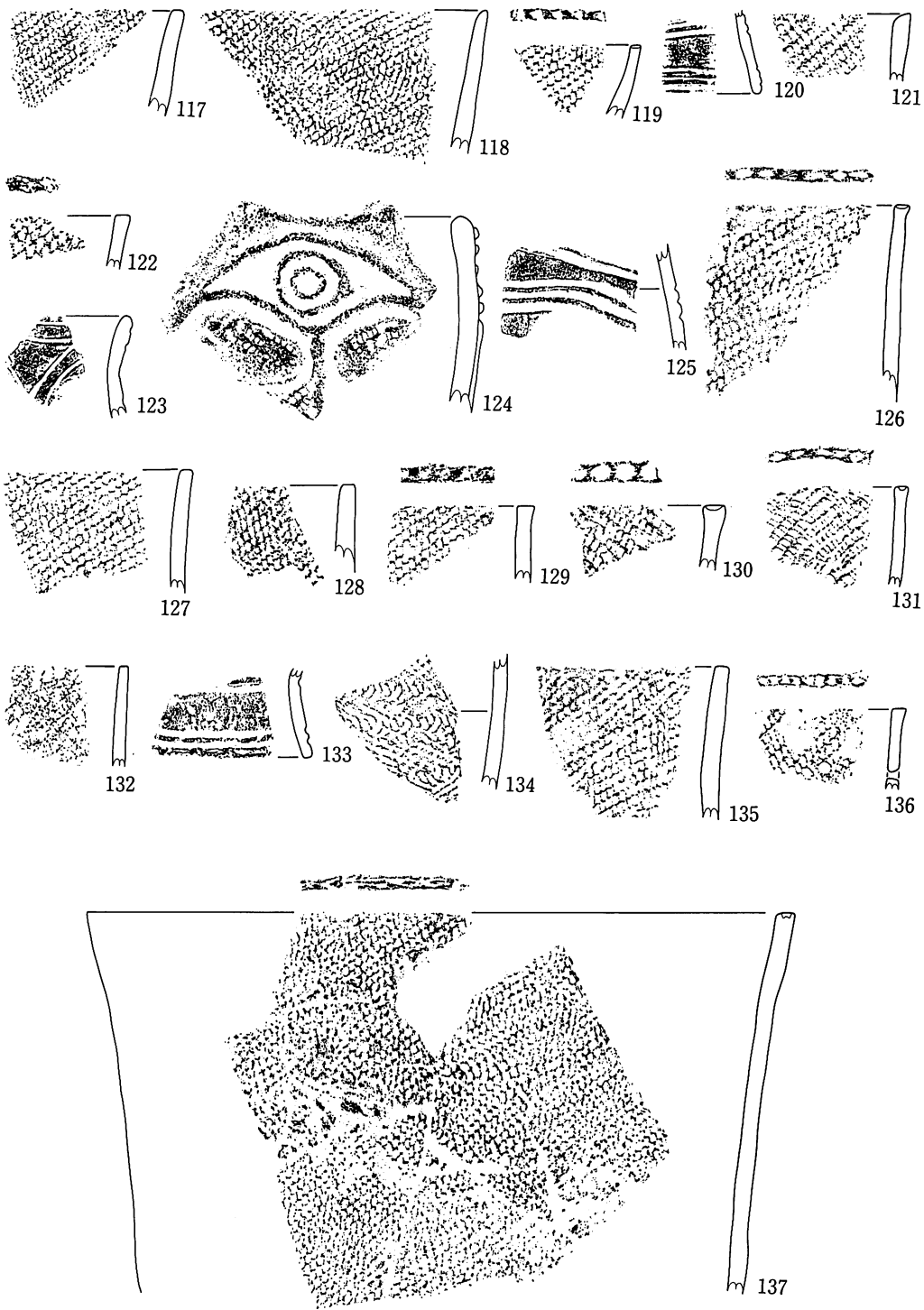
第13図 北側包含層出土の土器(3) (S = 1/3)



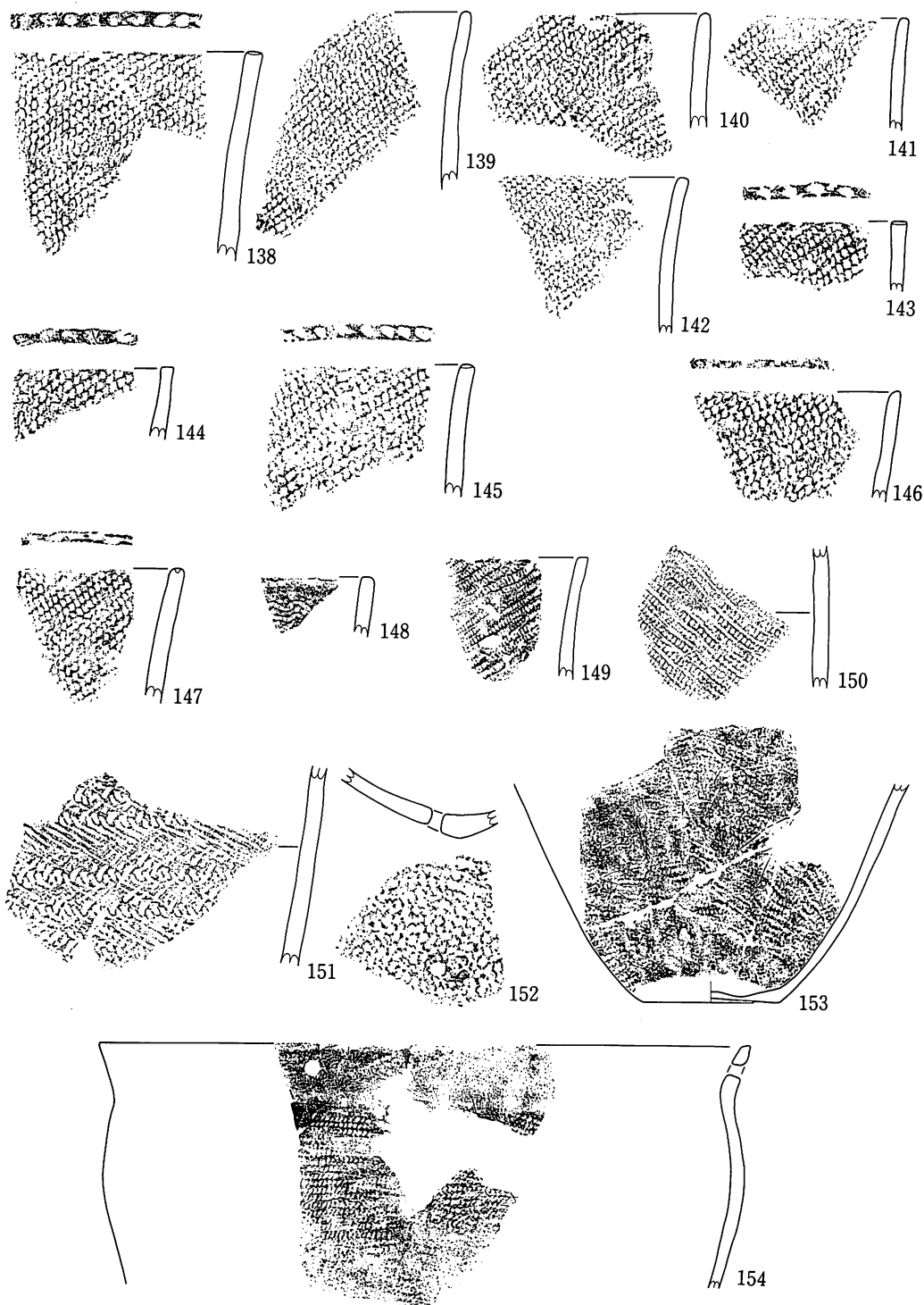
第14図 北側包含層出土の土器(4) (S = 1/3)



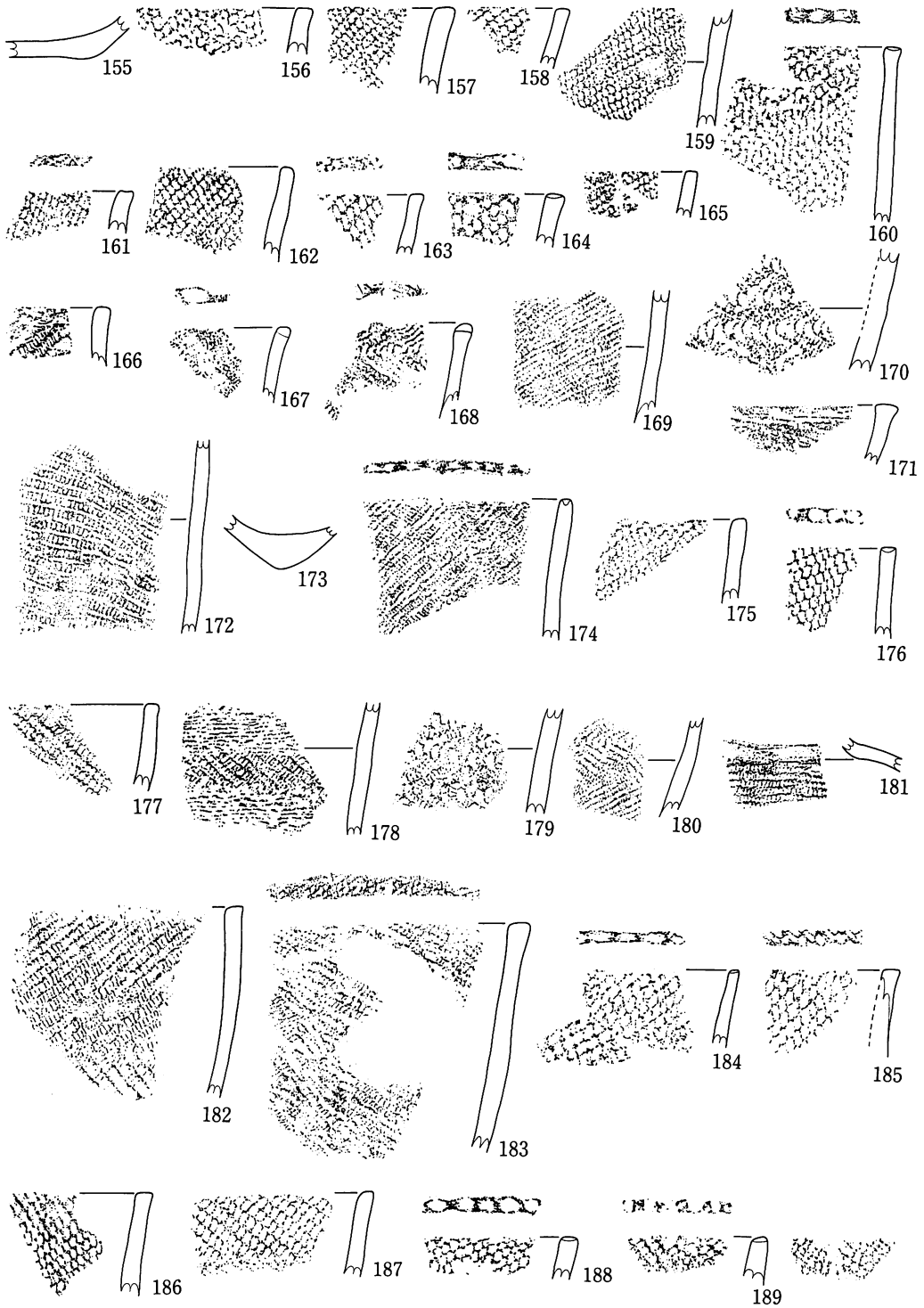
第15図 北側包含層出土の土器(5)・南側包含層出土の土器(1) (S = 1/3)



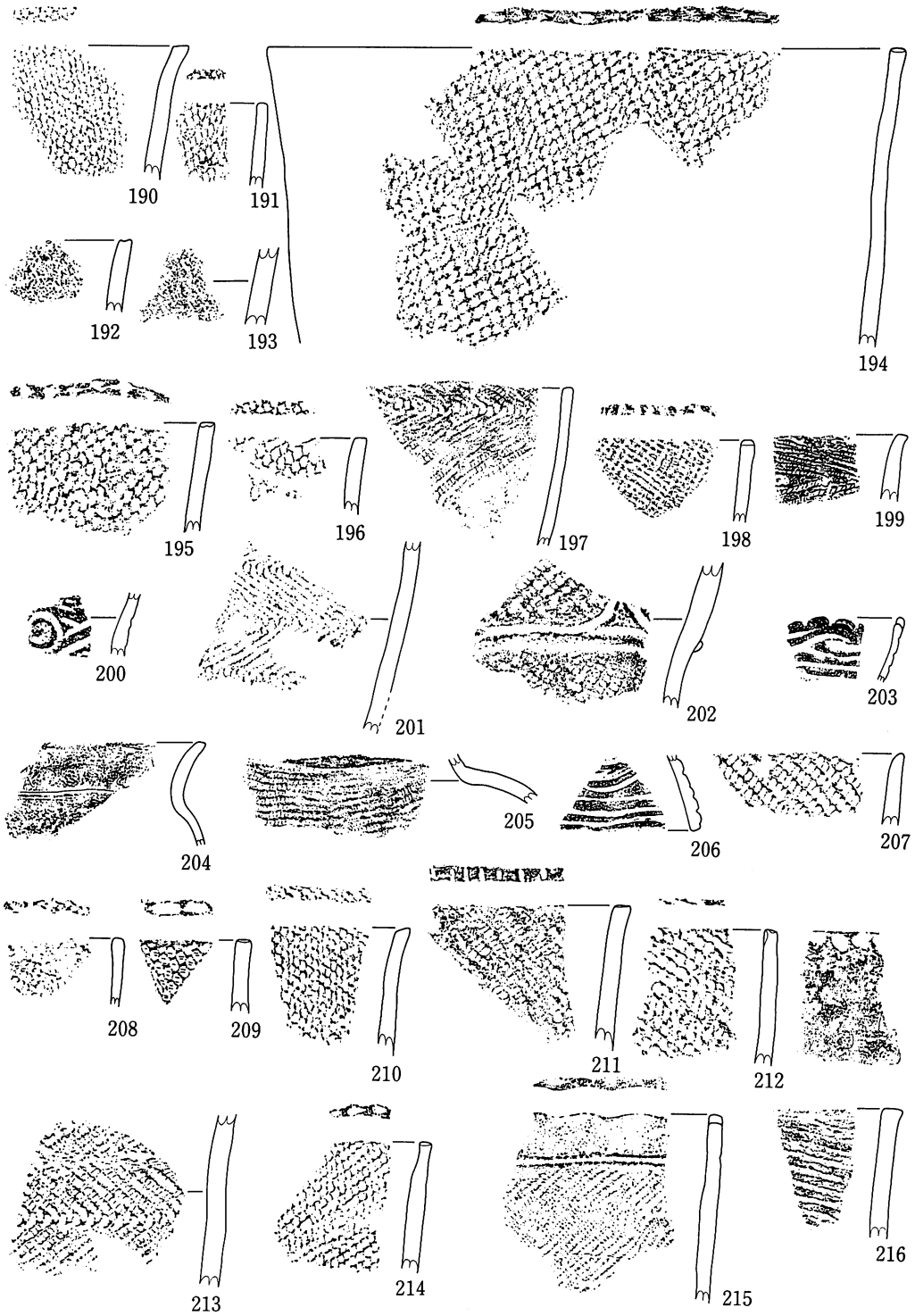
第16図 南側包含層出土の土器(2)



第17図 南側包含層出土の土器(3) (S = 1/3)



第18図 遺構・包含層外出土の土器(1) (S = 1/3)



第19図 遺構・包含層外出土の土器(2) (S = 1/3)

第3表土器観察表(1)

遺構内出土土器

図 番 号	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (文 様・地 文・原 体など)	内 面 (調 整など)	備 考	本 文 載
1	1号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に縄の圧痕(?)・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入	
2	3号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇に回転縄文?・結束羽状縄文(RL、LR)(0段多条)	ナテ	繊維混入	
3	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
4	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に縄の圧痕(?)・複節縄文(RLR)?	ナテ	繊維混入	
5	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文?・複節縄文(RLR)?	ナテ	繊維混入	
6	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(LR)?・単節縄文(LR)	ナテ	繊維混入	
7	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
8	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	不明(複節?)	ナテ	繊維混入	
9	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に縄の圧痕(LR)?・口縁に縄文・結節回転	ナテ	繊維混入	P92
10	4号住居・覆土	深鉢・胴部	結束羽状縄文?	ナテ	繊維混入	P92
11	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・結束羽状縄文(RL、LR)?	ナテ	繊維混入・補修孔	
12	4号住居・覆土	深鉢・胴部	結束羽状縄文?	ナテ		P92
13	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	結束羽状縄文(RL、LR)	ナテ	繊維混入	
14	4号住居・覆土	深鉢・胴部	結束羽状縄文(RL、LR)	ナテ	繊維混入	
15	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に刻目・単節縄文(RL)	ナテ	繊維混入	
16	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	口唇部に縄の圧痕(LRL)?・不明	ナテ	繊維混入	
17	4号住居・覆土	深鉢・口縁部	単節縄文(RL)	ナテ		
18	4号住居・覆土	台?		ミガキ?		
19	1号土坑	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文?・単節縄文(LR)?	ナテ	繊維混入	
20	4号溝状ピット	深鉢・口縁部	口唇部に縄の圧痕(LRL)?・単節縄文(LR)	ナテ	繊維混入	
21	4号溝状ピット	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
22	4号溝状ピット	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・単節縄文(LR)	ナテ	繊維混入	
23	溝	深鉢・口縁部	口唇部に刻目・結束羽状縄文(RL、LR)	ナテ	繊維混入	
24	溝	深鉢・口縁部	単節縄文(LR)		繊維混入	
25	溝	深鉢・口縁部	単節縄文(RL)(0段多条)	ナテ		
26	溝	深鉢・口縁部	複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
27	溝	深鉢・口縁部	単節縄文(LR)?	ナテ	繊維混入	
28	溝	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)	不明		
29	溝	深鉢・口縁部	口唇部に縄の圧痕?	ナテ	繊維混入	
30	溝	深鉢・口縁部	ループ文	ナテ		
31	溝	壺・胴部	単節縄文(LR)	ナテ		

第4表土器観察表(2)

北側包含層出土土器(1)

図版 番号	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (文 様・地 文・原 体 など)	内 面 (調 整 など)	備 考	本 文 記 載
32	4 I	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
33	4 I	深鉢・底部	単節縄文(L R) ?	ナ デ	繊維混入	
34	4 I	底部	底面に網代痕	ナ デ		
35	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(R L R)	ナ デ	繊維細レキ混入	
36	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に押さえ・単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
37	4 J	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
38	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に押さえ・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
39	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に押さえ・複節縄文(R L R)	ナ デ	繊維混入・補修孔	
40	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に押さえ・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
41	4 J	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L) ?	ナ デ	繊維混入	
42	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に縄文・複節縄文(R L R)	ナ デ	繊維混入	
43	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
44	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に押さえ・単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
45	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・結束羽状縄文(L R、R L) (0段多条)	ナ デ	繊維混入	
46	4 J	深鉢・口縁部	口唇部に刻目・側面圧痕(L)・単節縄文(R L)	不 明	繊維混入	P 92
47	4 J	深鉢・胴部	(本文記載参照)	ナ デ	繊維混入	P 93
48	4 K	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
49	4 K	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
50	4 K	深鉢・口縁部	結束羽状縄文(L R、R L)	ナ デ	繊維混入	
51	4 K	深鉢・胴部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
52	4 K	高坏?・口縁部	口唇部に刻目	ナ デ		
53	4 K	蓋?・口縁部?	単節縄文(R L)	ナ デ		
54	4 K	壺・胴部	単節縄文(L R)	ナ デ		
55	4 K	底部	単節縄文(L R)	ナ デ		
56	4 K	甕・口縁~胴部	単節縄文(L R)	ナ デ		
57	北側包含層	深鉢・口縁~胴部	単節縄文(L R) ?	ナ デ	繊維混入	
58	北側包含層	深鉢・口縁~胴部	(本文記載参照)	ナ デ	繊維混入	P 93
59	北側包含層	深鉢・口縁~胴部	単節縄文(L R) (0段多条)	ナ デ	繊維細レキ混入	
60	北側包含層	深鉢・口縁~胴部	口唇部に刺突・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入・補修孔あり	
61	北側包含層	深鉢・口縁~胴部	複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
62	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
63	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R) ?	ナ デ	繊維混入	
64	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入・補修孔	
65	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
66	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
67	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
68	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に指頭?圧痕・単節縄文(L R) ?	ナ デ	繊維混入	
69	北側包含層	深鉢・口縁部	結束羽状縄文(R L、L R)	ナ デ	繊維混入	
70	北側包含層	深鉢・口縁部	口頸部に撚糸文(R)・単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	P 93
71	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L) ?	ナ デ	繊維混入	
72	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(R L) ?	ナ デ	繊維混入	
73	北側包含層	深鉢・口縁部	撚糸文(L)	ナ デ	繊維混入	P 93

図 番 号	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (文 様・地 文・原 体 など)	内 面 (調整など)	備 考	本 文 記 載
74	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
75	北側包含層	深鉢・口縁部	口頸部に摺糸文(L)・単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	P93
76	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(R L)、単節縄文(R L)(0段多条)	ナ デ		
77	北側包含層	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維細レキ混入	
78	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
79	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に刻目・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
80	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・結束羽状縄文(R L、L R)	ナ デ	繊維混入	
81	北側包含層	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
82	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文・単節縄文(R L)(0段多条)	ナ デ	繊維混入	
83	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入	
84	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R) ?	ナ デ	繊維混入	
85	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
86	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
87	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・単節縄文(R L)	ナ デ	繊維混入	
88	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕(L R L) ? ・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
89	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
90	北側包含層	深鉢・口縁~胴部	単節縄文(L R)	ナ デ	外面にスス付着	
91	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕 ? ・羽状縄文 ?	ナ デ	繊維混入	P92
92	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・結束羽状縄文	ナ デ	繊維混入	
93	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)(0段多条)	ナ デ	繊維混入	
94	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ		
95	北側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナ デ		
96	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文 ? ・結束羽状縄文 ?	ナ デ		
97	北側包含層	深鉢・口縁部	口頸部に摺糸文(L)・羽状縄文(R L、L R ?)	ナ デ		P93
98	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕 ? ・単節縄文(R L) ?	ナ デ		
99	北側包含層	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
100	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(L R L)・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
101	北側包含層	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
102	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L) ?	ナ デ	繊維混入	
103	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕(?)・複節縄文(L R L)	ナ デ	繊維混入	
104	北側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L) ?	ナ デ	繊維混入	
105	北側包含層	鉢 ? 口縁部	口唇部に竹管による押圧 ? ・竹管による押し引き	ナ デ		
106	北側包含層	深鉢・口縁部	摺糸文(R)	ナ デ	繊維混入	P93
107	北側包含層	深鉢・胴部	単節縄文(L R)	ナ デ	繊維混入・内側にスス	
108	北側包含層	深鉢・胴部	結束羽状縄文	ナ デ	繊維混入	
109	北側包含層	深鉢・胴部	結束羽状縄文(不明)	ナ デ	繊維混入	
110	北側包含層	深鉢・胴部	結束羽状縄文(R L、L R)	ナ デ	繊維混入	
111	北側包含層	深鉢・胴部	羽状縄文(L R、R L)(0段多条)	ナ デ	繊維混入	
112	北側包含層	深鉢・胴部		ナ デ		
113	北側包含層	深鉢・底部	縄文 ?	ナ デ	繊維混入	
114	北側包含層	深鉢・底部	不明	ナ デ	繊維混入	
115	北側包含層	深鉢・底部	不明	ナ デ	繊維混入	

第5表土器観察表(3)

南側包含層出土土器

図 番 号	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (文 様・地 文・原 体など)	内 面 (調 整など)	備 考	本 文 記 載
116	1 I	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
117	1 I	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナテ	繊維混入	
118	1 I	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
119	1 I	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
120	1 I	高杯?・台		ナテ		
121	2 I	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナテ	繊維混入	
122	2 I	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕(?)・複節縄文(R L R)?	ナテ	繊維混入	
123	2 I	口縁部		ナテ	白い砂レキ多く含む	
124	2 I	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナテ		
125	2 I	高杯?・台		ナテ		
126	1 J	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
127	1 J	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
128	1 J	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
129	1 J	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
130	1 J	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・複節縄文(R L R)	ナテ	繊維混入	
131	1 J	深鉢・口縁部	口唇部に竹管様のもので刺突・単節縄文(L R)?	ナテ	繊維混入	
132	1 J	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
133	1 J	高杯?・台		ナテ		
134	1 J	深鉢・胸部	結束羽状縄文?	ナテ	繊維混入	P 92
135	2 J	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)	ナテ	繊維混入	
136	2 J	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(R L R)?・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入・補修孔	
137	南側包含層	深鉢・口縁～胸部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
138	南側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
139	南側包含層	深鉢・口縁～胸部	複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
140	南側包含層	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
141	南側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)?	ナテ	繊維混入	
142	南側包含層	深鉢・口縁部	複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
143	南側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
144	南側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
145	南側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
146	南側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕?・複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入	
147	南側包含層	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・縄の側面圧痕?・複節縄文(L R L)?	ナテ	繊維混入	
148	南側包含層	深鉢・口縁部	ループ文	ナテ		
149	南側包含層	深鉢・口縁部	単節縄文(L R)(0段多糸)	ナテ	繊維混入	
150	南側包含層	深鉢・胸部	付加糸(L RとR)	ナテ		P 93
151	南側包含層	深鉢・胸部	結束羽状縄文	ナテ	繊維混入	
152	南側包含層	深鉢・底部	複節縄文(L R L)	ナテ	繊維混入・補修孔	
153	南側包含層	深鉢・胸部～底部	単節縄文(L R)	ナテ		
154	南側包含層	深鉢・口縁～胸部	単節縄文(L R)	ナテ	外面にスス付着・補修孔	

第6表土器観察表(4)

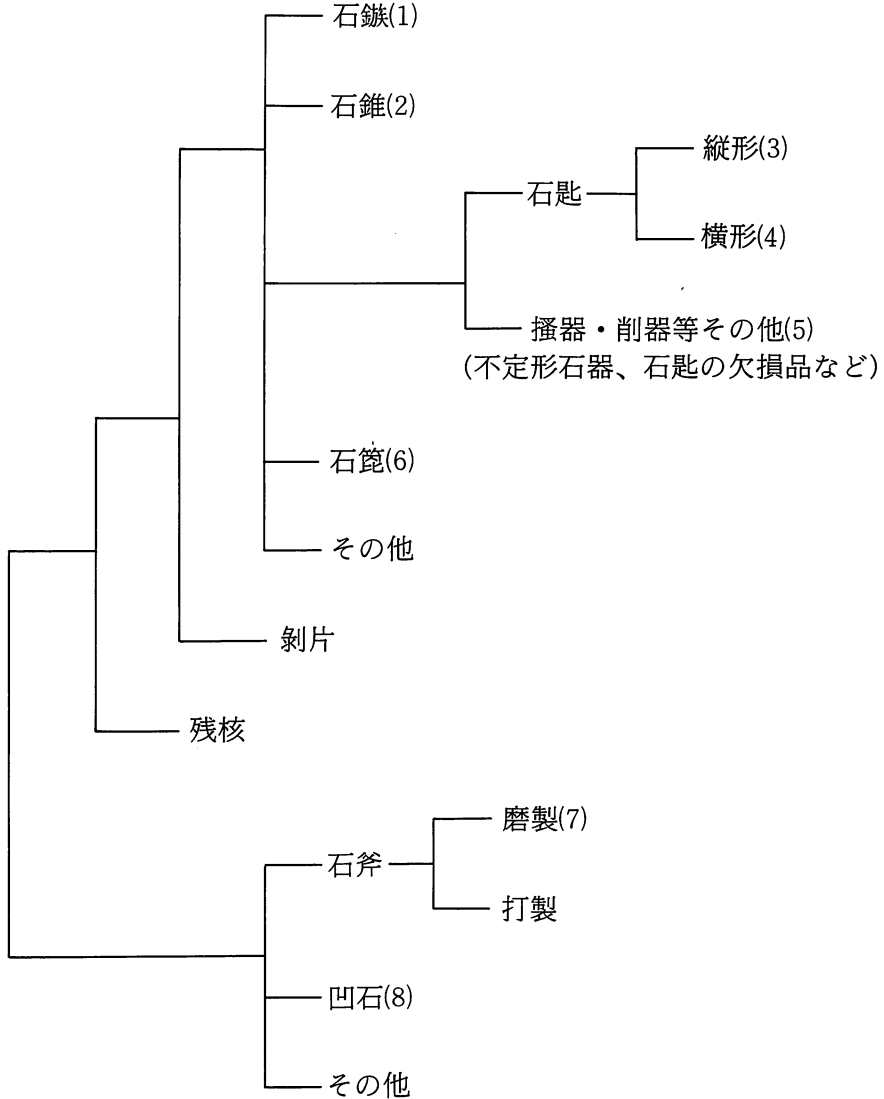
遺構・包含層外出土土器

図 番 号	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (文 様・地 文・原 体など)	内 面 (調整 など)	備 考	本 文 記 載
155	4B・I層	底部				
156	4C	深鉢・口縁部	複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
157	2G・I層	深鉢・口縁部	単節縄文(LR)?	ナテ	繊維混入	
158	2G・I層	深鉢・口縁部	複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
159	2G・I層	深鉢・胴部	単節縄文(LR)	ナテ	繊維混入	
160	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入・外面にスス	
161	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕?・複節縄文(RLR)?	ナテ	繊維混入	
162	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	単節縄文(LR)	ナテ	繊維混入	
163	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の側面圧痕?複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入?	
164	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入	
165	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	単節縄文(RL)	ナテ	繊維混入	
166	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	単節縄文(LR)(0段多条)	ナテ	繊維混入	
167	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・羽状縄文?	ナテ	繊維混入	
168	2G~3G・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・結束羽状縄文	ナテ	繊維混入	
169	2G~3G・II層	深鉢・胴部	単節縄文(LR)	ナテ	繊維混入	
170	2G~3G・I層	深鉢・胴部	結束羽状縄文	ナテ	繊維混入	
171	1H・II層	深鉢・口縁部	撚糸文(L)	ナテ	繊維混入	P93
172	1H・I層	深鉢・胴部	附加条(LR、R)	ナテ		P93
173	1H	深鉢・底部	縄文?	ナテ	繊維混入	
174	2H・I層	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・単節縄文(RL)	ナテ	繊維混入	
175	2H・I層	深鉢・口縁部	複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
176	2H	深鉢・口縁部	口唇部に刺突・複節縄文(LRL)	ナテ		
177	2H・II層	深鉢・口縁部	単節縄文(RL)	ナテ	繊維混入	
178	2H・II層	深鉢・胴部	(本文記載参照)	ナテ	繊維混入	P93
179	2H	深鉢・胴部	結束羽状縄文(RL、LR)	ナテ	繊維混入	
180	2H・II層	深鉢・胴部	結束羽状縄文(RL、LR)(0段多条)	ナテ	繊維混入	
181	2H・II層	壺・胴部	単節縄文(LR)	ナテ		
182	3H・I層	深鉢・口縁~胴部	羽状縄文(LR、RL)(0段多条)	ナテ	繊維混入	
183	3H・I層	深鉢・口縁~胴部	口唇部に回転縄文(LR)・単節縄文(RL)(0段多条)	ナテ	繊維混入	
184	3H・I層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入?	
185	3H	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(RLR)・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入	
186	3H	深鉢・口縁部	単節縄文(LR)	ナテ	繊維混入	
187	3H・I層	深鉢・口縁部	複節縄文(RLR)?	ナテ	繊維混入	
188	3H・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(RLR)?	ナテ	繊維混入	
189	3H・II層	深鉢・口縁部	口唇部に刻目・複節縄文(RLR)	縄文(RLR)	繊維混入	
190	4H	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(RLR)?・複節縄文(RLR)?	ナテ	繊維混入	
191	4H	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(?)・複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
192	4H	口縁部?	綾絡文	ナテ		
193	4H	胴部	綾絡文	ナテ		
194	3I	深鉢・口縁~胴部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)	ナテ	繊維混入	
195	3I・II層	深鉢・口縁部	口唇部に縄の圧痕(RL)・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入	
196	3I	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(LR?)・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入	

図 番 号	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (文 様・地 文・原 体など)	内 面 (調整 など)	備 考	本 文 記 載
197	3 I・II層	深鉢・口縁部	結束羽状縄文	ナテ	繊維混入	
198	3 I	深鉢・口縁部	口唇部に刻目・羽状縄文(縦)(RL、LR)	ナテ	繊維混入	
199	3 I・II層	深鉢・口縁部	木目状捺糸文	ナテ		P93
200	3 I・II層	深鉢・頸部	側面圧痕(LR)	ナテ		P92
201	3 I	深鉢・胴部	結束羽状縄文(RL、LR)(0段多糸)	ナテ	繊維混入	
202	3 I・I層下部	深鉢・胴部	複節縄文(LRL)?	ナテ		
203	3 I・II層	鉢・口縁部	入組三又文	ミガキ		
204	3 I・II層	甕・口縁部	単節縄文(LR)	ナテ		
205	3 I・II層	壺・胴部	単節縄文(LR)	ナテ		
206	3 I・I層下部	高杯?・台		ナテ		
207	3 J・II層	深鉢・口縁部	単節縄文(RL)	ナテ	繊維混入	
208	3 J・II層	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(LRL)・複節縄文(RLR)	ナテ	繊維混入	
209	3 J・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入?	
210	3 J・II層	深鉢・口縁部	口唇部に回転縄文(RLR?)・複節縄文(RLR)?	ナテ	繊維混入	
211	3 J・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・単節縄文(RL)	ナテ	繊維混入	
212	3 J・II層	深鉢・口縁部	口唇部に押圧・複節縄文(RLR)?	ナテ・押圧	繊維混入	
213	3 J	深鉢・胴部	結束羽状縄文(LR、RL)	ナテ	繊維混入	
214	3 K・II層	深鉢・口縁部	口唇部に刻目・複節縄文(LRL)?	ナテ	繊維混入	
215	3 K・II層	深鉢・口縁部	波状口縁・単節縄文(LR)	ナテ		
216	表採	深鉢・口縁部	捺糸文(L?)	ナテ	繊維混入	P93

②石器・石製品

本章では、遺跡から出土した石器を第7表のような分類体系のもとに分類・記述した。分類について多少付言しておく。搔器等の中のその他には、石匙が破損して石匙とわからなくなったものや不定形なもの等、他の項目に当てはまらなかった雑多なものが含まれている。したがって115のような異形石器もこの中に含まれていることをお断りしておく。



第7表 石器分類表 (今回関係する器種に限定、数字は記載順序を表す)

(1)出土状況

特に注目すべき出土状態は認められなかった。出土位置は、大きく遺物包含層とそれ以外の二ヶ所に分けられる。

(2)器種別による分類

上に述べた分類ごとに、概要を述べ、表の補足をしていく。

石鏃（1～30）

30点出土しており、そのうち16点が包含層の出土である。

石錐（31～39）

9点の出土のうち7点が包含層の出土である。

石匙（40～114）

石匙は、縦形、横形合わせて75点出土しており、そのうち縦形が58点、横形が17点である。また縦形の58点のうち42点が包含層の出土であり、横形の17点のうち12点が包含層の出土である。なお、次の“搔器等その他”に含めた中には石匙が破損したものと思われる石器が幾つか含まれていることを付言しておく。

搔器・削器等その他（115～143）

石匙が欠損して同定できなくなったもの、不定形なもの等を一括した。115は異形石器とも呼べるものであるが、表側？（図左）の二股の部分と右下の部分に使用の痕跡が窺われるので、ここに含めた。

石筥（144～145）

2点のみ出土している。

石斧（146）

磨製石斧が、1点のみ出土している。

凹石（147～153）

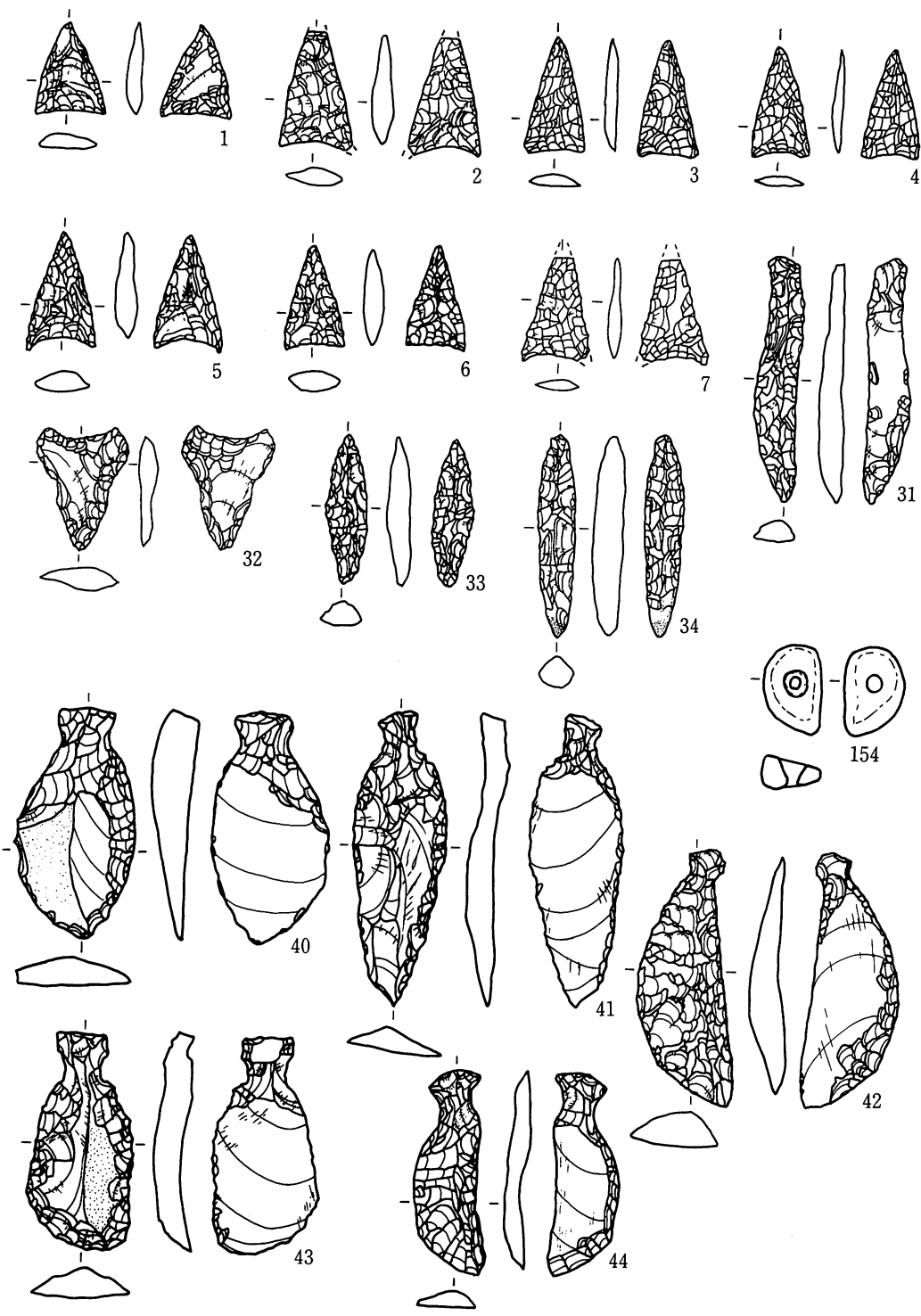
7点出土している。石質はすべて淡緑色砂質凝灰岩である。

石製品（154）

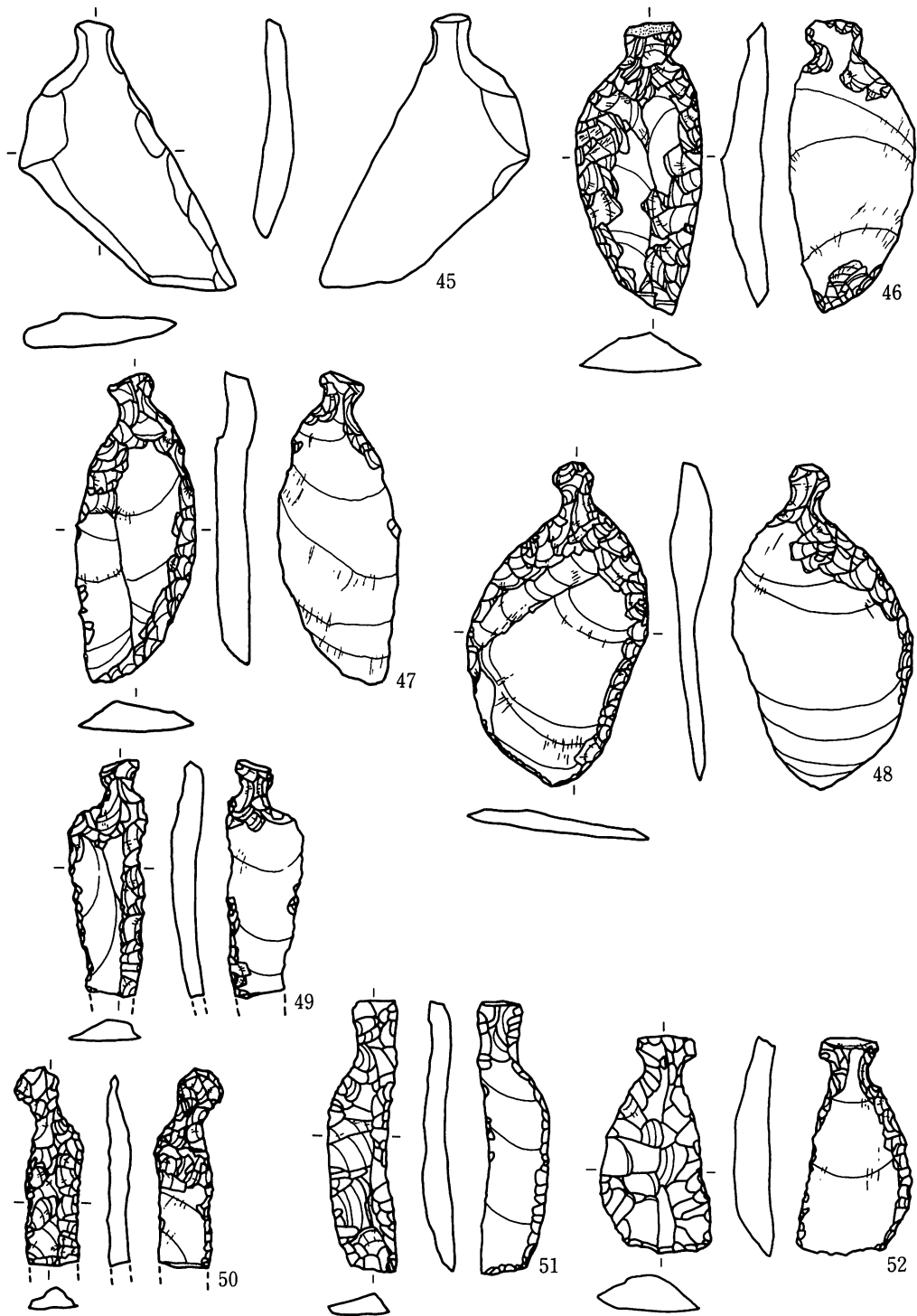
垂飾と思われるものが1点出土している。中央の孔は片側のみから開けられている。石質はチャート質淡緑色凝灰岩・古生界・北上山地という鑑定結果を得ている。

引用・参考文献

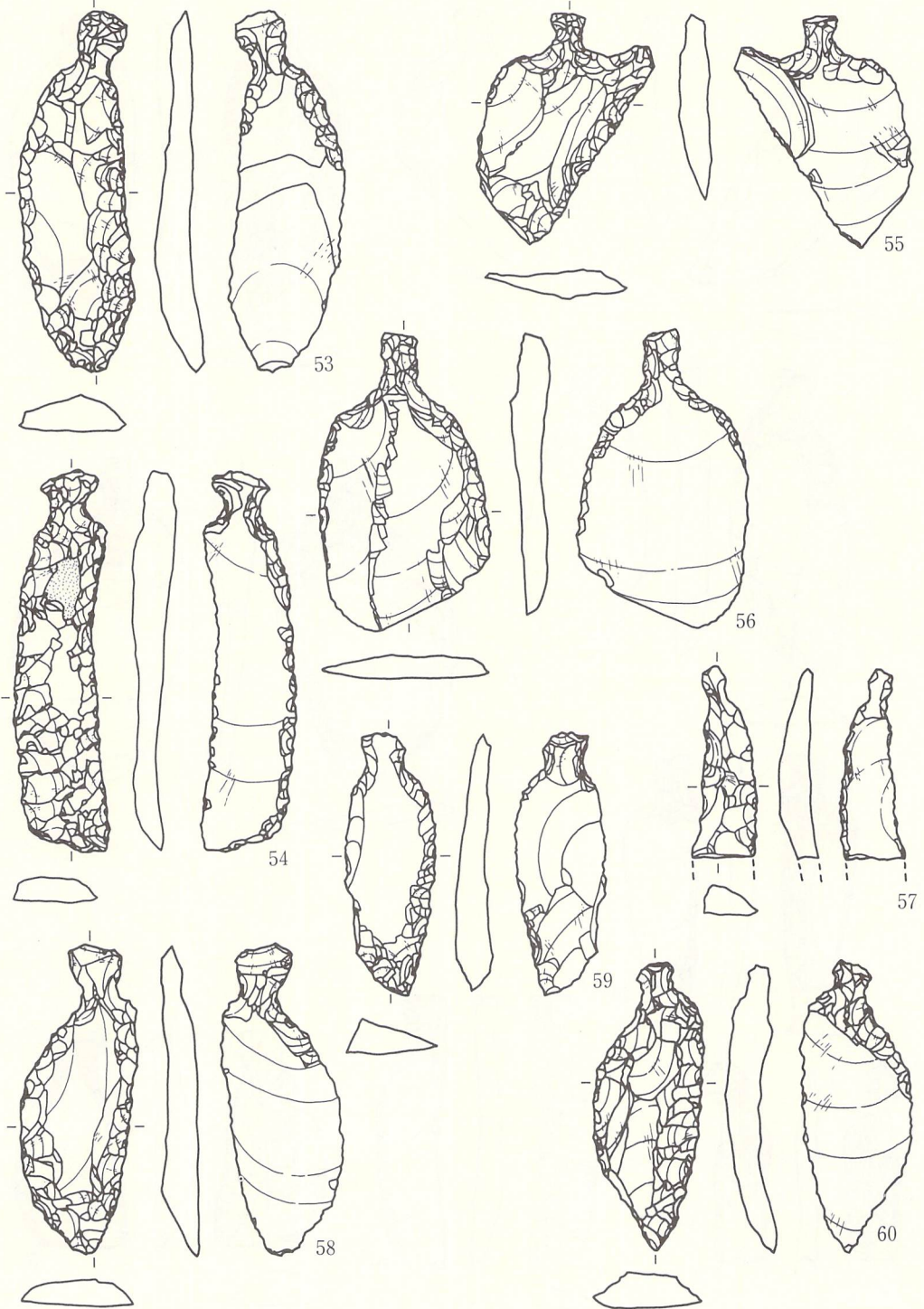
鈴木道之助(1991) 『図録・石器入門事典<縄文>』 柏書房



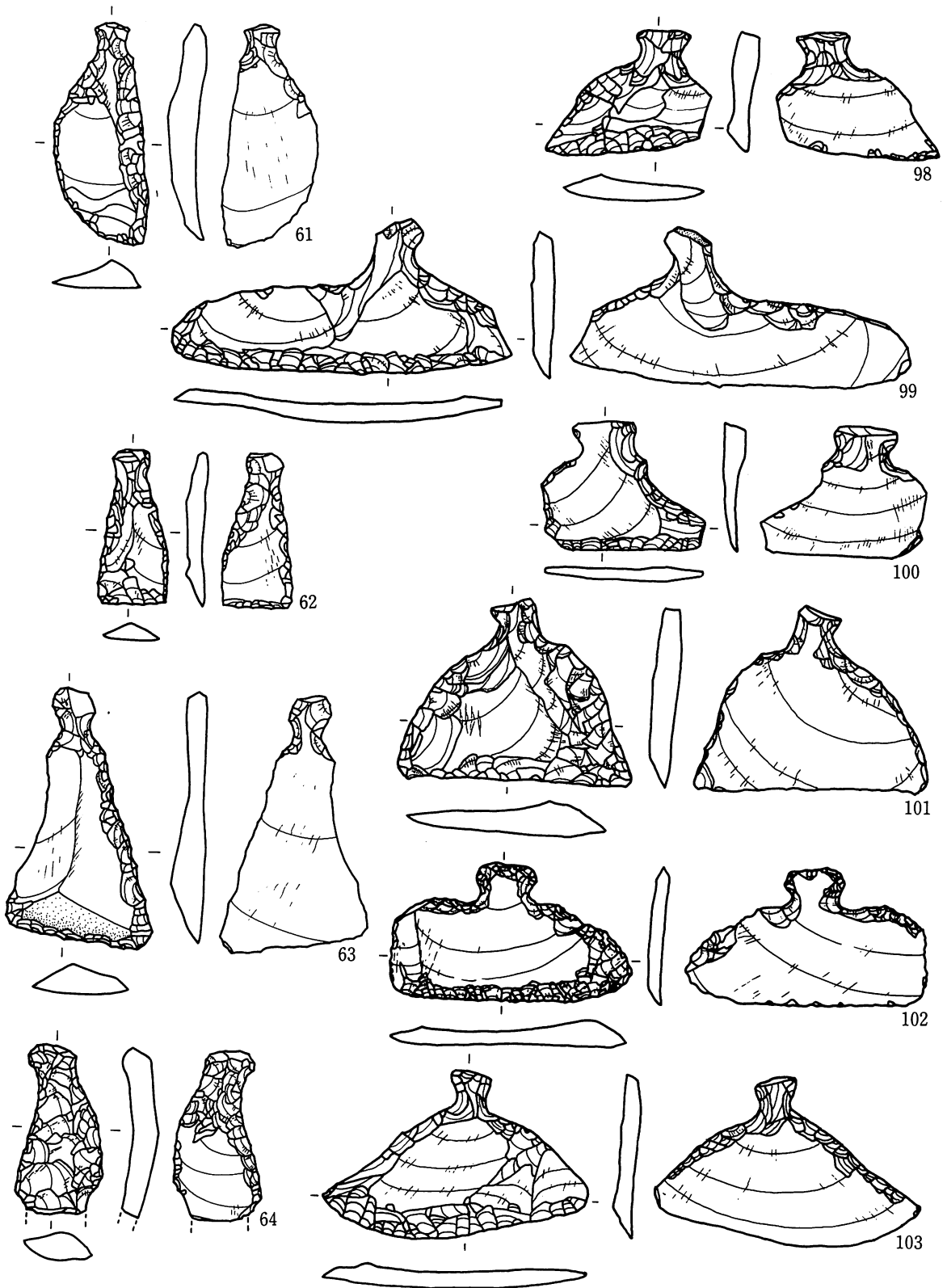
第20図 北側包含層出土の石器(1) (S = 2/3)



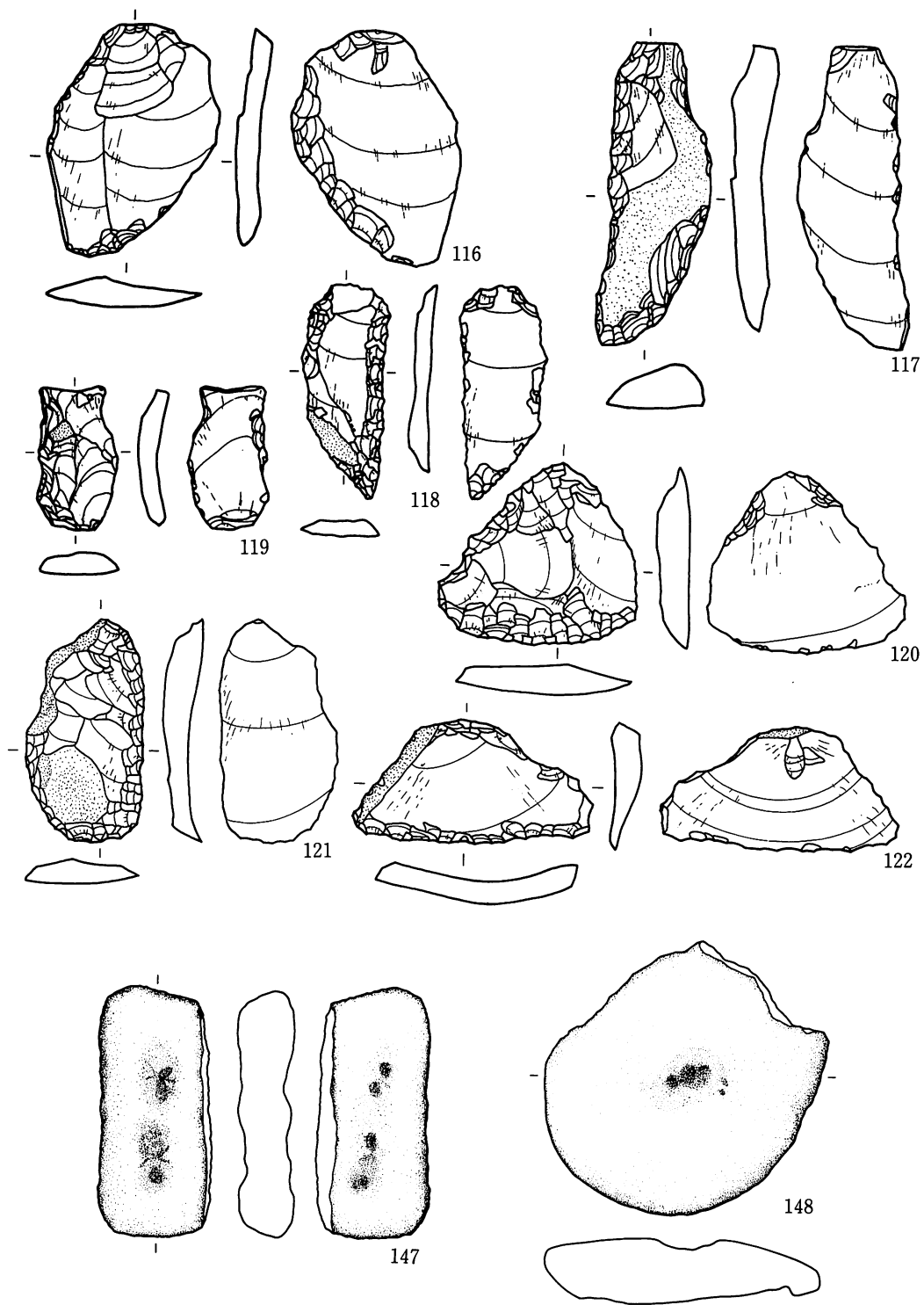
第21図 北側包含層出土の石器(2) (S = 2/3)



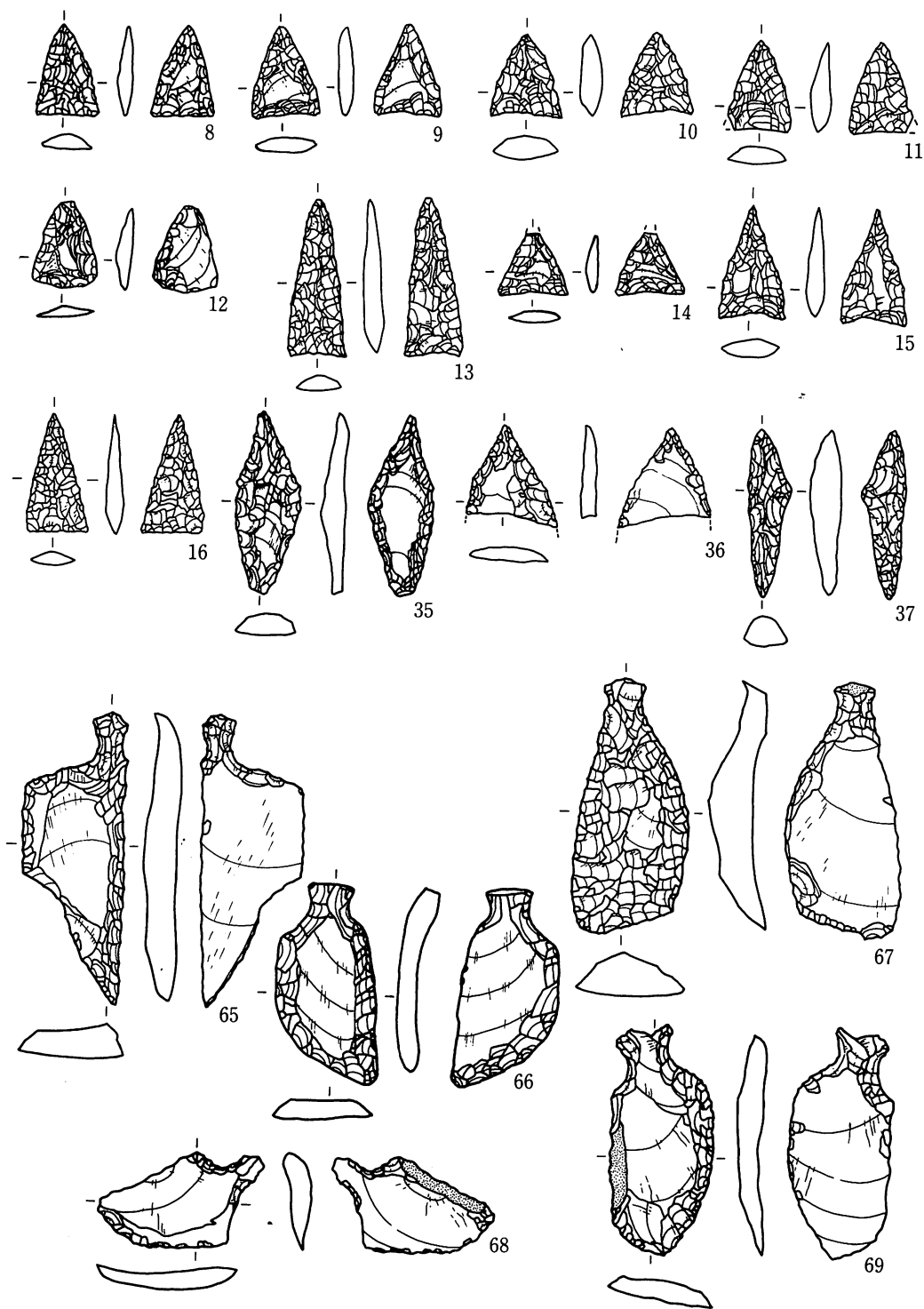
第22図 北側包含層出土の石器(3) (S = $\frac{2}{3}$)



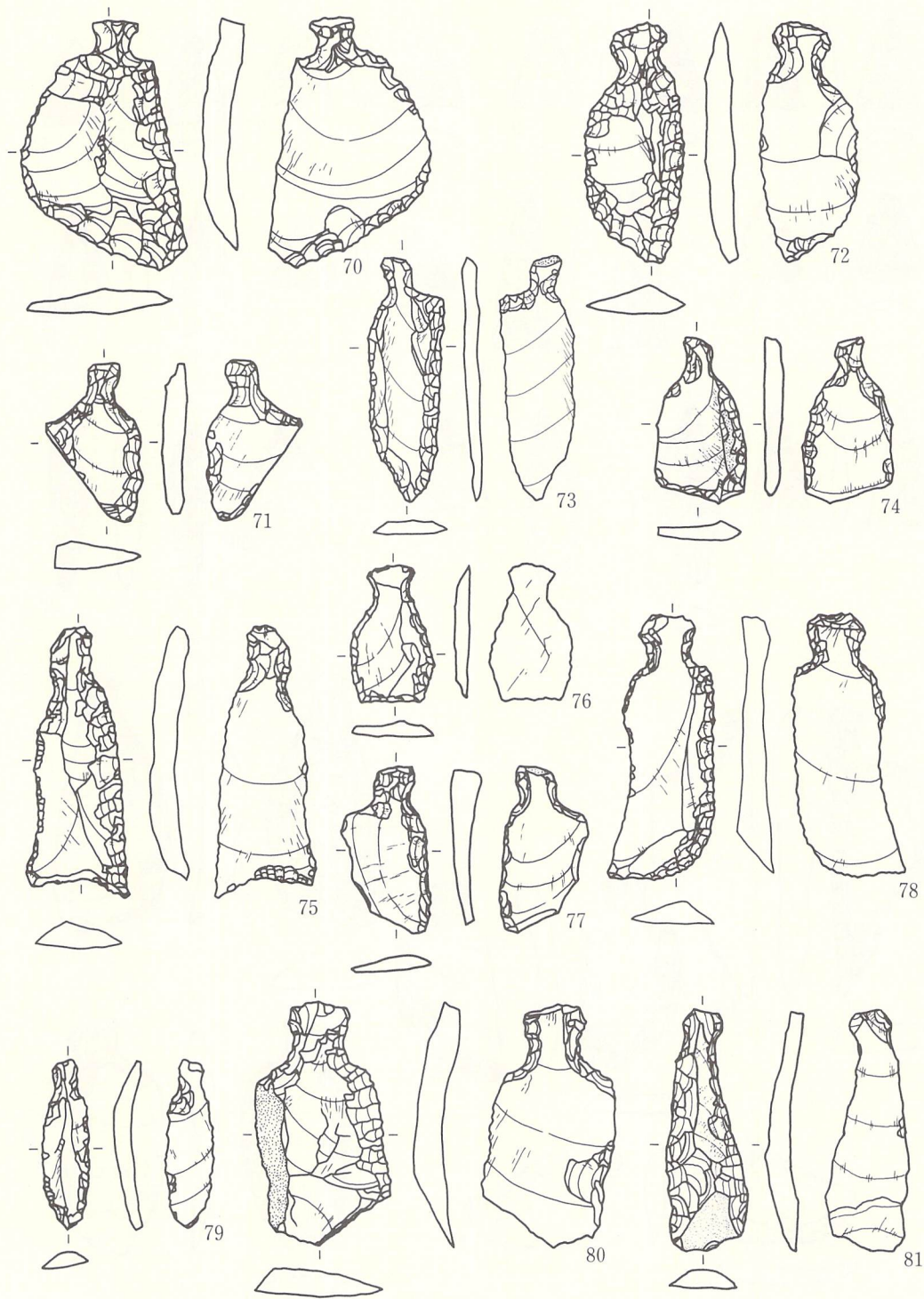
第23図 北側包含層出土の石器(4) (S = $\frac{2}{3}$)



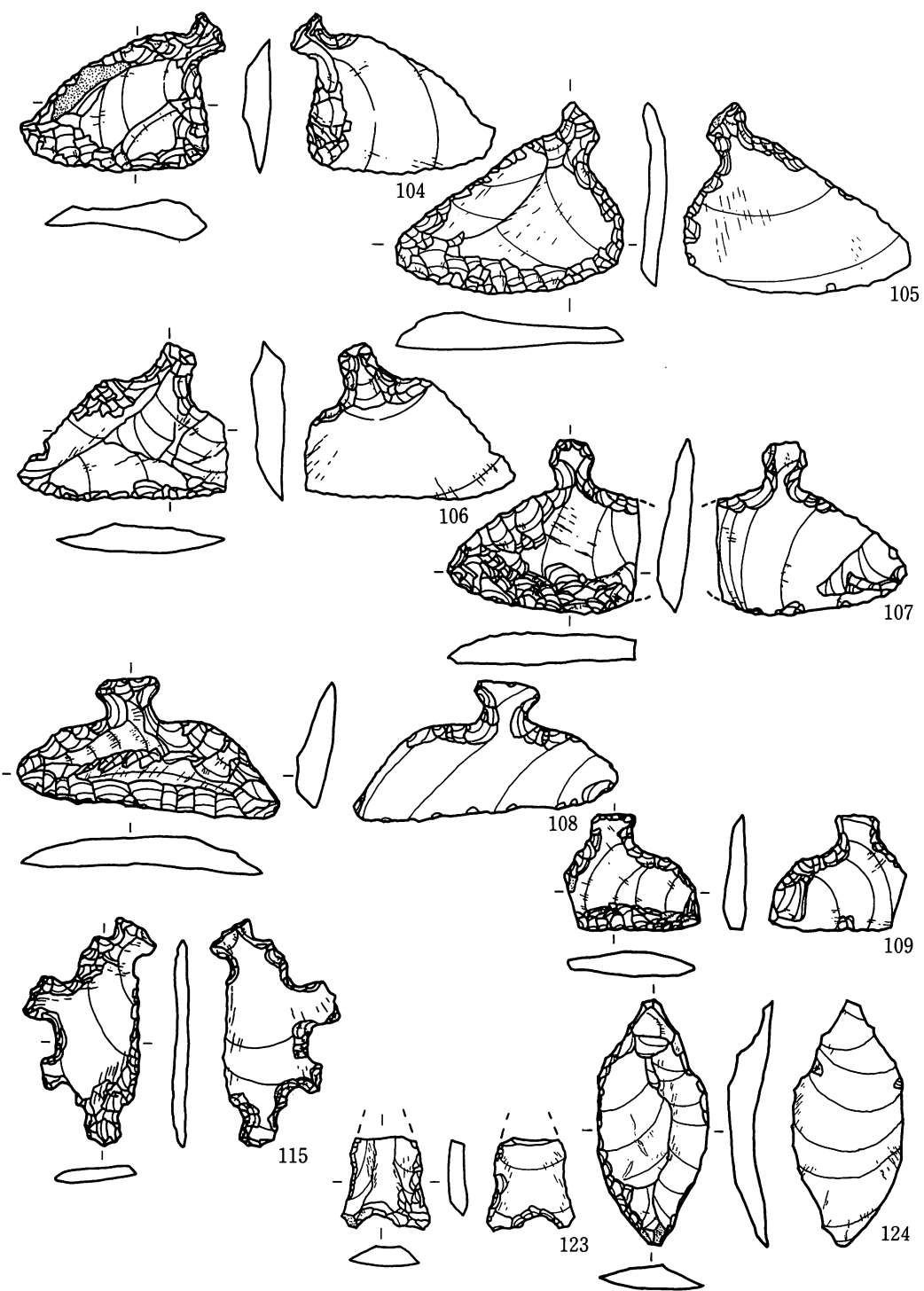
第24図 北側包含層出土の石器(5) (116~122は $S = \frac{2}{3}$ 、147、148は $S = \frac{1}{3}$)



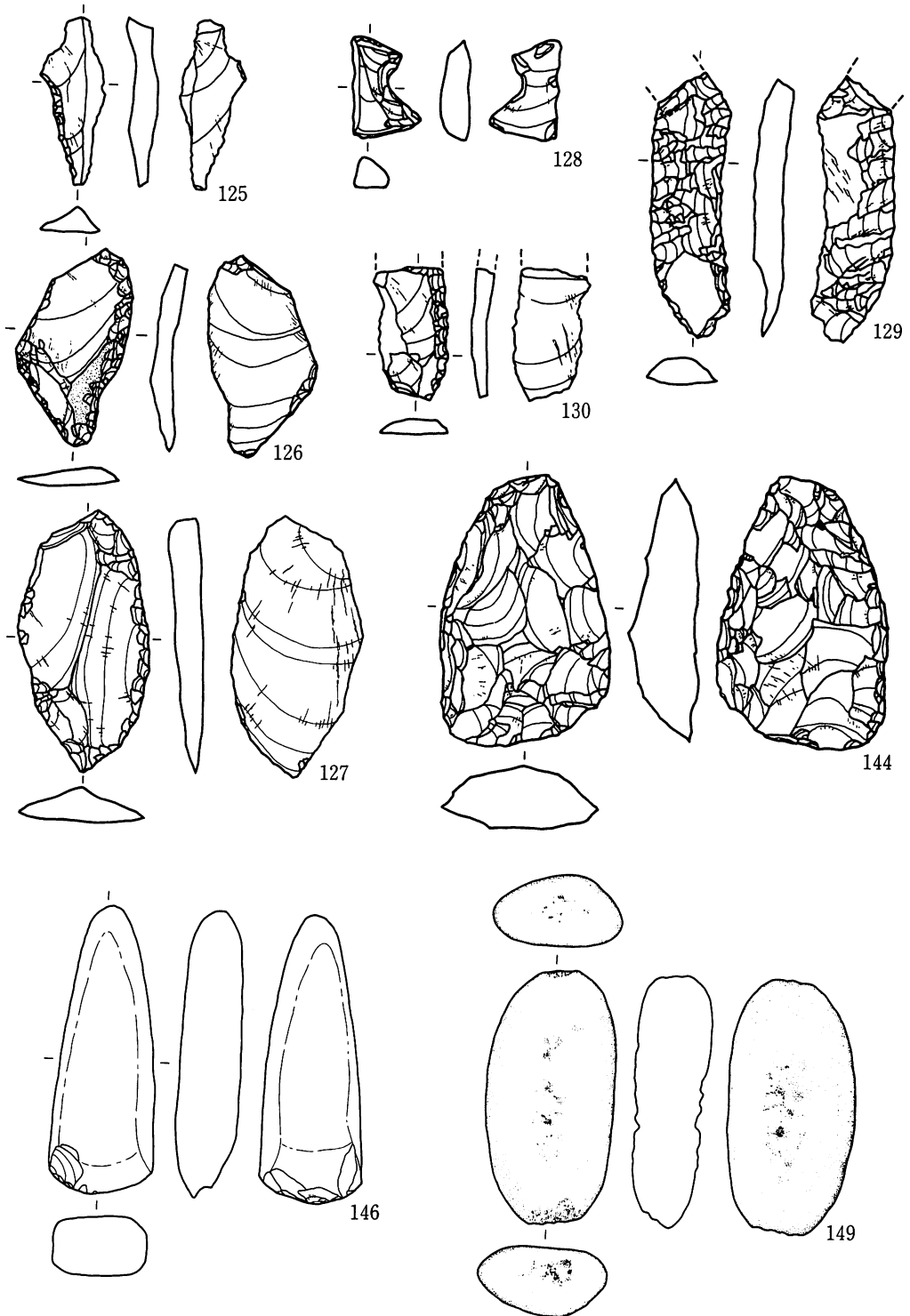
第25図 南側包含層出土の石器(1) (S=2/3)



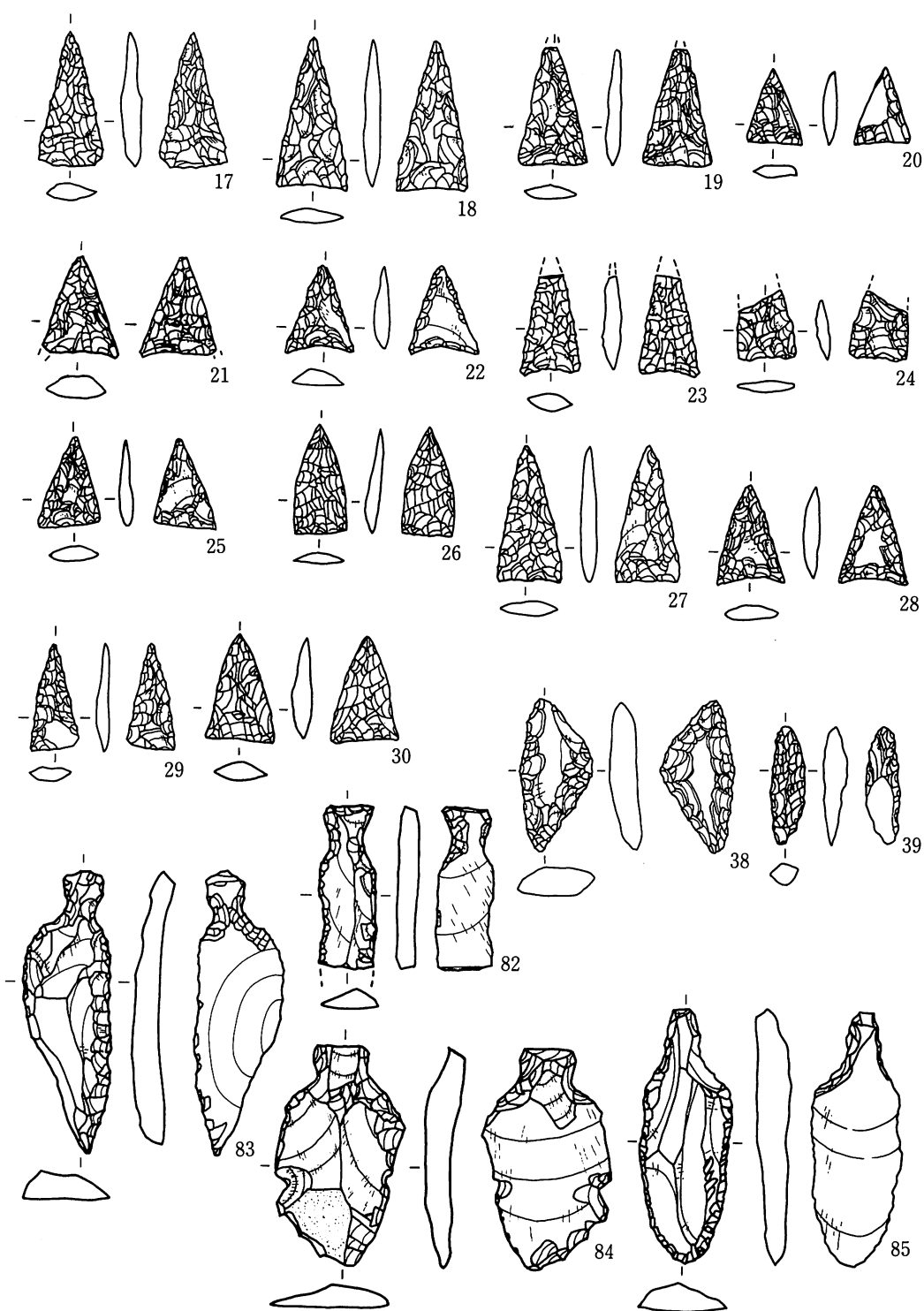
第26図 南側包含層出土の石器(2) (S=2/3)



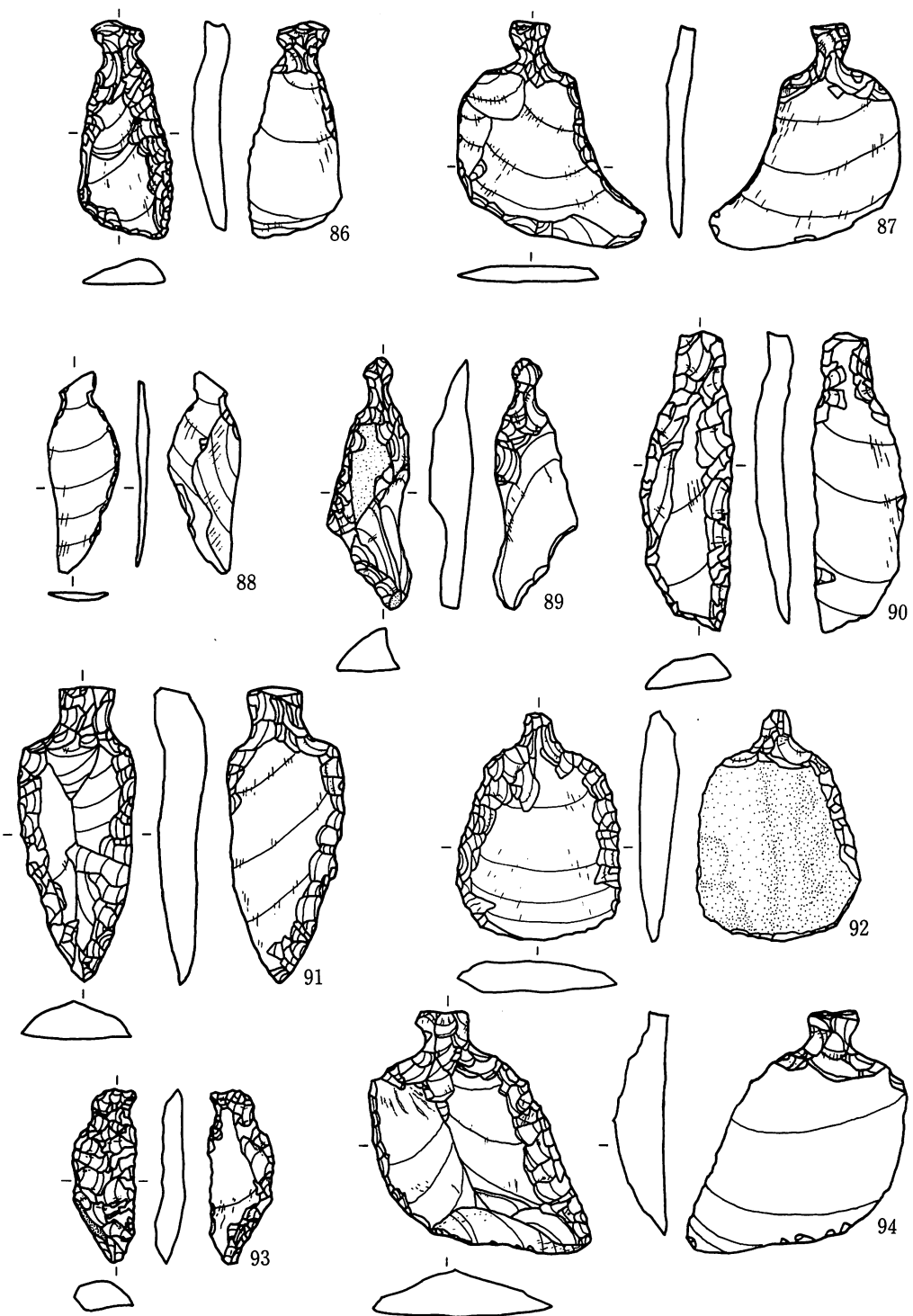
第27図 南側包含層出土の石器(3) (S = 2/3)



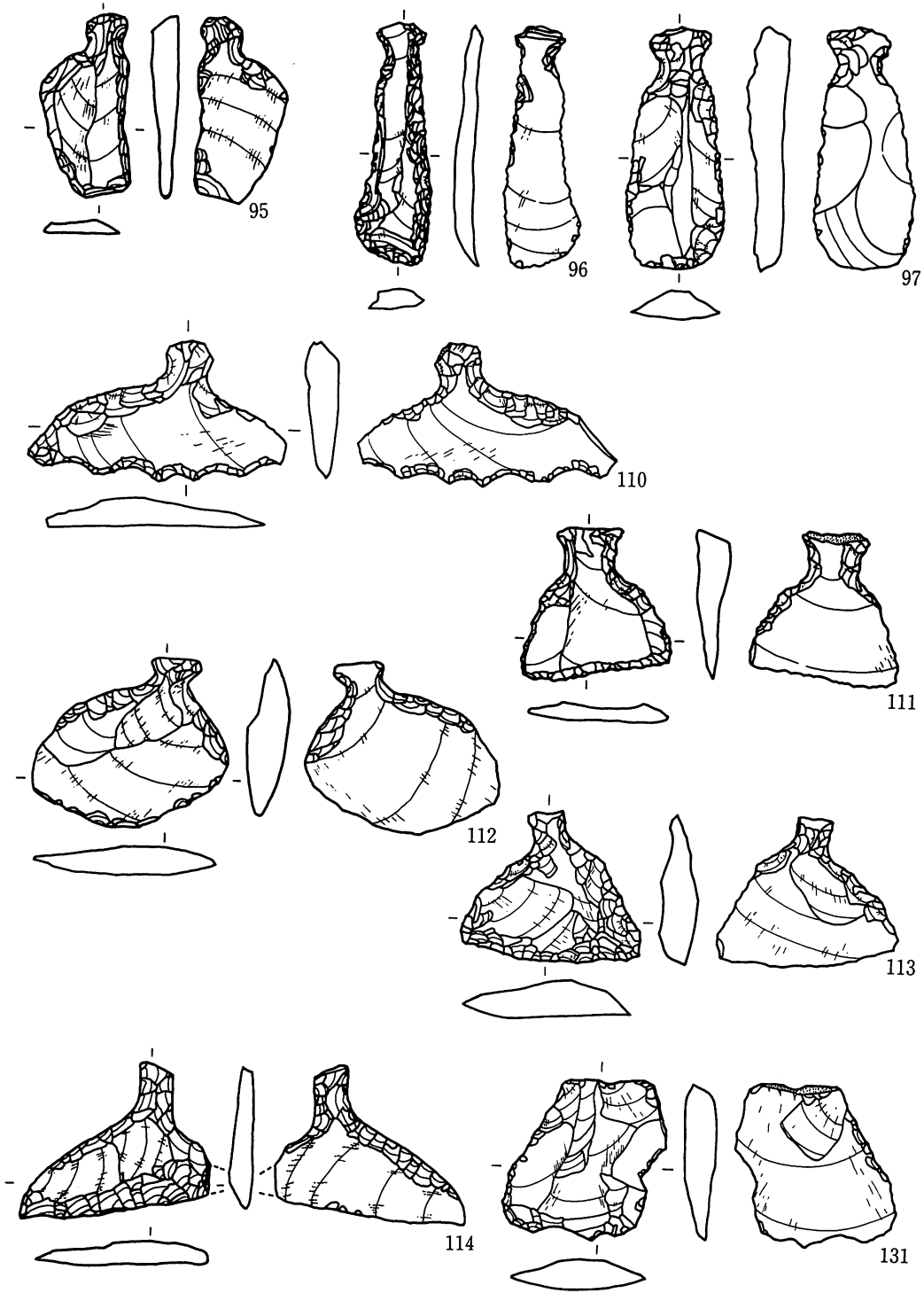
第28図 南側包含層出土の石器(4) (146、149は $S = \frac{1}{3}$ 、それ以外は $S = \frac{2}{3}$)



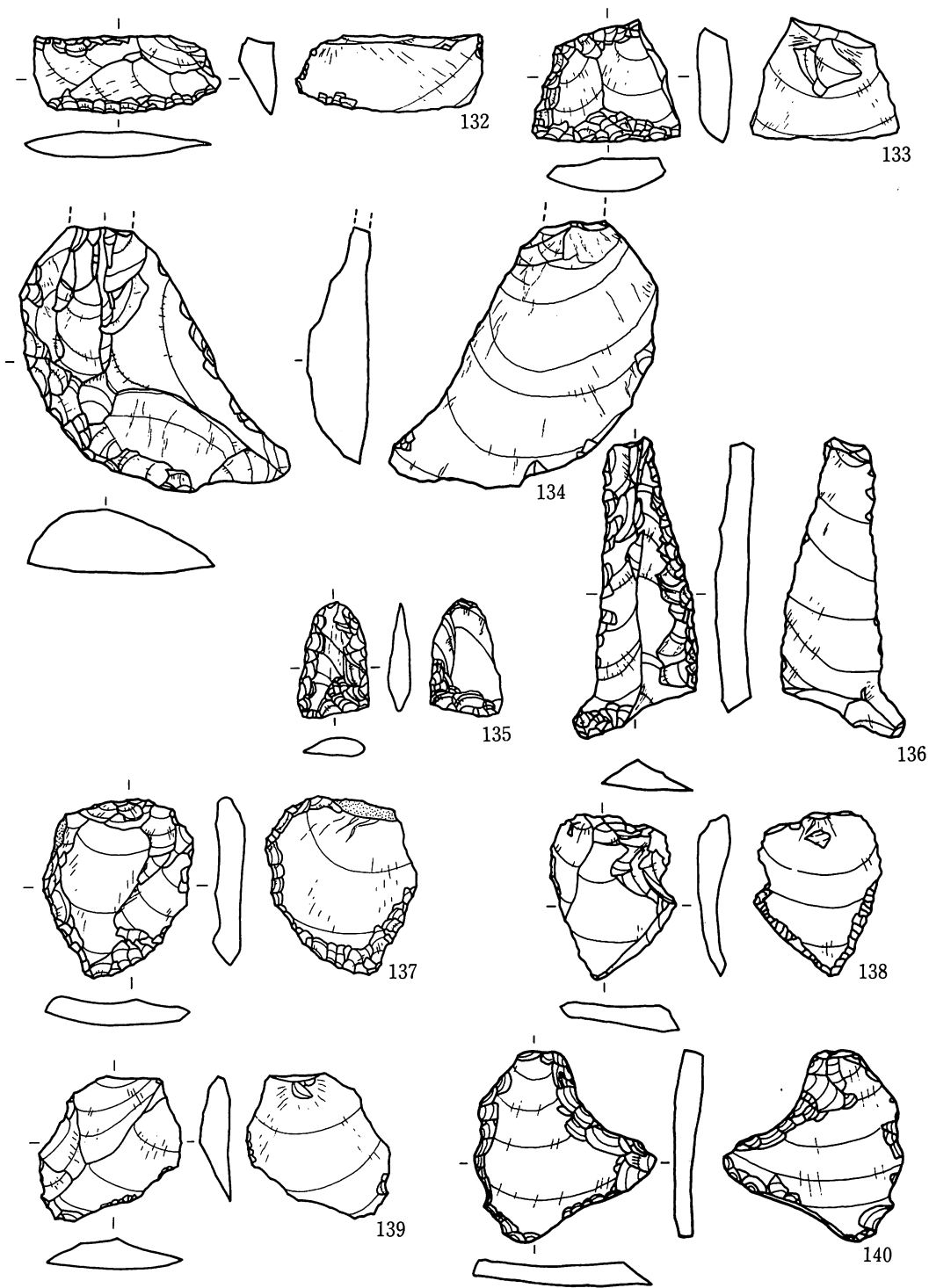
第29図 包含層外出土の石器(1) (S = 2/3)



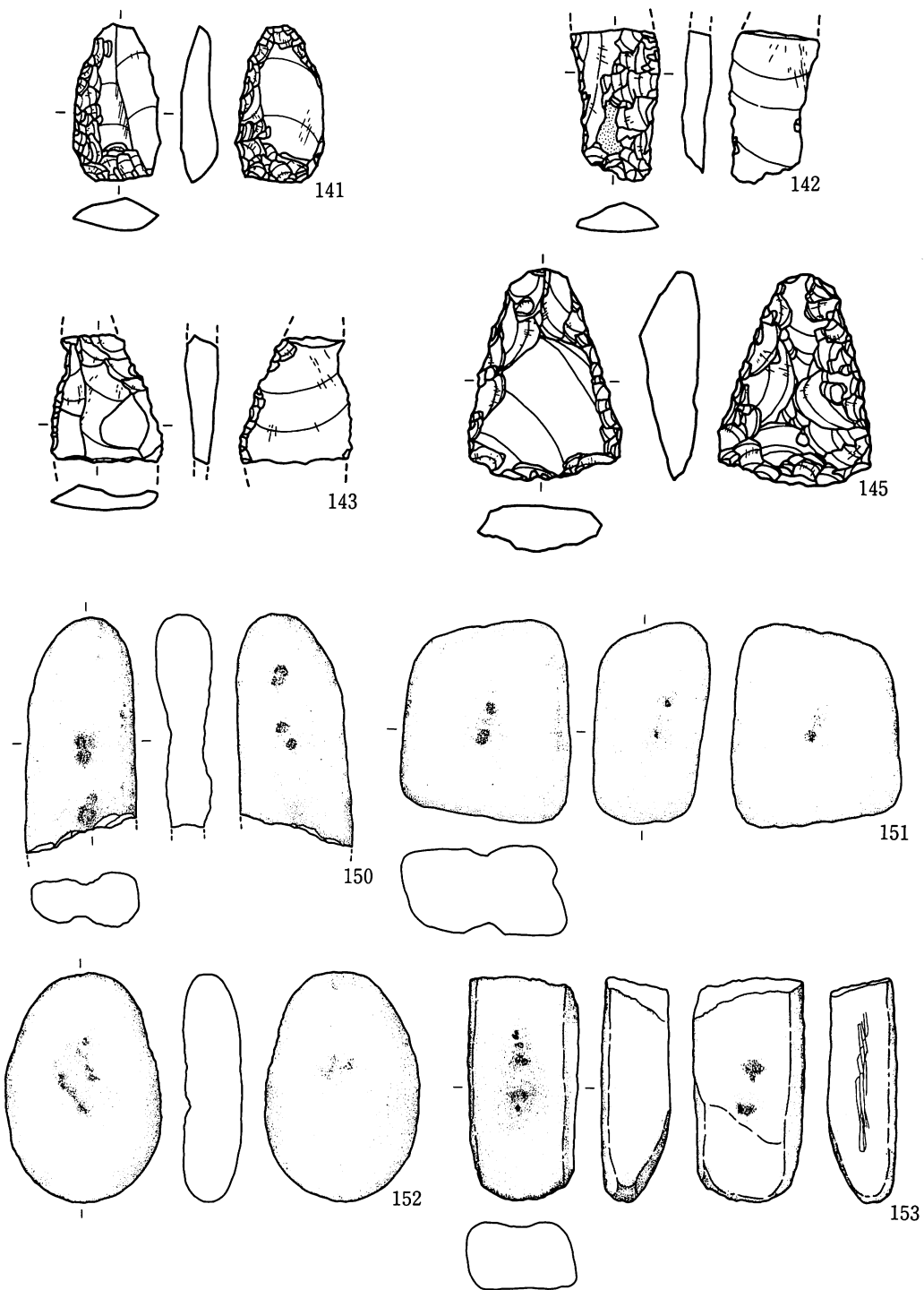
第30図 包含層外出土の石器(2) (S = 2/3)



第31図 包含層外出土の石器(3) (S = 2/3)



第32図 包含層外出土の石器(4) (S = $\frac{2}{3}$)



第33図 包含層外出土の石器(5) (141~145は $S = \frac{2}{3}$ 、150~153は $S = \frac{1}{3}$)

第 8 表 石器・石製品観察表

No	出土地点・層位	器種	最大計測値 (m)			重量(g)	石質	残存状態	本記 文載
			長さ	幅	厚さ				
1	4 I II層 北包含層	石 鏃	2.0	1.57	0.31	0.77	粘板岩	先端部欠損	
2	4 I II層 北包含層	石 鏃	2.48	1.6	0.38	1.25	凝灰質珪質泥岩	一部欠損	
3	4 I II層 北包含層	石 鏃	2.58	1.38	0.3	0.77	凝灰質珪質泥岩	完形	
4	4 I II層 北包含層	石 鏃	2.38	1.27	0.25	0.65	粘板岩	先端部欠損?	
5	4 J II層 北包含層	石 鏃	2.35	1.5	0.48	1.15	粘板岩	完形	
6	4 J II層 北包含層	石 鏃	2.2	1.3	0.5	1.07	粘板岩	先端部欠損	
7	北包含層	石 鏃	2.3	1.6	0.3	0.8	粘板岩	一部欠損	
8	1 I II層 南包含層	石 鏃	2.05	1.4	0.38	0.75	凝灰質珪質泥岩	完形	
9	2 I II層 南包含層	石 鏃	2.0	1.5	0.29	0.3	粘板岩	完形?	
10	2 I II層 南包含層	石 鏃	1.78	1.6	0.46	0.45	粘板岩	ほぼ完形	
11	2 I II層 南包含層	石 鏃	2.0	1.4	0.39	0.77	粘板岩	一部欠損	
12	1 J II層上部 南包含層	石 鏃	1.98	1.45	0.27	0.74	珪質粘板岩	一部欠損	
13	1 J II層 南包含層	石 鏃	3.5	1.26	0.4	1.45	凝灰質珪質泥岩	先端部欠損?	
14	2 J II層 南包含層	石 鏃	1.32	1.6	0.3	0.51	粘板岩	先端部欠損	
15	2 J II層 南包含層	石 鏃	2.45	1.48	0.35	0.95	粘板岩	完形	
16	南包含層	石 鏃	2.7	1.4	0.4	0.74	粘板岩	ほぼ完形	
17	4 C	石 鏃	3.05	1.45	0.44	1.22	珪質泥岩	一部欠損	
18	1 H II層	石 鏃	3.34	1.6	0.36	1.46	凝灰質粘板岩	完形	
19	2 H II層	石 鏃	2.66	1.55	0.37	1.05	玻璃質流紋岩	先端部欠損	
20	2 H I層	石 鏃	1.68	1.24	0.25	0.48	粘板岩	片側欠損	
21	3 H II層	石 鏃	2.17	1.68	0.53	1.45	玻璃質流紋岩	一部欠損	
22	3 H I層	石 鏃	1.82	1.5	0.33	0.66	粘板岩	ほぼ完形	
23	3 H II層 上部	石 鏃	2.15	1.3	0.425	0.83	粘板岩	先端部欠損	
24	3 I II層	石 鏃	1.54	1.3	0.3	0.55	粘板岩	1/2	
25	3 I II層	石 鏃	2.0	1.4	0.31	0.64	粘板岩	一部欠損	
26	3 J II層	石 鏃	2.47	1.15	0.28	0.71	粘板岩	完形	
27	3 J II層 下部	石 鏃	3.08	1.43	0.32	1.17	粘板岩	ほぼ完形	
28	2 K III層	石 鏃	0.15	1.5	0.36	0.72	凝灰質珪質泥岩	完形	
29	2 K II層	石 鏃	2.38	1.05	0.3	0.5	粘板岩	一部欠損	
30	3 K 表探	石 鏃	2.35	1.58	0.44	0.9	玻璃質流紋岩	完形	
31	4 I (試掘トレンチ埋土) II層 北包含層	石 鏃	5.4	0.95	0.53	2.77	凝灰質珪質泥岩	完形	
32	4 I II層 北包含層	石 鏃	2.55	2.03	0.52	1.93	粘板岩	一部欠損	
33	4 K II層	石 鏃	3.3	0.9	0.6	1.65	凝灰質珪質泥岩	先端部摩滅?	
34	4 K II層	石 鏃	4.55	0.85	0.74	2.45	凝灰質珪質泥岩	完形	
35	1 I II層 南包含層	石 鏃	4.1	1.42	0.56	2.94	粘板岩	一部欠損	
36	1 J II層 南包含層	石 鏃	2.0	1.98	0.3	0.45	凝灰質珪質泥岩	欠損	
37	2 J II層 南包含層	石 鏃	3.75	1.0	0.7	1.75	珪質粘板岩	完形	
38	3 I I層	石 鏃	3.47	1.65	0.64	3.33	粘板岩	ほぼ完形	
39	3 K I層	石 鏃	0.65	0.78	0.52	0.78	凝灰質珪質泥岩	先端部欠損	
40	4 I II層 北包含層	石 匙鏃	5.2	2.7	1.008	10.45	粘板岩	完形	
41	4 I 北包含層	石 匙鏃	6.55	2.1	0.58	6.93	珪質泥岩	完形	
42	4 I (試掘トレンチ埋土) II層 北包含層	石 匙鏃	5.0	2.05	0.75	8.1	粘板岩	完形	
43	4 J II層 北包含層	石 匙鏃	0.85	2.32	0.7	3.62	珪質泥岩	ほぼ完形	
44	4 J II層 北包含層	石 匙鏃	4.5	1.4	0.45	3.5	凝灰質珪質泥岩	完形	
45	4 K II層 北包含層	石 匙鏃	5.0	3.5	0.74	16.49	粘板岩	全体摩滅	
46	4 K II層 北包含層	石 匙鏃	6.5	2.8	0.95	13.65	凝灰質珪質泥岩	完形	
47	4 K II層(下部) 北包含層	石 匙鏃	6.6	2.7	0.8	16.32	粘板岩	ほぼ完形	

No	出土地点・層位	器種	最大計測値(m)			重量(g)	石質	残存状態	本記	文載
			長さ	幅	厚さ					
48	4 K II層(下部)北包含層	石 匙鉢	7.1	4.0	0.76	12.55	凝灰質珪質泥岩	ほぼ完形		
49	北包含層	石 匙鉢	5.28	1.7	0.625	4.8	凝灰質珪質泥岩	欠損		
50	北包含層	石 匙鉢	4.4	1.2	0.54	2.9	粘板岩	欠損		
51	北包含層	石 匙鉢	6.1	1.4	0.58	5.46	珪質粘板岩	完形		
52	北包含層	石 匙鉢	4.8	2.32	0.84	8.85	粘板岩	完形		
53	北包含層	石 匙鉢	7.95	2.48	0.87	14.98	凝灰質珪質泥岩	一部欠損		
54	北包含層	石 匙鉢	8.4	1.88	0.74	14.05	凝灰質珪質泥岩	ほぼ完形		
55	北包含層	石 匙鉢	4.6	3.4	0.7	8.92	凝灰質珪質泥岩	一部欠損		
56	北包含層	石 匙鉢	6.5	3.75	0.65	14.44	珪質泥岩	一部欠損?		
57	北包含層	石 匙鉢	4.2	1.4	0.74	4.08	粘板岩	欠損		
58	北包含層	石 匙鉢	6.8	2.5	0.83	12.32	珪質泥岩	ほぼ完形		
59	北包含層	石 匙鉢	5.7	1.98	0.8	8.07	凝灰質粘板岩	片側欠損		
60	北包含層	石 匙鉢	6.35	2.38	0.9	12.24	粘板岩	一部欠損?		
61	北包含層	石 匙鉢	5.5	2.3	0.7	8.38	輝緑凝灰岩	完形		
62	北包含層	石 匙鉢	3.8	1.7	0.5	3.25	凝灰質珪質泥岩	片側欠損?		
63	北包含層	石 匙鉢	6.3	3.6	0.8	12.25	珪質泥岩	先端部摩滅?		
64	北包含層	石 匙鉢	4.3	2.2	0.75	6.6	珪質粘板岩	ほぼ完形		
65	2 I 南包含層	石 匙鉢	6.6	2.3	0.7	8.44	凝灰質珪質泥岩	完形		
66	2 I II層(下部)南包含層	石 匙鉢	4.25	2.25	0.6	6.15	粘板岩	完形		
67	2 I III層(上部)南包含層	石 匙鉢	5.65	2.5	0.98	12.48	珪質粘板岩	ほぼ完形		
68	2 I III層(上部)南包含層	石 匙鉢	3.75	2.2	0.42	2.7	凝灰質珪質泥岩	完形?		
69	1 J II層(上部)南包含層	石 匙鉢	5.3	2.3	0.67	2.30	珪質粘板岩	片側欠損?		
70	1 J II層 南包含層	石 匙鉢	5.35	3.45	0.67	12.6	珪質泥岩	先端部欠損		
71	1 J II層 南包含層	石 匙鉢	3.54	2.1	0.65	3.71	粘板岩	完形?		
72	1 J II層(上部)	石 匙鉢	5.38	2.2	0.67	8.05	珪質粘板岩	完形		
73	2 J 南包含層	石 匙鉢	5.4	1.66	0.36	3.8	珪質泥岩	完形		
74	2 J II層 南包含層	石 匙鉢	3.55	2.0	0.43	3.23	粘板岩	完形		
75	2 J III層(上部)南包含層	石 匙鉢	5.7	2.25	0.745	7.75	珪質泥岩	完形?		
76	2 J II層(下部)南包含層	石 匙鉢	3.08	1.85	0.38	2.2	凝灰質粘板岩	完形		
77	2 J II層 南包含層	石 匙鉢	3.82	1.9	5.85	3.56	凝灰質粘板岩	欠損?		
78	2 J II層(下部)南包含層	石 匙鉢	5.95	2.0	0.7	8.06	粘板岩	完形		
79	2 J II層(下部)南包含層	石 匙鉢	3.8	1.05	0.31	1.54	珪質泥岩	完形		
80	2 J II層(下部)南包含層	石 匙鉢	5.5	2.8	0.7	11.69	粘板岩	先端部欠損		
81	2 J II層 南包含層	石 匙鉢	5.42	1.8	0.73	5.46	珪質泥岩	ほぼ完形		
82	2 G~3 G II層	石 匙鉢	3.7	1.3	0.5	2.2	粘板岩	欠損		
83	2 G~3 G II層	石 匙鉢	6.3	1.9	0.7	8.95	珪質泥岩	完形		
84	2 H I層	石 匙鉢	5.1	2.8	0.71	9.24	珪質粘板岩	一部欠損		
85	2 H II層	石 匙鉢	5.8	2.0	0.78	8.39	粘板岩	完形		
86	2 H II層	石 匙鉢	4.6	2.1	0.64	5.72	粘板岩	完形		
87	2 H II層	石 匙鉢	4.77	3.6	0.58	6.65	流紋岩質極細粒凝灰岩	完形		
88	2 H II層	石 匙鉢	4.2	1.6	0.24	1.4	凝灰質粘板岩	欠損		
89	3 I I層	石 匙鉢	5.5	1.6	1.17	7.97	珪質泥岩	完形		
90	3 I II層(下部)	石 匙鉢	6.56	2.0	0.64	8.37	玻璃質流紋岩	摩耗		
91	3 I II層	石 匙鉢	6.6	2.65	0.97	16.73	珪質粘板岩	完形		
92	3 I II層(下部)	石 匙鉢	5.08	3.65	0.78	15.22	輝緑凝灰岩	完形		
93	3 I III層(上部)	石 匙鉢	3.85	1.4	0.625	3.54	輝緑凝灰岩	完形		
94	1 K II層	石 匙鉢	5.1	4.2	1.07	21.5	珪質泥岩	完形		

No.	出土地点・層位	器種	最大計測値(m)			重量(g)	石質	残存状態	本記 文載
			長さ	幅	厚さ				
95	3 K 表採	石 匙(磯)	4.1	1.95	0.57	4.46	粘板岩	一部欠損?	
96	表採	石 匙(磯)	5.44	1.67	0.43	4.02	凝灰質粘板岩	完形(再利用)?	
97	表採	石 匙(磯)	5.48	2.2	0.76	8.69	珪質泥岩	完形	
98	4 I (トレンチ埋土) 北包含層	石 匙(磯)	3.0	3.6	0.73	6.6	珪質泥岩	一部欠損	
99	4 J II層 北包含層	石 匙(磯)	3.8	8.45	0.57	15.45	粘板岩	一部欠損?	
100	4 J II層(下部)北包含層	石 匙(磯)	3.2	3.95	0.59	4.58	珪質粘板岩	欠損	
101	4 J II層 北包含層	石 匙(磯)	0.55	5.8	0.79	18.36	凝灰質粘板岩	ほぼ完形	
102	4 K II層 北包含層	石 匙(磯)	3.45	6.0	0.6	10.4	珪質泥岩	一部欠損	
103	4 K II層 北包含層	石 匙(磯)	4.2	6.5	0.54	11.13	珪質泥岩	完形	
104	2 I II層(下部)南包含層	石 匙(磯)	5.03	3.1	0.845	9.62	珪質泥岩	完形	
105	2 I III層(上部)南包含層	石 匙(磯)	4.1	5.1	0.82	11.62	粘板岩	ほぼ完形	
106	2 I III層(上部)南包含層	石 匙(磯)	3.5	4.68	0.74	7.95	粘板岩	完形?	
107	2 J II層 南包含層	石 匙(磯)	3.9	4.25	0.75	10.89	珪質粘板岩	欠損	
108	2 J II層 南包含層	石 匙(磯)	2.95	5.5	0.72	11.94	凝灰質珪質泥岩	完形	
109	2 J I層 南包含層	石 匙(磯)	2.6	2.88	0.47	3.65	珪質泥岩	欠損	
110	3 H II層(上部)	石 匙(磯)	3.2	5.8	0.72	8.34	凝灰質珪質泥岩	一部欠損?	
111	3 H II層(上部)	石 匙(磯)	3.42	3.35	0.59	4.88	珪質粘板岩	完形	
112	3 I II層	石 匙(磯)	3.7	4.4	0.83	11.5	流紋岩質極細粒凝灰岩	完形	
113	3 J II層	石 匙(磯)	3.4	4.1	0.8	9.62	粘板岩	完形	
114	3 J II層	石 匙(磯)	3.35	4.1	0.5	5.45	流紋岩質極細粒凝灰岩	完形?	
115	2 I II層(下部)南包含層	撿器等その他	5.1	2.6	0.35	4.6	粘板岩	完形	P113
116	4 J II層 北包含層	撿器等その他	5.2	3.8	0.8	14.23	珪質泥岩	完形	
117	4 J II層 北包含層	撿器等その他	6.8	2.35	1.25	14.5	珪質泥岩	完形?	
118	4 J II層 北包含層	撿器等その他	4.8	1.84	0.53	4.94	粘板岩	欠損	
119	4 K II層 北包含層	撿器等その他	3.2	1.8	0.5	3.17	凝灰質粘板岩	完形?	
120	北包含層	撿器等その他	4.12	4.52	0.84	13.9	凝灰質珪質泥岩	ほぼ完形	
121	北包含層	撿器等その他	5.1	2.7	0.8	11	凝灰質珪質泥岩	完形	
122	北包含層	撿器等その他	2.9	5.5	0.65	13.05	粘板岩	完形	
123	2 I 南包含層	撿器等その他	2.1	2	0.5	2.18	粘板岩	欠?	
124	1 J II層 南包含層	撿器等その他	5.6	2.5	0.715	7.7	珪質泥岩	完形	
125	1 J II層(上部)南包含層	撿器等その他	3.8	1.4	0.58	1.72	珪質泥岩	先端部欠損	
126	2 J 南包含層	撿器等その他	4.28	2.42	0.52	5.17	粘板岩	欠損	
127	2 J II層 南包含層	撿器等その他	5.83	2.92	0.62	10.25	流紋岩質極細粒凝灰岩	完形	
128	2 J 南包含層	撿器等その他	2.3	1.5	0.64	2	珪質粘板岩	ほぼ完形?	
129	2 J 南包含層	撿器等その他	6.0	1.66	0.745	8.36	珪質粘板岩	欠損	
130	2 J 南包含層	撿器等その他	3.0	1.6	0.37	1.8	凝灰質珪質泥岩	欠損	
131	2 G~3 G II層	撿器等その他	3.7	3.2	0.7	10.87	粘板岩	完形	
132	2 G~3 G II層	撿器等その他	1.7	4.3	0.8	6.45	珪質泥岩	完形	
133	2 G~3 G II層	撿器等その他	2.75	3.4	0.77	7.18	粘板岩	完形	
134	2 H II層	撿器等その他	5.58	4.4	1.43	41.48	凝灰質粘板岩	一部欠損?	
135	3 H I層	撿器等その他	2.5	1.6	0.54	1.8	凝灰質珪質泥岩	完形?	
136	3 H I層	撿器等その他	6.45	2.25	0.7	10.25	凝灰質珪質泥岩	欠損	
137	3 H II層(下部)	撿器等その他	3.9	3.3	0.89	11.24	粘板岩	欠損?	
138	3 H II層	撿器等その他	3.7	2.7	0.63	6.1	珪質泥岩	欠損	
139	3 J II層	撿器等その他	3.3	3.2	0.7	6.62	珪質泥岩	完形	
140	3 J II層	撿器等その他	4.35	4.1	0.655	9.42	珪質泥岩	ほぼ完形	

No.	出土地点・層位	器種	最大計測値 (m)			重量(g)	石質	残存状態	本記 文載
			長さ	幅	厚さ				
141	表採	播器等その他	3.5	2	0.84	5.75	粘板岩	完形	
142	3 K 表採	播器等その他	3.35	1.95	0.56	4.08	粘板岩	欠損	
143	3 K 表採	播器等その他	2.83	2.5	0.61	4.25	粘板岩	欠損	
144	1 I II層 南包含層	石 罎	6.0	3.82	1.62	39.65	珪質泥岩	完形?	
145	4 H I層	石 罎	4.7	3.45	1.36	20.34	珪質粘板岩	一部欠損	
146	1 I II層 南包含層	磨製石斧	13.0	4.7	2.73	294	チャート質淡緑色凝灰岩	ほぼ完形	
147	4 J III層(上部)北包含層	凹石	11.5	5.1	3.1	282	淡緑色砂質凝灰岩	完形?	
148	4 K III層(上部)北包含層	凹石	12.4	12.6	3.39	490	淡緑色砂質凝灰岩	欠損?	
149	1 I II層(下部)南包含層	凹石	11.6	5.8	3.19	314	淡緑色砂質凝灰岩	完形	
150	1 H II層(上部)	凹石	9.45	5.0	2.72	185	淡緑色砂質凝灰岩	欠損	
151	3 H I層	凹石	9.1	7.6	4.53	467	淡緑色砂質凝灰岩	完形	
152	3 J II層	凹石	10.3	6.93	2.685	241	淡緑色砂質凝灰岩	ほぼ完形	
153	3 J II層(下部)	凹石	10.1	5.0	3.06	266	淡緑色砂質凝灰岩	欠損?	
154	4 I (試掘トレンチ埋土) II層 北包含層	垂飾	2.0	1.32	0.695	2.85	チャート質淡緑色凝灰岩	完形	P113

6. まとめ

遺構、遺物、遺跡について若干の考察を述べてまとめとしたい。

①遺構

(1)遺構の種類ごとの様子

・ 竪穴住居跡

4棟検出した。いずれも縄文時代前期初頭に位置付けられると思われる。平面形は方形～楕円形を基調とし、いずれの住居跡からも炉、柱穴は確認できなかった。傾斜が緩やかになり始める辺りに比較的まとまって立地している。これら4棟が併存していたかどうかは定かではないが、互いの位置関係などから考えると、それぞれは他の住居跡を意識して建てられている可能性もある。

次に類例と比較してみる。縄文時代前期初頭の竪穴住居跡の検出例としては、青森県では、売場遺跡（青森県教育委員会 1985）、表館遺跡（青森県教育委員会 1984）、岩手県では、平沢Ⅰ遺跡（岩手県埋蔵文化財センター 1988）、飛鳥台地Ⅰ遺跡（岩手県埋蔵文化財センター 1988）、湯舟沢遺跡（滝沢村教育委員会ほか 1986）、千鷲遺跡（宮古市教育委員会 1989）、宮城県では小梁川遺跡（宮城県教育委員会 1987）などがある。この中でまとまった数の検出例があるのが千鷲遺跡であり、その報告者の高橋・鎌田氏は、検出した34棟の住居跡を6タイプに分類し、それを青森県、岩手県、宮城県、山形県の早期後半～前期前半の住居跡の調査例と比較し、傾向を探っている。本遺跡の住居跡を6タイプに当てはめようとすれば、第4号住居跡がB₁タイプ（柱穴がほとんど確認できないもので方形～長方形プランを基調とする）に、第1～3号住居跡がB₂タイプ（B₁タイプ同様柱穴がほとんど確認できず楕円形プランを基調とするもの）に分類できると思われる。これは、高橋・鎌田氏が「青森、岩手県の東北半ではB₁、B₂タイプ」が多いとした傾向に符号するものといえる。

本遺跡の住居跡からは炉・柱穴は確認できなかった。類例を見ると、炉は認められるものと認められないものがあり、炉はほとんどが地床炉のようである。柱穴は、ほとんど確認できないものもあるようであるが、多くの住居跡からは確認されており、本遺跡で全く確認できなかったのは検出作業が足りなかったことによるかもしれない。この時期の住居は、壁沿いに小坑状のピットをめぐらすものもあり、また周溝を持つものもあるようである。

本遺跡の住居跡からは付属施設等は確認できなかった。この時期の住居跡から付属施設等は確認されないことが多いようであるが、岩手県平沢Ⅰ遺跡のGⅢ-4住居には「出入口」施設と推定されるゆるやかな傾斜面が伴っている。

・溝状ピット

5基検出した。時期は縄文時代に属すると思われるが、不明である。また5基が併存しているかどうか不明である。地形、分布、形態、そして何よりも類例から、陥し穴の可能性が高いと思われる。

次に類例と比較してみるが、最初に溝状ピットの中で、次に陥し穴の枠組みの中で行う。なお、第3号溝状ピットは他とやや形態が違い、別物として分類されていることが多いので、ここでは、第1・2号、第4号を溝形、第3号を楕円形のもの、区別して扱うことにする。

はじめに形態について。第1号と第2号溝状ピットは長軸方向の片側がオーバーハングしている。こうした形態は溝状ピットには一般的にみられるようであり(註2)、また両側がオーバーハングする例も多いようである(註3)。

次に遺跡での在り方について。本遺跡跡の溝状ピットは、いずれも丘陵の裾部に長軸方向が等高線を切る形で構築され、さらに溝形の場合は2基一対となっている。類例を見ると、丘陵の裾部に立地するのは一般的であるが、必ずしも長軸方向が等高線を切るということはなく、長軸方向が等高線に沿う形のものも存在する(註4)。溝形が2基一対に並ぶ在り方は、一般的でいくつかの遺跡に見られる(註5)。また溝形は2基だけではなく数基～10基前後まで並列する例も多いようである(田村 1987)。

最後に時期について。本遺跡跡の溝状ピットはいずれも時期を特定することができなかったが、田村荘一氏は、出土遺物や他の溝構との切りあい、さらには埋土に存在する火山灰の分析等から次のような結果を得ている(田村 前掲)。溝形は縄文時代中期末～後期前葉に存在し、楕円形は時期不明であるが、縄文時代晩期中葉～平安時代前期に存在した形態もある。

次に、本遺跡跡の溝状ピットを陥し穴という枠のなかで捉らえてみる。岩手県で「陥し穴状遺構」と認定されたものには、田村(1987)によれば、大きく分けて三つの形態が存在する。溝形のもの、楕円形のもの、そして円形のものである。本遺跡跡では、溝形のもの、楕円形のもの、そして円形のものである。本遺跡跡では、溝形のもの、楕円形のもの「溝状ピット」として既に触れてきた。円形のものについては、これまで触れてこなかったが、「土坑」として一括した中に含まれているかもしれない。本遺跡跡の出土例には副穴も存在せず、取り立てて陥し穴とする根拠も見当たらなかったため「土坑」としてしまったが。なお、岩手県では溝形が大多数をしめ(約8割)、この傾向は北海道、青森県でも変わらないという(田村 1987)。

・土坑

5基検出した。二つに分類できる。ひとつは、平面形が円形で規模・形態にかなりの共通性が見られるもの(第1～3号土坑)。もう一つは、方形を基調とし、近代の墓坑と考えられるもの(第4、5号土坑)。

前者の円形の土坑は、縄文時代に属すると思われるが、不明である。3基が併存していたかどうか不明である。分布は、斜面の高いところから低いところへ並んでいるようにも見受けられる。用途としては、陥し穴、貯蔵穴などが考えられるが不明である。陥し穴とすれば、田村荘一氏がC型（円形）と分類したものに相当し、この型は縄文時代早期末～前期初頭の時期に構築された可能性があるという（田村 1987）。

・溝

1条検出した。時期は弥生時代の可能性がある。用途は墓の付属施設などが考えられるが不明である。

・炉跡

石囲炉を1基検出した。時期は縄文時代前期初頭の可能性が高い。炉のない住居跡に関係するかもしれない。

・焼土

10箇所検出した。時期は縄文時代前期初頭の可能性が高い。炉のない住居跡に関係するかもしれない。

(2)異種遺構間の関係

ここでは、明らかに時期が異なると思われる第4、5号土坑、溝を除外して、住居跡と他の遺構の関係を主としてみていきたい。

石囲炉と焼土は、住居跡に炉がないことから関係がありそうである。また遺構とは言いがたいが、遺物包含層も住居からの廃棄場として関係があるかもしれない。

溝状ピットは、陥し穴という性格を考慮すると同時期に存在したとは考えにくい。蛙などの小動物をとったものと仮定すれば住居の近くに存在してもいいかもしれない。もし、溝状ピットが住居跡と関係あるものとするれば、遺物包含層を住居からの廃棄場と考えた時、第4、5号溝状ピットがおそらく包含層を切っていることから、住居は同時に存在したのではなく、前後関係があるものと考えべきであろう。ただし、上で見てきたように、田村荘一氏は、溝状ピットは溝形のもの「縄文時代中期末～後期後葉までの時期には確実に使用されていた。それ以前、あるいはそれ以後に広がる可能性は低い」（田村 前掲）としているので、同時存在を想定すべきでないかもしれない。

円形の土坑と住居跡の関係は推定しにくい。土坑を小動物の陥し穴あるいは貯蔵穴と考えれば、関係のあるものとすることもできる。

②遺物

(1)土器

本遺跡からは、縄文時代前期初頭～前葉の土器、中期中葉の土器、晩期前葉の土器、弥生土器が出土したが、ほとんどは前期初頭の土器である。以下、その前期初頭の土器について、その概要と特徴、および簡単な所見を述べてまとめたい。

前期初頭の土器で最も多いのは、いわゆるピッチリ縄文を持つ早稲田6類の時期に岩手県に局地的に存在する土器である。また、本遺跡からは他に類例を見ない土器が出土した(47、58、178)が、これは、文様効果の類似性などから長七谷地Ⅲ群に相当するのではないかと思われる。

前期初頭の土器は、他に長七谷地Ⅲ群・上川名Ⅱ式と思われるものも出土しているが(46、200)、表館・芦野Ⅰ群に相当すると思われる、いわゆるコンパス文を持つ土器は出土していない。本遺跡では大木1式、2a式と思われる土器も出土している(30、148と199)。表館式の型式内容は不明で、縄文のみのものであることから(佐藤 1960)、うかつにもは言えないが、一般的に用いられている長七谷地Ⅲ群・上川名Ⅱ式－表館式・芦野Ⅰ群、早稲田6類(新旧関係は不明)－大木1式－大木2a式という編年のうち、表館式・芦野Ⅰ群のみが本遺跡で欠落していることは何を意味するのであろうか。

(2)石器・石製品

石器は、石鏃、石錐、石匙、搔器等その他、石筥、磨製石斧、凹石、およびそれらを作り出した素材剥片等が、石製品は垂飾が出土した。石器の内訳は、石鏃が30点、石錐が9点、石匙が75点、搔器等その他が28点以上、石筥が2点、磨製石斧が1点、凹石が7点である。

本遺跡出土の石器は全体として石質が悪いという印象を受ける。例えば、45の粘板岩製の石匙(縦形)などは全体が摩滅してしまっているし、また、92の輝緑凝灰岩製の石匙(縦形)は、石質が悪くてうまく剥離を行えなかったように見える。

なお、包含層からは横形の石匙も出土している。鈴木道之助氏によれば、「東北地方北半部および北海道では縦型から出発し、前期中葉に至って横型を伴出しはじめ、前期末葉から横型優勢となる」(鈴木 1991)とのことである。包含層の形成期は、出土土器の大部分が前期初頭のものであることから、前期初頭としたが、土器と同じく石器も他の時期のものが混じっているのかもしれない。

③遺跡

(1)遺跡の性格

各時期ごとに想定される遺跡の性格について述べていく。

・縄文時代前期初頭

集落とって良いかどうかかわからないが、今回の調査区および付近に人が住んでいて、斜面下半に土器破片などのゴミを捨てていたと想定される。

・縄文時代中期中葉、晩期前葉

調査区およびその付近で、人が土器破片を伴う何らかの活動をしていたことが想定される。

・弥生時代初頭

調査区およびその付近で、人が溝や土器破片を伴う何らかの活動をしていたことが想定される。

・江戸末～明治時代初期

近隣に住む家庭の墓地として使用されていたことが想定される。

(2)地域の中で

周辺の遺跡を参照して、この地域で人々がどのような活動をしていたかを、本遺跡で最も資料の多い縄文時代前期初頭に限って想定してみる。大迫町には前期初頭～前葉の遺跡が7遺跡確認されている(第二章第4節 周辺の遺跡参照)。このうち発掘調査が行われて調査内容が明らかになっているのは、経塚長根、経塚森、白山の3遺跡のみで、前期初頭の遺構が確認されたのは経塚森、白山の2遺跡である。また、詳細は知りえないが、熊の上遺跡からは方形の住居跡の一部と柱穴が確認されており、形態から推定すると前期初頭の住居跡の可能性があろう。しかし、以上の遺跡から出土した土器は、繊維土器とは言っても、経塚森遺跡から多量に出土した、いわゆるピッチリ縄文をもつ土器(早稲田6類)は少なく、多くがそれ以降の大木1～2式土器である点が気になる。そこで、ここでは主として位置・立地の面から縄文時代前期初頭の時期にこの地域で人々がどのような活動をしていたかを推定してみる。

まず、位置的に見ても、経塚森、経塚長根、白岩長根の3遺跡は関係がありそうである。同時期のひとつの活動範囲か、移動があったのかはわからないが。

次に、分布から見ると7つの遺跡は三つの地域に分けられる。現在の大迫町の中心地域(第1地域と仮称する。古館、熊の上、白山の3遺跡が相当)と今回調査した内川目の白岩付近(第2地域と仮称する。経塚長根、経塚森、白岩長根の3遺跡が相当)、そして岳川のさらに上流に位置する大又地区(第3地域と仮称する。大又I遺跡が相当)である。これら3つの地域は距

離的に見れば一日で行って帰れる範囲である。遺跡立地から考えれば、第1地域が最も住みやすく、続いて第2、第3ということになろう。第2地域の経塚森遺跡で住居跡が検出されたといっても、それは斜面に構築されたものであり、住みやすかったとは言いがたい。

以上をまとめるといくつかの活動内容が想定される。ひとつは、第1地域を集落の拠点としていて、第2、第3地域に狩猟等に出掛け、この二つの地域はキャンプサイト的な遺跡であったという考え方。二つ目は、同じく第3地域はキャンプサイトにしながらも、第2地域の経塚森遺跡からやや古い時期の土器が出土していることから、集落の拠点が第2地域から第3地域に移っていったとする考え方。三つ目は、いずれも集落で、第3地域から第2地域へ、そしてさらに第1地域へと移っていったとする考え方。その他。

いずれにしても、これらの想定は根拠が乏しく可能性の域をでない。しかし、発掘調査が終わるたびにこうした想定を行ない、その想定をもとに次の発掘を行って再び想定しなおし、最終的には歴史の叙実を行なうという努力をする必要はあるのではないだろうか。ここでは、そうした考えからあえて大胆な想定を試みた次第である。

註

- (1)ただし、岩手県飛鳥台地Ⅰ遺跡からは、規模が9×5mという比較的大形の住居跡が検出されている。
- (2)例えば青森県発茶沢遺跡の第2001、2060号溝状ピットなど（青森県教育委員会 1988）。
- (3)例えば青森県発茶沢遺跡の第2033～2037号溝状ピットなど（青森県教育委員会 1988）。
- (4)例えば岩手県小井田Ⅲ遺跡。田村（1987）参照。
- (5)例えば岩手県荒谷Ⅱ遺跡、下猿田Ⅲ遺跡など。田村（1987）参照。

引用・参考文献

- | | | |
|--------------|------|----------------------------|
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『表館遺跡Ⅱ』 |
| | 1985 | 『売場遺跡発掘調査報告書（第1次調査、第2次調査）』 |
| | 1988 | 『発茶沢（1）遺跡Ⅳ』 |
| 岩手県埋蔵文化財センター | 1988 | 『飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 |
| | 1988 | 『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 |
| 大迫町教育委員会 | 1986 | 『観音堂遺跡—第1次～6次発掘調査報告書—』 |
| | 1987 | 『稗貫川流域遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』 |
| | 1989 | 『町内遺跡群発掘調査報告書Ⅲ〔白山遺跡〕』 |
| 大迫町ほか | 1990 | 『早池峰ダム水没地区民俗調査報告書』 |
| 佐藤達夫 | 1960 | 「六ヶ所村表館出土の土器」『上北考古会誌』1 |
| 鈴木道之助 | 1991 | 『図録・石器入門事典〈縄文〉』柏書房 |

- | | | |
|------------|------|---------------------------------------|
| 滝沢村教育委員会ほか | 1986 | 『湯舟沢遺跡』 |
| 田村荘一 | 1987 | 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『紀要』VII岩手県埋蔵文化財センター |
| 宮城県教育委員会 | 1987 | 『小梁川遺跡』 |
| 宮古市教育委員会 | 1989 | 『千鵝遺跡』 |

写 真 图 版

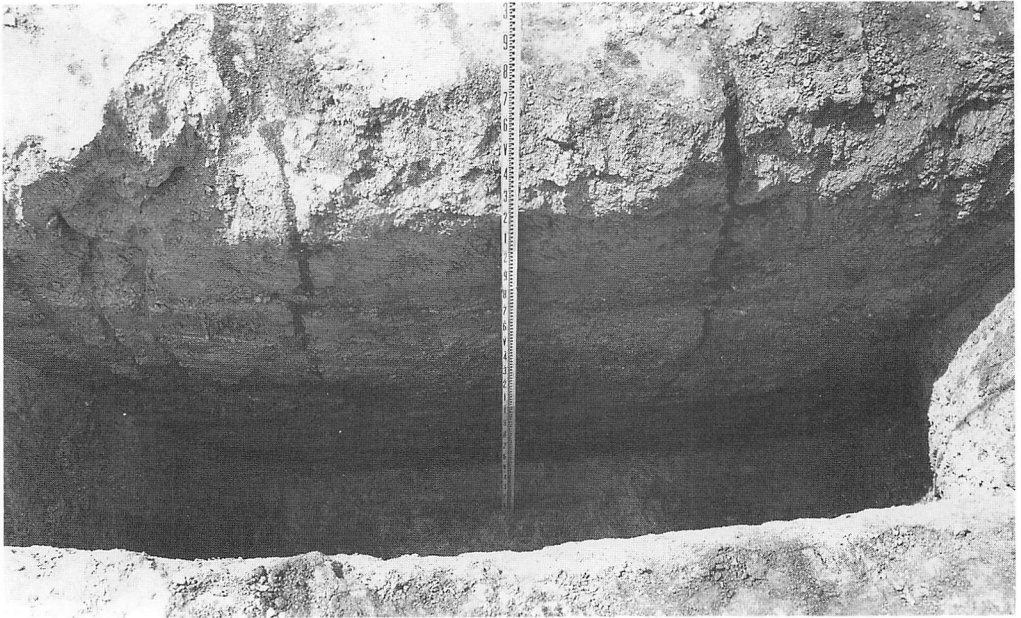


斜面上から



斜面下から

写真図版1 調査前全景



写真図版2 十勝沖地震による断層の様子



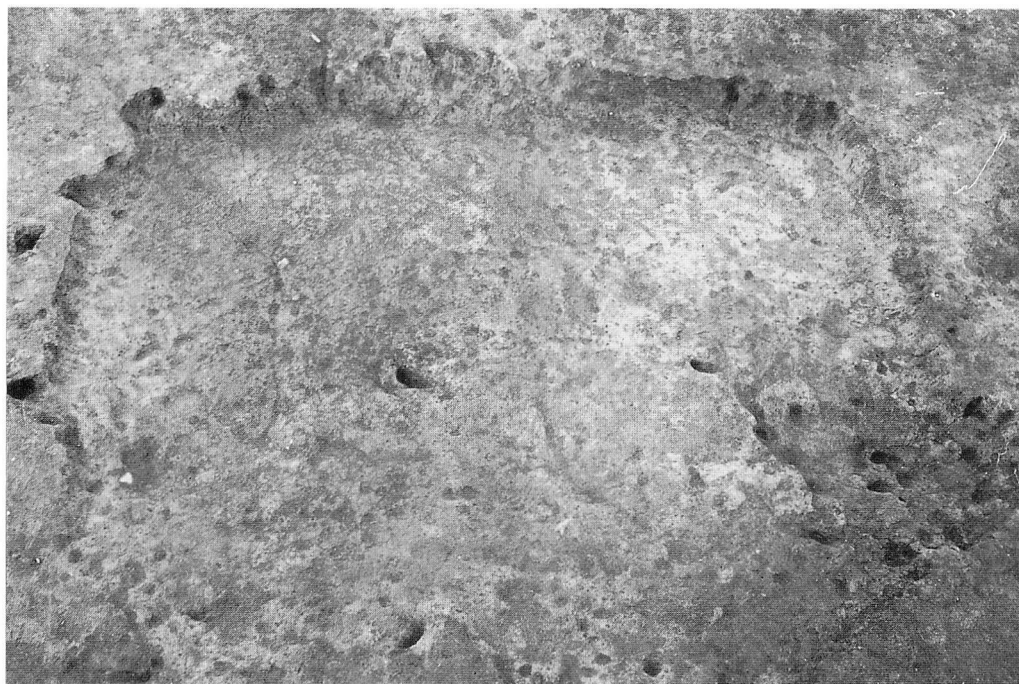
写真図版3 第1号住居跡



写真図版4 第2号住居跡



写真図版5 第3号住居跡



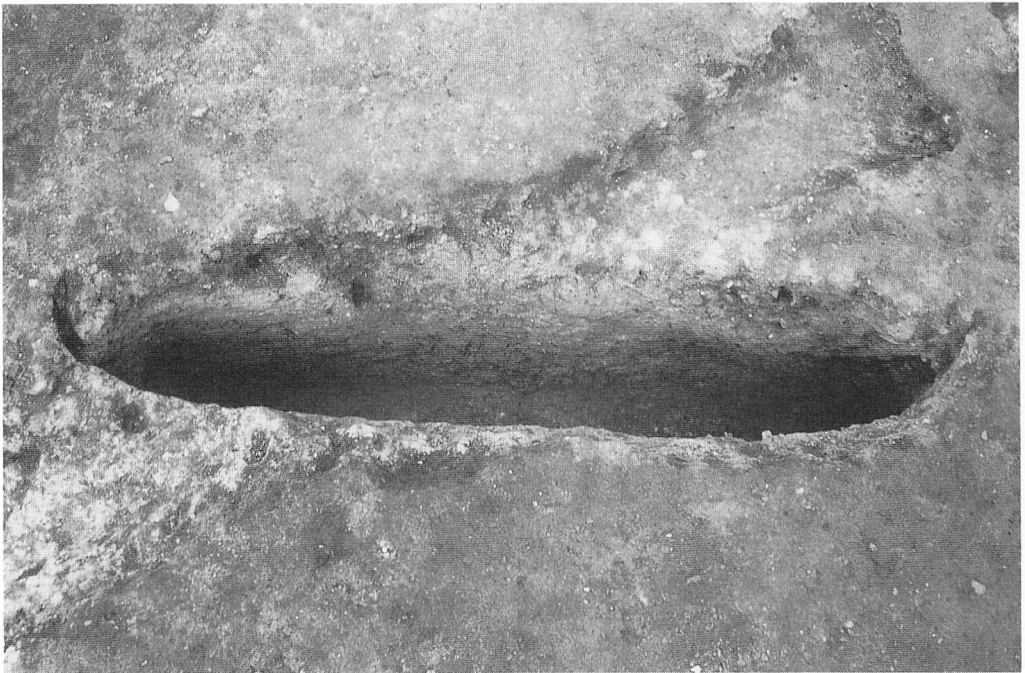
写真図版 6 第 4 号住居跡



写真図版7 第1号溝状ピット

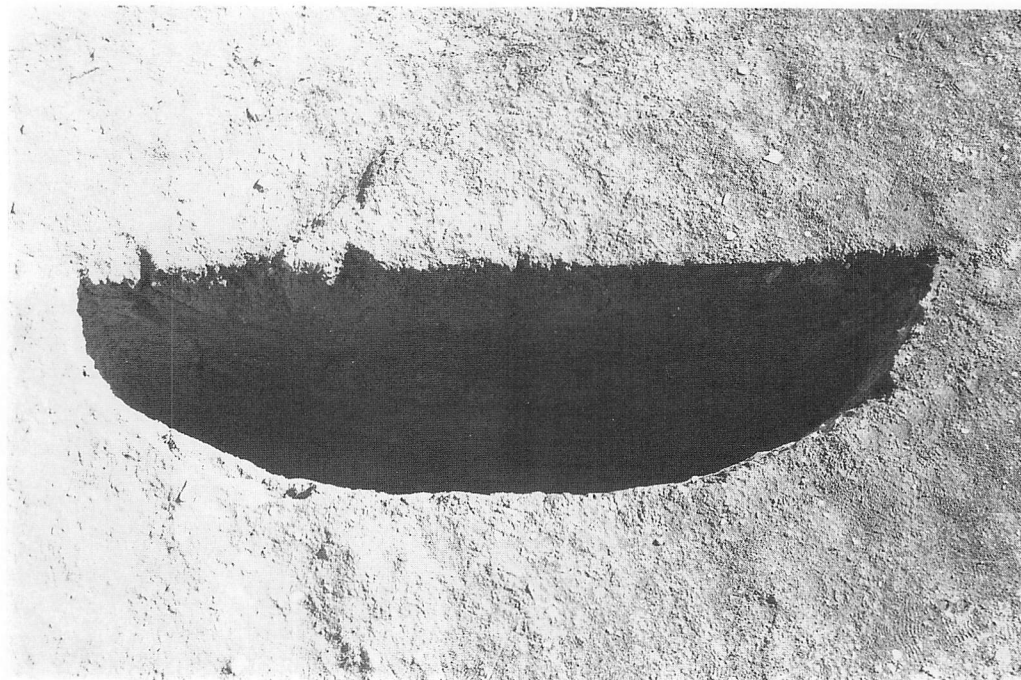


第2号溝状ピット

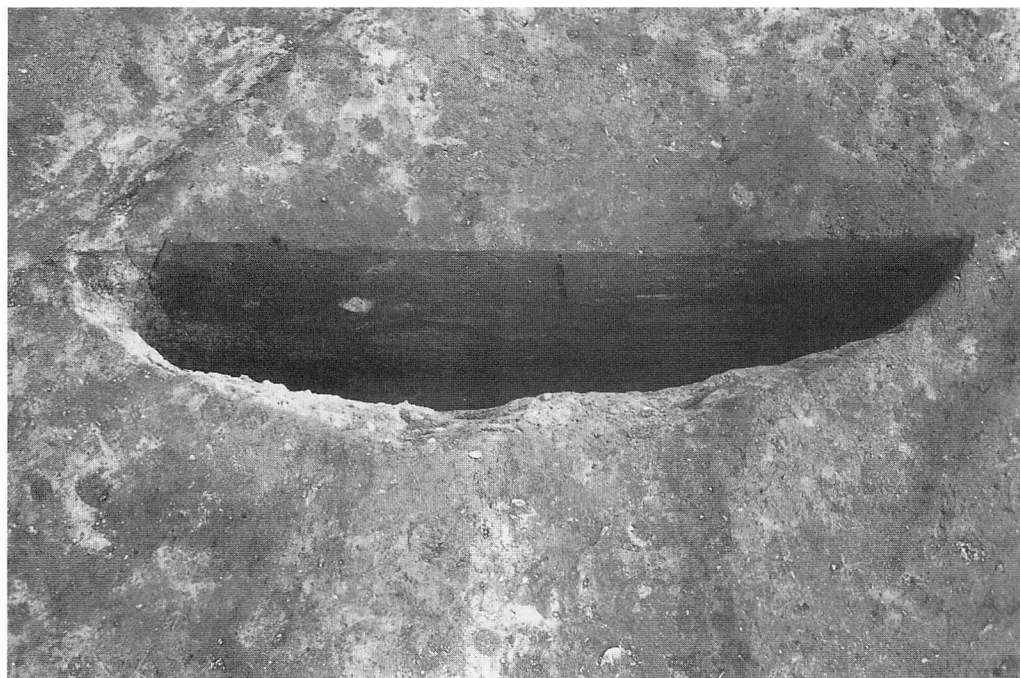


第5号溝状ピット

写真図版8 第2号・第5号溝状ピット



写真図版9 第3号溝状ピット



写真図版10 第4号溝状ビット

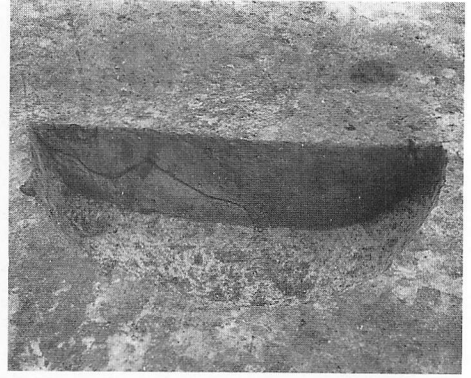
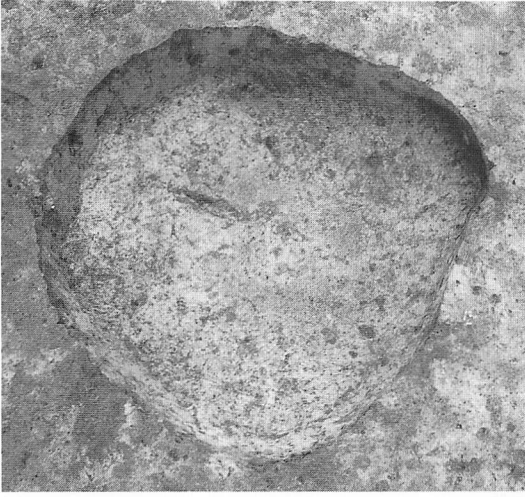


第1号土坑

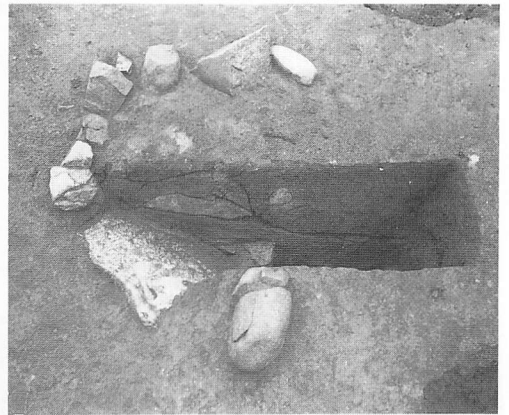
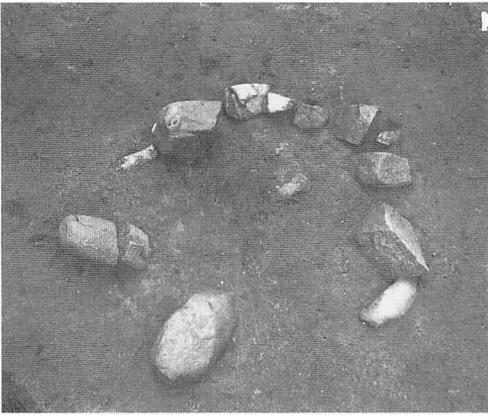


第2号土坑

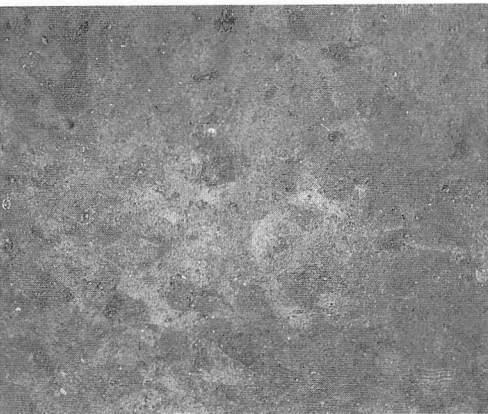




第3号土坑

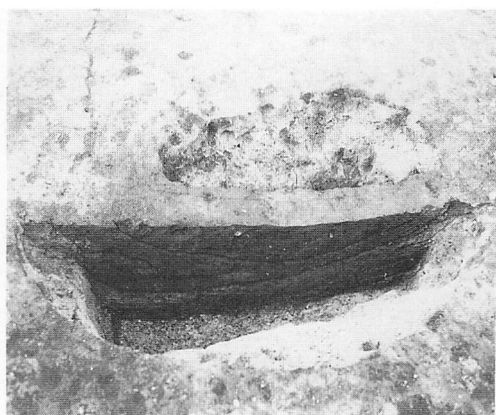


炉迹

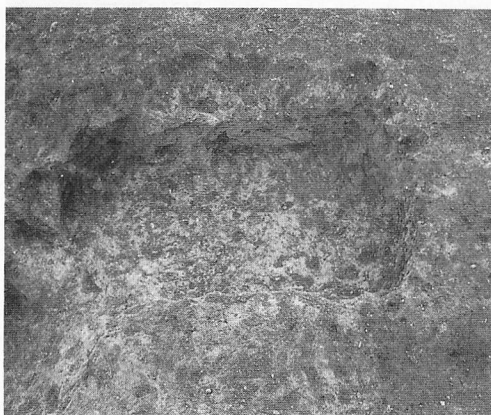


烧土

写真图版12 第3号土坑、炉迹、烧土



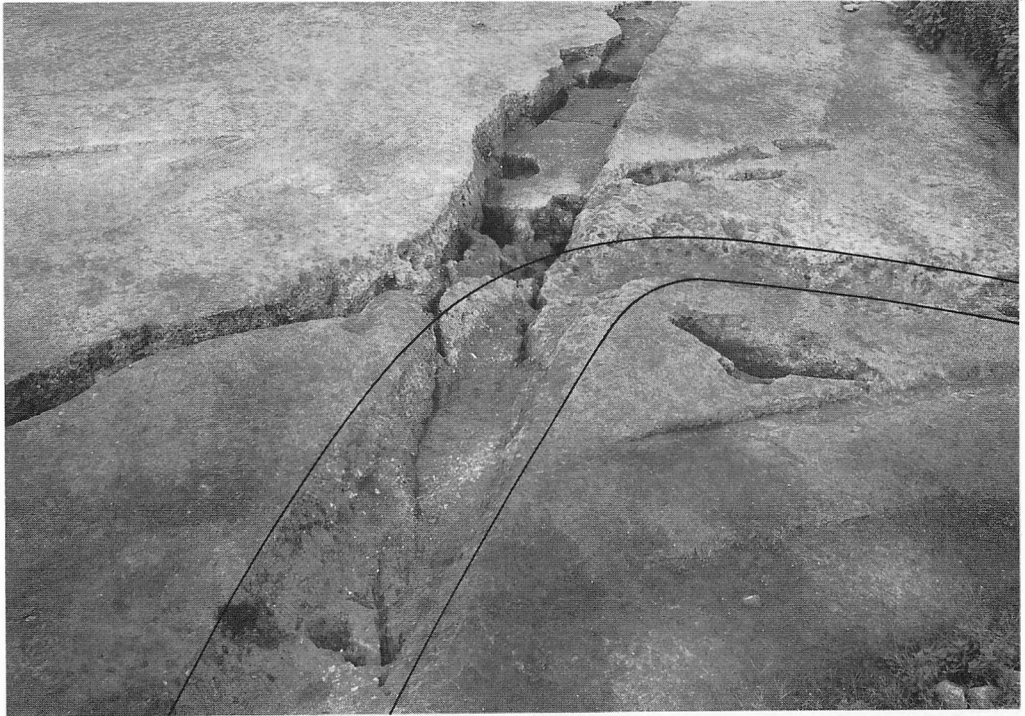
第4号土坑



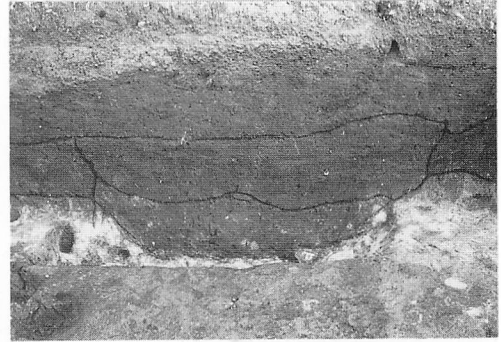
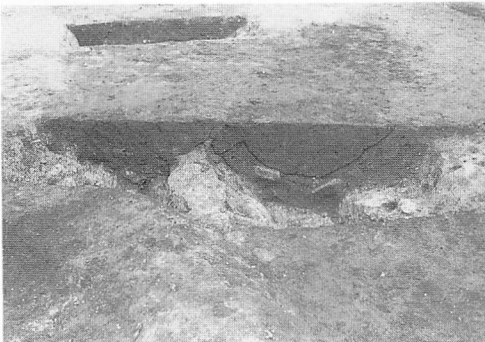
第5号土坑



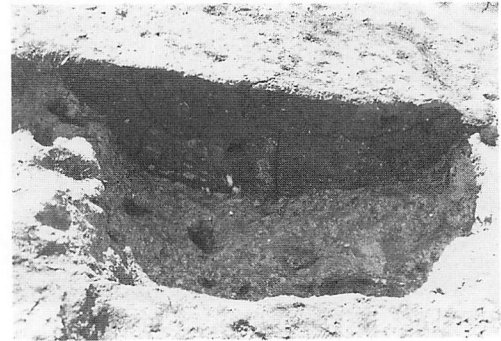
近代の墓坑



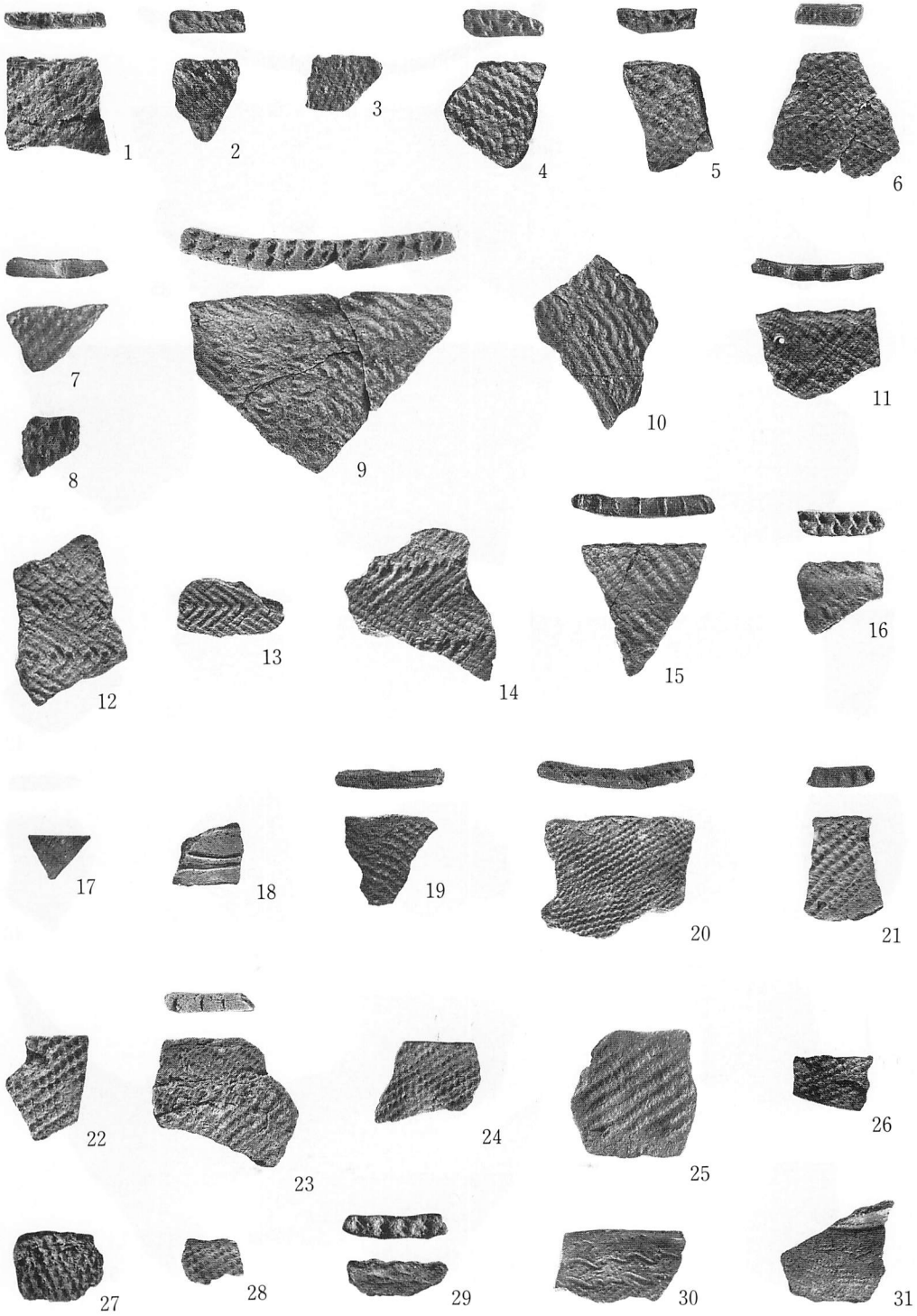
攪乱を受けている溝



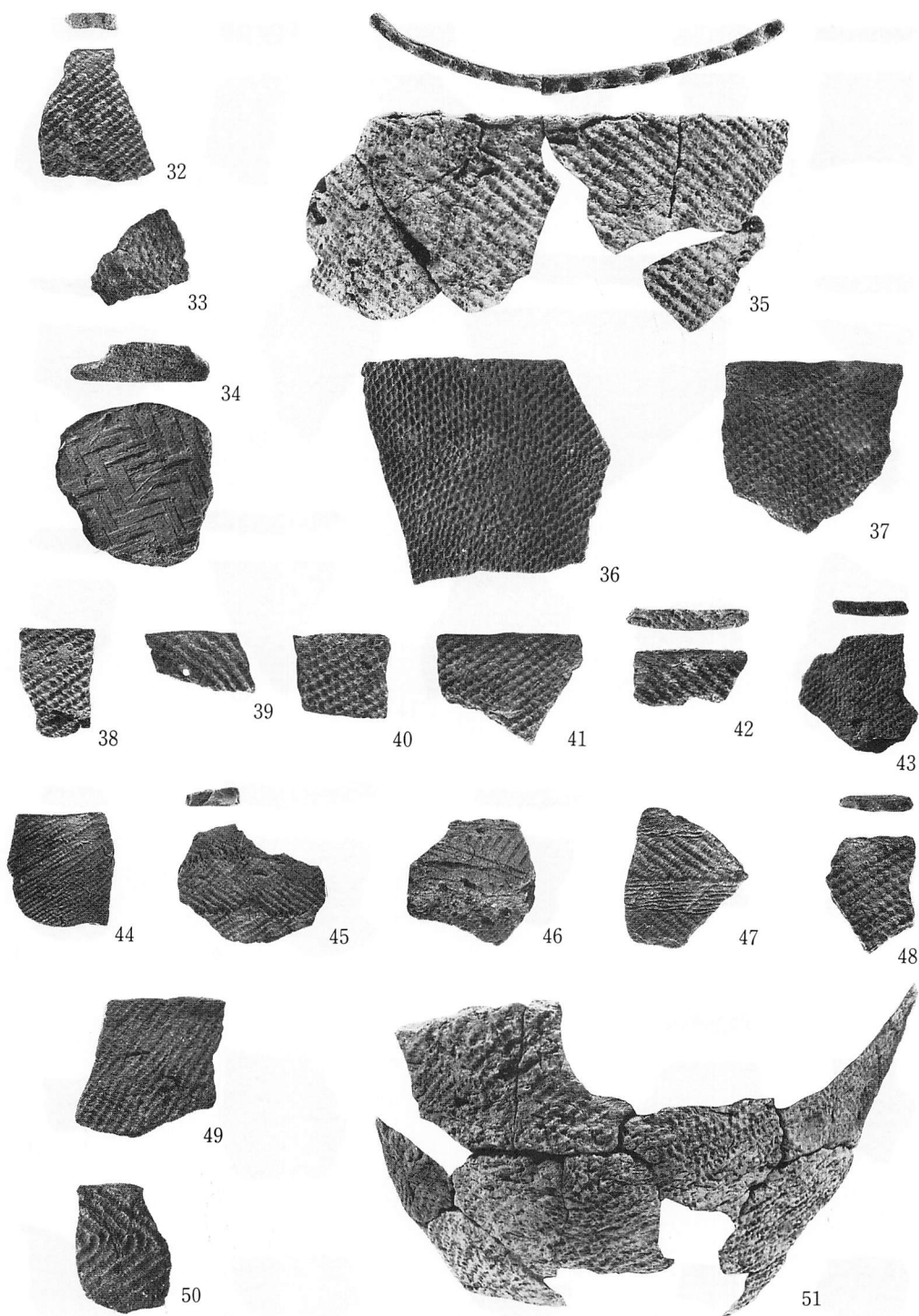
溝断面



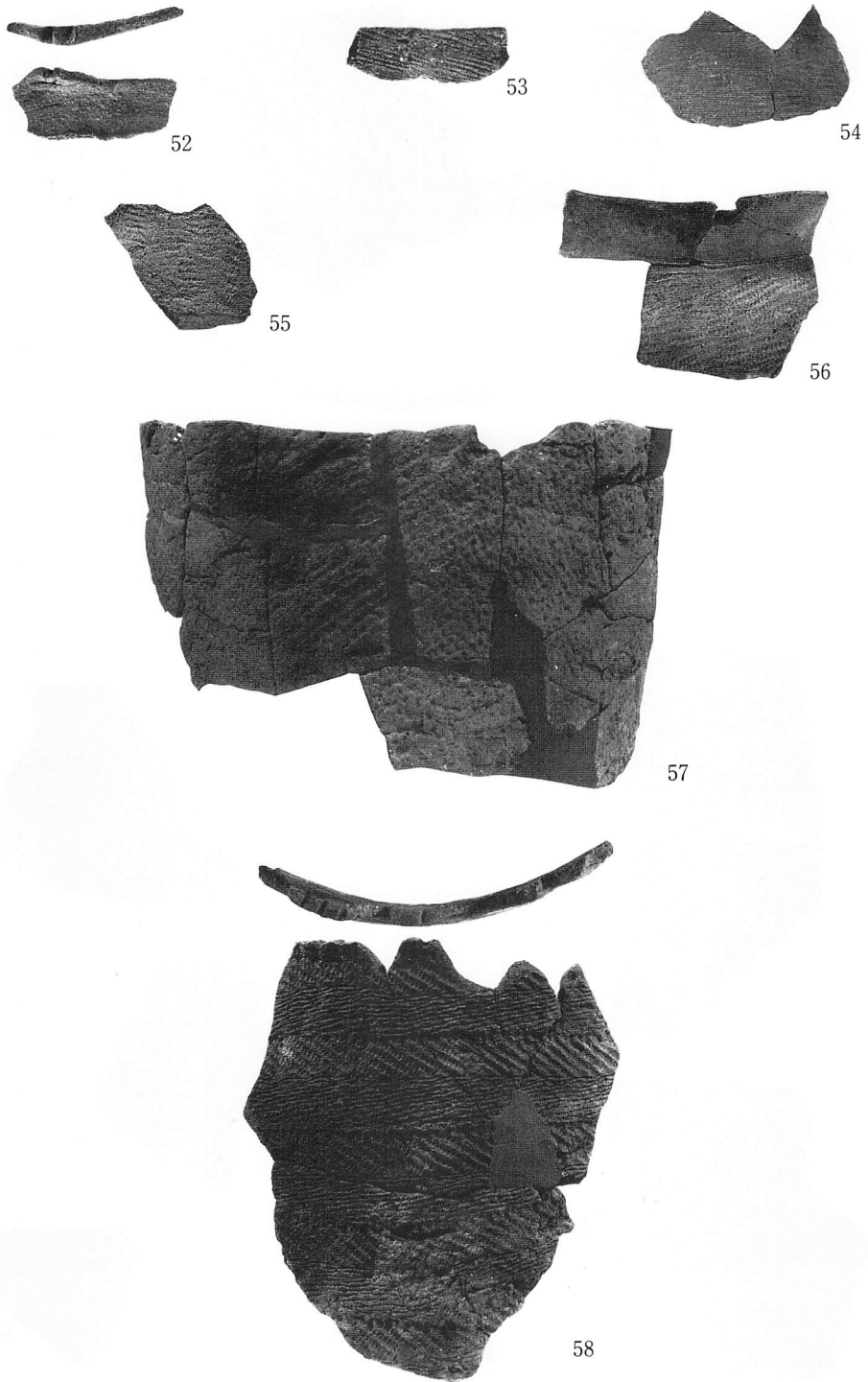
写真図版14 溝



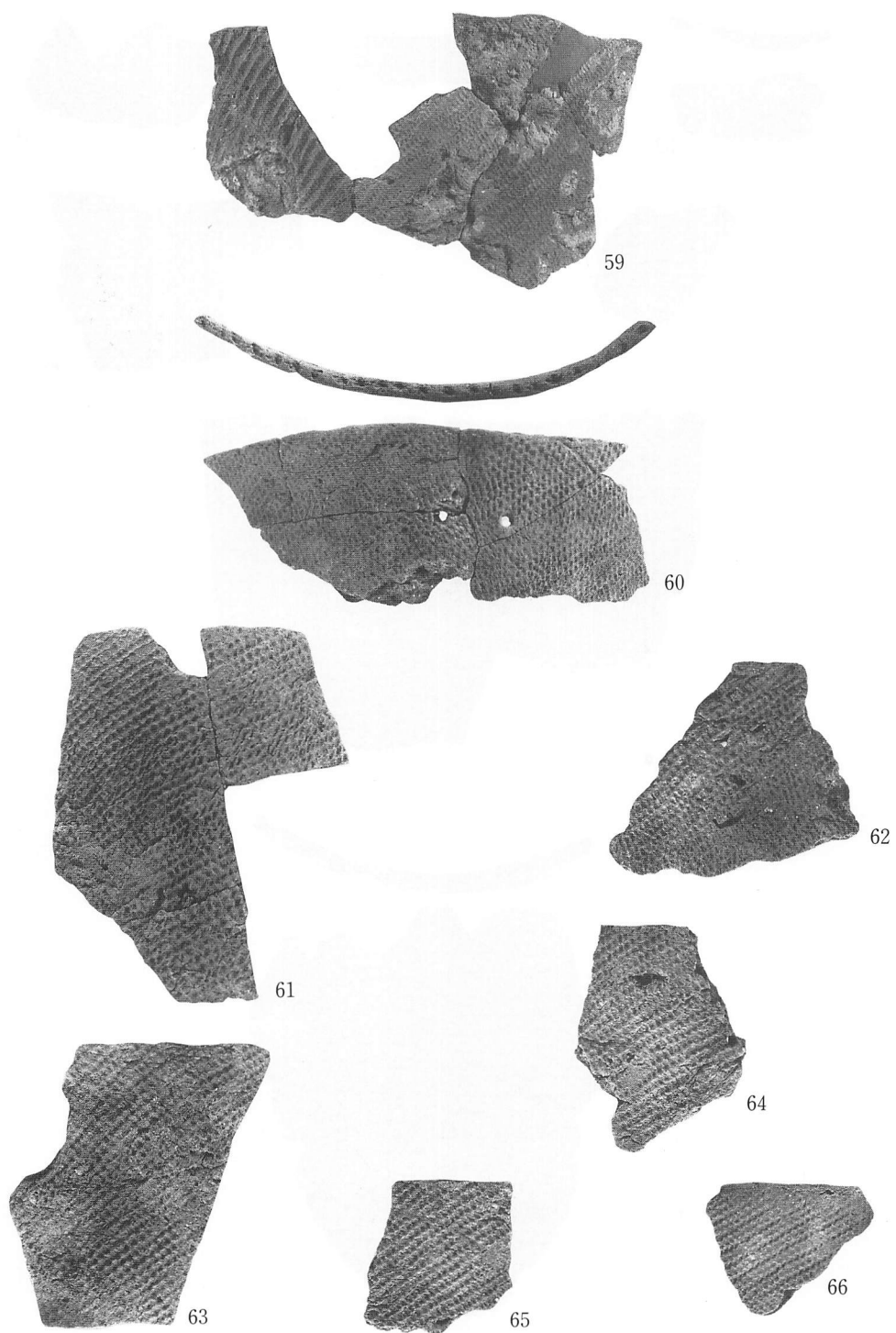
写真図版15 遺構内出土の土器 (S = 1/3)



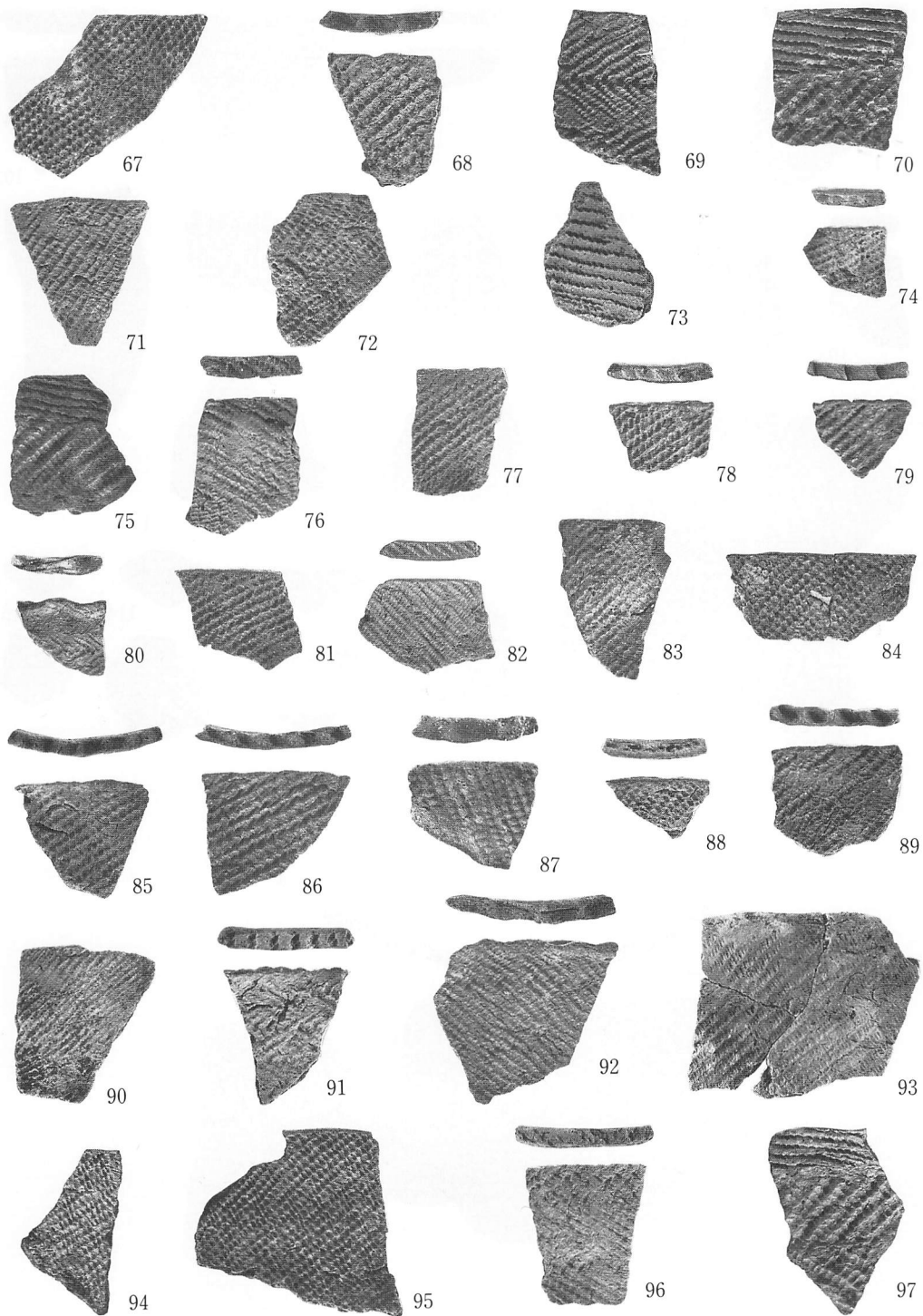
写真図版16 北側包含層出土の土器(1) (S=1/3)



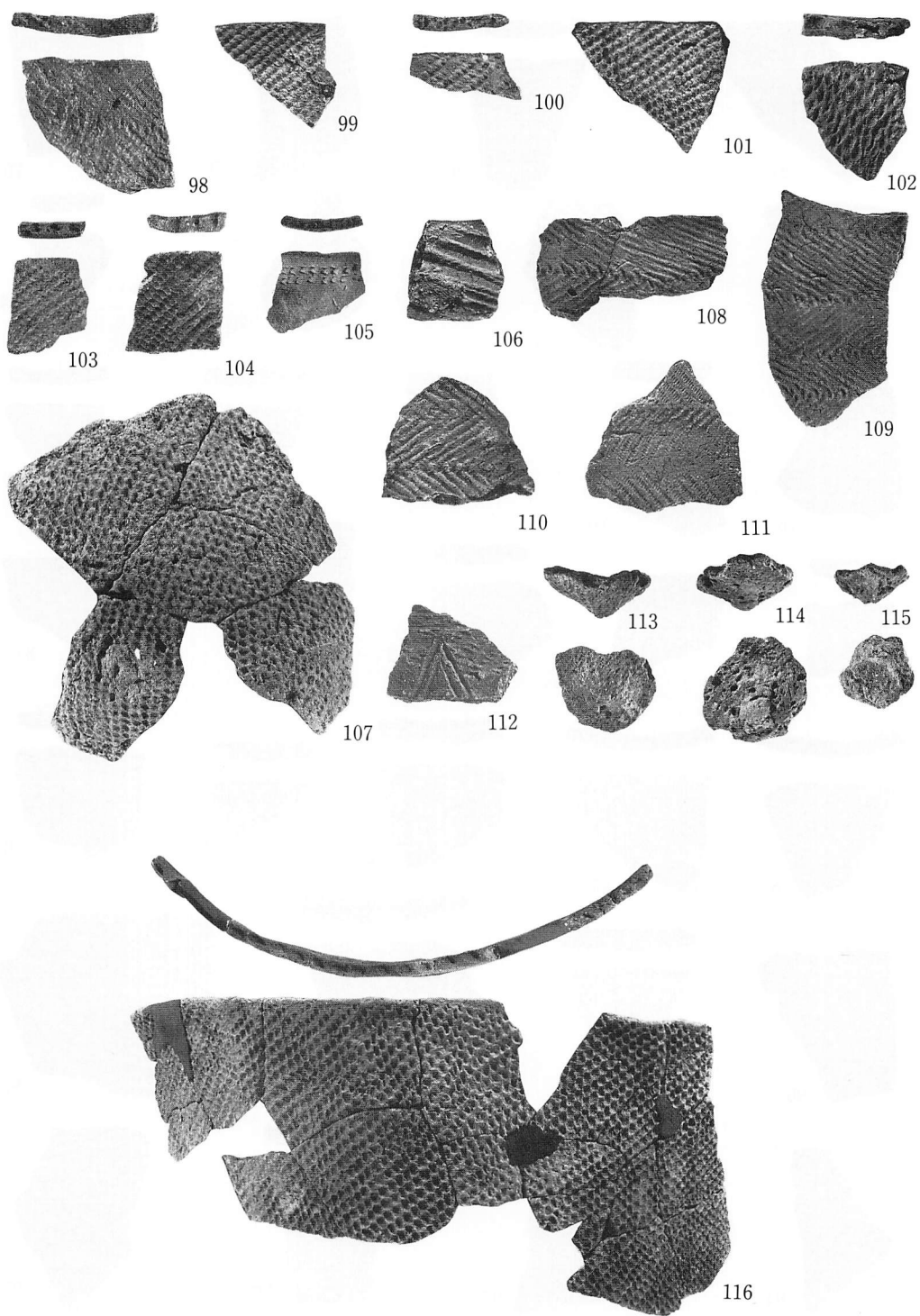
写真図版17 北側包含層出土の土器(2) (S = 1/3)



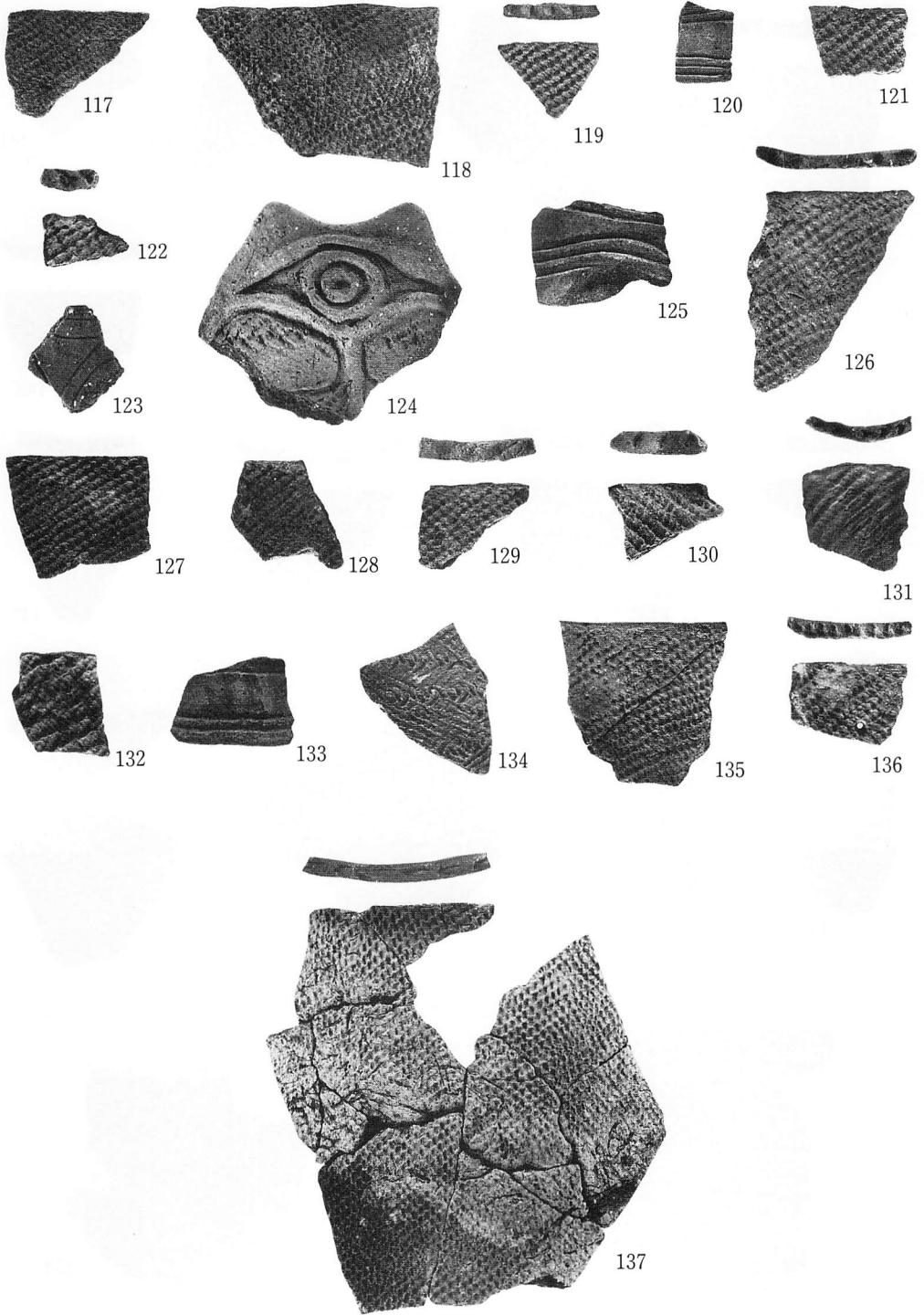
写真図版18 北側包含層出土の土器(3) (S=1/3)



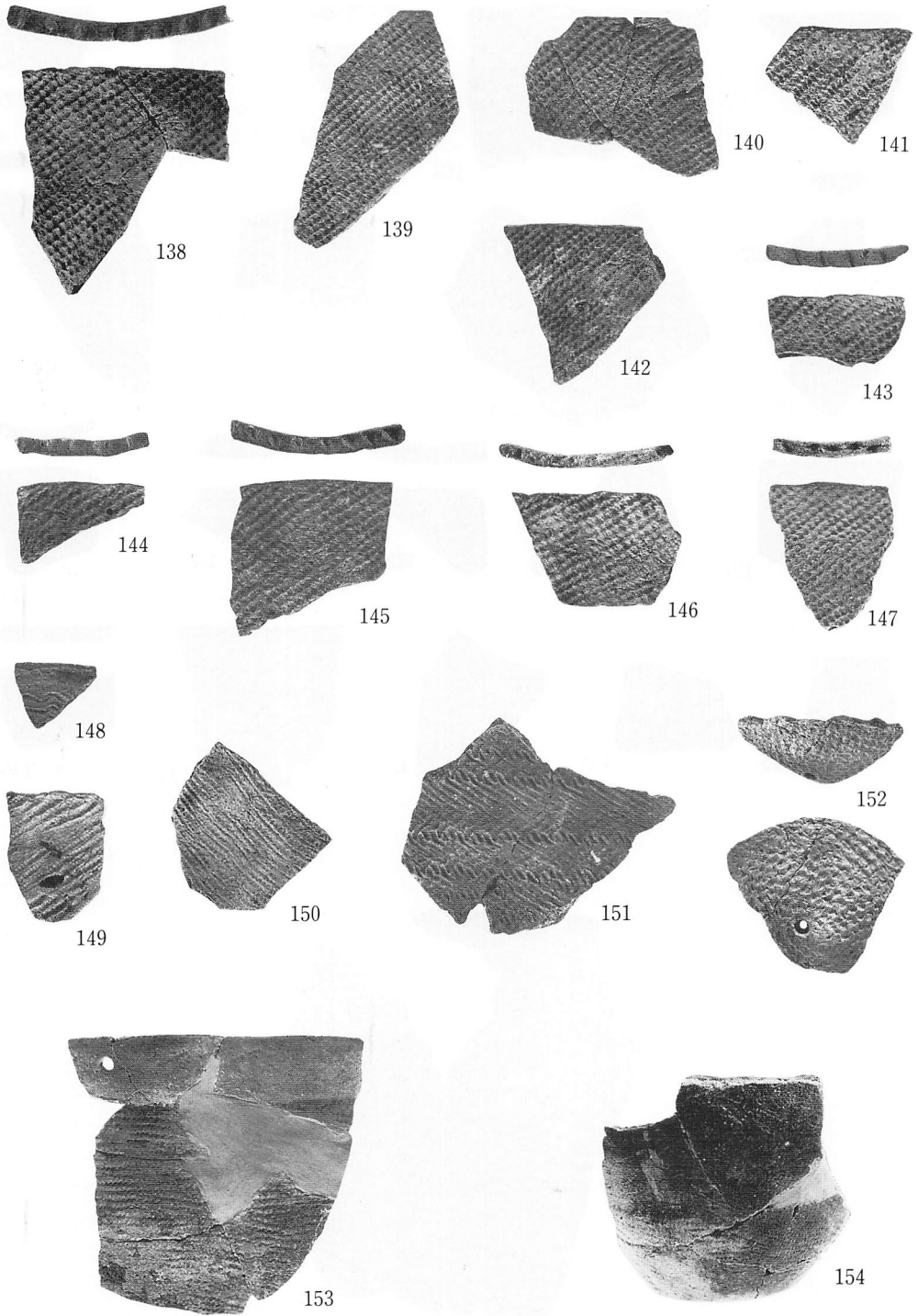
写真図版19 北側包含層出土の土器(4) (S = 1/3)



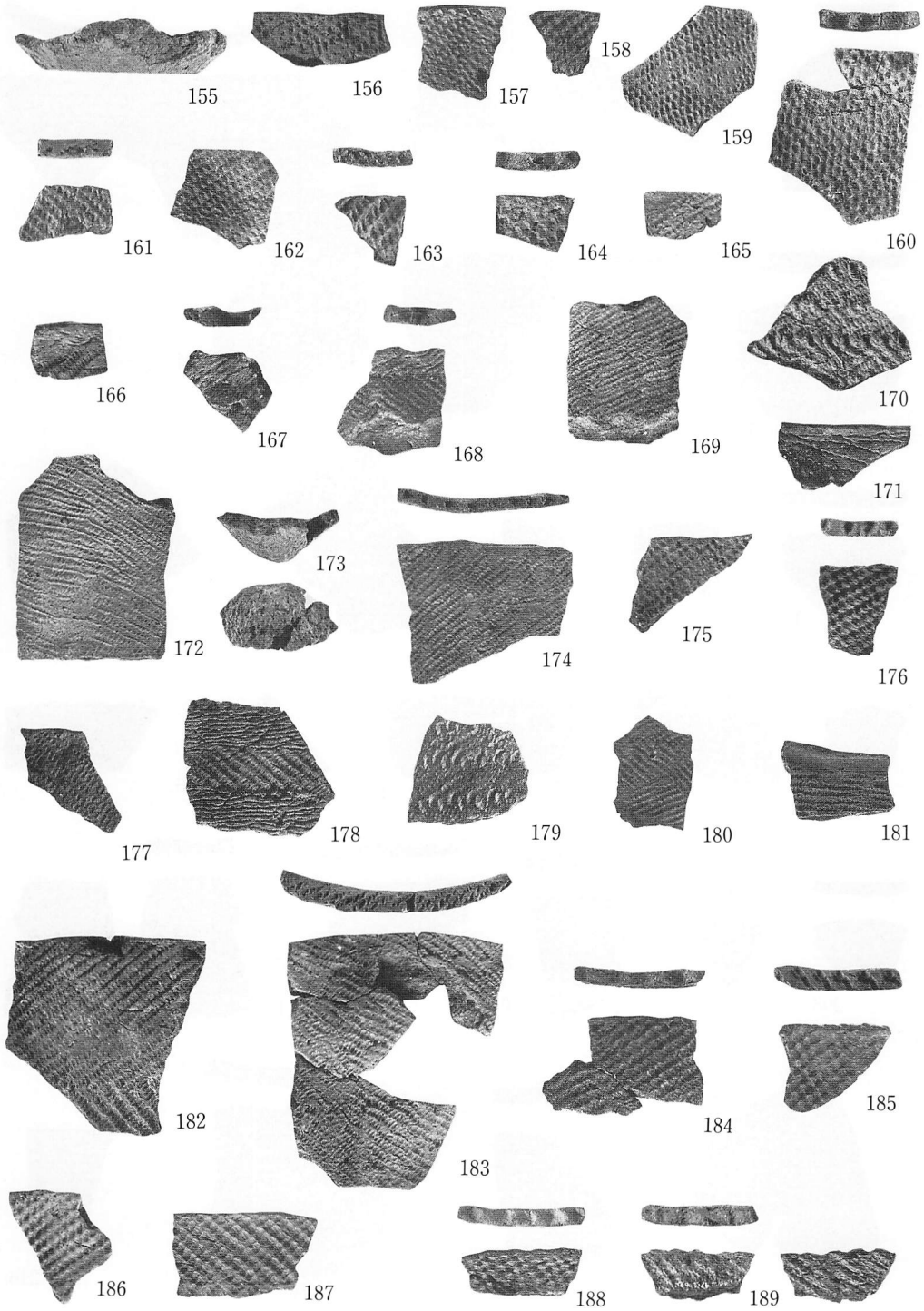
写真図版20 北側包含層出土の土器(5)・南側包含層出土の土器(1) (S=1/3)



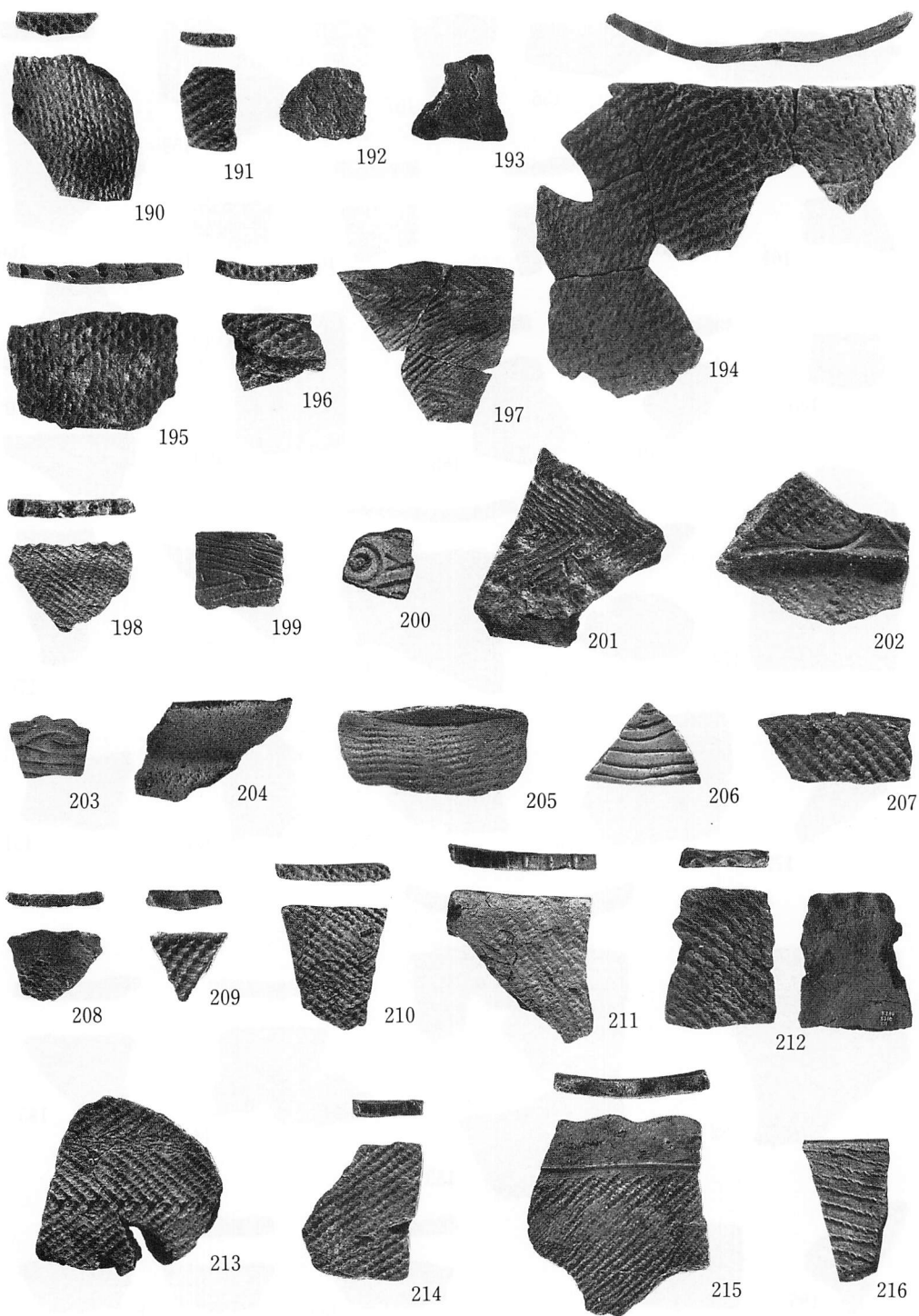
写真図版21 南側包含層出土の土器(2) (S = 1/3)



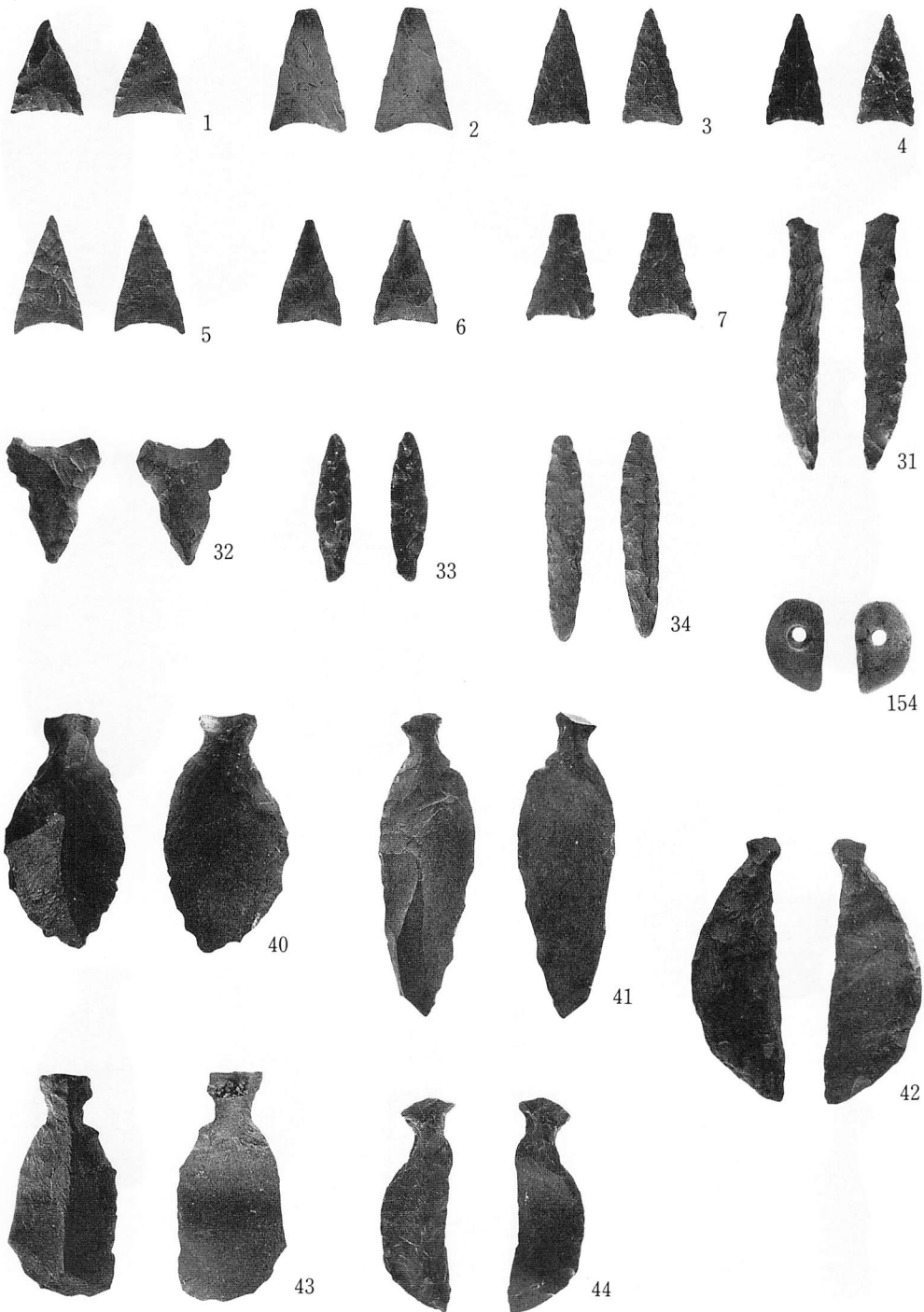
写真図版22 南側包含層出土の土器(3) (S=1/3)



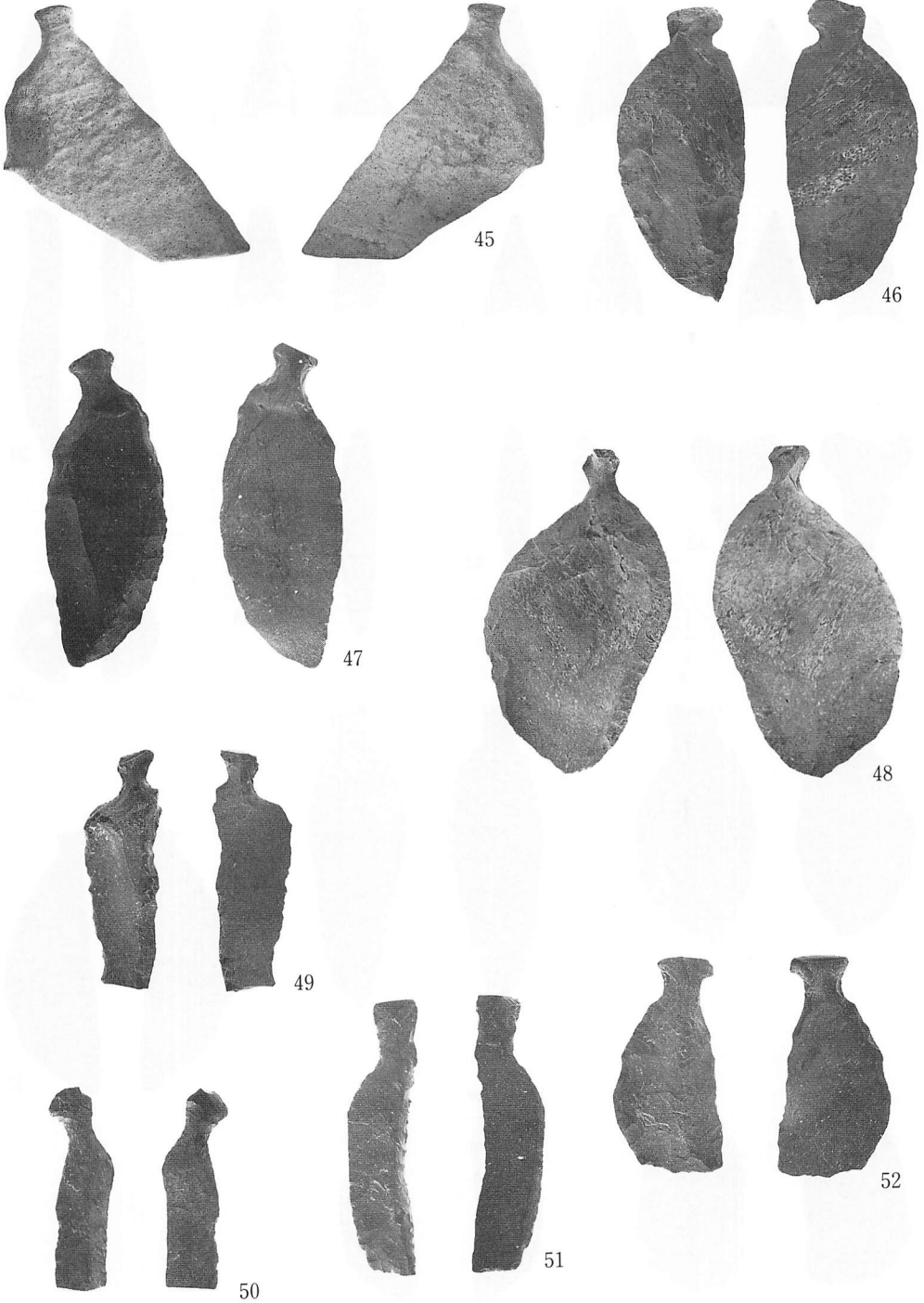
写真図版23 遺構・包含層外出土の土器(1) (S = 1/3)



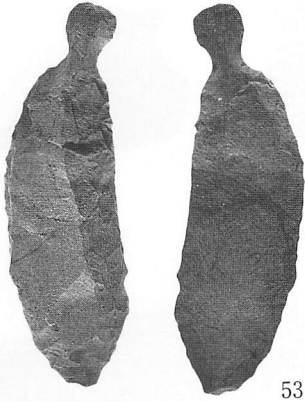
写真図版24 遺構・包含層外出土の土器(2) (S=1/3)



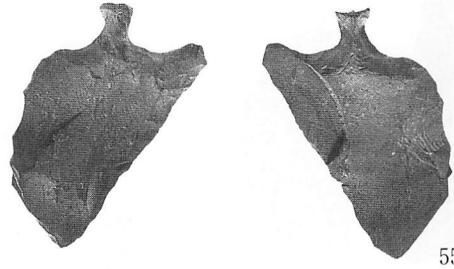
写真図版25 北側包含層出土の石器(1) (S = 2/3)



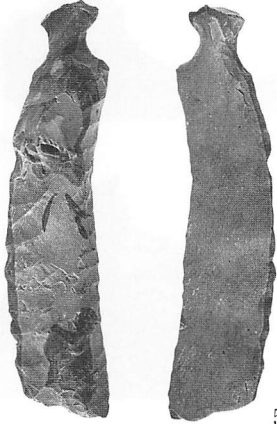
写真図版26 北側包含層出土の石器(2) (S=2/3)



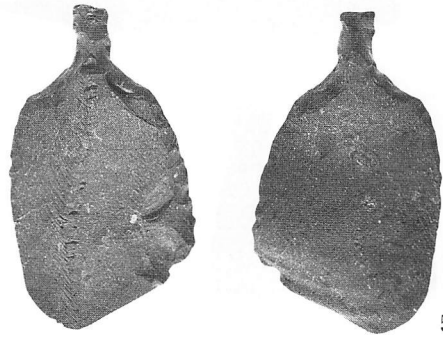
53



55



54



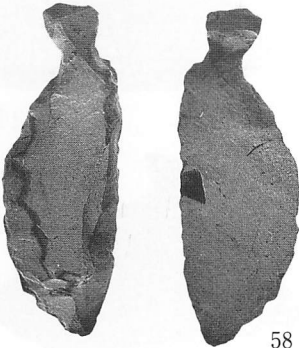
56



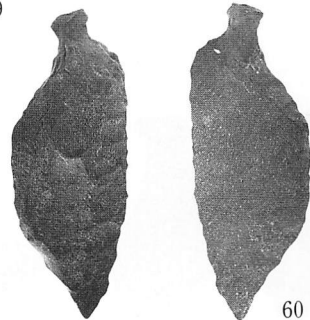
59



57

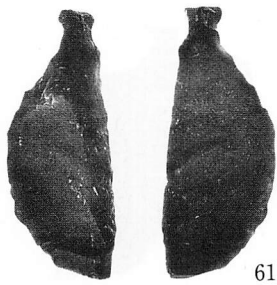


58

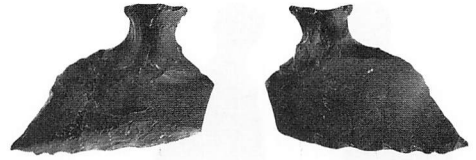


60

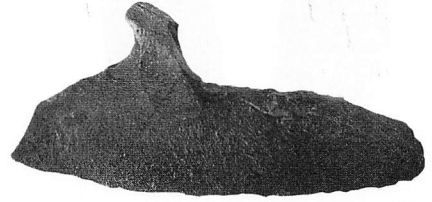
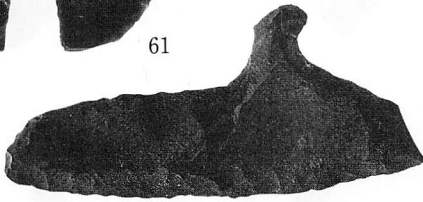
写真図版27 北側包含層出土の石器(3) (S=2/3)



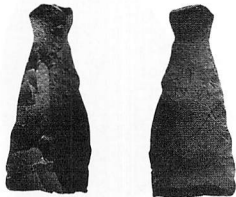
61



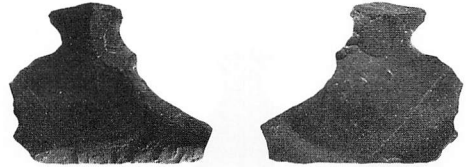
98



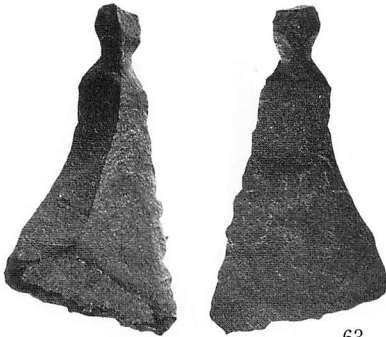
99



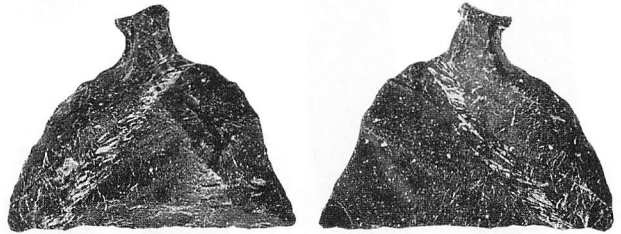
62



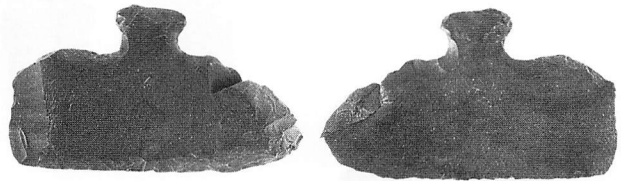
100



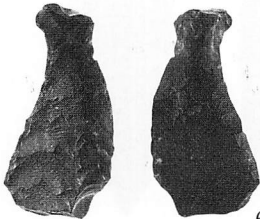
63



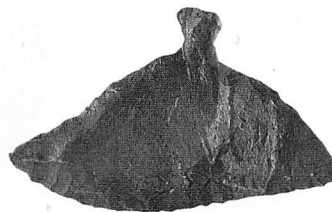
101



102

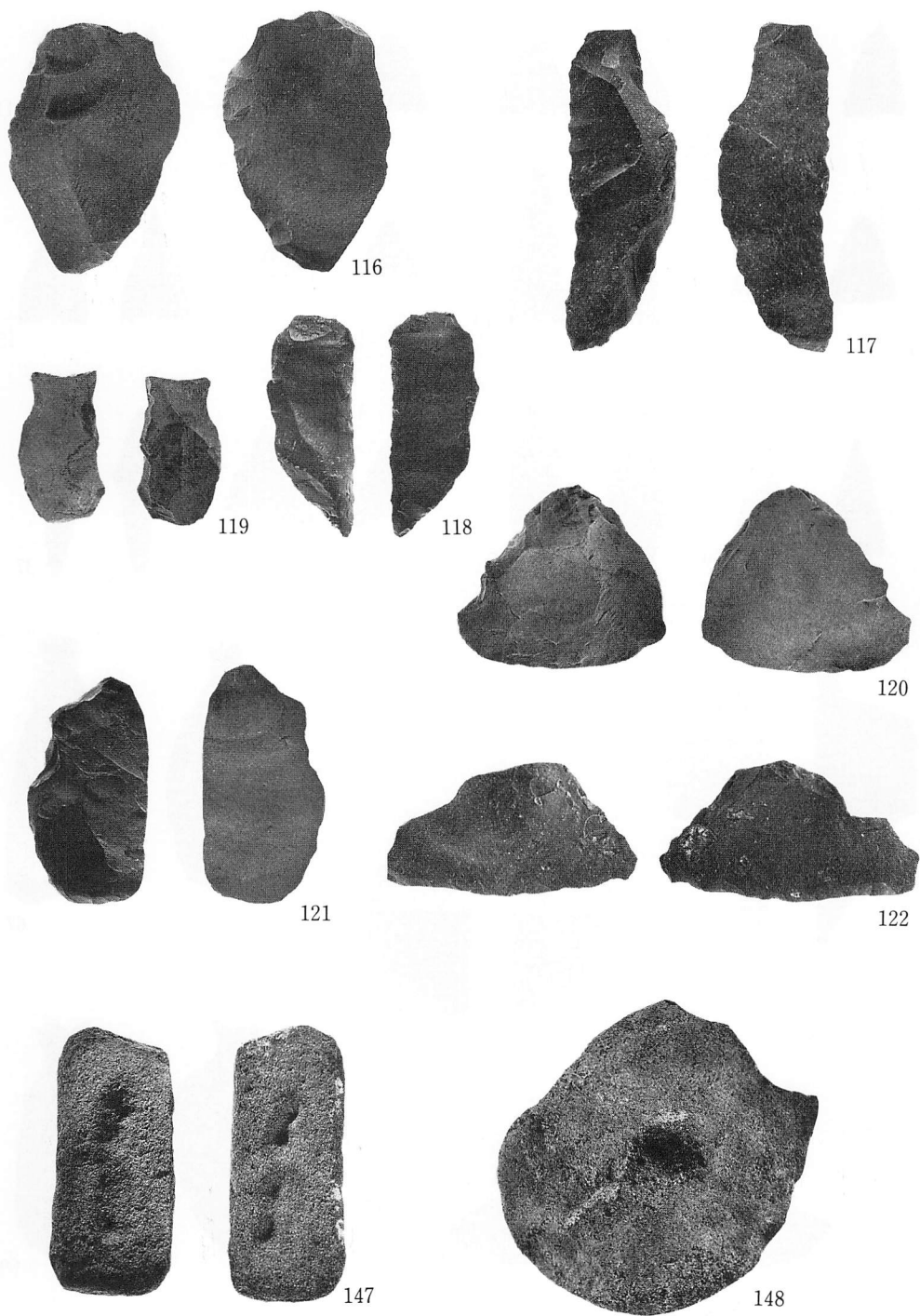


64

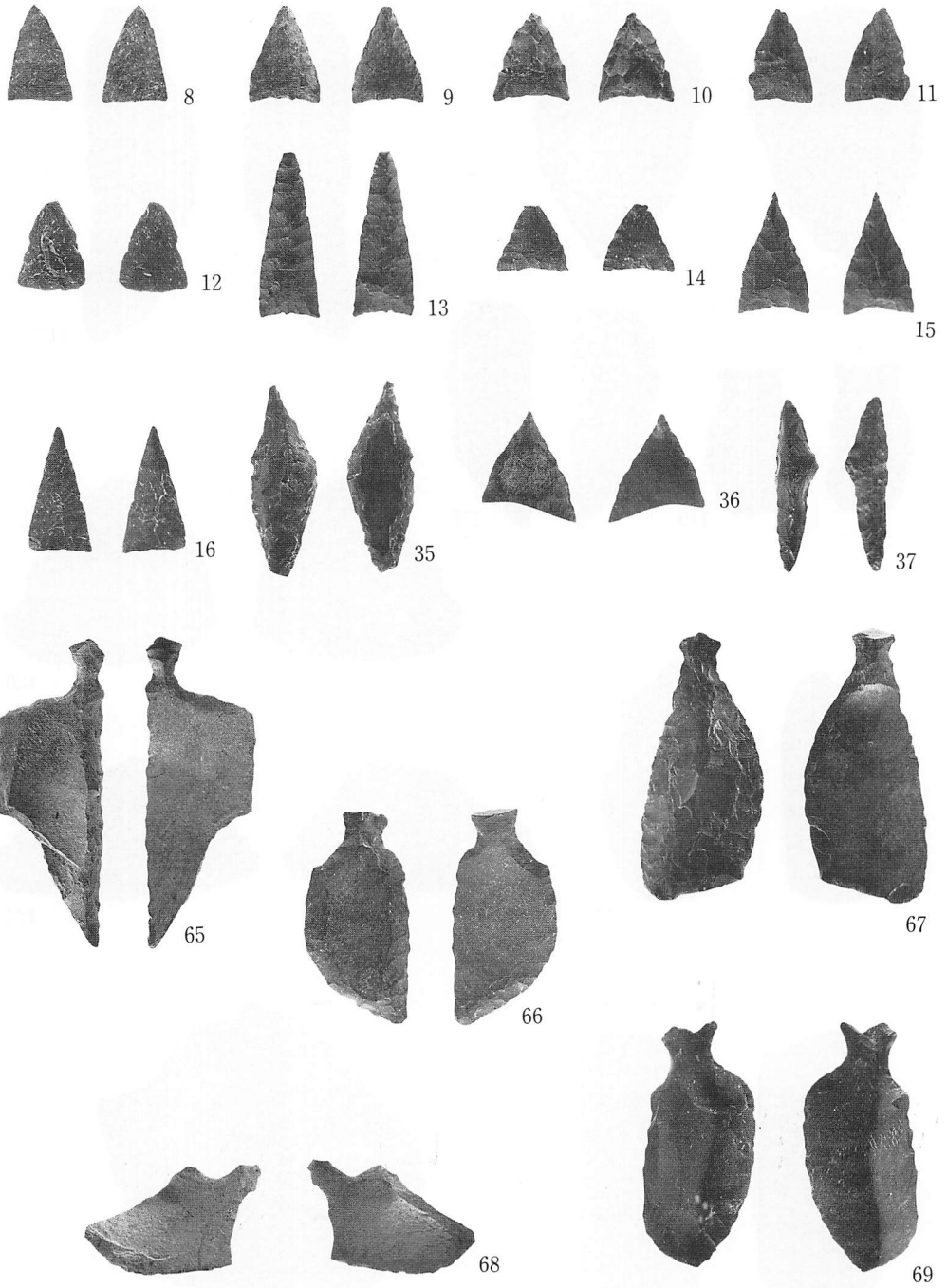


103

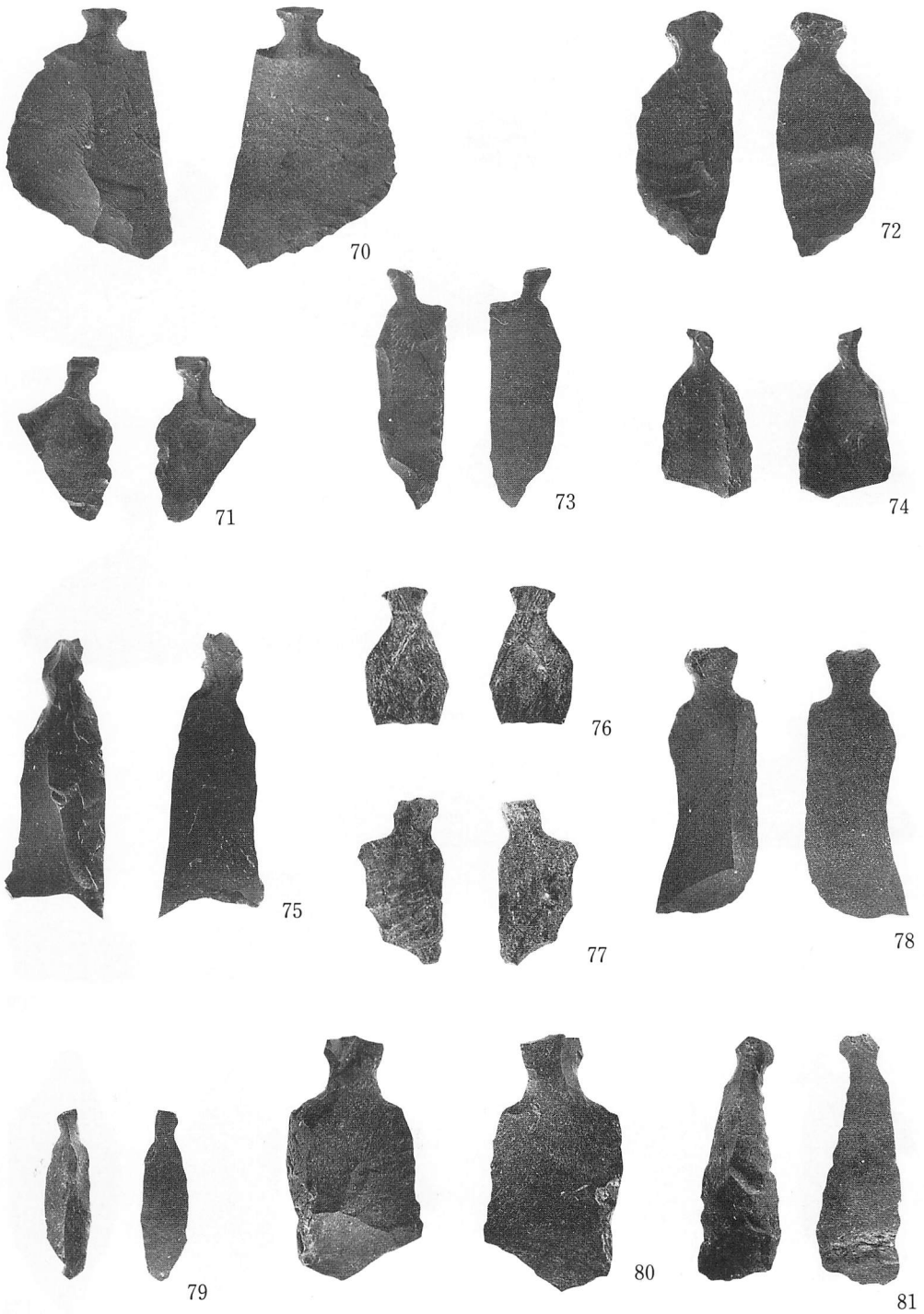
写真図版28 北側包含層出土の石器(4) (S=2/3)



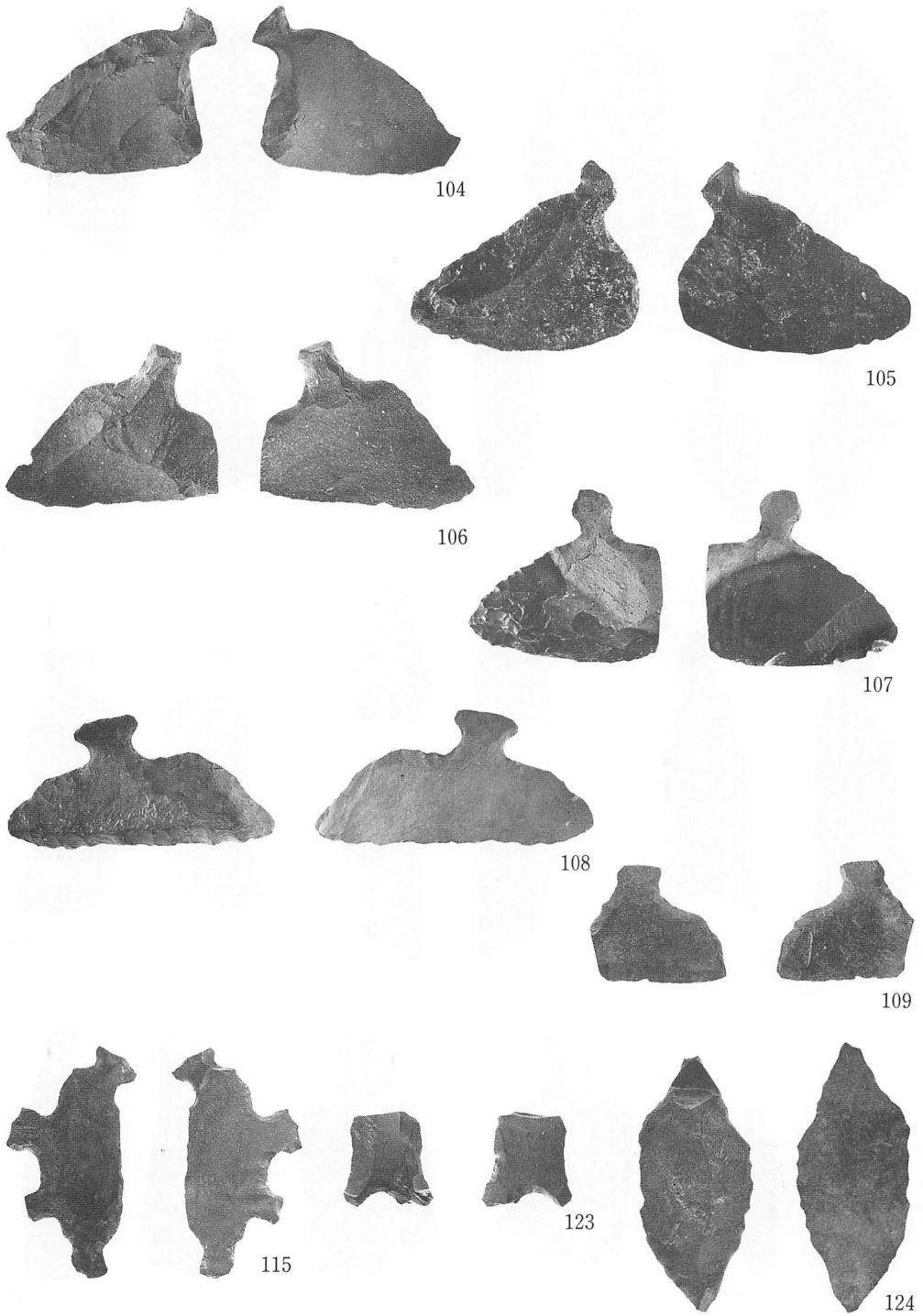
写真図版29 北側包含層出土の石器(5) (116~122は $S = \frac{2}{3}$ 、147、148は $S = \frac{1}{3}$)



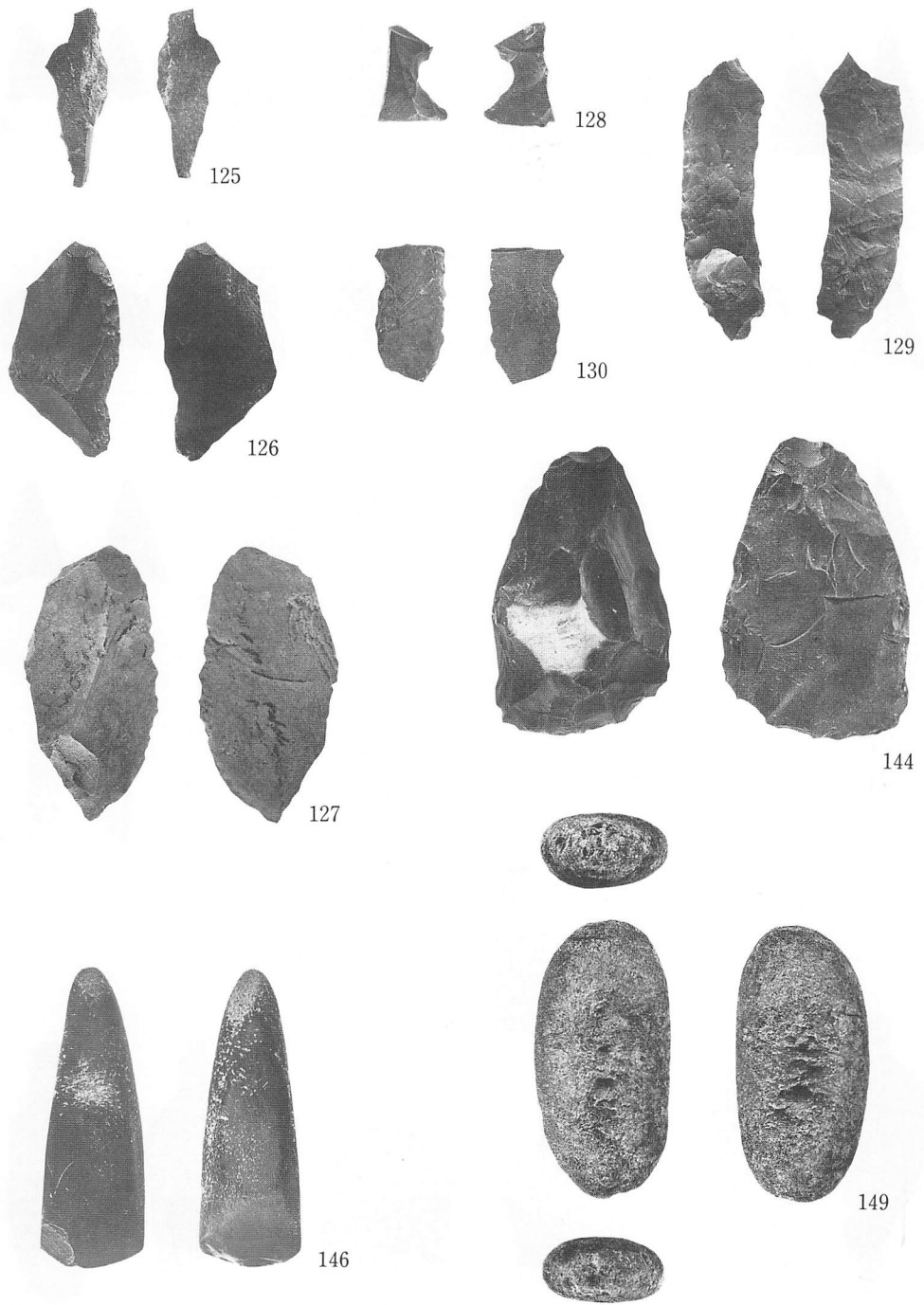
写真図版30 南側包含層出土の石器(1) (S=2/3)



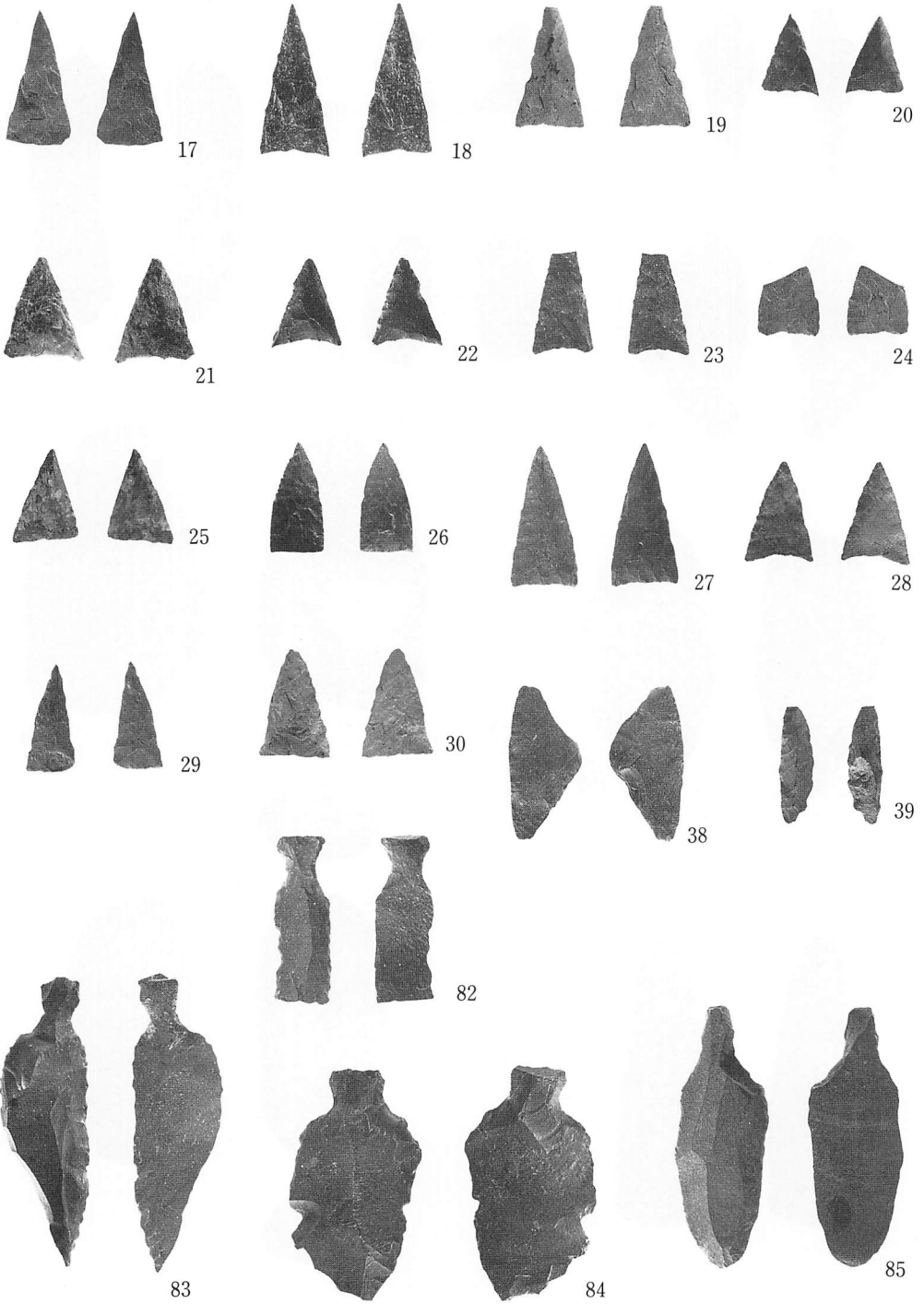
写真図版31 南側包含層出土の石器(2) (S=2/3)



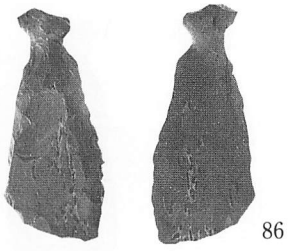
写真図版32 南側包含出土の石器(3) (S = 2/3)



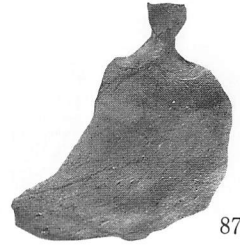
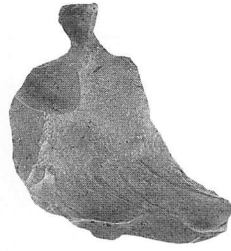
写真図版33 南側包含層出土の石器(4) (146、149は $S = \frac{1}{3}$ 、それ以外は $S = \frac{2}{3}$)



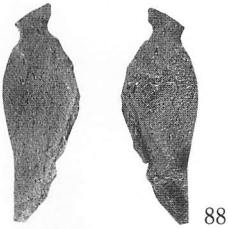
写真図版34 包含層外出土の石器(1) (S=2/3)



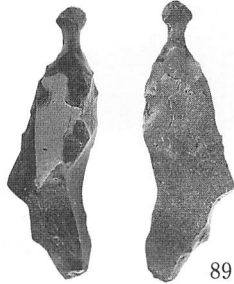
86



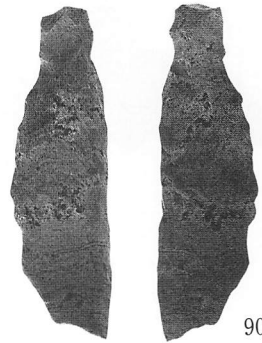
87



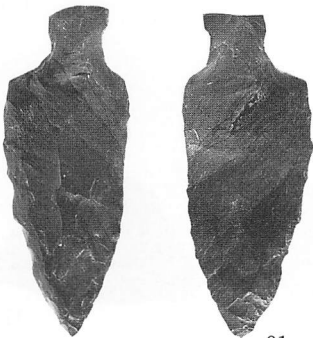
88



89



90



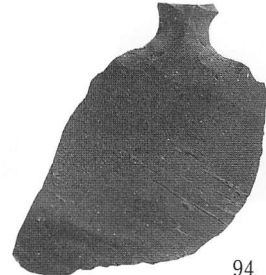
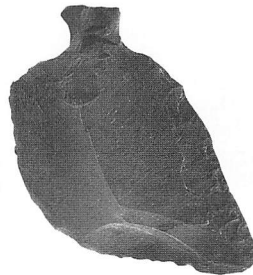
91



92

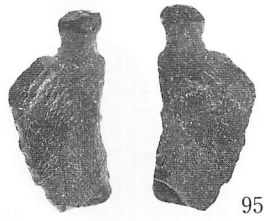


93

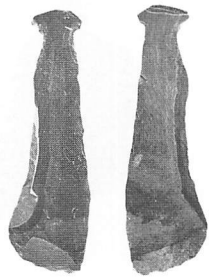


94

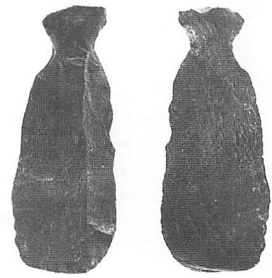
写真図版35 包含層外出土の石器(2) (S = 2/3)



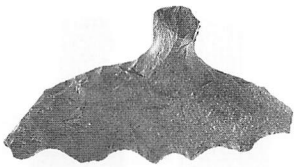
95



96



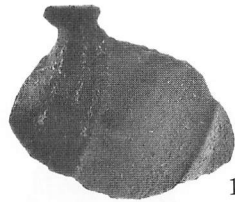
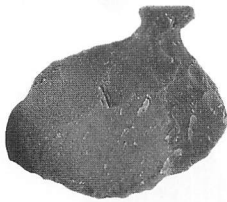
97



110



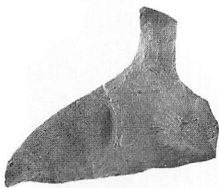
111



112



113

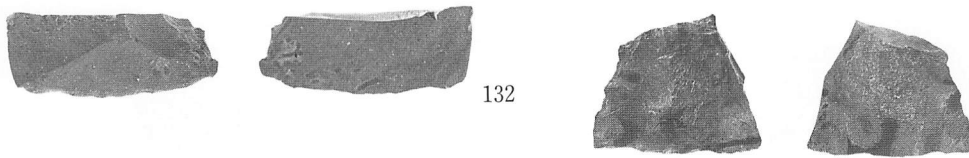


114



115

写真図版36 包含層外出土の石器(3) (S = 2/3)

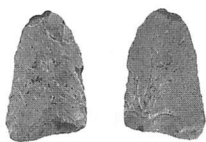


132

133



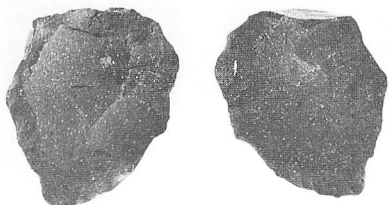
134



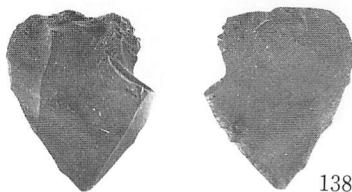
135



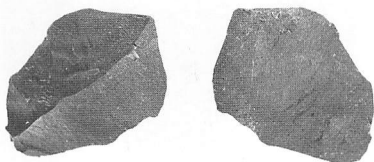
136



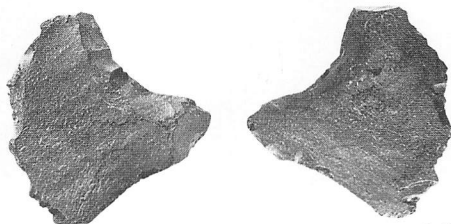
137



138

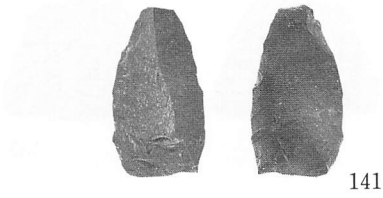


139

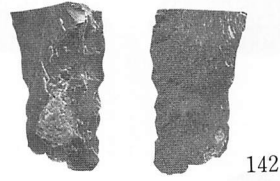


140

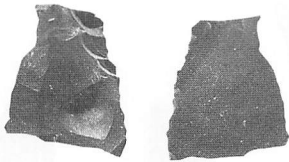
写真図版37 包含層外出土の石器(4) (S=2/3)



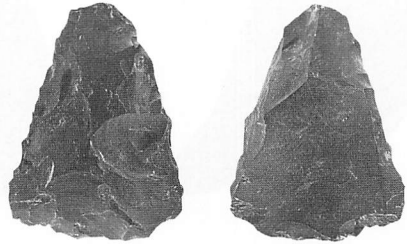
141



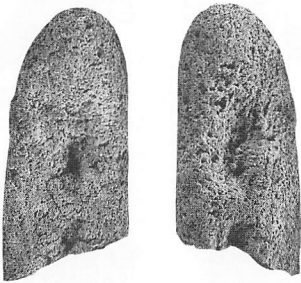
142



143



145



150



151



152



153

写真図版38 包含層外出土の石器(5) (141~145はS = $\frac{2}{3}$ 、150~153はS = $\frac{1}{3}$)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 所副 所長	小笠原 喜 一 高 橋 敬 明		
[管 理 課]			
管理課長(兼)	高 橋 敬 明	嘱 託	吉 田 一 男
管理課長補佐	森 岡 陽 一	運 兼 技 士 員	根 橋 文 一
主 事	佐 藤 理	文 化 財 員	佐 藤 春 男
[調 査 課]		運 兼 技 士 員	
調査課長	村 上 康 昭	文 化 財 員	佐々木 信 一
課長補佐	佐々木 嘉 直	運 兼 技 士 員	小 原 眞 一
主任文化財	鈴木 恵 治	運 兼 技 士 員	村 上 修 孝
専門調査員	小田野 哲 憲	運 兼 技 士 員	酒 井 宗 建
"	三 浦 謙 一	運 兼 技 士 員	松 本 速 子
"	工 藤 利 幸	運 兼 技 士 員	笹 平 克 政
"	高 橋 與 右 衛 門	運 兼 技 士 員	花 坂 博 務
"	平 井 進 紀	運 兼 技 士 員	佐々木 昭 彦
"	中 川 重 男	運 兼 技 士 員	金 子 田 宏 造
"	藤 村 敏 介	運 兼 技 士 員	濱 田 精 則
文化財	高 橋 義 實	運 兼 技 士 員	鎌 田 勝 邦 彦
専門調査員	斎 藤 隆 雄	運 兼 技 士 員	阿 部 雅 之
"	佐 瀬 孝 雄	運 兼 技 士 員	星 雅 之
"	千 葉 博 司	運 兼 技 士 員	引 屋 敷 学 己
"	斎 藤 隆 幹	運 兼 技 士 員	鈴 木 知 隆
"	東 海 林 隆 弘	運 兼 技 士 員	藤 村 悟 由
"	佐々木 均 行	運 兼 技 士 員	千 葉 博 信 一 郎
"	川 村 貞 格	運 兼 技 士 員	熊 谷 倉 博 英
"	鈴木 貞 修	運 兼 技 士 員	新 山 口 博 聰
"	伊 東 藤 邦 雄	運 兼 技 士 員	川 村 聡 子
"	遠 藤 敏 明	運 兼 技 士 員	八 重 座 の り
"	斎 藤 敏 明	運 兼 技 士 員	
"	神 敏 明	運 兼 技 士 員	
[資 料 課]			
資料課長	村 松 義 夫		
主任文化財	田 鎖 寿 夫		
専門調査員			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第174集

経塚長根遺跡・経塚森遺跡発掘調査報告書

早池峰ダム関連遺跡発掘調査

印刷 平成4年3月25日

発行 平成4年3月30日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185

TEL (0196)38-9001・9002

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 盛岡市本町通2-13-8

TEL (0196)23-3351

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1992